第４章　地域の歴史文化



旧日本専売公社赤穂支局（赤穂市立民俗資料館）

1．地域の歴史文化をどうとらえるか

本構想の目的の一つは「赤穂を代表する歴史文化」を導き出すことにある。

「赤穂を代表する歴史文化」とは、有形・無形、指定・未指定にかかわらず様々な文化財を歴史的・地域的関連性に基づき、一定のまとまりとしてとらえたものであり、それぞれのキーワードに基づくストーリーを構築することにより、市内の歴史文化遺産を結び付け、総体として、また面的に保存活用していくための概念である。

しかし、様々な歴史的特性をもつ市内各地区の中から、赤穂市を代表するキーワードやストーリーを構築するためには、それぞれの地域の歴史的蓄積をできるだけ広く、また深く把握し、その重層的なストーリーを関連させていくための方法が必要となる。そこで本構想では、まず市内各地区における歴史文化に着目し、それぞれの「地域に根差した歴史文化の視点」をつぶさに捉えていく。また、あわせて「地域を越えた歴史文化の視点」を取り上げ、市内の歴史文化遺産から紡ぎだされるキーワードやストーリーを、くまなくすくい上げる。こうして得られた数多くの歴史文化の視点を、様々に関連付けることによって、「赤穂を代表する歴史文化」を抽出していくこととする。

2．地区の設定

まず、「地域に根差した歴史文化の視点」を捉えるために必要な、地区設定を行う。

赤穂市は、旧町村が明治 22（1889）年から昭和 38（1963）年にかけて合併を重ねる中で、現在の市域となったまちであり、それぞれの地区は、江戸時代以来の行政単位である町や村がおおむね基礎となっている（図 27）。また、上位計画である『赤穂市総合計画』では、こうしたかつての町村区分を基礎としてつくられた９つの小学校区によって、地区区分が設定されている（図 26）。

本構想においても、原則としてこの『赤穂市総合計画』の地区区分に基づくことになるが、江戸時代以来の行政単位である各町村の、それぞれ豊かな歴史的経緯を尊重して特徴をまとめるためには、以下のような変更点を設けることがふさわしいと考えた。



図 26　赤穂市総合計画における地区区分

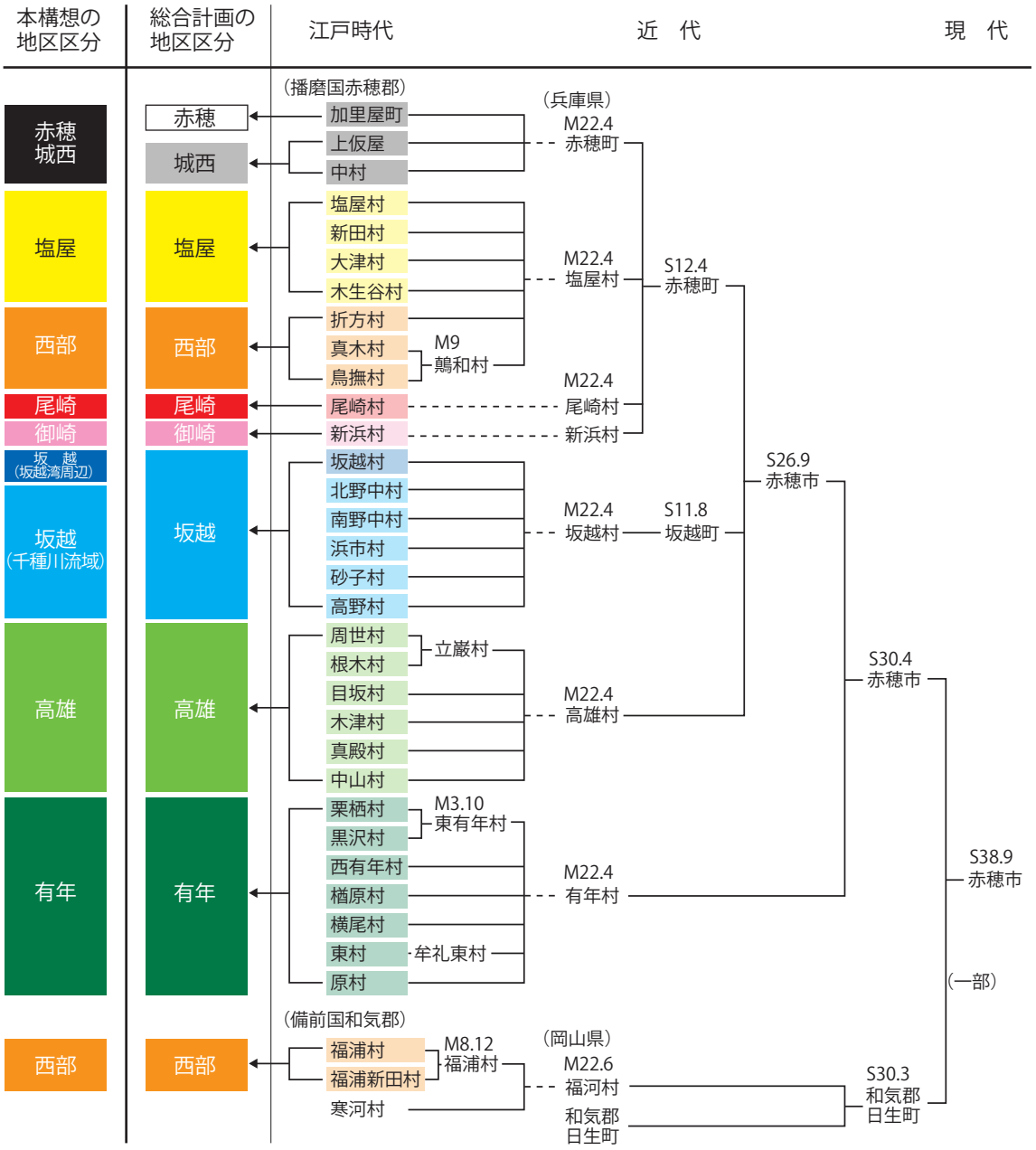


図 27　　旧町村の変遷と本構想の地区区分

（1）赤穂地区及び城西地区は、それぞれかつての赤穂城下町における町人地、侍屋敷地及び城の所在していた地区であり、その歴史的経緯を踏まえ、一括して「赤穂・城西地区」とする。

（2）坂越地区は、本来、坂越湾周辺の旧坂越村（浦方）と、千種川流域のそれ以外の村々（庄内）とに大きく分けられ、その歴史的特性が大きく異なっているため、坂越（坂越湾周辺）地区と、坂越（千種川流域）地区とに分けて地区設定を行う。

この結果、本構想における地区区分は９地区となった。

3. 地域に根差した歴史文化の視点

本構想を策定するにあたり、悉皆調査によって得られた 1,148 件の歴史文化遺産を基礎として、各地区におけるキーワード及びストーリーを構築したのが、図 28 に示した「地域に根差した歴史文化の視点」である。それぞれの視点には、ストーリーとともに、地区内にある歴史文化遺産を紐づけし、それぞれの歴史文化遺産は「もの」（動産）、「場」（不動産）、「こと」（言説・テクスト）の３分類によって整理した。

赤穂・城西地区	1．赤穂義士ゆかりのまち
	2．城をつくる－赤穂城前史－
	3．旧赤穂上水道
	4．現代に息づく城下町－絵図をみて歩けるまち
塩屋地区	5．塩づくり発祥の地
	6．備前街道
西部地区	7．播磨と備前の国境
	8．開拓ものがたり
尾崎地区	9．塩田とともに－浅野家が開いた塩田－
	10．赤穂藩と尾崎
御崎地区	11．塩業の歴史を今に伝える－東浜塩田－
	12．御崎の信仰
	13．景勝・赤穂御崎
坂越（坂越湾周辺）地区	14．古代の海人と秦河勝伝説
	15．港町・坂越
	16．伝説と信仰の山めぐり
坂越（千種川流域）地区	17．古代の謎
	18．村ごとの社寺と伝承
高雄地区	19．高瀬舟と赤穂鉄道
	20．農業用水と赤穂城下の水甕
	21．里山の景観と村々の社寺
有年地区	22．東西・南北の交通－近世山陽道と千種川－
	23．古代の遺跡めぐり－文化財の宝庫－
	24．夢のあと－山城と山岳寺院の風景－
	25．しぶらの里－豊かな農村風景－
	26．有年の先人に出会う旅

図 28　地域に根差した歴史文化の視点一覧

赤穂・城西地区

地　勢

千種川河口部の陸地化は遅く、現在の赤穂・城西地区周辺は、古代末から中世頃にかけてようやく陸地になったと言われている。赤穂城下町跡の発掘調査では、池田時代（約 400 年前）の地面は標高で 1.0mだったことが判明しており、当時は井戸を掘っても塩水が出て使用できなかったという。

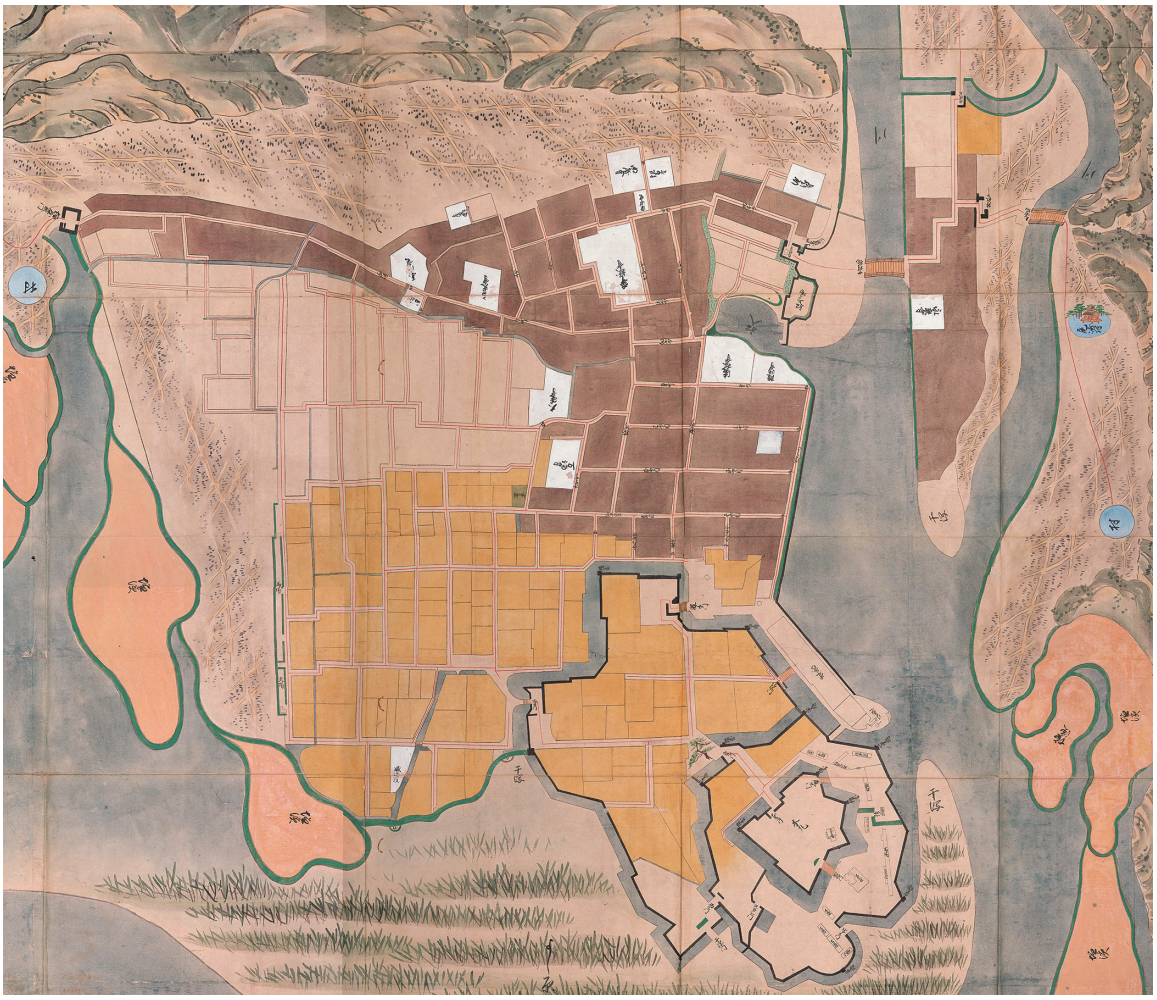
歴　史

千種川が運び込んだ土砂によって、低平で肥沃な平野が広がったところに人々が生活をはじめ、城や城下町を造ったのが、赤穂・城西地区の始まりである。中世になると､現在の市街地部分に「加里屋古城」と呼ばれる砦が築かれた。また豊臣秀吉が毛利攻めの際にこの周辺を整備して、姫路と備前への街道が整備されたという。

江戸時代になると、さらに海側へ陸地化した平野を活用して､現在の赤穂城跡本丸内に「揺上城」が池田家によって築かれ、また生活水の確保のため元和２(1616)年に旧赤穂上水道が敷設された。慶安元（1648）年には浅野長直によって現在の赤穂城が築城されはじめ、塩田生産による活況を背景に城下町も拡大整備されている。

刃傷事件によって浅野家が断絶した後は、永井家、次いで森家による支配に代わる。森赤穂藩は石高が浅野赤穂藩の半分以下の 2 万石となったため、侍屋敷が畑地化するなど、城下町は衰退していった。

明治 22（1889）年には加里屋町が上仮屋、中村と合併して赤穂町となり、昭和 12（1937）年には塩屋、尾崎、御崎（新濱）の各村と合併した。



元禄期頃の赤穂城下町（元赤穂縣管轄絵図面＜城下図＞（部分）東京大学史料編纂所蔵）
茶色が町家、黄色が侍屋敷、白色は社寺を指す。

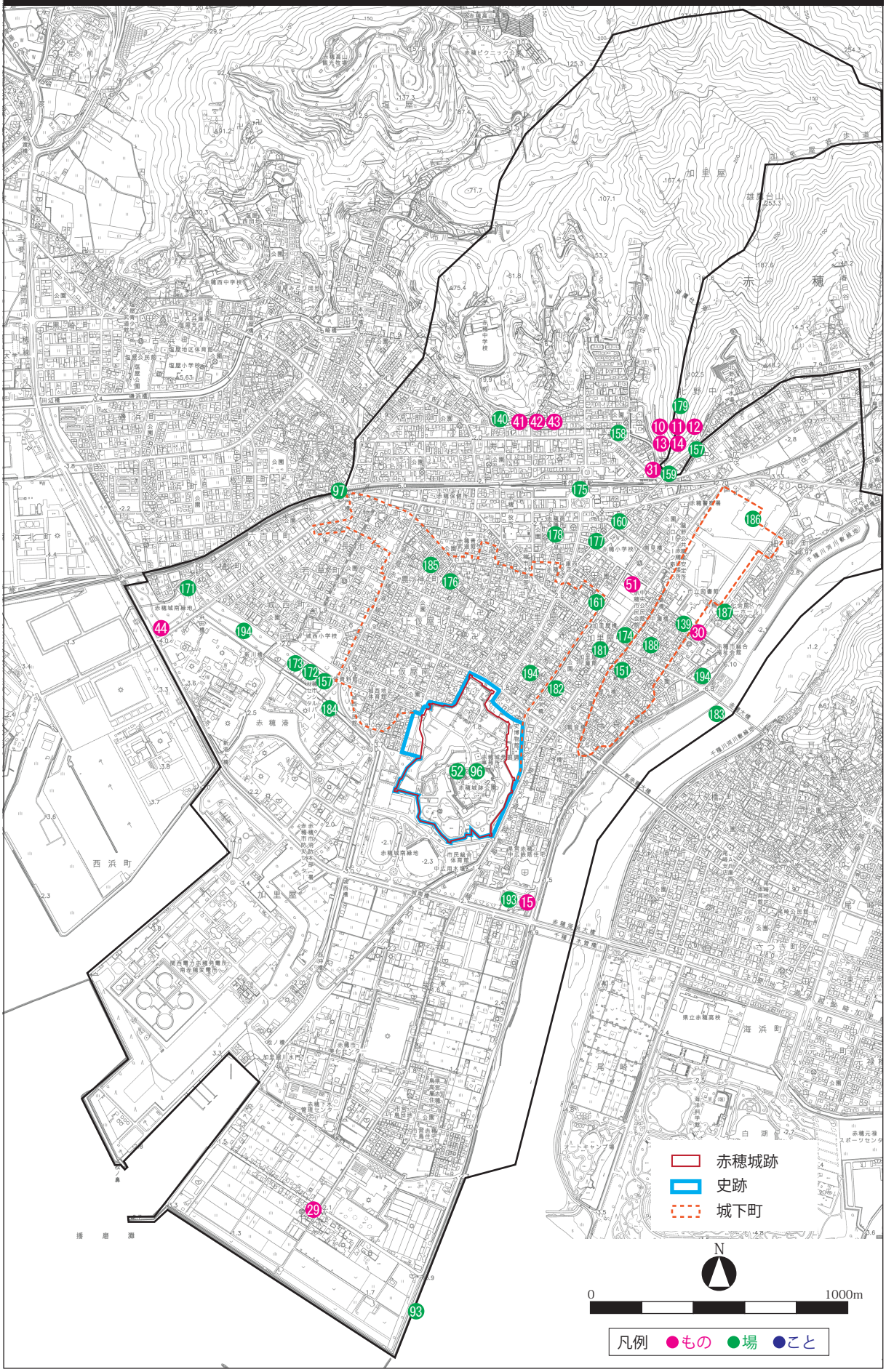
表 17　赤穂・城西地区　年表（1）

時　代	年　代	で　き　ご　と
		縄文海進の最盛期は雄鷹台山の山麓まで海であった
古　代	天平勝宝8(756)年	赤穂郡坂越郷の「塩生山（塩山）」30余町が東大寺に施入される（「播磨国符案」）
	承和9(842)年	石塩生荘園の範囲が「東 赤穂川　西 大依松原　北 百姓口分幷塩生山崎」と記載
	大治5(1130)年	東大寺の荘園「石塩生荘」50町9反172歩、塩山60町（「東大寺諸荘文書幷絵図等目録」）
	仁平3(1153)年	このころ「石塩生荘」が「赤穂庄」と呼ばれ始める（「東大寺諸荘園文書目録」）
	文治元(1185)年	このころ赤穂荘は石清水八幡宮となっていた
中　世	文安２～３年 (1445 ～ 1446)	中庄（中村）、坂越浦から兵庫北関への入船記録（「兵庫北関入船納帳」）
	享徳年中 (1452 ～ 1455)	赤松満祐の一族、岡豊前守光景が加里屋古城を築く（「播州赤穂郡志」）
	文正元～文明 15 年 (1466 ～ 1483)	岡豊前守光広が加里屋古城を構築する（「播州赤穂郡志」からの市史説）
	文明・長享年中 (1469 ～ 1489)	加里屋北部の山麓から上町出屋敷に集落が移住
	延徳 2(1490) 年	播磨六坊の一つ、永應寺が中村に建立される
	明応 7(1498) 年	本願寺実如、坂越庄中村の善祐に方便法身尊形を下付する
	明応～永正年間 (1492 ～ 1521)	塩屋高山山麓の集落が加里屋上町に移住する（「播州赤穂郡志」）
	享禄元 (1528) 年	「享禄元戊子年民家今ノ壱丁目・出河原・弐丁目辺ニ出ル」（「赤穂城ヶ州伝来書」）
	天文元 (1532) 年	大蓮寺を開山した察道が没する 坂越荘中村の法言に方便法身尊形を下付
	天正 2(1574) 年	万福寺が那波（相生市）から加里屋に移される
	天正 10(1582) 年	羽柴秀吉、加里屋に新土手（姫路街道・後に百目堤）を築かせる
	天正 14(1586) 年	生駒親正が伊勢国神戸から赤穂に入部する（6 万石）赤穂藩が始めて成立する
	天正 15(1587) 年	生駒親正は讃岐に移され、宇喜多秀家が配置される 宇喜多忠家、坂越・高野・中村・尾崎を地方知行か　宇喜多秀家の検地（真殿村文書：市指定）
近　世	慶長 5(1600) 年	池田輝政が播磨一国 52 万石を与えられ、三河国吉田から姫路城に入る 池田輝政の末弟、池田長政が加里屋に在城する（2 万 2 千石）
	慶長５～７年 (1600 ～ 1603)	掻上城が築かれる
	慶長 8(1603) 年	池田輝政の家臣、垂水半左衛門勝重が赤穂郡代となる（知行 500 石）
	慶長 18(1613) 年	池田輝政死去、赤穂は岡山藩池田忠継（輝政の次男）領（38 万石）となる
	元和元 (1615) 年	池田（松平）政綱が赤穂に入封する（3 万 5 千石） 赤穂藩が再び成立、藩邸を改め、大書院、広間、玄関、敷台、土蔵を築く
	元和 2(1616) 年	赤穂上水道の完成（「播州赤穂郡志」）。雲甫、随鷗寺を開創
	元和 7(1621) 年	加里屋全焼して中村へも飛び火、垂水半左衛門がはじめて町割を実施
	寛永 8(1631) 年	池田（松平）輝興が平福から赤穂に入封（3 万 5 千石） 藩邸に金の間、曲輪に多門・隅櫓、城内に馬屋を築く
	寛永 17(1640) 年	妙典寺（高光寺）、大津村から加里屋新町に移される
	正保 2(1645) 年	浅野長直が常陸国笠間より赤穂に入封（5 万 3 千 5 百石）
	正保 3(1646) 年	浅野長直、近藤三郎左衛門正純に命じ、加里屋城鎮守愛宕山社を創建
	慶安 2(1649) 年	赤穂城築城開始、戸島用水敷設
	承應元 (1652) 年	山鹿素行を禄高 1 千石で召抱える、二之丸門周辺の縄張を変更
	承應 2(1653) 年	加里屋田町の造成完了
	寛文元 (1661) 年	焼失した皇居造営工事のため赤穂藩、米、銀、金を支出 赤穂城完成
	寛文 6(1666) 年	山鹿素行、「聖教要録」が原因となり赤穂へ預けられる
	寛文 9(1669) 年	山鹿素行「大石氏の茶亭に遊ぶ・・」（「年譜」）
	寛文 11(1671) 年	浅野長直が隠居、長友が跡を継ぐ（5 万石）
	延宝 3(1675) 年	浅野長友が江戸で死去、長矩が跡を継ぐ（5 万石）
	貞享 4(1687) 年	本丸、二之丸に馬場をつくる（「播州赤穂郡志」）
	元禄年中 (1688 ～ 1703)	小広門村、洪水のため中村に移り廃村（「播州赤穂郡志」）
	元禄 3(1690) 年	中洲の馬場を片原町侍屋敷の西に移す（播州赤穂郡志」）
	元禄４～元禄 13 年 (1691 ～ 1700)	川端筋ができる
	元禄 7(1694) 年	浅野長矩の願いにより、弟長広（大学）に新田 3 千石の分知が認められる
	元禄 14(1701) 年	三代藩主長矩が、江戸城において刃傷事件を起こし即日切腹、赤穂浅野藩断絶
	元禄 15(1702) 年	大石内蔵助をはじめとする赤穂義士が吉良邸に討ち入る 永井伊賀守直敬が下野国烏山より赤穂に入封（3 万 3 千石）
	元禄 16(1703) 年	追手（大手）橋新たに架けられる 近藤源八屋敷火事（「那波屋文書写」）
	宝永 3(1706) 年	森和泉守長直が備中国西江原より赤穂に入封（2 万石）、明治廃藩まで 12 代続く 「加里屋町明細帳」「中村明細帳」
	享保 14(1729) 年	城内作事屋普請小屋より出火、旧大石屋敷類焼（「史蹟明鑑」）
	元文 4(1739) 年	花岳寺に浅野長矩・四十六士墓を建立
	安永 6(1777) 年	藩校博文館が上仮屋に落成
	安永 7(1778) 年	赤穂城本丸内屋敷出火、累代記録多く焼失（「森家累系譜」）
	天明 7(1787) 年	司馬江漢、赤穂を訪れる（「江漢西遊日記」）
	文化 12(1815) 年	城内出火あり、侍屋敷六軒並びに作事小屋木役所焼失（「新浜記」）
	文政 5(1822) 年	本丸御殿の台所の水道枡を取り替える
	天保 13(1842) 年	赤穂城本丸内の給水管を 7 間分新設する
	安政 3(1856) 年	大石屋敷長屋一棟建替（「大石邸棟札」）
	万延元 (1860) 年	上水道、農神道筋より塩屋村まで大改修する
	文久元 (1861) 年	赤穂城本丸御殿建替、上棟式を行う
	文久 2(1862) 年	西川升吉ら、家老森主税らを暗殺する（文久事件） 赤穂城本丸御殿の建替

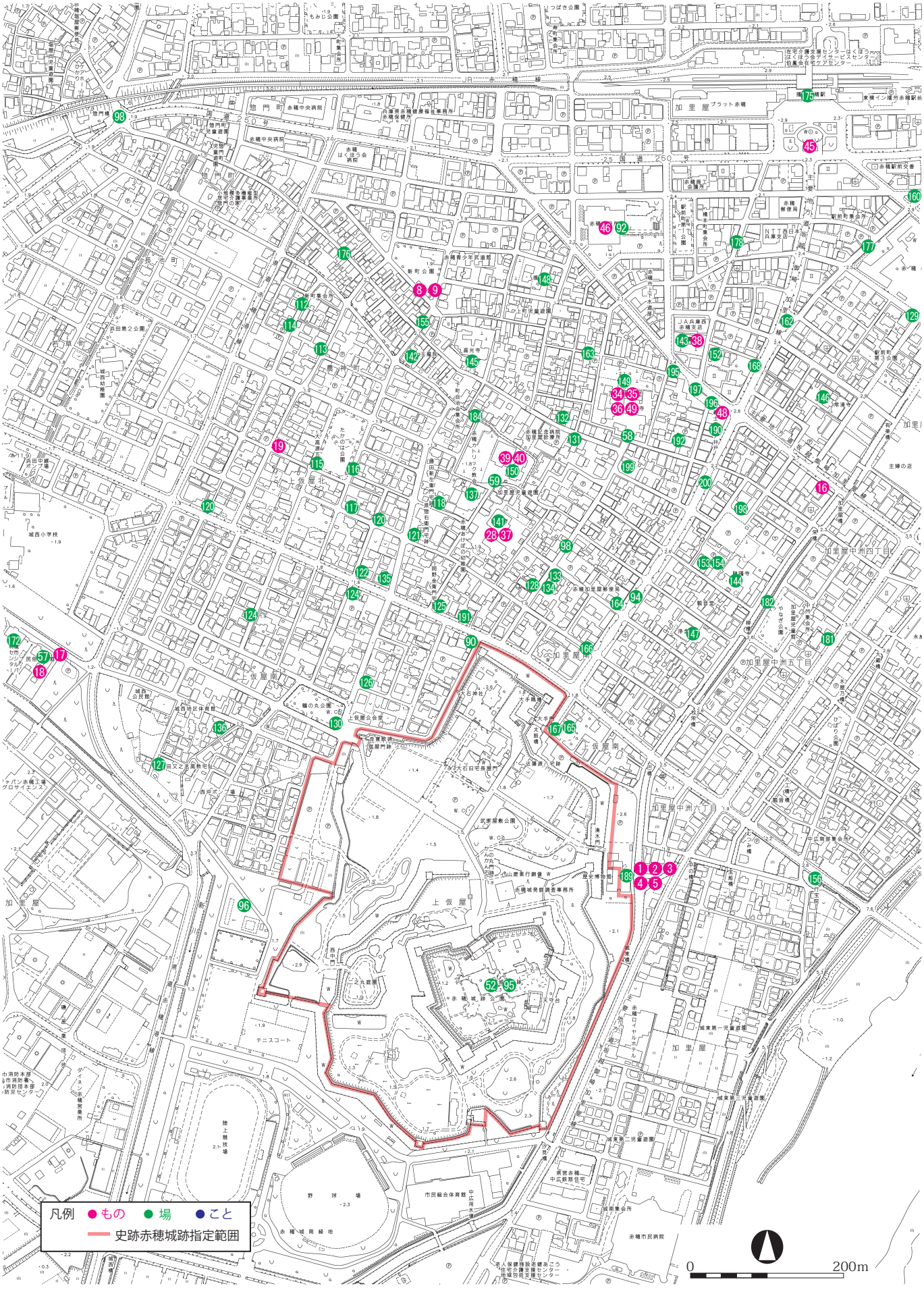
表 18　赤穂・城西地区　年表（2）

時　代	年　代	で　き　ご　と
近　代	明治元 (1868) 年	城内の三之丸及び二之丸後郭西部が士族、農民の田畑に分割される
	明治 4(1871) 年	廃藩置県、赤穂・岡山藩領は赤穂県、岡山県となる
	明治 5(1872) 年	赤穂城廃城決定
	明治 9(1876) 年	兵庫・飾磨・豊岡３県と名東県淡路を統合、兵庫県が成立する
	明治 11(1878) 年	本丸藩庁解体、赤穂尋常高等小学校校舎として移築される（「花岳寺所蔵棟札」）
	明治 14(1881) 年	花岳寺住職釈種仙珪が旧大石邸長屋門購入保存
	明治 25(1892) 年	千種川氾濫により大被害
	明治 25 ～ 27 年 (1892 ～ 1894)	明治 25 年の洪水災害復旧の築石のため、二之丸城壁の一部が撤去される
	明治 30(1897) 年	大石神社建立のため大手門枡形の南塁をくずし、北方多門をうずめて改造する
	明治 38(1905) 年	塩専売制施行、赤穂に塩務局が設置される
	明治 41(1908) 年	日本専売公社赤穂支局庁舎が完成
	明治 44(1911) 年	赤穂電灯株式会社設立される、赤穂・坂越間に電話線が新設される
	大正元 (1912) 年	赤穂大石神社建立される
	大正 9(1920) 年	中村への上水道配・給水
	大正10(1921)年	赤穂鉄道（赤穂－有年間）が開通
	大正 12(1923) 年	大石良雄宅跡、国指定史跡となる
	大正 14(1925) 年	旧大石頼母屋敷の敷地内に山鹿素行銅像建立
	大正 15(1926) 年	中村、広門村と合併し中広と改称する
	昭和 3(1928) 年	兵庫県立赤穂中学校校舎、本丸跡に竣工
	昭和 7(1932) 年	大石邸長屋門、宝物陳列場に改造される（「赤穂新報」）
	昭和 10(1935) 年	大手門前の堀が復旧し（「赤穂タイムス」）、太鼓橋が竣工（「土風時報」）
	昭和 12(1937) 年	赤穂町・塩屋村・尾崎村・新浜村が合併して大赤穂町が誕生 本丸跡天守台の崩壊が修復される、赤穂大橋が完成する
	昭和 15(1940) 年	赤穂城跡が風致地区に指定される（22.1ha）
	昭和 18(1943) 年	千鳥が埋め立てられる
	昭和 19(1944) 年	赤穂町に近代的水道が敷設される
現　代	昭和 23(1948) 年	千鳥の開拓開始
	昭和 24(1949) 年	日本専売公社が発足
	昭和 26(1951) 年	赤穂町・坂越町・高雄村合併し、赤穂市が施行 国鉄赤穂線が開通、赤穂鉄道が廃線 本丸西側の石垣開口
	昭和 27(1952) 年	赤穂城跡公園（普通公園）都市計画が決定（16.7ha）
	昭和 28(1953) 年	第一地区（加里屋地区）区画整理事業施行
	昭和 30(1955) 年	大手隅櫓、大手門が整備される 国鉄赤穂線、赤穂－日生間開通
	昭和 33(1958) 年	山鹿素行銅像を再建
	昭和 36(1961) 年	中洲地区土地区画整理事業施行
	昭和 39(1964) 年	駅北土地区画整理組合設立
	昭和 40(1965) 年	城跡公園計画決定区域のうち 7ha について城跡公園事業決定を受ける
	昭和 42(1967) 年	赤穂城本丸厩口門が開口される 上仮屋地区土地区画整理事業施行
	昭和 43(1968) 年	赤穂城跡二之丸内に赤穂塩業資料館が竣工する
	昭和 44(1969) 年	旧日本専売公社赤穂支局の隣接地に新庁舎竣工、役割を終える
	昭和 45(1970) 年	新赤穂大橋が完成
	昭和 46(1971) 年	赤穂城跡が国史跡に指定される（指定面積 187,895 ㎡）史跡買上げに着手
	昭和 49(1974) 年	赤穂城跡の石垣修理が始まる
	昭和 50(1975) 年	都市計画事業認可（7ha）
	昭和 51(1976) 年	台風17号による大水害
	昭和 53(1978) 年	大石良雄宅跡長屋門解体修理工事完了
	昭和 55(1980) 年	旧赤穂上水道の総合調査が実施される
	昭和 56(1981) 年	史跡赤穂城跡整備基本構想策定、旧赤穂上水道保存計画書策定 兵庫県立赤穂高等学校校舎、城外の尾崎へ移転する 市民総合体育館完成、新市庁舎完成、公共下水道供用開始
	昭和 58(1983) 年	本丸跡の発掘調査が始まる 赤穂市立民俗資料館が開館
	昭和 59(1984) 年	本丸天守台石垣修復
	昭和 61(1986) 年	本丸表御殿大池泉などの復元
	平成元 (1989) 年	赤穂市立歴史博物館が開館
	平成 5(1993) 年	赤穂海浜大橋が完成
	平成 6(1994) 年	磯浜工業団地完成
	平成 8(1996) 年	本丸門復元完成
	平成 10(1998) 年	市民病院の移転改築・開院
	平成 11(1999) 年	三之丸近藤源八宅跡長家門解体復元完了 「お城通り」が市街地景観形成地区に指定される
	平成 12(2000) 年	ＪＲ播州赤穂駅の橋上化が完成
	平成 13(2001) 年	厩口門整備によって本丸整備完了
	平成 14(2002) 年	旧赤穂城庭園（本丸庭園、二之丸庭園）が国名勝に指定される 二之丸庭園の整備開始
	平成 15(2003) 年	赤穂城跡の一部、国史跡に追加指定（2,510.17 ㎡）
	平成 17(2005) 年	赤穂駅前大石神社線（お城通り）整備完成
	平成 18(2006) 年	赤穂城跡二之丸庭園で屋形舟遊覧事業開始 赤穂城跡が日本 100 名城に、赤穂城跡公園が日本の歴史公園 100 選に選定
	平成 19(2007) 年	本丸内で赤穂国際音楽祭が開催される
	平成 25(2013) 年	二之丸加里屋川沿い城壁修理に着手
	平成 28(2016) 年	二之丸庭園の一部公開開始 旧赤穂上水道敷設 400 年記念事業実施

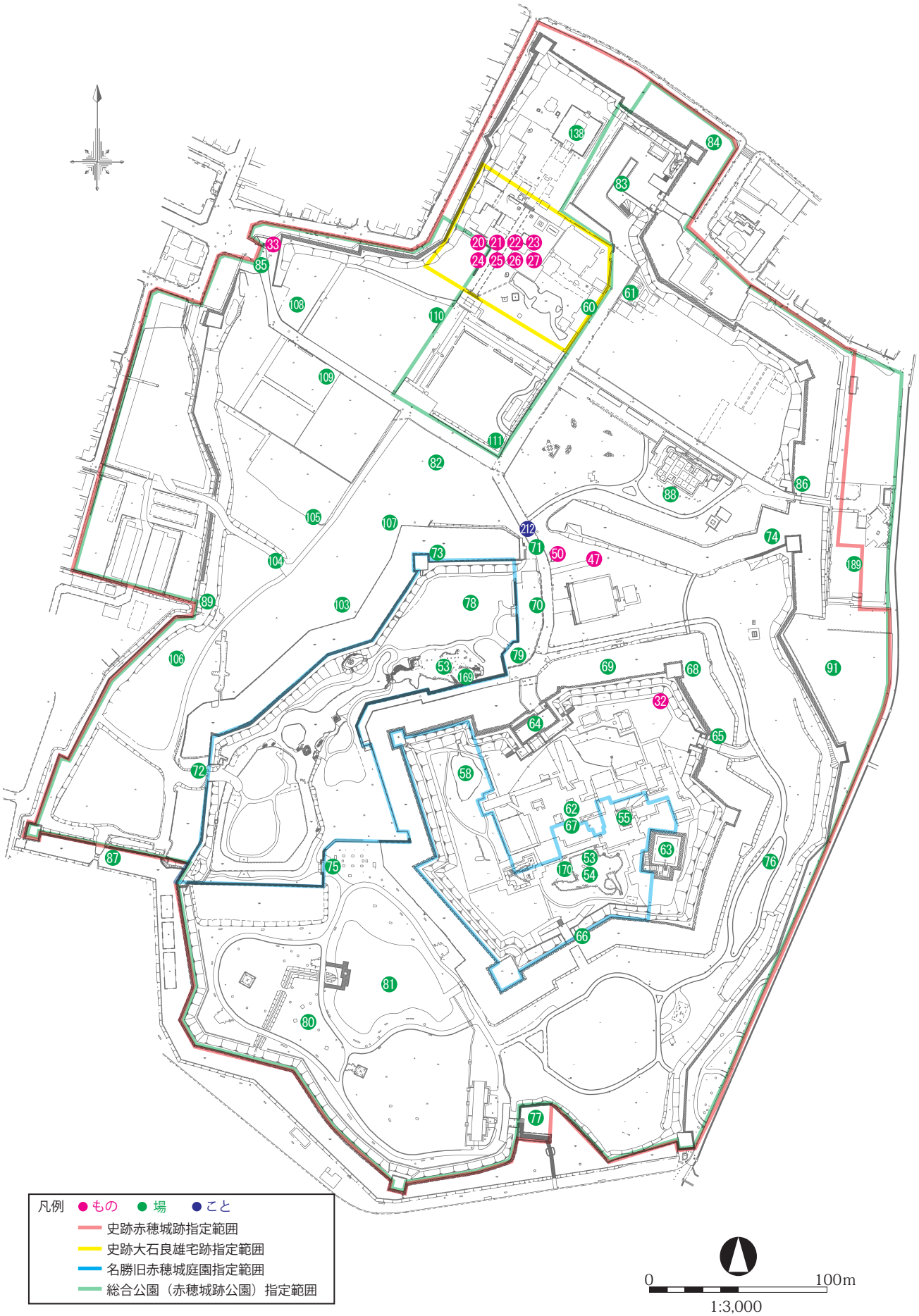
赤穂・城西全図



旧城下町全図



赤穂城全図


凡例
● もの
● 場
● こと
史跡赤穂城跡指定範囲
史跡大石良雄宅跡指定範囲
名勝旧赤穂城庭園指定範囲
総合公園（赤穂城跡公園）指定範囲
0
100m
1:3,000

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
1	当麻曼荼羅図	◎								●		縦394.8㎝、横396.9㎝の大幅で、奈良県当麻寺に伝わる根本曼荼羅の転写本である。 図様は『観無量寿経疏』にもとづいて描かれたもので、中央に阿弥陀如来、左右に普賢菩薩、観音菩薩の三尊を中心に極楽の世界を表現している。図の下辺の九区画には、九品来迎図が描かれ、その中央の区画には銘文が書かれているが、本図では文字が欠落していて一部しか書かれておらず、原図からの転写本とみられる。制作は、16世紀後半から17世紀前半の絵仏師系と推測される。 市指定。
2	仏涅槃図	◎								●		絹本着彩で、丈167.7㎝、幅172.8㎝を測る。中央の宝台に頭を左にした釈迦が横たわり、周囲には摩耶夫人、諸菩薩や天部、弟子達、動物達の姿が多数描かれている。本図の制作年代は、鎌倉時代末から南北朝期（14世紀前半）と推測される。市指定。
3	赤穂の製塩用具	◎			30			●				瀬戸内海沿岸地域では広い砂州と潮汐干満の大きな差を利用した入浜塩田が盛んに行われてきた。この資料は赤穂市域で使用されてきた製塩用具等一式を収集したもので、入浜塩田がほとんど見られなくなった現在では貴重な民俗資料である。国指定。
4	義士墨跡並びに 冨森助右衛門筆記	◎			1				●			「義士墨跡」は討入後熊本藩細川綱利邸に預けられた大石以下の義士から、同藩家中堀内伝右衛門が所望した手蹟を張り合わせて一巻としたもの。討入の状況を当事者が記したものとして最も詳しい。市指定。
5	井口半蔵・木村 孫右衛門連署起請文	◎			1				●			旧浅野家中の井口半蔵と木村孫右衛門が連署で大石内蔵助に差し出した起請文である。当史料は討入に参加しなかった者に返却された起請文であるが、赤穂事件にかかわる唯一の現存するもので貴重資料である。市指定。
6	赤穂浅野家藩札 銀拾文目札	◎			1				●			浅野長矩時代の延宝8(1680)年1月に発行された藩札。浅野家は元禄14(1701)年に改易となったため、21年間だけ通用したもので、札の表には「播州赤穂　延寶八(1680)庚申歳　正月吉祥日　銀拾文目」とある。藩札は銀10匁、銀1匁、銀5分、銀3分、銀2分の計5種類が発行され、厳しい専一流通が強制されていた。改易時の藩札発行高は900貫目、引替えにあてうる銀の現有高は700貫目であったため、速やかに6歩替えで回収。回収した藩札はすべて城内で焼却処分されたため、現在確認できている藩札は全国で5点のみである。市指定。
7	赤穂浅野家藩札 銀弐分札	◎			1				●			浅野長矩時代の延宝8（1680）年1月に発行された藩札。浅野家は元禄14（1701）年に改易となったため、21年間だけ通用したもので、札の表には「播州赤穂　延寶八庚申歳　正月吉祥日　銀弐分」とある。藩札は銀10匁、銀1匁、銀5分、銀3分、銀2分の計5種類が発行され、厳しい専一流通が強制されていた。改易時の藩札発行高は900貫目、引替えにあてうる銀の現有高は700貫目であったため、6歩替えで回収。回収した藩札はすべて城内で焼却処分されたため、現在確認できている藩札は5点のみ。市指定。
8	新町地蔵(石仏)	●			4　29		●					加里屋の新町公園の東南隅に五輪塔の水・火輪や宝篋印塔の傘を交互に積み重ねた塔をはさんで、2体の石仏が祀られている。向かって左の石仏は板碑に彫られている。彫り方から南北朝末期～室町初期のものと推定される。向かって右側の石仏は、欠損部があるが南北朝期まで遡る可能性が強い。この石仏は以前この地にあった薬師堂のもので、もとは高山の岩屋寺(薬師屋敷)にあったが寺の移築に伴い移されたものと言い伝えられている。
9	新町延命地蔵	●			4		●			●		新町公園内にある、像高129㎝を測り大正5(1916)年造立の丸彫り半跏像。もともとは薬師堂内に安置されていたが、薬師堂が区画整理事業によって普門寺へ移転したため、地蔵は現在地へ移された。
10	山崎山八十八箇所石仏	●			4		●			●		赤穂南部に点在していた石仏を、明治33(1900)年に巡礼しやすいように山崎山に集積したものと言われる。八十八箇所のうち一番は木像である。山崎山麓には一番札所があったという。八十番の板碑形石仏には明治35(1902)年の紀念銘が残る。
11	地蔵(雄鷹台山)	●			4		●			●		雄鷹台山斜面にある、像高112㎝を測る丸彫りの立像。
12	不動明王(雄鷹台山)	●			4		●			●		雄鷹台山山上にある、像高66㎝を測る半肉彫りの不動明王像。
13	黒谷不動	●			4		●			●		雄鷹台山黒谷にある、像高110㎝の板碑。天保11(1840)年の造立。
14	地蔵(天王道)	●			4		●			●		自然石の上に載る像高48㎝の丸彫り坐像。頭部補修痕あり。
15	迎え地蔵(東沖)	●			4		●			●		東沖の元三昧跡にある、像高108㎝の丸彫り坐像で、宝暦6(1756)年の造立。
16	東惣門石標	●			2　4　27		●		●			城下町の東の押さえとして、浅野長直によって築かれた惣門で、枡形構造をもち惣門と番所が設置されていた。跡地周辺には石標が建てられている。
17	大蔵省境界石標	●			30			●				旧日本専売公社赤穂支局(現・赤穂市立民俗資料館)敷地の南東に残されている、境界石標。北の隣接地には時期の異なる専売公社の境界石標が2本残る。
18	赤穂町道路元標	●			27		●					高さ59㎝で正面に「赤穂町道路元標」、背面に「兵庫縣」と記す。かつては花岳寺門前に建てられていたが、現在は赤穂市立民俗資料館の敷地内に移築されている。旧位置には「加里屋道路元標跡」の碑が平成2(1990)年に建てられた。
19	道標(上仮屋)	●			4　27		●					鷹の羽公園から60m西の四つ角の路傍に建つ。高さ92㎝の凝灰岩製の道標。「左　□(大カ)坂道　義士もくぞふあり」と刻まれている。
20	大石神社神饌所 新築之碑	●			1					●	●	明治16(1883)年に仙珪和尚が大石神社創建願いを出し、明治33(1900)年に兵庫県知事から「大石神社創立の件聞届く」と許可書をうけ、三之丸大石邸跡の一角に創建されたことを記念して、大正2(1913)年に建立された。
21	故浅野氏家老大石君 遺愛桜樹碑	●			1					●	●	安政5(1858)年建立。大石大夫遺愛桜碑と一対になっている。
22	大石大夫遺愛桜碑	●			1					●	●	大正9(1920)年、浅野赤穂城主の筆頭家老内蔵助を称え、赤埴重賢裔である赤埴慶蔵氏によって建立された。故浅野氏家老大石君遺愛桜樹碑と一対になっている。
23	義芳碑	●			1					●	●	明治45(1912)年、大石神社建築に際し本丸内の一石を神社の境内に移し建立。義芳の文字は幕末の儒者佐藤一斎の漢詩巻「忠芬義芳」より転写。義芳門から参道の右側にあったが、義士討ち入り300年記念事業の一端で大石邸庭園の現在地に移転。
24	吉田忠左衛門遺愛桜碑	●			1					●	●	大正9(1920)年建立。明治45(1912)年に拝殿手前の注連柱右側に吉田忠左衛門遺愛の枝垂れ桜が移植されていたが枯死、この碑のみ残っている。
25	仙珪和尚表功碑	●			1					●	●	赤穂大石神社境内にある。大石神社創建の功労者である花岳寺二十一世の住職仙珪和尚の表功碑。碑文は鞍掛勇三郎の撰、書は黒田俊童で昭和3(1928)年に建立された。
26	武士道歌碑	●			1					●	●	婦女新聞社長福島四郎の詠歌「播磨路のあさ野の末に武士の道しるべとてでる大石」を法学博士泉二新熊が自然石に揮毫彫刻。昭和16(1941)年に上城玉垣西寄絵馬殿北側に建立されていたが、平成の新造営に当たり大石庭園に移転された。
27	退筆塚	●								●		昭和24(1949)年に赤穂神社境内より移設したもので、文政14(1831)年の建立の碑文銘がある。平成12(2000)年に七社合祭殿右の現在地に移された。
28	萬福寺本堂再建記念碑	●								●		万福寺境内にある。住職源誓顕が昭和15(1940)年に建立。
29	燦矣開拓魂之碑	●				●				●		昭和23(1948)年より始まった千鳥ケ浜開拓の開拓の労苦を伝えるため、昭和37(1962)年に建立された。
30	稲荷神社社務所建築碑	●			33					●		大正11(1922)年建立。
31	文久事件関係者の墓	●			1				●	●		文久事件(1862年)に関係した青木彦四郎・浜田豊吉・松本善次の墓である。青木は自宅で、浜田・松本は花岳寺でそれぞれ自害した。大蓮寺には西川升吉の墓がある。
32	武川先生頌徳碑	●			1				●	●		赤穂城本丸内にある。武川壽輔は会津に生まれる。陸軍少将退役後、旧制の兵庫県立赤穂中学校の初代校長を勤める。かつて赤穂藩に招聘された同郷の山鹿素行を慕い、校長就任を承諾したという。昭和14(1939)年に赤穂城跡本丸天守台北側に建立、平成元(1989)年移築。
33	良寛歌碑	●			4		●			●		赤穂城三之丸塩屋門付近にある。歌碑は良寛が諸国行脚の途中、赤穂天神の森に立ち寄り野宿したときに歌ったものといわれ、弱い人間の心、悲しみのため息が感じられ、一人の貧しい行脚僧をも受け入れない人の世の冷たさへの嘆きが漏れている。昭和29(1954)年建立。
34	忠義塚	●			1					●		花岳寺境内にある。義士50回忌を前にして寛永3(1750)年に建立されたもので、府臣某とは奥藤利栄、松本善宣、柴原救長、奥藤利徴、田淵春元、柳田吉甫らのことを指したもの。撰文を請われた藤江熊陽(忠廉)は、赤穂に生まれ義士の流れを汲む人として、その願いに応えたものである。
35	忠義櫻句碑	●			1					●		花岳寺境内にある。赤穂森藩において義士追慕の句を募ったとき『忠に咲き義に散る塚の櫻かな」の小林貞良の句が秀逸に当り、それから広く人口に膾炙されていたのを、義士150回忌に伴資達が書き、青山安藤の両氏が句碑として嘉永5(1852)年に建立した。
36	双松碑	●								●		花岳寺境内にある。境内にあった2本の大松を大石良雄手植えの松と伝える。文政10(1827)年建立。
37	講師秀存碑	●								●		万福寺境内にある。万福寺18世住職の秀存の顕彰碑、明治30(1897)年建立。
38	前賀松泉先生碑	●								●		妙慶寺境内にある。前賀松泉は元治元(1864)年坂越村に生まれる。蓼城と号し、赤穂・坂越で教鞭をとり、塩屋小学校長などを30年務めた。また陶芸、花道など幅広く道を究めた。昭和2(1927)年建立。
39	広延斎神田精甫・ 旭光斎神田英甫碑	●								●		大蓮寺境内にある。廣延精甫は通称十郎、旭光斎神田英甫は通称啓太郎といい、花道を極めた。石碑は明治38(1905)年建立された。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
40	謝恩碑	●								●		大蓮寺境内にある。神吉鈴子は安政2(1855)年生まれ。21歳の時に断髪し、裁縫・挿花を究めて家塾を40年営んだ。大正6(1917)年に死去。昭和3(1926)年に石碑が建立された。
41	宮崎先生碑	●								●		龍安寺境内にある。宮崎清七は天保5(1834)年に生まれ、幼くして謡曲、歴学などを教えた。明治33(1900)年建立。
42	児玉□君記念碑	●								●		龍安寺境内にある。伊丹警察署分署の巡査の殉職碑。明治39(1906)年建立。
43	前川氏遠祖功徳碑	●								●		龍安寺境内にある。前川氏の出自、龍安寺の縁起を記す。嘉永3(1850)年建立。
44	西浜塩田三ツ樋浜 一番跡石碑	●			4　30			●				三樋町西側のグリーンベルト内にある石碑で、高さ153㎝、幅30㎝を測る。正面には「西浜塩田三ツ樋浜一番跡石碑」「昭和四十(1965)年廃田」、裏面には「昭和六十一(1986)年三月　赤穂市教育委員会建之」と刻まれている。
45	大石内蔵助良雄像 (JR播州赤穂駅前)	●			1		●		●			JR播州赤穂駅前のロータリーに建つ像は、昭和58(1983)年に赤穂ライオンズクラブ認証20周年を記念して建立された。作者は二科会審査員の高橋忠雄氏。
46	大石内蔵助良雄像 (赤穂市役所内)	●			1		●		●			市役所一階の市民ホールに建つ像は、昭和57(1982)年に市職員により市役所新庁舎竣工を記念して設置。制作は兵庫県彫刻家連盟会員の広嶋照道氏。
47	山鹿素行像	●			1　2　4				●			赤穂藩士の教育、赤穂城建築の縄張りに寄与した儒学者、山鹿素行は嘉永6(1853)年、幕府の封建政治を非難し朱子学を攻撃したとして赤穂に流刑に処され、大石頼母助(大石良雄の大叔父)の奥座敷に住まいをもったという。銅像は大正10(1921)年に大石頼母助屋敷跡に建立されたが、戦時供出で失われて昭和33(1958)年に再建。平成10(1998)年には二之丸庭園整備に伴う発掘調査のため、現在地に移された。なお二之丸にあったとされる「山鹿素行謫居地」は、「兵庫県史跡名勝天然記念物保存費補助規定」に基づく史跡として、かつて認定されていた。
48	義士あんどん (からくり時計)	●			1				●			市制施行60周年を記念して設置された高さ4m程のからくり時計「義士あんどん」。午前9時～午後8時の毎正時、からくり人形が忠臣蔵の名場面「松の廊下」「はやかご」「勝どき」などを再現する。
49	大石なごりの松(花岳寺)	●			1		●		●			大石内蔵助良雄が、母松樹院が亡くなった時に冥福を祈るため植えたとされる2本の松は、樹齢310年の「大石なごりの松」として「兵庫県史跡名勝天然記念物保存費補助規定」にもとづく天然記念物の認定を受けていた。しかし昭和2(1927)年に枯死したため、現在は二代目の松が植樹された。一代目の松は、千手堂(休憩所)に切り株として記念保存されている。
50	かんかん石	●			2					●		赤穂城二之丸門跡付近にあり、周辺の石垣に使われていた石。石でたたくと「かんかん」と音がすることから呼称されている。
51	赤穂鉄道顕彰碑	●			27	●						赤穂鉄道播州赤穂駅跡の赤穂鉄道記念碑が、赤穂市民会館敷地内に建てられている。昭和43(1968)年12月建立。
52	赤穂城跡		◎		1　3　27　32 2　4　28　34　35	●	●		●		●	正保2(1645)年6月、浅野長直が池田輝興除封の後をうけて、常陸国笠間から転封し、慶安元(1648)年から寛文元(1661)年にかけて築城したもの。縄張りは当時の地形を利用して要を得たものと認められる。大手門、水手門付近その他において近世初期に発達した軍学の影響と思われる手法が見られる近世城郭史上価値ある城跡である。国指定史跡。
53	旧赤穂城庭園 本丸庭園 二之丸庭園		◎		1　3 2　4　28　34		●		●		●	本丸庭園は、御殿南面の大池泉、中奥坪庭の小池泉、本丸北西隅の池泉が設けられており、発掘調査後、検出した遺構を整備し公開している。二之丸庭園は、本丸門前に占める大石頼母助屋敷南部から、二之丸西仕切まで至る池泉からなる大規模な庭園であり、これらの水はすべて旧赤穂上水道によって賄われていた。本庭園は本丸・二之丸一体となって保存されている大名庭園であり、平成14(2002)年に「旧赤穂城庭園　本丸庭園　二之丸庭園」として国名勝指定を受けた。
54	本丸大池泉		◎		1　3 2　4　28　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。南側にある大規模な池泉で、発掘調査によってきわめて良好な状態で検出された。池には中島・入江・岬をしつらえ、護岸汀線は直線・曲線を巧みに組み合わせ、池の底には割石・砂利石を敷き、一部には瓦を幾何学的に敷き詰めるなど趣のある造形をもっている。
55	坪庭池泉		◎		1　3 2　4　28　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。御殿中奥坪庭の小池泉は、流れの池泉と舟形の池泉という並列した二つの池泉から構成され、池泉の南側護岸は漆喰に玉石を配した霰こぼし状の特徴ある仕上げとなっている。なお舟形の池泉は赤穂の昔話「赤穂城の石舟」に出てくる「石舟」になぞらえることができる。(赤穂の昔話)
56	くつろぎ池泉		◎		1　3 2　4　28　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。古絵図では「くつろぎ」と記され竹林が描かれているにすぎなかったが、平成元(1989)年の発掘調査によって池泉跡が発見された。池泉跡からは多数の陶磁器類や木製品が出土したが、なかでも「浅野内匠頭」「大石内蔵助」など歴史上の人物名が記された木簡が注目される。
57	旧日本専売公社 赤穂支局 (赤穂市立民俗資料館)		◎		30			●				明治38(1905)年の塩専売法施行に伴い、明治41(1908)年に建設された塩務局庁舎。日本に唯一現存する塩務局庁舎で、現在は市立民俗資料館として、市内で収集された民俗資料を展示している。県指定。なお近隣には旧日本専売公社の新庁舎(現・赤穂市シルバー人材センター)、塩倉庫などが残されている。
58	花岳寺山門		◎		1　4		●		●	●		城下町の西惣門であったものを、明治6(1873)年に花岳寺二十一代仙珪和尚が購入移築した。柱は当時のものより約三寸短くなっていると思われ、建材は栂を主としている。主屋根は本瓦葺きで、棟木と出桁が一支半継ぎたしされている。本山門は高麗門形式をとり、西惣門の遺構であるため、素朴無骨で武家門の風格を構えた城郭付属建築と言える。市指定。
59	大蓮寺山門		◎		1　2　4		●		●	●		一般的な門形式に該当しないもので、棟に1本の冠木を通しているが、中央棟と両脇棟の屋根を段違いにして中央を開き戸、両脇を片開きとし、三間一戸の形式をとる。市内の寺院にはほかに見られない特異な形式の門であり、規模が雄大で18世紀の建築として貴重な建築遺構である。
60	大石良雄宅跡(長屋門)		◎		1　3 2　4　34		●		●			浅野家筆頭家老大石家の一家三代が57年にわたり居宅を構えた。屋根瓦には大石家の家紋である二ツ巴が見られる。また元禄14(1701)年3月主君の刃傷事件を伝える早打ちが叩いた門ともされている。安政3(1856)年に大修理が行われ、大正12(1923)年に国史跡に指定された。
61	近藤源八宅跡長屋門		◎		1　3 2　4　34		●		●			赤穂城の設計を担当した近藤三郎左衛門正純の子、近藤源八正憲の屋敷跡に残る長屋門。父の跡を継いで甲州流軍学を修め、浅野家の軍師として千石番頭の重職にあった。長屋門は三分の一が改変を受けながらもかろうじて保存されており、平成10(1998)年に市指定文化財となった。その後、現存建物の解体修理が行われ、平成11(1999)年から一般公開されている。
62	本丸		●		1　3 2　4　28　34		●		●		●	本丸内の面積は4,580坪でこのうち約三分の二を御殿・庭園・天守台・その他の建物が占めていた昭和3(1928)年には兵庫県立赤穂中学校(現・兵庫県立赤穂高等学校)が内部に建築されたが、国指定を受けて昭和56(1981)年に移転。昭和58(1983)年より発掘調査が開始され、平成8(1996)年に本丸門が整備されるなどし、平成13(2001)年の厩口門の整備によって一旦整備が完了し、公開されている。
63	天守台		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。本丸の天守台は独立して東南隅の最要害部にあり、東西8間、南北9間、高さ3丈1尺5寸の四方石垣で、打込接を主とし、隅角部は算木積みである。廃藩置県後は隅角上部が破壊されていたが、昭和初期に修復された。
64	本丸門		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。本丸門は東西12間余に南北8間余の約100坪の虎口枡形を控えて、一の門と二の門を持つ多門であった。発掘調査の結果や古写真等を資料として、平成8(1996)年に復元が完成した。
65	厩口門		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。浅野家時代には厩口門、森家時代には台所門と呼称されていた。廃城後に失われ、昭和42(1967)年には県立赤穂高校の通用門として改変された。発掘調査の成果を活かして平成13(2001)年に整備された。
66	刎橋門跡		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。本丸の南面、藩邸の裏手にあたる門で、非常門とも不浄門とも伝えられる。建坪5坪の小門で、ここから二之丸へ開閉式の刎橋が架けられていた。現在は本丸内に、門へ至る斜路が整備されている。
67	本丸御殿跡		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡本丸内。本丸内の大部分は藩邸である御殿が占めていた。御殿は表・中奥・奥から構成され、表御殿は政務を行う公的な場、中奥は藩主の私的な場、奥は女中たちの部屋として使用された。この地にあった兵庫県立赤穂高等学校が移転した翌々年の昭和58(1983)年から発掘調査が開始され、昭和61(1986)年に御殿間取りが整備された。
68	本丸東北隅櫓台		●		1　3 2　4　34		●				●	赤穂城跡本丸内。本丸にあった唯一の隅櫓で、東西4間2尺、南北3間4尺2寸の基底部を持つ二重櫓であった。明治初期撮影の本丸門の古写真にはかすかにこの櫓が写っており、往時の姿をかろうじてうかがうことができる。現在は礎石も失われているが、櫓台に登る石段の一部が残存している。
69	本丸外堀		●		1　3 2　4　34		●				●	赤穂城跡本丸内。本丸を取り巻く外堀で、本丸門の土橋部分のみ途切れている。発掘調査によると堀底はほぼ平坦で深さは1.5m前後と比較的浅い。明治の廃城後は田畑として利用されたが、昭和28(1953)年以降に順次復元され、平成10(1998)年に全周の復元が完了した。
70	二之丸		●		1　3 2　4　34		●		●		●	本丸をほぼ円形に包む郭が二之丸で、面積は1万7,259坪、堀によって本丸と隔てられた。石塁は本丸より小さいが、櫓・門などを除いて、681間余、高さは3間4尺と記録されている。
71	二之丸門跡		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡二之丸内。山鹿素行が自ら設計の変更をした二之丸門は、塁線から引き込まれてやや南寄りの西方に開かれた。門は櫓門で口幅3間1歩、高さ2間、建坪9坪のもので、門前には簡単な馬出し(石塁)が設けられていた。明治25(1892)年の千種川大水害の復旧のため二之丸城壁が撤去されていたが、発掘調査では枡形石垣の根石が検出されてその構造が判明したことを受け、平成25(2013)年に一部の石垣が復元整備された。
72	西中門跡		●		1　3 2　4　34		●		●		●	赤穂城跡二之丸内。三之丸干潟門の北東に西向きに設けられた。西の門ともいったが、内部が二之丸庭園であり平時は番人もなく閉ざしていた。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
73	二之丸北隅櫓台		●		1 3 2 4 34		●				●	赤穂城跡二之丸内。二之丸門の北西部に位置し、往時は東西3間半、南北4間半の基底部を持つ一重櫓が存在した。平成16(2004)年の発掘調査では埋没石垣が見つかり、赤穂城の櫓台の中でも古い時期に構築されたことが判明した。平成18(2006)年に解体修理が実施された。
74	二之丸東北隅櫓台		●		1 3 2 4 34		●				●	赤穂城跡二之丸内。二之丸の東北隅角、清水門の南に位置する二重櫓で、基底部は東西3間半、南北4間1尺の規模を持っていたという。櫓台の石垣は明治25(1892)年の大洪水の災害復旧用資材として持ち去られて大半は失われたが、平成8(1996)年に復元整備された。
75	西仕切門		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡二之丸内。西仕切は二之丸を南北に二分する城壁の一つで、低石垣の上に土塀がめぐらされていたことが古絵図や発掘調査から明らかになっており、そこに小門が東に面して設けられていた。古絵図では「透シ門」ともあり、発掘調査で検出された遺構等の成果をもとに平成22(2010)年に復元整備された。
76	東仕切門跡		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡二之丸内。天守台東側の堀に接して、二之丸仕切の石垣があり、これに小門が西に面して設けられていた。古絵図によれば、東仕切の北側には作事小屋が、南側には馬場があった。平成25(2013)年の発掘調査で、仕切土塀石垣とそれに接続する二之丸城壁の腰石垣が発見され、位置がほぼ確定された。
77	水手門跡		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡二之丸内。二之丸の南端に位置し、海もしくは干潟に面した門で、間口1丈、高さ2間余り、建坪4坪の規模を持っていたという。門の周囲は船の出入りのため城壁を大きく内側に引き込んだ水撚の縄張となり、その城壁は緩やかな曲線を描いて西方の南沖櫓台へとつながっていることが特徴である。門前は雁木と突堤が築かれており、雁木と突堤については平成10(1998)年に発掘調査及び復元整備が行われた。
78	大石頼母助屋敷跡		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城二之丸　二之丸門を入ると右手には大石頼母助屋敷があった。大石頼母助良重は大石内蔵助良雄の大叔父に当たる人物で、特に藩主長直に重用され赤穂においては二之丸に屋敷を賜った。山鹿素行が赤穂に配流された際、素行はこの大石頼母助の屋敷の一角で8年余りの謫居生活を過ごした。 頼母助屋敷は発掘調査によって遺構が明らかとなり、平成21(2009)年にはその成果を活かして屋敷門が整備された。
79	二之丸庭園表門		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城二之丸　二之丸庭園の南東隅角にあたり、発掘調査では後世の削平によって遺構は失われていたが、古絵図の資料から門の存在が判明し、平成20(2008)年に冠木門が整備された。
80	元禄桜苑(花見広場)		●		1		●					赤穂城跡二之丸内。二之丸にある花見広場。二之丸南西部にあり、発掘調査を行ったところ遊水池遺構が発見された。現在は池の復元がなされ、周囲には元禄期のサクラの品種など18種200本余りが植えられて市民の憩いの場となっている。
81	遊水池跡		●		1 3 2 4 34		●				●	赤穂城跡二之丸後郭にあった池跡。発掘調査によって発見され、現在は花見広場の中に復元整備されている。
82	三之丸		●		1 3 2 4 34		●		●		●	二之丸の北・西部を囲む郭が三之丸で、面積は約2万2605坪と算定される。石塁は全長573間5尺、高さは3間と記されているが、塩屋門から干潟門にいたる部分は高さ約1間半と低い石垣が築かれている。
83	三之丸大手門枡形		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡三之丸内。浅野長直が赤穂城を築城した際に城域を拡張した部分が、赤穂城の玄関口ともいえる三之丸大手門である。明治30(1897)年に石垣が改変されたが、平成13(2001)年には発掘調査の成果を活かし、再び往時の姿に整備された。
84	三之丸大手隅櫓		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡三之丸内。大手門の北にある二重櫓で、東西4間半、南北3間半の基底部を持つ二重櫓である。大手門を監視する到着櫓としての性格を持ち大手門防備の要となる櫓である。明治初期に取り壊されたが、昭和30(1955)年に大手門や土塀とともに再建された。
85	塩屋門跡		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡三之丸内。搦手の門である。口幅2間2歩、建坪5坪、門を入ると正面に番所、その裏には長さ13間2尺、高さ2間半、幅2間半の石塁があり、内枡形をしていた。この枡形内に太鼓櫓があって、藩士に合図をした。門の向きは南寄りの西向きで、足軽・下番各2人、三道具一組が配置された。
86	清水門跡		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡三之丸内。三之丸東に口幅2間2歩、建坪4坪の清水門があり、板橋を渡ると米蔵、御薬煙場、川口番所に出られるようになっていた。門番は一人で平常は閉門していたという。発掘調査の成果を活かし、平成3(1991)年に橋石垣の復元整備が行われた。
87	干潟門跡		●		1 3 2 4 34		●		●		●	赤穂城跡三之丸内。潟口門とも呼ばれた。二之丸水手門と同様、海に面していた。口幅1間2歩、建坪5坪、平常閉門、番人なしであった。
88	武家屋敷公園		●		1 4		●					赤穂城跡三之丸内。清水門の西側に位置し、浅野時代には坂田式右衛門の屋敷があった。昭和58(1983)年に門と瓦葺土塀を復元し、内部は部屋の間取り表現を行ったほか、井戸屋形や四阿などを設けている。また屋敷地の植栽には当時の侍屋敷の生活をしのばせる野菜や薬草類なども植えられている。
89	樋門跡		●		1 3 2 4 34						●	赤穂城跡三之丸内。赤穂城跡二之丸外堀の水量調節の樋門で、三之丸城壁の石垣面に開口している。水は堀から石組み溝によって導かれ、城壁の下を通りこの樋門から城外へ排水された。
90	三之丸外堀護岸復元		●		1 3 2 4 34		●				●	赤穂城跡三之丸内。三之丸外堀は、清水門から塩屋門西までの間に巡っていた。廃城後に田畑となっていたものを順次復元したが、塩屋門周辺は区画整理により、道路や宅地となっている。その一部については発掘調査によって護岸石垣が検出されており、現在はモニュメント公園が整備され、往時の堀幅を表示している。埋没した堀部分の一部は平成15(2003)年8月27日に史跡の追加指定を行われた。
91	船入跡(赤穂城)		●		1 3 2 4 34		●				●	赤穂城の東に隣接する米蔵の南側にあり、熊見川に開口していた。昭和59(1984)年～61(1986)年に一部が発掘調査された。船入の内部は石垣護岸となり、桟橋状の突堤が付設されていた。
92	赤穂市役所遺跡		●		34						●	昭和31(1956)年市庁舎建設のための基礎工事中、数片の土器が発見された。赤穂デルタが形成され、瓦器を使用しうるような階層の人が居住したと考えられる。
93	千鳥ヶ浜土器採集地		●		34						●	千種川河口の西側の高い堤防の外側に広い砂浜がある。これが千鳥ヶ浜で、この砂浜は千種川の流れによって運ばれた土砂の沖積地である。河口の砂浜で採集された土器片は弥生時代のものであった。
94	加里屋古城跡		●		2 29	●					●	15世紀頃、熊見川河口は急速に陸地化が進んでいくなかで、山麓部から人々が移住してくるとともに、河口部の中村が港町として栄え始めていた。そこで岡豊前守は中村の西、熊見川の対岸に加里屋古城を築き、新たな砦とした。『播州赤穂郡志』によると加里屋古城は城下町の一丁目と寺町の間南北66間、東は大川(熊見川)、西は横町を限った範囲にあったという。 16世紀には周辺で寺の建立が始まり、城下町も充実しはじめた。江戸時代になると城はさらに南に移動し、加里屋古城跡は城下町の町家へと変わっていった。
95	掻上城跡		●		2 4	●					●	池田河内守長政時代に垂水半左衛門勝重によって城ケ洲に構築された。古絵図には一重の石垣に囲まれた城郭が描かれており、現在の本丸跡にあたると推定されているが、池田時代にはその後も様々な城郭増築が行われたことがわかっている。
96	土取場跡		●		2							赤穂城築城時の土取り場跡。『年々御侍屋敷其外色々御用定引覚』によると、「慶安四(1651)年御城御普請ノ時土取場ニ成、所は伊藤五右衛門様ノ南堤ノ外畠」とされている。
97	西惣門跡		●		1 2 4 27		●					現在のJR赤穂線の高架下周辺に該当する。備前街道より赤穂城下へ入る際の西の押さえの門であり、現在の赤穂城を築いた浅野長直が城下町を拡張した際、東西に惣門を築き番所を配して守りとした。この門の一部は花岳寺の山門として移築されている。
98	御成道		●		4 27		●					花岳寺門前の道の通称。古くは赤穂城の大手から花岳寺までを浅野菩提寺の参詣道として御成道といい、とくに重要視されたという。
99	鍵型街路		●		2 4		●					城下町内の道を、鍵形に曲げたり袋小路を設けるなどすることで見通しをなくし、城への到達時間を延長させたもの。現在も各所に見られる。
100	武者隠し		●		2 4		●					城下町内の道幅を突如広めることによって死角を作り出し、突如狭めることによって敵の軍勢の勢いを軽減させるなど、城下町防備の工夫が現在も残されている。
101	侍屋敷(上仮屋)		●		2 4 36		●					侍屋敷は城の北西に整備された。浅野家が赤穂に入封したときも、石高の増加に伴って城下町を拡大整備したのみである。二之丸、三之丸には重臣邸が置かれ、侍屋敷の大部分を占めたのは塩屋門外の上仮屋の一帯であった。
102	町家(加里屋)		●		2 4 30		●					町家は城の北方に整備されていた。町家は17町に分けられていた。
103	外村源左衛門屋敷跡		●		1				●			浅野家家臣で禄高400石番頭。刃傷事件後、藩札引き替えの資金借用に奔走したが、当初から開城論に立ち、当初から盟約には加わらず。
104	糟谷勘左衛門屋敷跡		●		1				●			浅野家家臣。250石の用人。浅野内匠頭長矩の遺骸を引き取り、高輪泉岳寺まで見送った6人の中の一人。討ち入りには参加せず。
105	佐々木平作屋敷跡		●		1				●			浅野家家臣で、15石3人扶持。屋敷地は東面して間口13間半程、奥行き18間程であったと伝えられる。討ち入りには加わらず。
106	大木弥右衛門屋敷跡		●		1				●			浅野家家臣で500石の中小姓頭。屋敷地は間口30間、奥行き30間以上を測る広大なものであった。屋敷地横手の三之丸城壁には二之丸外堀の水量調節用の樋門がある。
107	小松又右衛門屋敷跡		●		1				●			浅野家家臣で150石の膳番。屋敷地は西面して間口13間程、奥行き20間程であったと伝えられる。屋敷地裏は二之丸外堀となっており、堀の対岸には一重櫓があった。
108	間瀬久太夫宅跡		●		1				●			義士宅址。間瀬久太夫正明は寛永18(1641)年生まれ。役職は目付(大目付)で知行高は200石・役料10石であった。間瀬孫九郎の父、小野寺十内の従弟にあたる。享年63歳。
109	磯貝十郎左衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。磯貝十郎左衛門正久は延宝7(1679)年に江戸で生まれた。役職は用人(近習・物頭並側用人)で、知行高は150石であった。享年25歳。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧（4）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
110	大石瀬左衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。大石瀬左衛門信清は延宝5(1677)年に赤穂で生まれた。役職は馬廻で知行高は150石であった。享年27歳。
111	片岡源五右衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。片岡源五右衛門高房は寛文7(1667)年に名古屋で生まれた。役職は用人(内証用人)で知行高は350石であった。享年37歳。
112	菅谷半之丞宅跡		●		1				●			義士宅址。菅谷半之丞政利は万治3(1660)年に赤穂で生まれた。役職は馬廻・代官で知行高は100石であった。享年44歳。
113	近松勘六宅跡		●		1				●			義士宅址。近松勘六行重は寛文10(1670)年生まれ。役職は馬廻(給人)で知行高は250石であった。奥田貞右衛門の兄。享年34歳。
114	早水藤左衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。早水藤左衛門満堯は寛文4(1664)年に備前国西大寺で生まれた。役職は馬廻(給人)で知行高は150石であった。享年40歳。
115	大高源五宅跡		●		1				●			義士宅址。大高源五忠雄は寛文12(1672)年に赤穂で生まれた。役職は中小姓近習・膳番で知行高は20石5人扶持であった。享年40歳。
116	貝賀弥左衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。貝賀弥左衛門友信は慶安3(1650)年生まれ。役職は中小姓近習・蔵奉行で知行高は10両・役料2石3人扶持であった。吉田忠左衛門の弟、吉田沢右衛門の叔父。享年54歳。
117	不破数右衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。不破和右衛門正種は寛文10(1670)年丹波国古市で生まれた。役職は浪人(元馬廻・元浜辺普請奉行)で知行高は元100石であった。間瀬久太夫の甥。享年48歳。
118	勝田新左衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。勝田新左衛門武堯は延宝8(1680)年赤穂で生まれた。役職は中小姓近習・札座横目で知行高は15石3人扶持であった。享年24歳。
119	中村勘助宅跡		●		1				●			義士宅址。中村勘助正辰は明暦2(1656)年に越後国村上で生まれた。役職は馬廻・祐筆頭(給人ほか)で知行高は100石であった。間瀬久太夫の甥。享年48歳。
120	岡嶋八十右衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。岡嶋八十右衛門常樹は寛文6(1666)年生まれ。役職は中小姓近習・札座勘定方で知行高は20石5人扶持。原惣右衛門の弟、下貝賀弥左衛門の甥。
121	原惣右衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。原惣右衛門元辰は慶安元(1648)年生まれ。役職は足軽頭(鉄砲頭・物頭)で知行高は300石。岡嶋八十右衛門の兄。享年56歳。
122	間喜兵衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。間喜兵衛光延義士宅址。は寛永12(1635)年に近江国で生まれた。役職は馬廻・勝手方吟味役で知行高は100石であった。間重治郎・新六の父。享年69歳。
123	矢頭右衛門七宅跡		●		1				●			義士宅址。矢頭右衛門七教兼は貞享3(1686)年に赤穂で生まれた。矢頭長助の子。享年18歳。
124	木村岡右衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。木村岡右衛門貞行は万治元(1658)年に赤穂で生まれた。役職は馬廻(絵図役)で知行高は150石であった。享年46歳。
125	岡野金右衛門宅跡		●		1				●			義士宅址。岡野金右衛門包秀は延宝8(1680)年に赤穂で生まれた。小野寺十内の甥、大高源五の従弟。享年24歳。
126	千馬三郎兵衛宅跡		●		1				●			義士宅址。千馬三郎兵衛光忠は承応2(1653)年生まれ。役職は馬廻で知行高は100石。享年51歳。
127	潮田又之丞宅跡		●		1				●			義士宅址。潮田又之丞高教は寛文9(1669)年に江戸で生まれた。役職は馬廻・国絵図役人で知行高は200石。享年35歳。
128	赤松滄州宅跡		●		4		●					赤松滄州・蘭室父子は、博文館をはじめとする赤穂藩の文教の基礎を築いただけでなく、近世後期における京都との文化交流の役割も果たした。
129	大島黄谷窯跡		●		4		●					大嶋黄谷は名を九郎次といい、鋳物・生花等に秀で、特に陶芸では黄谷と号して雲火焼と呼ばれる陶器を創り出した。この場所は熊見川の新土手にあたり、黄谷に陶芸を教えた作根弁次郎が築いたもので、黄谷も使用したという。
130	博文館跡		●		4		●					藩医、医儒であった赤松滄州と、その子蘭室の尽力により、家臣の子弟教育のため安永6(1777)年に完成した藩校である。落成に先だち「博文館規範」が制定され、言行を慎み、諸書を博覧し、詩文に通じた人材の養成を目的とした。明治維新後は、明治5(1972)年の学制発布を経て、翌年に博文小学校として引き継がれたが、明治10(1877)年には学校統合とともに中村に移転した。現在は鶴の丸公園となっており、平成29(2017)年の発掘調査で建物の位置が確定した。
131	木南家住宅		●		4		●					旧備前街道に面して建つ、取り込み格子、出桁造の厨子2階の町家。明治34(1901)年築、平成10(1998)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
132	山﨑家住宅		●		4		●					旧備前街道に面する間口が広く中央に庭を挟んだ母屋と塩蔵がある。幕末～明治初期築、平成10(1998)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
133	新田家住宅		●		4		●					御成道に面した、黒漆喰塗りの重厚な建物。昭和7(1932)年築、平成6(1994)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
134	谷家住宅		●		4		●					御成道に面する2階の虫籠窓の意匠が見られる本瓦葺きの建物。昭和6(1931)年築、平成6(1994)年に赤穂市市街地重要建築物に指定。
135	濱尾家住宅		●		4		●					赤穂城下町の特徴で塀で囲まれた入母屋造の厨子二階武家風住宅。明治中期築と推定。平成10(1998)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
136	天神宮跡(梅通寺跡)		●		4		●			●		天保3(1647)年、浅野長直が笠間城内にあった鎮守を塩屋門西に移し「天神宮」として建立したものという。元文元(1736)年～明和6(1769)年頃には、森忠洪によって空き地となっていた大蓮寺南に移された。明治12(1879)年の寺社明細帳によれば、信徒は7,108人を数えたが、明治42(1909)年、この地に移転してきた赤穂神社に合祀された。天神堀に住む「ガタロウ」という河童が登場する昔話がある。(赤穂の昔話)
137	赤穂神社跡 (天神宮・天満神社跡)		●		4		●			●		明和3(1767)年、森忠洪が赤穂城二之丸後郭に建立した森家三霊祠を前身とするもので、明治10年代に赤穂神社と改称した後、塩屋門西(博文館跡)に遷された。明治42(1909)年には加里屋町の天満神社(天神宮)跡地に改築移転、昭和24(1949)年には大石神社に合祀されたが、建物は改修されながらも赤穂カトリック教会として長く使用された。平成25(2013)年、幼稚園舎建替えに伴い解体された。
138	赤穂大石神社		●		1　33		●		●	●		明治天皇の宣旨を契機として明治33(1900)年に神社創立が公許せられ、大正元(1912)年11月、四十七義士命を祀る神社が大石良雄宅跡を含む敷地に建立された。祭神は大石内蔵助良雄以下四十七義士命と萱野三平命を主神とし、浅野長直・長友・長矩の三代の城主、その後の藩主森家の先祖で本能寺の変に散った森蘭丸ら七人の武将を合祀する。昭和24(1949)年に赤穂神社を合祀し、赤穂大石神社となった。境内には義士史料館、義士宝物殿、義士木像奉安殿、大石邸長屋門・庭園などがある。
139	稲荷神社(中広)		●		33		●			●		祭神は倉稲魂命。本殿・拝殿・社務所のほか、淡島社が合祀されている。毎年10月第3日曜日には中広地区の秋祭りで獅子舞の奉納が行われている。
140	龍安寺・荒神社		●		4		●			●		寛永3(1626)年に真言宗として天王山の西麓に開山し、元禄14(1701)年に中興されて禅宗に改められ、現在に至る。山号は荒神山。龍安寺にある天王神社は上郡町の長嶺神社から遷してきたものと伝えるが詳細は不明。このほか三宝大荒神と稲荷社が祀られている。境内には、延享5(1748)年造立の台石をもつ像高75㎝の地蔵菩薩像(像と台石は石材が異なる)、像高64㎝を測る丸彫りの石造地蔵菩薩像がある。
141	万福寺		●		1　2　4　29		●		●	●		真宗大谷派の寺院で、播磨六坊の一つ。もと英賀(姫路市)に建立されていたが、那波大島(相生市)を経て天正年間(1573～1592年)に加里屋に移った。山号は大嶋山。
142	玉龍院		●		4		●		●	●		かつては玉龍庵、因首座といった。北側には慶長2(1597)年に移築再建されたという大高山長安寺(大楽院)があったが、昭和32(1957)年に普門寺と相合して尾崎に移された。
143	妙慶寺		●		4		●		●	●		赤穂城を設計した近藤正純が建立したもので、赤穂城築城の余材をもって築かれたと伝わる。山号は大谷山。近藤正純の墓は、のちに花岳寺に移された。すぐ南に隣接して報恩寺もあった。
144	随鷗寺		●		1　2　4		●		●	●		元和2(1616)年に開創された臨済宗寺院で山号は江西山。開山の雲甫は不生禅を確立した盤珪の師。かつて寺の裏は熊見川に面し、浅野時代には遠林寺とともに水軍の屯所としての役割を担っていた。境内の墓地には義士の肉親や近藤源八の墓があるほか、弘化5(1848)年造立、総高134㎝、像高54㎝を測る「羽鱗塔」地蔵菩薩像のほか、嘉永元(1848)年造立、像高48㎝の丸彫り坐像がある。後者は「延命地蔵」「出世地蔵」と呼ばれ、かつては上仮屋南にあったが区画整理事業によって移転、所在不明ののち備前市で発見、平成18(2006)年に現在地に安置された。
145	高光寺		●		1　2　4		●		●	●		大津村にあった日蓮宗寺院妙典寺が、寛永17(1640)年に備前街道に対する構えとして現在地に移設。明暦3(1657)年に浅野長直から本尊の寄進を受け、寛文2(1662)年には長直夫人の菩提寺となり、延宝2(1674)年にその法名から高光寺となる。寺には原惣右衛門が奉納した直筆の法華経8巻、大石内蔵助良雄画の大黒天画像、浅野家寄進の三十番神画像、鬼子母神十羅刹女画像のほか、義士の位牌などが残されている。山号は法耀山。
146	常清寺		●		1　4		●		●	●		慶安年間(1648-1655)に開創された真言宗の寺院で、もとは東性寺といったが、浅野長直三回忌の延宝3(1675)年に長直の法号をとって寺号とした。城下町の東北隅に位置し、東惣門の押さえとしての役割を担っていたという。寺には、浅野家からの寺領寄進状が残されている。山号は春日山。境内には10体の地蔵菩薩像が安置されている。
147	浄念寺		●		4		●			●		真宗本願寺派の寺院で、明応4(1495)年に釈浄が開基した。かつて万福寺前にあったが、元禄15(1702)年に現在の場所に移ったという。山号は等力山。
148	福泉寺		●		1　4		●		●	●		寛文5(1665)年に建立された法華宗寺院。境内には茅野和助の子猪之助の墓があるほか、大石頼母助良重の書簡が伝わる。山号は長遠山。幕末の文久事件により藩政から退けられた村上真輔の次男河原駱之助が藩領外へ立ち退く途中、襲撃の企てがあることを知り福泉寺で自害しており、境内にその墓がある。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧（5）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
149	花岳寺(義士墓所)		●		1　2　4		●		●	●		正保2(1645)年に、浅野長直が父華獄院殿と母台雲院殿の菩提寺として建立し、その法名から台雲山華獄寺と称した。曹洞宗永平寺の末寺である。以後、歴代藩主となる永井家、森家の菩提寺でもある。境内には浅野・森家墓碑、赤穂義士47人の墓碑、義士宝物館、義士木像堂、大高源五の句碑、近藤正純の墓等があり、赤穂藩や義士関連資料が多く保存されている。ほか石仏として、享保19(1734)年、寛政2(1790)年、文化11(1814)年造立の地蔵菩薩像などがある。なお池田時代、このあたりは鉄砲屋敷であり、周辺の調査で鍛冶関連遺物が出土している。
150	大蓮寺		●		1　2　4　29　35		●		●	●		浄土宗の寺院で、もとは北方の山麓にあったと伝えられ、城下町の形成とともに加里屋に移された。天文元(1532)年には、開山した察道が没していることから、加里屋最古の寺院と言える。境内には帰依をうけた浅野長友夫人である戒珠院殿の墓があるほか、大石内蔵助良雄の寄進と伝えられる稲荷神社、石燈籠がある。また大川安碩、赤松蘭室、神吉東郭といった幕末期の文人の墓が残されている。石仏としては安政3(1856)年造立の六地蔵が安置されているほか、像高177㎝を測る笠付板碑形の半肉彫り立像がある。山門は市指定有形文化財。山号は照満山。
151	永應寺		●		1　2　4　29　32		●		●	●		延徳2(1490)年に開創された浄土真宗本願寺派の寺院。中村にあり「播磨六坊」のひとつで、山号は朝日山。寺には大石内蔵助良雄から寄進された喚鐘とその際の書状が残されている。墓地には、享保12(1727)年に『播州赤穂郡志』を著した藤江忠廉の墓がある。
152	普門寺跡		●		4		●			●		天台宗園城寺派の寺院跡地。寺縁起によると古来は雄鷹台山にあり、慈覚大師の創建といわれているが、慶長2(1597)年、普門寺は赤穂東組(橋本町)、長安寺は赤穂西組(新町)に再建された。昭和32(1957)年、加里屋の区画整理事業により尾崎に移築され、両寺が相合して明王山普門寺と改称された。本尊は木造千手観音坐像で、国指定重要有形文化財に指定されている。
153	玄興寺跡		●		2		●			●		池田家の赤穂入封とともに、池田家の菩提寺として建立された臨済宗妙心寺派の寺院。浅野家入封後は遠林寺と改められ、浅野家の祈願所となった。水軍の屯所として、赤穂城の出丸としての役割を果たしたという。
154	遠林寺跡		●		1　4		●		●	●		池田時代の臨済宗玄興寺を浅野時代に真言宗遠林寺と改め、浅野家の祈願所、赤穂藩水軍の屯所とした。山号は冥應山。赤穂浅野家断絶後は大石内蔵助が開城の残務処理を行ったこともある。明治14(1881)年に廃寺となり、本堂は御崎の廣度寺に移築された。
155	長安寺跡		●				●			●		浅野時代の城下町の整備に伴って、高光寺とともに備前街道の西の出丸的意味をもって新町に建立された。「大衆院」とも呼ばれた。薬師如来堂があった。昭和32(1957)年に普門寺と相合した。
156	行宝院観音堂		●		4		●			●		新赤穂大橋の西詰めにあり、道路形状からかつての中村の南端にあたる場所に位置する。観音堂横には像高154㎝を測る天保4(1833)年造立の丸彫り半跏像（迎え地蔵）を中心として、計23体分の地蔵菩薩像が安置されている。
157	山崎山東水余し樋		●		3　28	●						戸島枡から200mlほど上流にあり、導水路を流れる水の量を調節し、余った水を並んで走る悪水路に放流して水量を調節した。現在では近代的な施設に改修されていて旧状を偲ぶことはできないが、加里屋川の水源の一部となり、下流の水田を潤している。
158	戸島用水		●		2　3　4　28	●						正保2(1645)年、赤穂に入封した浅野長直は、城や城下町の整備とともに新田の開発を積極的に行った。慶安2(1649)年には「戸島井溝」を掘削し、翌年には戸島新田村を成立させた。この用水は184町9反5畝(約185ha)の灌漑用水として、また新田居村地区の生活用水としても利用され、現在は農業用水として役目を果たしている。大正2(1913)年からは鵯和地区にも送水している。
159	戸島枡		●		3　4　28	●	●					導水路から塩屋、戸島新田への農業用水（戸島用水）の分岐点であるとともに、導水路を南下してきた水を浄化する役割をもっていた。ここでは樋堰によって流れる土砂を沈殿させ、その上澄みの水を城下北端に設けられた百々呂屋裏大枡へ送っていた。現在では、ここもまった近代的な施設に変わってしまったが、付近には旧赤穂上水道案内板と、枡の石材を転用した水恩の碑が建てられている。ここから分岐して塩屋、戸島新田の田畑を潤した戸島用水は浅野長直が築いたものであり、改修されてはいるが現在もなお使用され続けている。
160	農業用水との分岐		●		3　4　28	●						加里屋地区への農業用水路は、現在は赤穂小学校に隣接する「いこいのハーモニー公園」の北側を西方向に通されている。この途中に仕切り板を差し込む穴があり、ここに仕切り板を差し込むことで水量が増し、余水が往時の上水導水路へと導かれ、城下町の旧上水道モニュメントへと通水されている。
161	余水排水溝		●		3　28	●						百々呂屋裏大枡のすぐ手前で、余水は東方に流され、熊見川へ排水された。この排水溝は現在も残されており、現在の加里屋川護岸からその状況を見ることができる。周辺の護岸は幾度かの改修痕跡が認められる。
162	旧赤穂上水道 モニュメント(駅前通り)		●		3　4　28	●	●					発掘調査や通水調査、文献調査などの総合調査によってその詳細が明らかとなった旧赤穂上水道のシステムと歴史的意義を記念し、その保存と活用のシンボルとして昭和57(1982)年に設置された。赤穂小学校前からの余水が通水されると水を検知し、上水道管から噴水のように水が噴き出すようになっている。
163	旧上水道ルートの レンガ表示 (旧上水道保存区域)		●		3　28	●	●					昭和55(1980)年の旧上水道調査の成果に基いて設定された旧上水道の保存区間に該当する花岳寺裏の路地には、旧上水道の配水路ルート上にレンガが埋め込まれ、そのルートが視認できるようになっている。また保存区間では、現在も道路下に旧上水道管や枡が残されていて、「旧上水道」と記載されたマンホールは、現在も地下に残された遺構を守っている。
164	町家汲出枡 水琴窟モニュメント		●		3　4　28	●	●					侍屋敷や町家への給水には、道路の下を通る配水管から引き込まれた給水管によって水が送られ、屋敷内の汲出枡からは長柄の桶やつるべを用いて汲み上げた。現在ではこうした汲出枡も多くが失われてしまったが、水琴窟モニュメントが整備されたこの小公園では、その裏側に当時の汲出枡がそのまま保存されている。内部を覗くと、土管が接続されているのを見ることができる。
165	旧赤穂上水道 モニュメント (大手前公園)		●		3　4　28	●	●					赤穂小学校前の用水分岐を経て、赤穂藩上水道モニュメントの噴水を通過した水は、赤穂城跡三之丸大手門前の大手前公園内に入り、池を潤す。ここでモニュメントに使用されている上水道管（陶管）は、実際の配水路に使われていたものを移築したものである。
166	配水路間枡		●		3　4　28	●	●					JR播州赤穂駅から赤穂城跡までの通称「お城通り」では、平成14(2002)年度に道路舗装工事が実施され、道路上の旧上水道配水路の間枡は上部が破壊されるとともに、内部も埋められて見えなくなってしまった。ただし江戸時代のメインストリートが現道とずれていたために「通り町」筋の配水路間枡を1基残すことができた。ここではグレーチングの隙間からではあるが、瓶枡に豊島石の井戸枠が組み合わされた間枡の四方に配水管が接続されている様子を実際に見ることができる。
167	大手門橋下の水道管		●		3　28	●						赤穂城三之丸大手門にある太鼓橋の下には、近代に改修された上水道菅を見ることができる。
168	百々呂屋裏大枡跡		●		3　4　28	●	●					城下町の北端にあたり、ここで上水道の導水路は開渠から暗渠となった。周辺には水を浄水するために、2間四方の石組枡が設けられていた。発掘調査によって位置が確定し、路面表示が行われている。
169	赤穂城二之丸庭園の 給水施設		●		2　3　28	●						赤穂城三之丸大手門枡形内を通過した上水道は、城内の侍屋敷を潤しながら二之丸門を通過した後、3方向に分岐する。南方向は本丸内に入るものであり、東方向は二之丸東仕切り周辺まで配水したようである。一方、西側には浅野家の重臣、大石頼母助良重の屋敷があり、その背後には広大な二之丸庭園が広がっていた。これら頼母助屋敷と二之丸庭園では、いずれも発掘調査が行われ、すべての水が旧上水道によって賄われていたことが明らかにされた。
170	本丸御殿の給水施設		●		2　3　28	●						元禄14(1701)年の『城中井戸、水道につき藩回答』によれば、城内の井戸は掘削しても用水にできず捨て置かれたものという。そのため城下の水道はすべて上水道によって賄われた。絵図や発掘調査の成果により、台所や庭園への給水施設が明らかとなっている。
171	西浜塩田跡		●		2　30	●		●				江戸時代から近代にかけての西浜塩田区域。主として森時代に開発された。
172	旧日本専売公社 赤穂支局新庁舎		●		30			●				昭和44(1969)年に専売公社赤穂支局として新築された建物。現在は公益社団法人赤穂市シルバー人材センターの事務所となっている。
173	塩倉庫群		●		30			●				旧日本専売公社赤穂支局(現・市立民俗資料館)に隣接して塩倉庫群が今も残されているほか、新川にかかる橋には、荷揚げの上家から塩倉庫へ塩を運ぶためにかつて使用されていた運搬車両用のレールが残されている。
174	赤穂鉄道播州赤穂駅跡		●		4　27		●					大正10(1921)年に播州赤穂ー有年間の12.7㎞を結ぶ軽便鉄道として開通し、昭和26(1951)年の国鉄赤穂線が開通するまで活躍した。播州赤穂駅は、現在の株式会社ウエスト神姫赤穂営業所周辺にあった。
175	JR播州赤穂駅		●		1　4　27		●					昭和26(1951)年12月12日 に日本国有鉄道の駅として開業した。
176	旧備前街道		●		2　3　4　27　29		●					三石から西有年、湯の内、大津、戸島新田、塩屋、加里屋へのルート。城下周辺では現在も道筋が残されており、緩やかにカーブするために見通しが悪く、また武者隠し等の防備施設を見ることができる。特に花岳寺周辺は市街地景観重要建築物もあって景観に優れている。
177	旧姫路街道(百目堰)		●		2 3　4　27　29　32		●					豊臣秀吉が毛利攻めをした際に整備された道が、池田家時代に土手道として整備され、後の姫路街道となった。しかし浅野時代には中村を経由するルートが主要道となり、かつての道は「有年道」となった。浅野時代には東側に新たに新土手が築かれ、土手としての役目も終えたが、旧上水道の導水路がこの土手に沿ってあったため、現在まで道として残されたと思われる。
178	旧黒谷道		●		2　4　27		●					旧道名。浅野長直が赤穂城下町を整備した際の関連文書「年々御侍屋敷其外色々御用定引覚」には万治3(1660)年に「黒谷道となる」との記載があり、その頃に整備されたと思われる。現在も一部のルートが残されている。
179	山崎山		●		36	●						JR播州赤穂駅の北側に位置する。別名「お大師山」と呼ばれ、八十八ヶ所石仏があるほかツツジの名所として知られる。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧（6）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
180	取揚島		●		4　36	●	●					千種川河口先の播磨灘にある3,562㎡の小島。江戸初期に播磨国と備前国との間でこの島の領有権争いがあり、幕府が取り揚げたことによる。のち島の東を播磨、西を備前領と定められた。現在も島上の石標から綱崎海岸に建つ国境石を見通した海上線が岡山・兵庫県境である。往昔の景勝地。
181	熊見川（加里屋川）		●		4	●	●	●				加里屋川の旧称。かつては高瀬舟等の交通のため尾崎川（現在の千種川の流れ）の水を亀の甲で堰き止めて熊見川を主流としていたが、明治25(1892)年の大水害後、亀の甲は撤去されて今の流れとなり、熊見川は川幅が狭められて加里屋川と中広川となった。加里屋川の護岸には、現在も雁木の痕跡が残されている。
182	加里屋川護岸		●		4　27	●	●					かつての熊見川の護岸にあたり、絵図によれば景観を重視した整備が行われて現在も新しい雁木が加里屋川の景観に一役を買っているが、古絵図に見られる位置にも雁木痕跡が残されている。
183	旧尾崎川		●		2　27	●						現在の千種川の旧河川名。かつては亀の甲によって川が堰き止められて熊見川（現在の加里屋川）に多くの水が流れていたが、明治25(1892)年の大水害後に亀の甲は撤去され、尾崎川が主流となり、千種川となった。
184	新川		●		27　30　35	●	●	●				かつて赤穂城の南から西方へ流れていた狐川が、塩田開発に伴って水路に整備されたもの。旧日本専売公社赤穂支局の南側を流れている。赤穂城築城に際し「コクスケ」という狐が妨害をし、狐川の名前を付けさせたこと、城内に国助（こくすけ）稲荷があることを伝えた昔話がある。（赤穂の昔話）
185	旧長池		●		2　4　32	●	●					中世に加里屋古城から西方面への街道は自然堤防上にできたと考えられ、江戸時代には備前街道となる。池田時代、備前街道の南側に沿って東西に長い池があり、長池と呼ばれた。浅野時代には長池は埋め立てられて町家となり、現在は水路のみとなっている。
186	旧上広門村		●		2　32							旧集落名。『播州赤穂郡志』によれば中村（現在の中広）の北側にあったが、享保12(1727)年にはすでに中村の内に入っていたという。
187	旧下広門村		●		2　32							旧集落名。『播州赤穂郡志』によれば中村(現在の中広)の北側にあったが、元禄年間（1688～1704）の洪水を難を逃れて家を中村に移したという。
188	旧中村(中広)		●		2　4　27　29　32	●	●					旧集落名。中庄(中村)は大川の河口部に堆積した中州上に成立した集落である。15世紀頃は中庄といい、千種川河口の港町として繁栄したことが『兵庫北関入船納帳』よりうかがわれる。播磨六坊のひとつ永應寺が開設され、市域南部の中世文化の中心地であった。明治25(1892)年の大洪水による千種川の大改修の後に中村と広門村が一つになり、大正15(1926)年に中広と改称した。
189	赤穂市立歴史博物館		●		1　3　4　28　30			●	●			かつて赤穂城に隣接してあった米蔵の場所に位置し、赤穂の塩、赤穂の城と城下町、赤穂義士、旧赤穂上水道の4テーマにもとづき、赤穂の歴史と文化を紹介する。平成元(1988)年開館。
190	赤穂情報物産館		●		4		●					加里屋お城通りに面した立地にあり、多種多様な地元の土産物を集めて販売する。販売スペースの1階部分には定番の塩味まんじゅう、塩をはじめ漬け物、陶器、絵はがきなど約150種類が並ぶ。
191	赤穂玩具博物館		●				●					大正時代後期に建築された古民家を活用し、昭和30～50年代を中心とした玩具を展示する私設博物館。
192	赤穂緞通加里屋工房		●				●	●				赤穂緞通の技法継承のために平成3(1991)年から開催された市教育委員会の講習会以後、市内各地につくられた赤穂緞通工房の一つ。
193	赤穂緞通いらか工房		●				●	●				赤穂緞通の技法継承のために平成3(1991)年から開催された市教育委員会の講習会以後、市内各地につくられた赤穂緞通工房の一つ。
194	グリーンベルト		●				●					塩田跡の工業地帯と住宅地域との間の公害緩衝緑地事業としてつくられた、総延長4kmの緑地帯。昭和43(1968)年に着手、昭和52(1977)年4月に工事完成。
195	義士モニュメント（噴水）		●		1		●					息継ぎ井戸西側にあり、四十七士の義と勇にあふれる心を顕彰するため平成13(2001)年に造られた。制作は彫刻家の井田彪氏。
196	息継ぎ井戸		●		1　3　4　28		●					江戸で浅野内匠頭による刃傷事件の第一報を知らせるため、元禄14(1701)年3月14日の夕刻に赤穂藩士、早水藤左衛門、萱野三平が早駕籠で江戸を出発。赤穂城下に着いたのは3月19日の早朝。155里（約620km）の行程を4昼夜半早駕籠に揺られ続けた両人は、城下に入りこの井戸の水を飲んで一息ついたといわれ、以来、移転を重ねながらも、息継ぎ井戸と呼ばれている。
197	いきつぎ広場		●		1		●					息継ぎ井戸周辺は観光施設として整備されて広場となっている。広場の一角では、発掘調査で見つかった旧赤穂上水道が露出展示されている。
198	船入広場・船入跡		●		4　27		●	●				江戸時代になると、熊見川に接して赤穂藩の船入が築かれた。元禄期の絵図には船入北側に雁木や船奉行屋敷、水主屋敷、船頭屋敷が描かれている。森時代になると役目を終えて水田となり、現在はその一部が加里屋駐車場になるとともに、隣接して船入広場が整備されている。平成14（2002）年の発掘調査で、18世紀代の護岸石垣が確認された。
199	花岳寺門前広場		●		4		●					花岳寺の門前に平成16(2004)年に整備されたポケットパーク。赤穂や義士にゆかりのある「桜」をシンボル・ツリーとし、赤穂義士の討ち入り装束の入山形舗装など、地域住民のアイディアが活かされたポケットパーク。
200	お城通り		●				●					赤穂駅大石神社線（みなと銀行～赤穂城大手門前）の愛称。平成10(1998)年に市街地景観形成地区に指定され、城下町をモチーフとした街路整備が実施された。
201	三味線製作技法			◎								赤穂市内において三味線の全工程を一貫製作する技術を持つ目坂進氏を赤穂市選定保存技術保持者に認定している。
202	加里屋・仮屋			●	2　4　29　36		●					地名。千種川河口西側のデルタ上に位置し、赤穂市役所をはじめ、行政機関の所在地。加里屋村は明応・永世(1492～1521年)頃に雄鷹山の西、黒谷・長尾・山下の加庄村の農民が耕作・製塩を営むために山下の南＝上町あたりに仮り屋をつくって移り住んだのに始まるという。かつての侍屋敷は上仮屋、町家は加里屋と呼ばれている。
203	黒谷			●	32		●					地名。黒と呼ばれた城下町北方の谷であり、現在も黒谷へ通じる黒谷道が一部残されている。
204	橋本町			●	36		●					地名。かつて長池にかかる橋があったことから名付けられた。中世加里屋古城の搦手にあたるとされる。浅野長直が慶安2(1649)年に埋め立てた。
205	磯			●	36		●					地名。森時代初期に開墾した塩田。
206	西沖			●	36		●					地名。加里屋川沿いの沖積地。大正6(1917)年頃より耕地整理事業で整備された敷地。
207	東沖			●	36		●					地名。西沖と同様で、加里屋川東側の沖積地。
208	千鳥			●	36		●					地名。千種川河口の砂州が発達して浜千鳥が遊ぶ砂浜であった。戦前の耕地整理事業、戦時中は軍需工場の立地、戦後は開拓組合によって高潮堤防が築かれ宅地化が進んだ。
209	農神			●	36		●					地名。農神西・農神東とある。森時代に農神社(備中西江原神社からの分神。明治43(1910)年に天満神社に合祀)があり、農神道といった。昭和53(1978)年3月1日に新設して農神町となる。
210	六百目			●	36		●					地名。塩屋の上田で一反600目の値打ちによる。
211	三樋			●	3		●					地名。三ツ樋元は池田時代の古塩浜。片浜・加藤・新川の三樋門があった。三ツ樋浜は三ツ樋元に続く安永9(1780)年の開浜。
212	山鹿素行による 二之丸虎口の改変			●	1　2						●	赤穂城二之丸門は、軍学者・山鹿素行によって二之丸虎口の改変が行われたとされており、平成14(2002)年の発掘調査で実際に改修痕跡が発見された。
213	赤穂義士祭			●	1				●			明治36(1903)年から、討入があった日の12月14日に開催されている催事。忠臣蔵パレードと称し、市内小学生による金管バンド、東映剣会による「殺陣」、赤穂義士娘による「義士娘人力道中」、「大名行列」、忠臣蔵ゆかりの人物に扮する「義士伝行列」、忠臣蔵の7つの名場面を演じる「山車」、泉岳寺へと向かう四十七義士に扮した「義士行列」と続き、多くの観光客でにぎわう。

赤穂・城西地区　歴史文化の視点１

1．赤穂義士ゆかりのまち

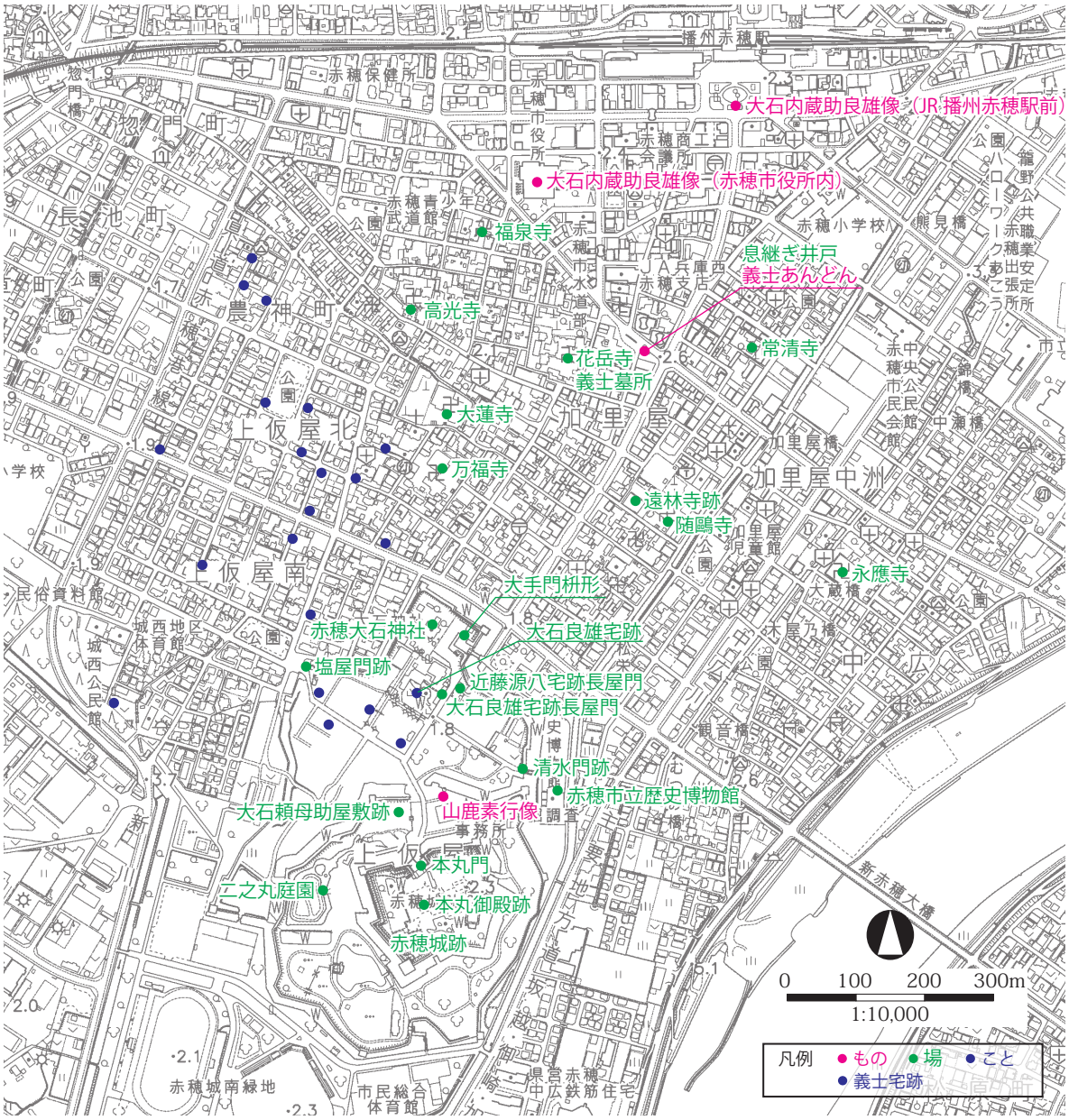
【ストーリー】

赤穂の名を全国に知らしめた赤穂事件。後に史実を元にして描かれた「忠臣蔵」は、現代に至るまで数々の物語を育んできた。

その舞台の多くは江戸にあるが、赤穂には義士らが実際に住んでいた土地、また政務を執っていた城跡が残されている。義士を祭神として扱った赤穂大石神社が建立されているほか、義士ゆかりの品々が残る社寺が数多く点在しており、旧赤穂城下町内に残る義士ゆかりの歴史文化遺産を巡ることによって、史実と描かれた物語の背景を知ることができる。



赤穂城跡と旧赤穂城下町



赤穂・城西地区　歴史文化の視点２

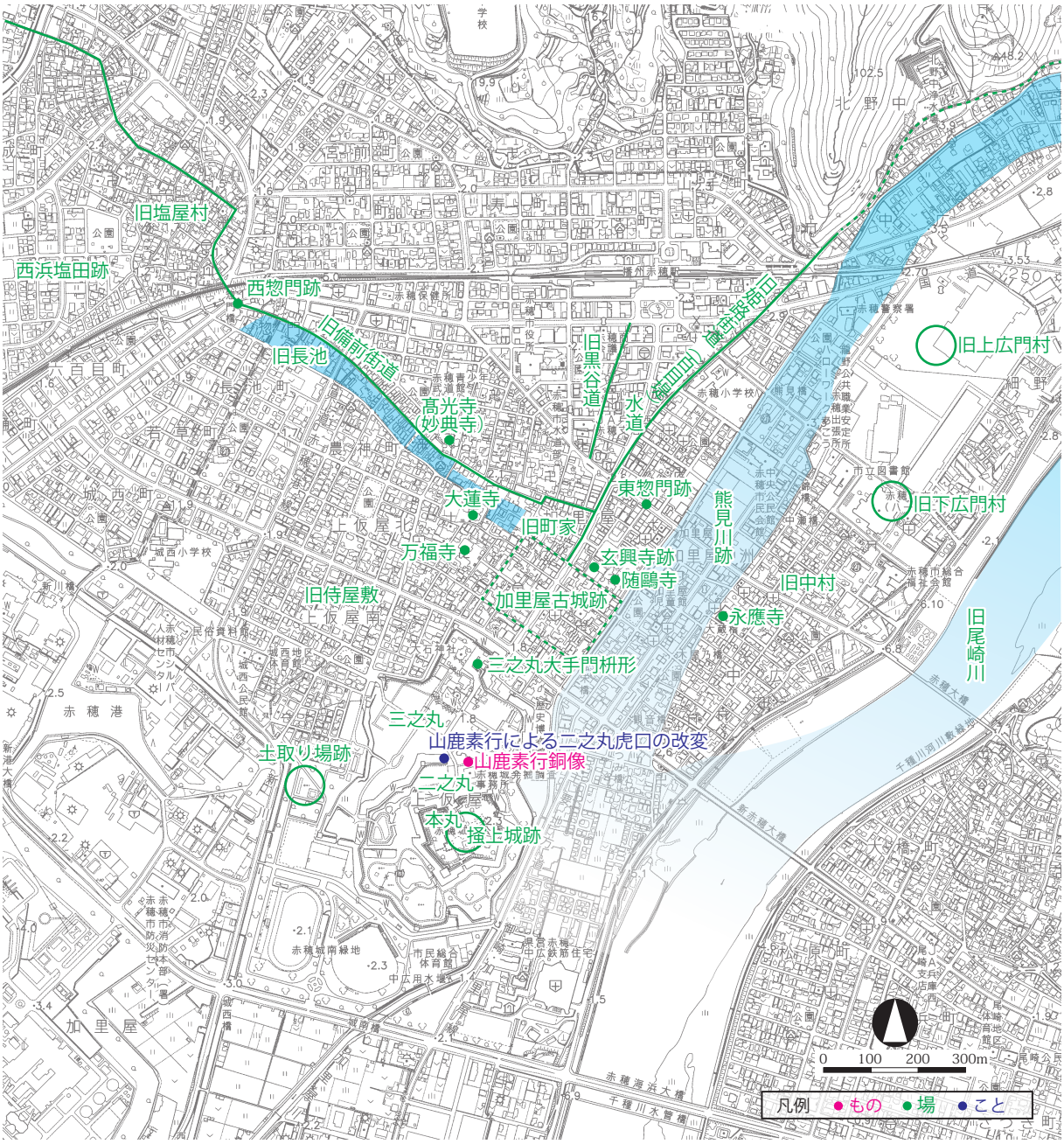
2．城をつくる－赤穂城前史－

【ストーリー】

千種川河口部は、急速に陸地化が進んだ中世になって開発が進んだ。岡豊前守によって当時の海岸線（百目堤・旧長池）沿いに「加里屋古城」が築かれ、羽柴秀吉が毛利攻めのときに整備した道を基礎として姫路街道が整備された。

江戸時代には、池田家が陸地化した河口部を城地とし、現在の赤穂城跡本丸付近に掻上城を築いた。この時にはすでに大蓮寺や万福寺をはじめとした各寺院が築かれ姫路街道、備前街道と接続して城下町を形成していた。隣接する中世以来の港町、中村（中庄）の存在も見逃せない。

現在の赤穂城跡は正保２（1645）年に赤穂に入った浅野長直によって築かれた。拡張された城下町の東西に惣門が置かれ、三之丸大手門枡形を整備、本丸、二之丸、三之丸の郭をもつ赤穂城が築かれた。採石場や土取り場も伝承や文献によっておおむね明らかとなっており、現在も赤穂城前史を物語る歴史文化遺産が数多く残されている。



赤穂・城西地区　歴史文化の視点３

3. 旧赤穂上水道

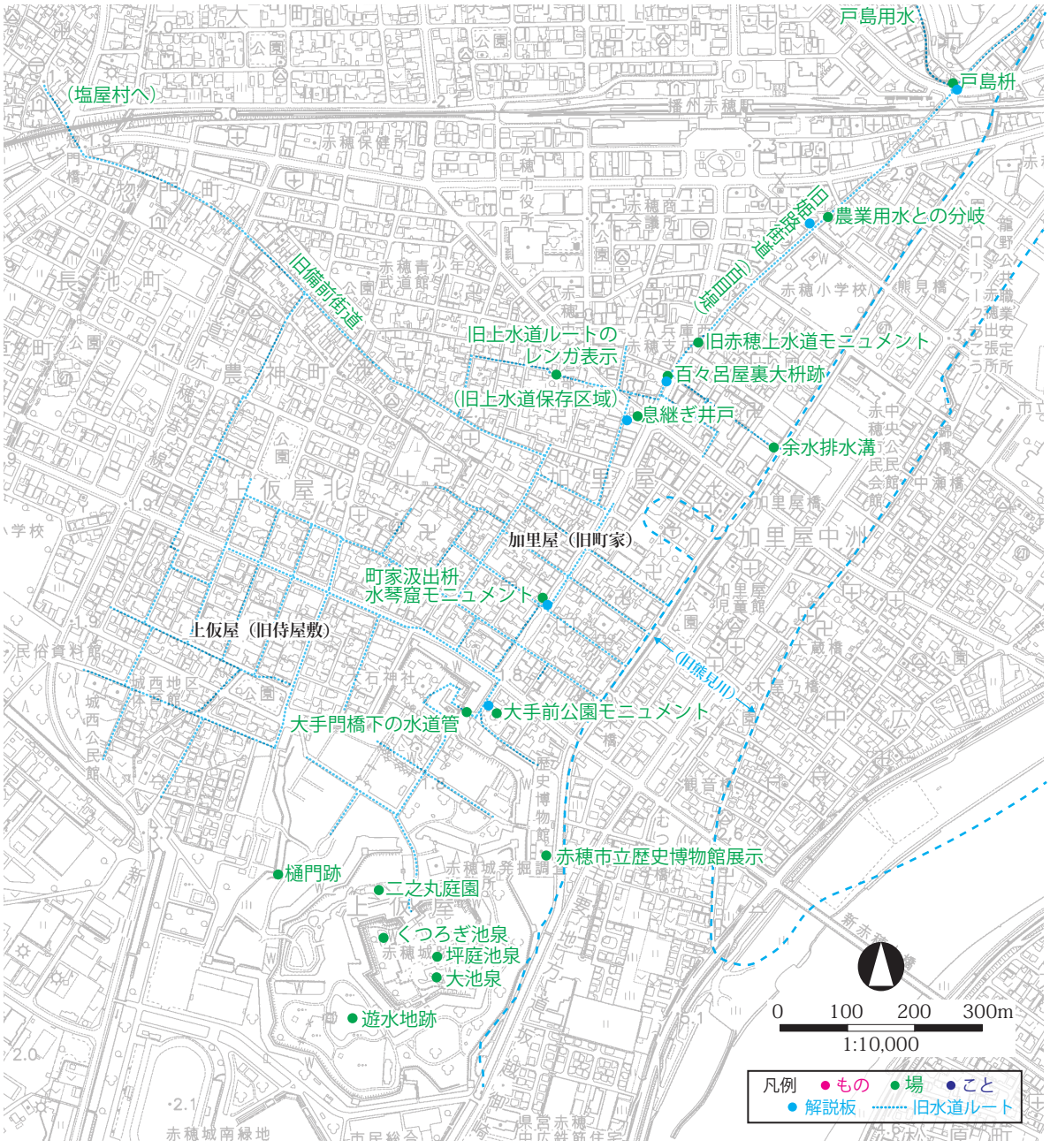
【ストーリー】

赤穂・城西地区の大部分は、千種川河口の三角州にあり、井戸を掘っても塩分を含み飲料水として使用できず、江戸時代になってこの地に城と城下町を築こうとしたとき、大きな問題となった。

上水道の整備は慶長 19(1614) 年、池田家の家臣・垂水半左衛門勝重が千種川の上流 7km から水をひく工事を開始。城下町や城への配水は、その２年後の元和２（1616) 年であった。

取水口から城下町北端までは蓋のない開渠であったが城下町内の北端にある百々呂屋裏大枡以南は暗渠となった。昭和 50（1975）年代の下水道工事の事前に総合調査が実施され、一部保存ルートが設定されるとともにモニュメント等が整備された。

「各戸給水」を成し遂げた旧赤穂上水道は、日本三大水道の一つといわれ、現在もその名残を留めている。



赤穂・城西地区　歴史文化の視点４

4．現代に息づく城下町－絵図をみて歩けるまち－

【ストーリー】

現在の市街地の街区は、約 400 年前に池田家が整備した町割が基礎となっており、約 350 年前に赤穂を治めた浅野長直は、城下町を拡大整備したが、基本的な町割を変えることはしなかった。

旧城下町は、昭和 40（1965）年代の区画整理及び平成の「お城通り」整備によって若干の改変を受けたが、ほとんどの町割りは現在も残っている。

赤穂城下町には東の姫路、西の備前への街道が接続しており、その防備として東西に惣門が築かれたほか城下や街道沿いに 10 の寺が配された。

また、城下町の町家周辺では単純な十字路を形成することはほとんどなく、いずれも鍵型にずれて設定されたほか、突然道幅が狭くなっていたりしていた。一方侍屋敷では、絵図に描かれないような細い道や、行き止まりなどが設置されていたが、その景観の多くは今も残されている。



赤穂市立民俗資料館
旧日本専売公社赤穂支局





赤穂市立歴史博物館

ＪＲ播州赤穂駅
西惣門跡石標
旧備前街道
福泉寺
新町地蔵
延命地蔵
玉龍院
高光寺
妙慶寺
花岳寺
いきつぎ広場
息継ぎ井戸
山崎家住宅
花岳寺山門
赤穂情報物産館
木南家住宅
道標
大蓮寺
花岳寺門前広場
恵比寿神社
赤穂神社跡
大蓮寺山門
赤穂緞通
加里屋工房
船入広場
船入跡
加里屋（旧町屋敷）
万福寺
遠林寺跡
随鷗寺
新田家住宅
濱尾家住宅
谷家住宅
赤松滄洲宅跡
水琴窟モニュメント
赤穂玩具博物館
三之丸外堀護岸復元
上仮屋（旧侍屋敷）
浄念寺
高瀬舟雁木跡
金毘羅神社
赤穂大石神社
大手隅櫓
高瀬舟雁木跡
（旧熊見川）
中広（旧中村）
博文館跡
天神宮跡
良寛歌碑
大手門
㋐旧上水道モニュメント
大手前公園
塩屋門跡
大石良雄宅跡
（長屋門）
近藤源八宅跡長屋門
稲荷神社
伊勢神社
三之丸
赤穂城跡
清水門跡
二之丸門跡
山鹿素行銅像
行宝院観音堂
二之丸
二之丸庭園
船入跡
本丸門
厩口門
本丸
本丸御殿跡
西中門跡
干潟門跡
西仕切門
天守台
本丸庭園
刎橋門跡
元禄桜苑（花見広場）
水手門跡
農業用水との分岐
旧上水道モニュメント
大島黄谷窯跡
百々呂屋裏大枡
赤穂鉄道顕彰の碑
常清寺
東惣門跡石標
赤穂鉄道播州赤穂駅跡
稲荷神社
惣門跡
永應寺
旧上水道
（旧上水）高瀬舟
加里屋川
千種川
新川
赤穂港

浅野時代（元禄期）の城下町・中村推定範囲
江戸時代の旧上水道ルート
赤穂市市街地景観重要建築物
武者隠し
鍵型街路

0　100　200　300m
1:5,000

凡例　●もの　●場　●こと

塩屋地区

地　勢

塩屋、新田、大津、木生谷が該当している。塩屋と大津は古くから陸地化が進行したようであり、堂山遺跡では縄文時代前期（6,000 年前）からの遺跡が発見され、また古代には、東大寺等の塩荘園として機能していたことがわかっている。また大津は地名のとおり、かつては港としての機能を持っていたと言われており、海が山際まで迫っていたと考えられている。

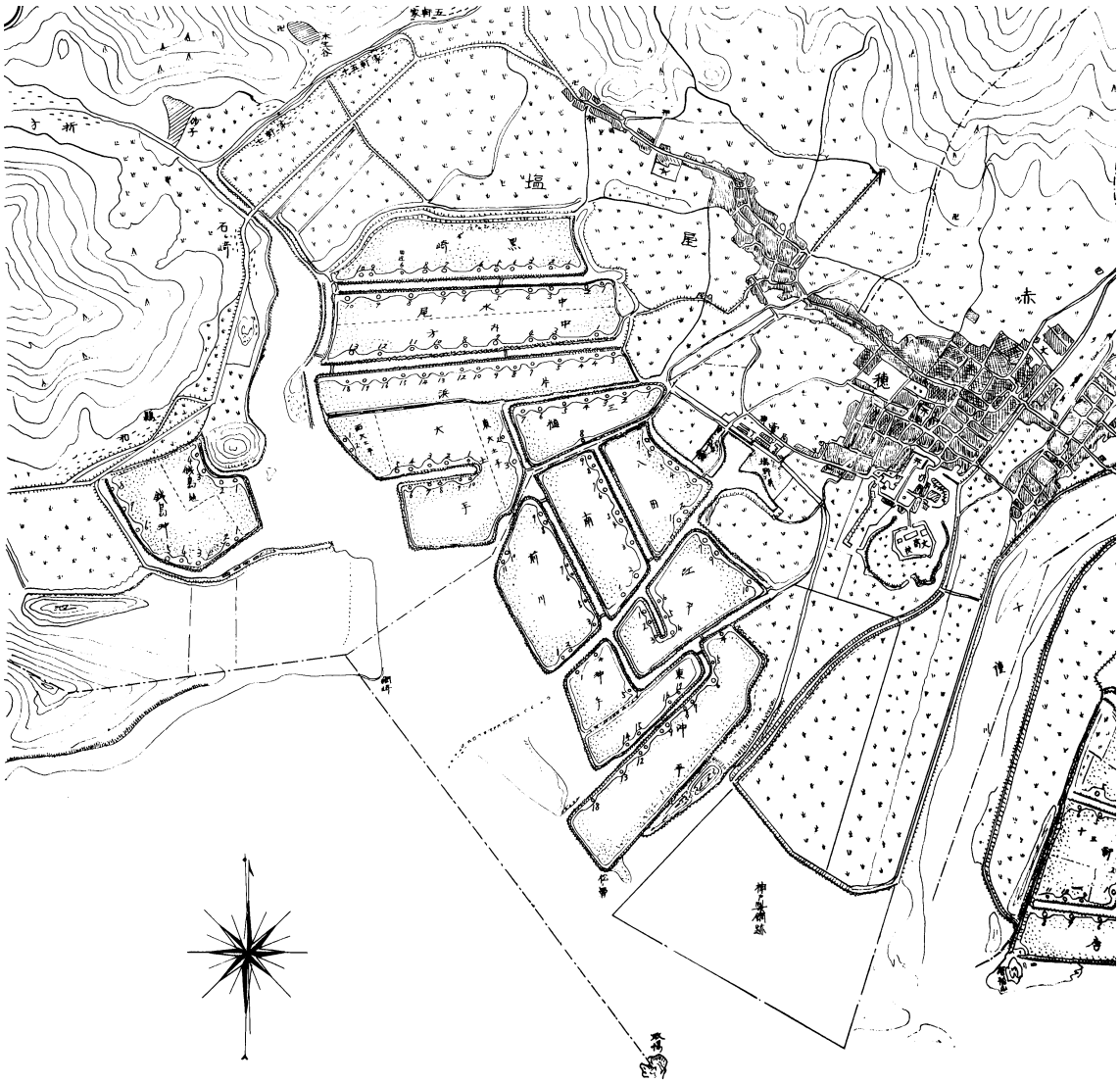
江戸時代に、戸島新田や西浜塩田の干拓が進んで現在のような平地ができ、近代の流下式塩田の廃止に伴って、平地には工場地帯や大学などが立地している。

歴　史

堂山遺跡で見つかった平安～鎌倉時代の塩田遺構や東大寺の塩荘園は赤穂塩田の発祥である。中世になると陸地化の進行とともに山麓に住んでいた人々が平地集住を開始したことに端を発し、江戸時代の塩田従事者の村、塩屋村はできあがった。

新田は、かつて浅野長直が開発した戸島新田村周辺にあたり、戸島用水の敷設によって塩田のみならず広大な耕作地を開拓したことで成立した。

西浜塩田は昭和 44（1969）年の塩田廃止に伴って大部分が広大な工業用地となった。なお工業地帯と住宅地の間には、全長約 4 ㎞に及ぶグリーンベルト（緑地帯）によって緩衝帯が設置されている。

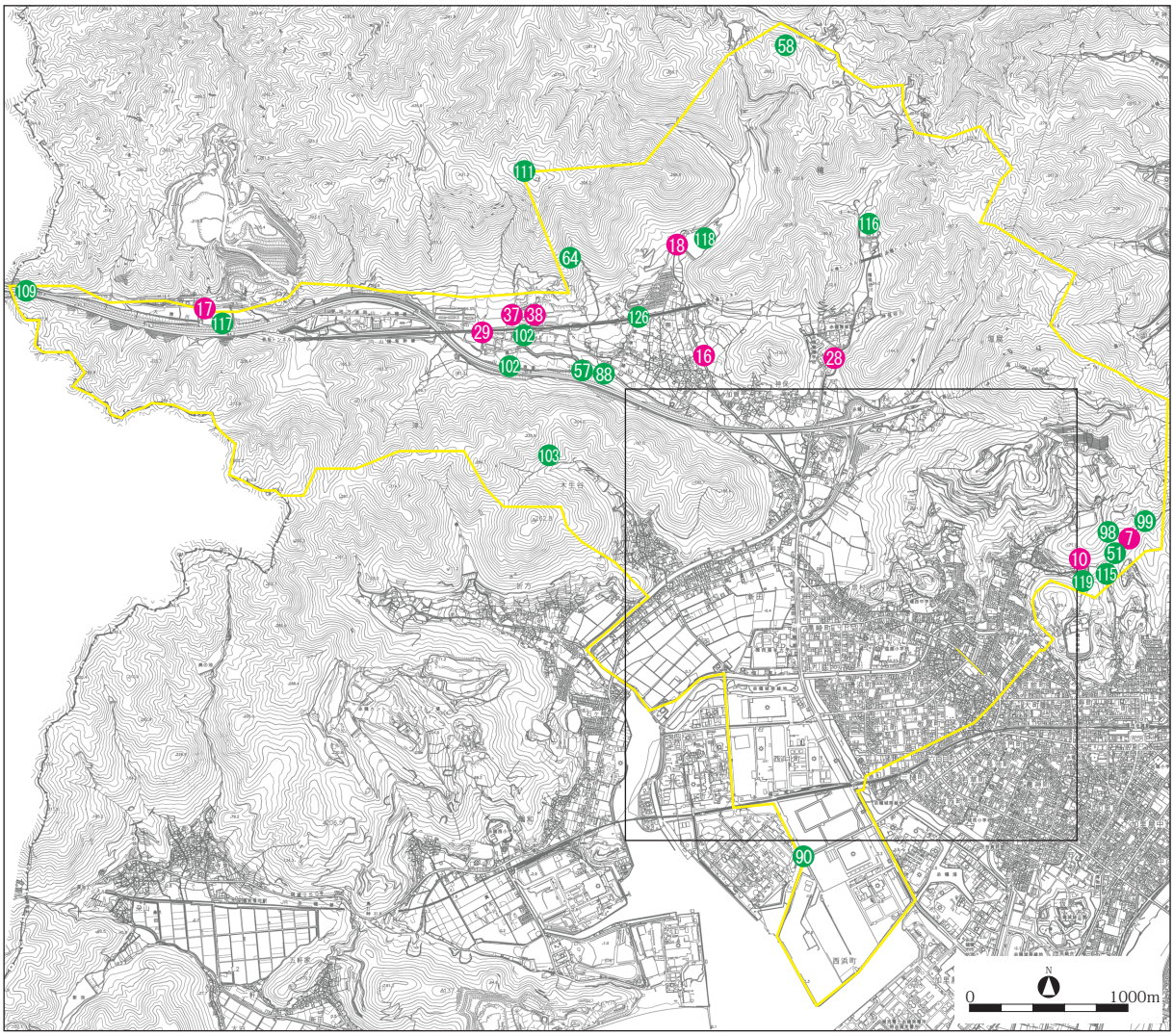


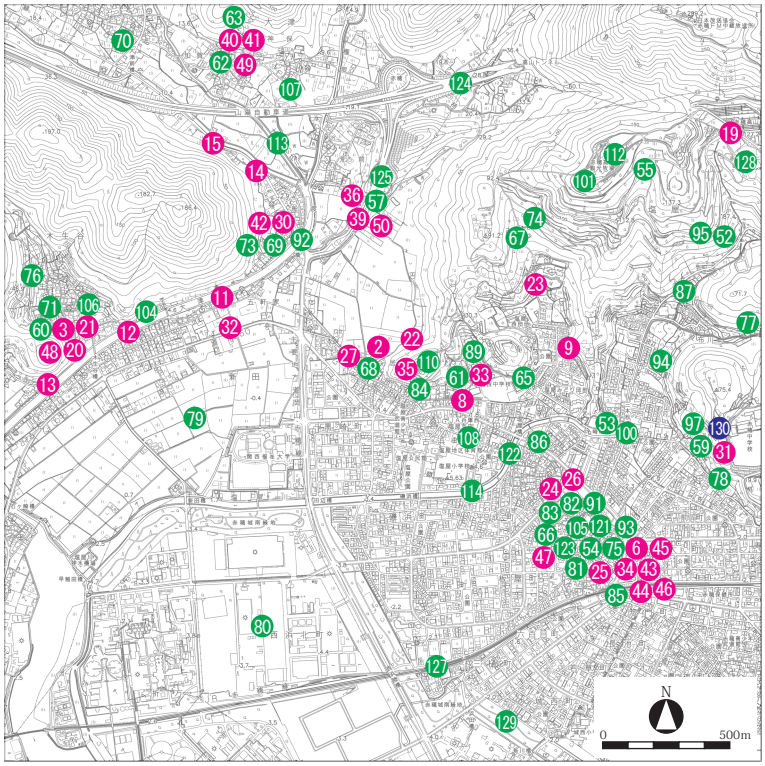
昭和 20 年代前半の塩屋地区（株式会社日本海水旧蔵資料）

表 19　塩屋地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
縄文時代		高山の山麓まで海が迫っており、平地は大津周辺に限られていた
縄文時代前期	約6,000年前	堂山遺跡で縄文時代の人々が生活をはじめる
縄文時代後期	約4,000年前	塩屋・築田遺跡出土の縄文土器の年代
弥生時代末	3世紀頃	堂山遺跡で土器製塩はじまる
古墳時代後期	6世紀後半～7世紀	大林古墳群で横穴式石室が築かれる
古　代	天平勝宝5(753)年	大伴家の開発した赤穂郡坂越郷の墾田を秦大炬が預かり、塩堤の構築を試みて失敗（「播磨国赤穂郡坂越神戸両郷解」）
	天平勝宝8(756)年	赤穂郡坂越郷の「聖生山（塩山）」30余町が東大寺に施入される（「播磨国符案」）
	宝亀元(770)年	赤穂郡内に西大寺の塩木山（塩山）が存在していた（「西大寺資材流記帳」）
	承和9(842)年	石塩生荘園の範囲が「東 赤穂川　西 大依松原　北 百姓口分幷塩生山崎」と記載
	10～11世紀頃	岩屋寺が築かれる
	大治5(1130)年	東大寺の荘園「石塩生荘」50町9反172歩、塩山60町（「東大寺諸荘文書幷絵図等目録」）
	仁平3(1153)年	このころ「石塩生荘」が「赤穂庄」と呼ばれ始める（「東大寺諸荘園文書目録」）
	この頃	堂山遺跡で揚浜系塩田（汲潮浜）による製塩が営まれていた
中　世	嘉吉2(1442)年	塩屋阿弥陀堂が西有年の六道山遍照院より移る
近　世	慶長～元和年間(1596～1624)	このころ古式入浜塩田の経営形態が完成する
	寛永17(1640)年	妙典寺、大津村より加里屋新町に移る
	正保元(1644)年	木生谷三宝荒神社、折方村の荒神社を勧進して創建
	慶安2(1649)年	戸島用水敷設
	慶安3(1650)年	戸島新田村開村
	万治3(1660)年	戸島新田村のうち五軒家・石ヶ崎できる
	延宝3(1675)年	荒神社（塩屋）の社再社頭一宇を再興 戸島新田村のうち十五軒家・七軒家できる
	元禄10(1697)年	尾崎家が尾崎村から塩屋に移り、柴原姓に改姓
	宝永6(1709)年	塩屋村・戸島新田村、大津村、木生谷村明細帳
	宝永7(1710)年	新田日吉神社を森長直が再興
	享保5(1720)年	湯の内山の入会権をめぐる山論がおこる
	元文2(1737)年	新田光浄寺、万福寺より移される
	宝暦6(1756)年	木生谷専法寺、妙慶寺の支坊として開基
	宝暦9(1759)年	八田浜（115反余）の塩田造成
	明和2(1765)年	南浜（83反余）の塩田造成
	安永9(1780)年	三樋浜（56反余）の塩田造成
	寛政元1789)年	沖手浜（60反余）・江戸浜（50反余）の塩田造成・再起
	寛政101798)年	大土手1～5番（70反余）の塩田造成
	享和元(1801)年	塩屋口惣門橋・橋下の上水道木樋を改修
	文化8(1811)年	東沖手（13軒前）・小内方（4軒前）の塩田造成
	文化9(1812)年	赤穂塩田、休浜同盟に参加
	文政5(1822)年	前川浜（80反余）の塩田造成
	文政11(1828)年	大土手（20反余）の塩田造成
	天保年間(1830～1840)	大津出口地区に底堰用水路を敷設
	嘉永5(1852)年	塩屋村で出火、128軒焼失する
	万延元(1860)年	上水道、農神道筋より塩屋村まで大改修する
	文久2(1862)年	荒神社（塩屋）の参道が柴原家より寄贈される 『柴原家文書』に屋台行事の初見
	慶応3(1867)年	東沖手（2軒前）の塩田造成
近　代	明治22(1889)年	市制・町村制により塩屋以西をすべて含めた塩屋村の成立
	明治37(1904)年	塩専売法公布、翌年施行
	明治39(1906)年	柴原家が破産する
	大正元(1912)年	塩屋に赤穂実科女学校が開校（1923年に中村に移転）
	大正2(1913)年	赤穂西浜塩業組合が発足
	昭和12(1937)年	赤穂・塩屋・尾崎・新浜が合併して大赤穂町が誕生
現　代	昭和23(1948)年	西浜塩業合同煎熬工場が完成
	昭和24(1949)年	日本専売公社が発足
	昭和26(1951)年	赤穂町・坂越町・高雄村合併し、赤穂市が施行
	昭和32(1957)年	流下式塩田への転換工事が完了
	昭和35(1960)年	西浜塩業組合、専売公社より廃業を勧告されるも赤穂海水工業株式会社を設立 塩屋山開拓開墾開始
	昭和39(1964)年	木生谷橋の改修
	昭和40(1965)年	西浜塩田跡地の工業用地への転換
	昭和44(1969)年	製塩法が流下式からイオン法に全面転換
	昭和47(1972)年	赤穂海水化学工業(株)、イオン法製塩の本格操業開始 山陽新幹線、新大阪－岡山間開業
	昭和51(1976)年	グリーンベルト完成、大津川の全面改修
	昭和54(1979)年	塩屋新町、加里屋地区に編入
	昭和57(1982)年	山陽自動車道赤穂インターチェンジ開通、塩屋川改修完成
	平成9年(1997)年	関西福祉大学開学
	平成11年(1999)年	塩屋土地区画整理事業完成

塩屋地区全図





凡例　●もの　●場　●こと

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	木造菩薩立像	◎								●		大津八幡神社薬師堂に安置され、薬師如来像の両脇侍として日光・月光菩薩像が伝えられている。現在は赤穂市立歴史博物館に寄託されている。市指定文化財。
2	木造浅野赤穂藩主坐像 (付)厨子3基	◎			5　6				●	●		浅野家初代より三代にいたる藩主の木造坐像である。3躰の藩主像は、その彫成及び表現から江戸期の肖像彫刻としては佳作であり、京都の仏師作家の手によって制作されたことが推定される。制作時期は18世紀後半頃と考えられる。市指定文化財。
3	木生谷三宝荒神社 義士画像図絵馬 (付)牽馬図絵馬1面	◎			6				●	●		義士画像図絵馬は、四十七士に萱野三平像を加えた計48面あり、大石内蔵助、主税の2面は大きめのものとなっている。大石内蔵助良雄像、大石主税良金像、萱野三平像には絵師である法橋長安義信の落款が見られ、内蔵助像には奉納時期を示す「慶応元(1865)乙丑季九月」の年記を読み取ることができる。また絵馬には奉納者の名前が記されており、三宅源兵衛をはじめとする木生谷及び周辺の在住者名や集団名が見られる。市指定文化財。
4	暦法算額絵馬	◎								●		大津村庄屋であった出口屋・浜田文治が寛政3(1791)年9月に大津八幡神社に奉納した歴法算額絵馬。算額絵馬は、江戸時代の和算の水準を示すものとして高い評価を得ている。このうち暦法を記した絵馬は珍しく、全国に4例しか確認されておらず、当絵馬は最古のものである。市指定文化財。
5	真光寺旧蔵・ 柴原家文書	◎			30			●				西浜塩田最大の塩業者で、近世において赤穂藩の御蔵元役として藩財政の一翼を担い、代々塩屋村大庄屋を世襲していた柴原家ゆかりの古文書類。市指定文化財。
6	塩屋阿弥陀堂の三地蔵	●			6　30			●		●		享保5(1720)年に塩屋村と有年村との間で起こった山論の犠牲者3名を偲んで享保5(1720)年に建立された3体の阿弥陀如来像石仏。「山公事の地蔵」ともいう。
7	横谷地蔵	●			6　27					●		横谷は山を隔てて高雄地区真殿へつながる谷を言い、塩屋には今も「まとの越え」という言葉が残っている。その山道を見守るように建てられているのが横谷地蔵で、高さ66㎝、銘文には大正8(1919)年に造られたことが刻まれている。『播州赤穂郡志』には赤穂の名所として「御崎の浜、横谷の流れ、興少なからず」という言葉が伝わる。雲火焼の創始者・大島黄谷は雅号を横谷の木偏をとって黄谷とした。平成16(2004)年に地蔵堂建替え。
8	水筋井戸番地蔵	●			6　28					●		地蔵菩薩が5体安置されている。塩屋浜ん台の善右衛門が慶応3(1867)年、井戸を掘り当てた。地蔵は井戸の守り本尊で、傍らには石枠で組まれた井戸が残り、現在でも清水が湧き出ているという。旧赤穂上水道の戸島用水にも接している。
9	塩屋大地蔵	●			6					●		寛保2(1742)年に流行病の発生により領内で270人が死亡し、病魔退散と使者の霊を慰めるため、大地蔵建立を赤穂藩に願い出、35年後の安永6(1777)年に認められ建立されたという。台石には寛保2(1742)年の銘が見られる。元は名崎の三昧(火葬場)にあったが、赤穂市斎場設立に際し現在地に移された。
10	ハブ池地蔵	●			6					●		地蔵には天保11(1840)年の銘が刻まれており、溺死者供養のために建立された。昭和の頃、一つだけ山上にあるのを可哀想と考えた村人が移したものであるという。
11	五軒家地蔵 (子授け地蔵)	●			6					●		昔大津川にかかる橋が流され、水害の根絶を願って造立された地蔵。後にこの地蔵の前に陽根の形をした石が置かれ、触れると子を授かると言われ「子授け地蔵」として信仰された。基礎石には昭和10(1935)年の記載があるが、像と石材が異なる。
12	十五軒家地蔵 (歯の地蔵)	●			6					●		大津川の左岸の土手の上に安置されている。いつのころからが歯痛に効くとされ「歯の地蔵さん」として信仰を集めている。台石には安政4(1857)年の銘があるが、像と石材が異なる。
13	七軒家地蔵 (目の地蔵)	●			6					●		大津川改修工事の際、一体の地蔵が埋まっていたのを引き上げて堂を建て、村の守り本尊としたが、まもなく村に大火事があり、村人は水の中にいた地蔵さんが、陸に揚げられて暑くて怒ったのだろうということで、堂を取り外した。以降、七軒家に火事は起こらなくなったという。今では「屋根なし地蔵」「目の地蔵」として親しまれている。寛政11(1799)年の銘あり。
14	首塚地蔵(清水)	●			6　35					●		船渡橋から少し北西に行ったところに「首塚地蔵」と呼ばれる地蔵が安置されている。役人となった弟が盗賊団の兄を捕らえ、涙ながらにこの地で首を刎ねた。これを憐れんで村人が建てたのがこの地蔵であり、首から上の病気を治癒するとされている。(赤穂の昔話)
15	道しるべ地蔵(清水)	●			6　27					●		道標を台石に転用した地蔵尊。「川こしうね道」とは大津川を渡り、有年に通じる道のことを指し「びぜん道」とは帆坂峠を越えて備前に至る備前街道を指す。道標はもと備前街道の傍に南を向いて立っていたと思われる。この道標には文化11(1814)年の銘が入っているが、像と石材は異なる。
16	大津奥三昧跡地蔵	●			6					●		スクモ塚の裾の田地の一角に、奥大津の三昧跡があり、穏やかな顔をした地蔵が安置されている。村人が有年の石工に依頼して造らせたところ、依頼者の顔そっくりの地蔵と評判になったという言い伝えがある。台石には明治4(1871)年の銘があるが、像と石材が異なる。
17	地蔵(帆坂)	●			6					●		寛政5(1793)年に造立された、像高105㎝の丸彫り立像。武士が建立したと伝わる。
18	大津湯の内池横地蔵	●			6					●		大津の湯の内池横の堂に祀られた、像高41㎝を測る半肉彫りの立像。
19	地蔵(高山霊園)	●			6					●		高山霊園内にある享保9(1724)年造立の丸彫り坐像。このほか1体の丸彫り地蔵がある。
20	地蔵(向山)	●			6					●		木生谷向山にある、像高33㎝の丸彫り坐像。台石には宝永二(1705)年の銘があるが、像と石材が異なる。このほか1体の地蔵がある。
21	村中地蔵	●			6					●		かつて流月庵に大小2体の地蔵が夫婦地蔵と呼ばれていた。木生谷に地蔵がないことを憂いた庵主が「歴世塔」と刻まれた墓石を台座とし、大きい方の地蔵を与えたのがこの地蔵という。木生谷橋のたもとに祀られていたが、大津川の改修時、昭和46(1971)年に現在地に移転。
22	居村観音	●			6					●		新田居村の山裾に祀られた石仏で、江戸時代末期、眼病の旅人が井戸水で洗眼し治癒したことに感謝し建立。土地の人々は眼病に効く「地蔵」として祀ったが、昭和28(1953)年、堂宇改修時の調査で、地蔵菩薩像ではなく観音菩薩像であることが判明。毎年4月18日には信者一同が集まり法要を営む。
23	烏谷観音	●			6					●		天長年間(824～834年)に、弘法大師空海が2体の観音像を石に刻んだと伝わる。その際、1体は魚供養のために海へ、1体は鳥獣供養のために山へ埋められたという。堂内には像高約50㎝の自然石の秘仏があり、享保15(1730)年の「由来書」に記載されている。
24	西の観音様	●			6					●		塩屋北畔の九右衛門が、夢のお告げから水中より観音様を拾い上げ、観音堂を建立したといわれる。文政13(1830)年には、住民が会所へ嘆願して銀札300目の貸付を受け、堂宇の屋根替えや台石取替などを行った記録がある。現在は塩屋西観音堂集会所に安置されていて秘仏となっており、延宝年間(1673～1681)以降の開帳記録が残されている。
25	道標(塩屋広道)	●			6　27		●					赤穂城下町西惣門から阿弥陀堂までを広道というが、広道と村中小道への分岐点に「右びぜん道」と刻まれた道標がある。花崗岩の自然石で高さ約70㎝を測る。
26	塩屋村道路元標	●			6		●					江戸時代の塩屋村会所跡に、町村間の距離を測るための起点となる道路元標が建てられている。
27	新田居村の道標	●			6		●					「左　はま遍(浜辺)　右　ひせん(備前)　道」と刻まれる。年代不詳であるが、左の道を行けば塩田・浜に至り、右に行けば大津を経て備前に至ることを示す。
28	権現の題目塔	●								●		権現の三昧跡の横に「南無妙法蓮華経」と日蓮宗の題目が彫られた石塔があり、文政9(1826)年に船渡の妙典寺が建立したものである。
29	帆坂の題目塔	●								●		帆坂峠に向かう道筋に「南無妙法蓮華経」の題目が刻まれた石塔がある。日蓮宗が盛んであった大津において、天保2(1831)年に日蓮の550回忌を記念して身延講中によって建立されたものである。
30	妙典寺開基日恵上人塔	●			6					●		妙典寺境内にある。妙典寺を開基した日恵上人の石碑。明治43(1910)年建立。
31	荒神社石燈籠 奉納記念碑	●			6					●		荒神社(塩屋)境内にある。大正13(1924)年建立。
32	警鐘台建設記念碑	●			6					●		昭和10(1935)年建立。
33	看護婦殉職供養塔	●								●		明治12(1879)年のコレラ禍の後に建てられた村立の避病院では、大正初期のチフス流行の折に2人の看護婦が感染し命を落とした。平成3(1991)年に、地域の人々によって墓石が供養塔として祀られた。
34	コレラ病死者供養碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。当時流行したコレラで亡くなった人々の供養碑。明治14(1881)年建立。
35	忠魂碑	●			6					●		以良羅山の山頂に大正13(1924)年に建立。忠魂碑には246人の戦没者が祀られている。碑文の文字は、旧日本帝国軍東郷平八郎元帥の書である。折方出身の松崎伊織中将が統合元帥の副官を2期勤めた関係から書をなしたといわれている。
36	岡部氏の墓	●			6					●		岡部六弥太という源氏の武将が、堂山のイチブ(麻の一種)畑であった戦で憤死し、その祟りからイチブが育たなくなったとされ、慶応元(1865)年に供養墓が建てられた。
37	西山徳治君碑	●			6					●		明治6(1873)年に大津村の豪農に生まれ、小学校中等科を卒業し閑谷学校で漢学を学ぶ。卒業後は木生谷尋常小学校で教鞭をとった。後に推されて師範学校に進むが病となり、学業半ばに帰宅、療養の甲斐なく明治27(1894)年22歳で没。明治33(1900)年に友人たちが彼の才能と徳行を忍び建碑した。
38	吉村先生之碑	●			6					●		大正13(1924)年建立。

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
39	安部先生碑	●			6					●		安部浅吉は安政4(1857)年新田村生まれ。随鷗寺内の学舎で学ぶ傍ら俳句を嗜み、大島宗丹翁に師事して源氏流の挿花の技を極め松韻斎と号した。近郷の子弟に俳句や謡曲、挿花を教え地域の文化人として活躍、昭和3(1928)年の七回忌にあたり、門人が碑を建て追慕の意を表した。
40	里正有本翁碑	●			6					●		有本新九郎は元文2(1737)年大津村生まれ、父新三郎の後を継ぎ庄屋となる。大津村はしばしば旱魃の被害にあい、これを憂いて帆坂に大池を完成させ、旱魃から村を守った。仏教の信仰厚く安養寺の再建にも尽力した。新九郎の行為に村人は崇敬の念を惜しまなかったが、藩公の忌諱にふれて身を引き、備前三石に転居し文化9(1812)年没。翁の100回忌にあたり同志が建碑してその徳を明らかにした。明治44(1911)年建立。
41	明治三七・八年戦役 凱旋祝賀記念樹碑	●			6					●		明治39(1906)年建立。
42	西川先生碑	●			6					●		妙典寺境内にある。西川奥三吉は慶応2(1866)年大津村生まれ。明治11(1878)年17歳のとき恩師小林新也とともに西灘小学校教員に採用され、大嶋千代麿・平尾杉松・安部浅吉らと教壇に立った。明治29(1896)年に木生谷小学校校長を拝命して子弟の育成に尽力。明治38(1905)年に病気で教職を去った後、寺子屋を開き、近隣の青年の教育に尽くした。村の総代や寺の総代、郡会議員、村会議員を歴任。大正8(1919)年、58歳で他界。師を慕って門下生が昭和12(1937)年碑を建立した。
43	宇田勝平の墓碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。明治9(1876)年、塩屋村に入った泥棒を追った時の傷がもとで死んだ宇田勝平の墓。大泥棒を捕まえたということで明治10(1877)年に145円が子の亀太郎に下がり、墓をつくり供養した。
44	黒田力松元幸先生碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。柔術高木流の十三代師範であり、明治43(1910)年に死去。大正11(1922)年に建立。
45	八木一治郎丕績碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。昭和25(1950)年、赤穂町消防団副団長であった八木一治郎が昭和24(1949)年に殉職したことを悼み、その業績を称えて赤穂町消防団塩屋分団によって建てられたもの。
46	芭蕉句碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。弘化4(1847)年建立、平成5(1993)年再建。
47	浄響碑	●			6					●		真光寺境内にある。大正9(1920)年、西播磨研響会本徳寺の梵唄の指導者として大きな力徳を備えた人物である第十九世義巧師の弟子たちが人柄にひかれ追慕の碑を建立。
48	谷口先生碑	●			6					●		木生谷の谷口紋次郎は池の坊流を子弟に教育した。明治36(1903)年建立。
49	和気清麻呂公御舟寄松	●			35					●		和気清麻呂が宇佐八幡へ行くとき、この松に括り付けて船を停め、郷里である和気に立ち寄ったという。(赤穂の昔話)
50	堂山遺跡出土縄文土器	●			23 34						●	現在の山陽自動車道赤穂インターチェンジ設置や鉄塔建設に伴う発掘調査によって、縄文時代前期(約6,000年前)から縄文時代晩期(約3,000年前)までのそれぞれの時代の土器が多量に出土している。
51	大林古墳群		●		34						●	烏谷を谷川沿いに登ると、右方に横谷が展開し、横谷の奥にハブ池がある。池の北側に迫る山の斜面をさらに東に登ったところに古墳が造られている。昭和44(1969)年当時で4基の古墳が残存。昭和57(1982)年の調査では一帯はミカン畑に開発され2号墳と4号墳は消失し、南斜面に1号墳が残存するのみである。
52	烏谷布目瓦出土地		●		34						●	字烏谷の観音堂に通じる道の途中に布目瓦の出土地がある。観音堂の手前約100mの道路の西側に狭い造成地があり、そこから小片2点が採集された。外面にはやや細かい布目が施されていて、内面には不規則に並ぶ線文が刻まれており、平安期のものとされる。
53	塩屋築田遺跡		●		34						●	塩屋川改修工事の際に縄文土器片と中世以降の木樋2本等が出土した。
54	塩屋阿弥陀堂貝塚		●		34						●	阿弥陀堂改修の際、平安～鎌倉時代の貝塚が発見された。
55	高山遺跡		●		34						●	弥生時代の土器や石器が採集されている。
56	大津出口貝塚		●		34						●	市内の貝塚は、堂山貝塚を除いていずれも小規模。時期としては出土器からみて室町時代以降に属するものと推測される。
57	堂山遺跡		●		5 30 34			●			●	現在の海岸線から約4km北側の通称「堂山」と呼ばれる山裾に位置し、山陽自動車道赤穂インターチェンジ建設や鉄塔建設の際に発掘調査が行われた。赤穂インターチェンジ建設地では平安時代以降の塩田遺跡が全国で初めて発見されたほか、縄文時代前期から晩期にいたる多量の縄文土器や、古墳時代以降の製塩土器などが多数出土した。
58	坊主屋敷跡		●		34					●	●	僧庵の跡と伝えられており、周辺には若干の平坦地、石段、土塁、井戸跡と思われるものが残されている。
59	荒神社(塩屋)		●		5 6 30 31 33					●		創立年月は不詳。皇極天皇のころ(7世紀中ごろ)秦河勝が素戔嗚尊を勧進し創建したと伝えられる。延宝3(1675)年、正徳5(1715)年、寛政12(1800)年の棟札に再建・修復が行われた記述がある。別称「正面さん」。明治42(1909)年には若宮社・金毘羅社・塩釜社を合祀した。境内には市内で比較的古い廻船絵馬が奉納されている。秋祭りに行われる塩屋荒神社屋台行事は市指定文化財。
60	三宝荒神社(木生谷)		●		6 33					●		正保元(1644)年に折方村の荒神社を勧進して創建。祭神は素戔嗚命。拝殿には江戸後期に活躍した絵師法橋義信の四十七義士画像図絵馬が掲げられている。境内に大正8(1919)年に流月庵から村が譲り受けた稲荷神社を合祀。
61	日吉神社		●		5 6 33					●		戸島新田の造成により住民が定着したため、承応元(1652)年に藩主浅野長直が近江の山王大権現宮(日吉大社)を勧請したのが起こり。祭神は大山咋神・香山戸神・羽山戸神。宝永7(1710)年に森長直が本殿・拝殿・鳥居等の再興を行った。明治元(1868)年には神仏分離令により「山王権現神社」を日吉神社に改称。境内に稲荷神社・天満宮・水神社が合祀されている。
62	森吉稲荷神社(大津)		●		6					●		八幡宮の参道の西に、稲荷神社・金刀比羅神社・鍋ケ森神社を祀った一角がある。稲荷神社は明治2(1869)年3月15日に勧進、一説には明治42(1909)年に合祀されたという。2月初めの午の日に宮司、宮総代、参拝者によって祭礼が行われる。金刀比羅神社は掛山にあったものが昭和56(1981)年に合祀された。鍋ヶ森神社は、水不足に悩む村人が、水神を祀る千種町の鍋ケ森神社から分霊を勧進したものと伝わる。また、ここにはかつて和気清麻呂が船を繋いだという伝承のある松の大木があり、現在祠の中に切り株が残されている。
63	八幡神社(大津)		●		6 32 33					●		和気清麻呂が豊前の宇佐八幡宮からの帰路に寄港し、八幡神を勧進したのが始まりと伝える。社殿は天正年間(1573～1592)に宇喜多秀家の軍勢が駐屯した際にすべて焼失し、その後明暦2(1656)年に本殿再建。薬師堂内にあった(現在は歴史博物館寄託)2体の木造菩薩立像は平安時代後期の作風をみせ、市指定文化財となっている。鳥居は享保20(1735)年の銘があり、坂越の生島、西有年の大避神社に次いで古いもの。
64	鍋ケ森神社(大津)		●		6					●		水不足に悩む村人が、水神を祀る千種町の鍋ケ森神社から分霊を勧進したものと伝わる。旱魃時には、ここで雨乞いの神事が行われた。参加者に飴湯を振る舞い、全員で雨乞いしたという。
65	若宮神社跡		●		6					●		奈良若宮神社の分霊を勧請して祀られていたが、明治42(1909)年に境内神社に合祀。神社のあった頃、7月15日に行われていた祭礼には道路沿いに露店が並び、力相撲も行われて大いに賑わったという。
66	真光寺		●		5 6					●		浄土真宗西本願寺派に属し、僧善明が創建。永正3(1506)年、西有年の六道山遍照院よりこの地に移ったとされる。山号は遍照山。山門(東表門)は立派な雄龍雌龍の彫り物のある四脚門。
67	蓮岳寺		●		6					●		「岡山最上稲荷神社赤穂支所」として建立。桜対の麓の字奥田は、播磨国主大伴宿祢がハブ山を開発した際に桜谷の奥も開墾したため、奥田と呼ばれるようになり、塩屋で最も古い田と伝わる。山号は桜妙山。
68	光浄寺		●		5 6					●		干拓に伴い、慶安3(1650)年に新田居村、明暦3(1657)年に五軒家、寛文5(1665)年に十五軒家と七軒家ができ寺が創建された。享保21(1736)年に万福寺(浄土真宗)に願い出て、藩庁の許可を得た翌元文2(1737)年、万福寺の寺家であった光浄寺を移したのが起こり。山号は戸嶋山。寺では寛政年間頃(1789～1801年)に、新田村を作った藩主、浅野長直・長友・長矩の木像を作って安置し、以来長直の命日である毎年8月24日に「たくみさん」という法要が営まれている。
69	妙典寺		●		6					●		文亀2(1502)年に備前国浦伊部の僧日慧上人が、大津の法華垣内に法華道場を開設したのが始まりと言われる。寛永17(1640)年に赤穂城下に移転、その後藩主浅野長友が生母の菩提寺として大改修し、寺号を高光寺と改めた。この時妙典寺の寺号を残すため、大津の船渡に寺を再興して現在に至っている。山号は啓運山。寺には江戸時代に赤穂藩主が立ち寄ったことを記した記録が残されている。
70	安養寺		●		6					●		安養寺は大治元(1126)年に大和国南河内郡天見村の得蓮院了乗が、西国修行の途中に立ち寄り草庵を結んだのが始まりという。当初は真言宗で、浄土真宗の流布に伴い、元禄8(1695)年に改宗。大津八幡宮の神宮寺として加賀苧にあったが、改宗に伴い現在地に移転。山号は紫雲山。天明8(1788)年に本堂焼失、寛政6(1794)年に再興し現在に至る。
71	専法寺		●		6 29					●		宝暦6(1756)年に赤穂別院妙慶寺の支坊として、仏像を東本願寺から下付されて現在の木生谷集会所のあたりに開基した浄土真宗の寺院。文化2(1805)年に東本願寺より専法寺の寺号を受けた。明治11(1878)年に妙慶寺の末寺として独立。大正3(1914)年現在地に寺坊を移した。山号は潜龍山。平成4(1992)年大改修を行い現在に至る。
72	岩屋寺跡(薬師寺跡)		●		29 34					●	●	土塁によって囲まれた5間四方の礎石が残る。周辺から平安時代頃の須恵器椀が出土している。加里屋新町にあった長安寺の前身であったと伝えられている。
73	大慈庵跡		●		6					●		花岳寺の末寺として正徳5(1715)年建立された。境内は20間四方であったが、昭和10(1935)年頃、無住となる。現在境内は県道となり、当時の井戸が現存する。

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
74	西の御大師さん（大師堂）		●		5　6　35					●		以前は炭屋台に祀られており、塩業に従事する塩屋の人々の信仰と集いの場であったといわれる。昭和32(1957)年に現在の桜谷に移設。建物老朽化のため昭和60(1985)年に改築。 本尊は、自然石に浮彫が施された60cm程度の大師像。大正時代に流行病で亡くなった人々への供養のための観音像1体と大師像2体が安置されており、自然石に半肉彫りの地蔵、「二ばん」と記載のある半肉彫りの弘法大師像、「二十一ばん」と記載のある観音菩薩像、大正9（1920）年造立の弘法大師像が安置されている。毎月1.15.21日には御詠歌が詠唱される。 桜谷の貉（むじな）が人をだまそうとする逸話がある。（赤穂の昔話）
75	阿弥陀堂（塩屋）		●		6					●		縁起には、嘉吉2（1442）年、西有年の六道山逼照院より移ったと記されている。本尊は阿弥陀如来。本堂改築の際、平安時代～鎌倉時代の貝塚が確認されている。
76	流月庵		●		6					●		新田村にあった禅宗の草庵が廃寺となっていたのを、正徳元(1711)年に木生谷出身の新田の大庄屋、三宅政清が現在地に移したのが始まり。昭和54(1979)年の庵主没後、仏像・仏具等は北野中の興福寺の管理となる。観音堂には、観音菩薩・弘法大師・地蔵菩薩が安置され、播州赤穂坂内33ケ所霊場の21番札所。庵の裏庭には安祥慈穏比丘尼や三宅氏の墓などがある。
77	横谷住居跡		●		5			●				『播州赤穂郡志』に「塩屋村鰻谷より出村也。鰻谷は正面荒神山の後、横谷溜池の谷なり。」と記されており、塩屋村の起こりが背面山塊の合間にある横谷の地であったと伝えられている。現在は、石垣や井戸の石組等の遺構が残るのみであるが、大正時代まで人々が生活していた。
78	戸島用水		●		6　27　28	●	●					正保2(1645)年、赤穂に入封した浅野長直は、城や城下町の整備とともに新田開発を積極的に行った。慶安2(1649)年には「戸島井溝」を掘削し、翌年に戸島新田村を成立させた。この用水は旧赤穂上水道の導水路を活用し184町9反5畝(185ha)の灌漑用水として、また新田居村地区の生活用水としても利用され、現在も農業用水として役目をはたしている。大正2(1913)年からは鵜和地区にも送水している。
79	戸島新田		●		27		●					正保2(1645)年、赤穂に入封した浅野長直は、城や城下町の整備とともに新田開発を積極的に行い、慶安2(1649)年には「戸島井溝」を掘削して、184町9反5畝(185ha)の戸島新田を開発した。
80	西浜塩田跡地		●		5　6　30			●				古代から製塩が行われていた塩屋では、近世になり池田時代～浅野時代～森時代と塩田開拓を行った。尾崎地区・御崎地区の東浜塩田に対して、塩屋地区は西浜塩田と呼ばれ、宝永3(1706)年で95町2反8畝ほどあったとされ、西浜での平均生産高は約10万石と推定されている。西浜は主として真塩と称する上方向けの上質塩を生産し、大坂市場を得意先としていた。
81	柴原本家（浜野屋）屋敷跡		●		5　6　30		●					柴原家は尾崎村より元和6(1620)年に移住。赤穂屈指の塩田地主・豪商となり、赤穂藩(森家時代)の藩元役、塩屋村大庄屋を務めた。文化年間(1804～1818)には田畑23町余(約23ha)、塩田28町余(約28ha)、屋敷3反1畝余(約3100㎡)、大坂掛屋敷3軒その他、数えきれない程の借家を所有していたが、近代に没落した。
82	寺田家住宅		●		5		●					寺田家は西浜塩田の有力地主の一つ。「志保屋（しほや）」の屋号で塩問屋を営んだ。旧備前街道に面した邸宅は母屋、離れ、茶室、蔵など9棟からなり、木造厨子二階建ての主屋は、通りに面した上階部分が江戸時代中期の建築といわれ虫籠窓が特徴。敷地北西の茶室「蓬庵」は畿内流を象徴する「燕庵」を忠実に写している。地域のまちなみに重要な役割を果たしているとして、兵庫県景観形成重要建築物に赤穂市で初めて指定された。
83	塩屋村会所跡		●		5　6		●					江戸時代に、塩屋役人の詰所として使用されていた。脇には塩屋村道路元標がある。
84	新田組大庄屋三宅家の屋敷跡		●				●					三宅又兵衛清貞が貞享3(1686)年に木生谷より出てこの地に居を構えて以来、廃藩置県まで9代約200年もの間、大庄屋三宅家の屋敷があった。
85	西惣門跡		●		6　27		●					備前街道より赤穂城下へ入る西の惣門であり、枡形が築かれ番所が配置されていた。その門の一部は、明治4(1871)年に花岳寺住職仙珪和尚が買収後花岳寺の山門として移築し、平成元年(1988)に市指定文化財となっている。
86	木戸の口跡		●		6		●					江戸時代には、塩屋村へ出入りする木戸門があったと言われ、治安維持のために出入りする者を見張っていた場所である。
87	塩硝蔵跡・塩硝蔵番小屋		●				●					森時代、鉄砲の火薬を作る塩硝蔵(火薬庫)が建てられていた。はたき蔵といわれる瓦葺4間2間(約8×4m)の作業蔵と瓦葺3間2間(6×4m)の火薬庫が建てられ、その上には火事に備えて池が造られていた。また現在は高さ約2mの石垣上に幅約30m、奥行き約15mの平地だけが残っている。蔵の上手と下手には藁葺の番小屋が置かれていたが、現在は農家の納屋となって1軒残るのみである。
88	出口の底井出跡		●		6		●					天保時代(1820～1840年)の末期、大津村庄屋の浜田繁治は出口地区を干ばつから救うため、私財を投じて地下に底堰を造り、伏流水をここから放流した。
89	長尾の池跡		●		35		●					かつて27m×29mの池があり、近くの処刑場で打ち落とされた首を洗ったため池の水は赤味を帯び、日に7度も色を変えたので「七色の池」と呼ばれた。また仇討があり池の中へ若者が返り討ちにされたことから「うらみの池」の別名がある。
90	蓼場跡		●		5　30			●				西浜塩田の水尾にあり、潮の満ち引きを利用してここに塩廻船を停船させ、船底についた貝を焼いて掃除した。現在のドック（船渠）のような役割を果たした。
91	かんにん橋		●				●					石橋の側面の一方には「堪忍橋」、もう一方には「かんにんばし」と刻まれている。正月屋と言われる大家が衰退したが、逆境に耐えて「堪忍、かんにん」と働き、家を再興させたという話が残る。小橋川に架けられていたが、道路工事の際、現在地に移された。
92	船渡橋		●		6　36	●						大津川にかかる橋の一つで、古来はこのあたりまで海岸線が迫っていたといわれている。
93	小橋川の洗い場の石		●		6		●					旧塩屋村の北辺には、近代上水道が設置されるまで戸島用水から引いた小橋川に、長さ約30mにわたる石造りの洗い場があった。上流から順に、水汲み場・米や野菜の洗い場・洗濯場・おしめ洗い場・牛馬洗い場が並んでいたといわれる。小橋川が暗渠となる際に、現在地に移された。
94	金時さんの足跡		●		35					●		「金時さんは、小豆島から海を跳び越え、片足はこの石の上に、もう一方の片足は高山についた。」と昔話は語る。（赤穂の昔話）
95	おんびき岩（上）・牛岩（下）		●		35					●		道の上側にガマガエルの形をした「おんびき岩」、道の下側に「牛岩」と呼ばれる巨石があり、塩屋に伝わる昔話に「仲のよい三つの岩」の二つとして語りつがれている。（赤穂の昔話）
96	お鐘石		●		35					●		50m登ったミカン畑にある。塩屋に伝わる昔話「仲のよい三つの岩」の一つ。春分・秋分の日には尾形にある「オンビキ岩」から真東となるこの石の上から日が昇るという。（赤穂の昔話）
97	げんじょの岩		●		2　35					●		塩屋の荒神社の裏山にあり、高さ約2.5mを測る花崗岩。矢穴が穿たれており、赤穂城築城に伴う石切りとの関連も指摘される。上方には「げんじょの台」と呼ばれる見晴らしの良い場所がある。げんじょの台は、昔話「お伊勢まいり」に登場する。（赤穂の昔話）
98	八畳敷		●		35					●		塩屋の横谷から木津・真殿の方に繋がる山道には、金玉袋と八畳くらいまで広げて旅人を襲う化け物が出たという。しかしある時ついに退治され、その正体は大きな古狸であったという昔話が伝えられており、この昔話の舞台となった横谷にある大岩を「八畳敷き」と呼びならわしている。（赤穂の昔話）
99	おも石（主石）		●							●		横谷の渓谷を流れる川の中に家のように大きな岩があり、川の主であると伝えられ「主石」として親しまれてきた。主石と八畳敷きがある横谷の渓谷は、山道が荒れているため、現在は探訪が困難。
100	三本松		●				●			●		明治25(1892)年の洪水の際、現在地付近で3本の松の株が見つかった。昭和63（1988）年には河川改修工事の起点に記念碑とともに松が植えられた。
101	二重の石垣（今荒神の砦跡）		●				●					西方の大津、南方の瀬戸内海、東方の尾崎が見渡せる小字今荒神の山頂付近に二重の石垣が見られる。現在見られる石垣は牧場開拓の際に積まれたものであるが、『播磨鑑』に記述された昔の砦跡を偲ばせるものである。塩屋の山中に戦国時代の山城が存在したのかもしれない。現在は私有地のため立ち入ることはできない。
102	猪垣(大津)		●		6		●					大津の備前街道に沿って造られ、農作物や人家を猪の被害から防いでいた。
103	木生谷の猪垣		●		6		●					いつ頃造られたかはよくわからないが、木生谷集落を囲むように石垣が造られ、人家や農作物を猪の被害から防いでいた。
104	西灘小学校跡		●				●					明治5(1872)年に学制が発布され、新田以西の5カ村内に6校の小学校が開校したが、明治9(1876)年には6校が合併して西灘小学校が開校された。明治36(1891)年には木生谷尋常小学校に移転した。
105	赤穂実科女学校発祥地		●				●					明治45(1912)年、塩屋村他5カ町村の組合立赤穂実科女学校が創立され、袴姿の女学生が通っていた。当初塩屋尋常小学校が置かれ、次に赤穂実科女学校、塩屋村役場、塩屋保育所となり、現在は公園及び屋台格納庫となっている。
106	木生谷尋常小学校跡		●				●					明治9(1876))年に新田以西5部落6校が合併して西灘小学校が開校されたが、明治36(1891)年にはこの地に移転され、木生谷尋常小学校となった。
107	海食崖跡		●			●						荒前から神保にかけての田地の中に、北西方向に高低差1m程度の小崖が続いている。地表下1～1.2m以下が海成とみられる砂層となっていること、近くの堂山、田茂に海成とみられる堆積物があることから、この小崖は縄文時代の海食崖(海岸線)と考えられている。
108	旧備前街道		●		6　27		●					備前街道は、赤穂城下から新田を経て、船渡から大津川右岸の山際を通って帆坂峠に続いていた。現在、大津川と山麓の間にその跡を見ることができる。
109	帆坂峠		●		6　27　32		●					兵庫県と岡山県の県境にあり、大津川の源流となっている。

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（4）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
110	以良羅山		●		6		●					古くから「イララ山」と呼ばれる。古代の朝鮮語で「ラ」は津・港の意味があり「ララ」は津渡、イは場所の意味で、イララは津を渡る場所の意となるため、渡来人による命名ではないかと考えられている。山頂に大正13(1924)年に塩屋村在郷軍人会によって建てられた忠魂碑があり、戦没者246名の霊を祀る。昭和27(1952)年、昭和44(1969)年に設置された2基の緊急用上水貯水タンクは役目を果たし平成19(2007)年に撤去。山一帯は昭和45(1970)年に風致地区に指定された。
111	黒鉄山		●		6　35		●					大津地区の北側にそびえる黒鉄山は標高430.9mを誇る。頂上からは北は中国山脈、南は淡路島・四国が望める。第二次世界大戦までは山麓で銅鉱石の採掘が行われていた。大正時代初期頃まで、旱ばつ時には降雨の祈りをこめて村人総出で山頂にうず高く積み上げた薪を焚いて雨乞いを行った。氏神様を崇めなかった大津への天罰に関わる昔話がある。(赤穂の昔話)
112	高山		●		6		●					標高約299mを測る。旧塩屋村の北側の山々の中で一番高い山である。山腹には赤穂市の「赤」字が、ウバメガシとシイによって昭和47(1972)年に浮彫植樹されている。下方にはかつて石粉採取地があった。以前は米を精米するため、農家の人々がここでよく石粉を採っていたと伝わる。弥生土器や石鏃、須恵器が採集されている。
113	大津川		●		6	●						大津川水系は、源を兵庫県・岡山県県境の帆坂峠に発して、大津湯ノ内川、権現川と合流し流れを南東から南西に変え、さらに折方川合流点で南へ変え、塩屋川と合流した後、播磨灘に注ぐ二級河川である。昭和51(1976)年に全面改修された。
114	塩屋川		●		6	●						昭和51(1976)年の台風被害の復旧のため、昭和57(1982)年に二級河川として改修完成した。改修は長さ2,470m、橋梁10橋に及んだ。工事の起点場所には昭和63(1988)年に三本松の碑が建立された。
115	横谷の渓谷		●		35	●						横谷は塩屋でも最も古く人々の居住地であったところで、山道は木津・真殿へ続いている。渓谷の中には「八畳敷」と呼ばれる広い岩場があり、狸にまつわる昔話がある。(赤穂の昔話)
116	権現池		●		6	●						水不足が深刻であった大津は灌漑用のため池が多く造られ、権現池は中でも規模の大きいものである。権現池は天保年間(1830～1844)に当時の庄屋の資金を得て着工、その後赤穂藩が決壊防止のための大工事を行い、約10町歩の田の水源として利用された。昭和18～19(1943～1944)年に堤防を高く改修、昭和49(1974)年に余水吐の改修を行い、平成13～14(2001～2002)年度に堤防等の改修を行って現在に至る。
117	帆坂池		●		6　35	●						県境のある帆坂峠近くにあり、開削時期は不明。全国的に大飢饉の続いた天明年間(1781～1789)に当時の庄屋、有本新九郎が中心となり大改修を行ったことが明らかとなっている。この工事での出費がかさんだため年貢が滞り、新九郎は領外追放となって三石で没したという話が伝わる。昭和24(1949)年に堤防が決壊して大津に水害をもたらし大改修が行われた。平成8～10(1996～1998)年度にかけて堤防・放水設備等の改修が行われている。北田・南田・出口・奥・中開地等に水を供給している。帆坂池の大蛇が赤穂藩主をだました逸話がある。(赤穂の昔話)
118	湯の内池		●		6　36	●						黒鉄山東麓に位置し、大津のため池の中で最大。開削時期は不明だが、江戸時代中期には既にあったと推測される。文化4(1807)年に堤防が決壊し、死者1名を出したことが記録に残る。昭和30年代に堤防の補強・大改修を行い、昭和63(1998)年度から平成3(1991)年度にかけて余水吐、放水設備の改修を行った。長坂・奥・クボリ・スクモ塚・中開地・加賀苧の各地区の田に水を供給。この池の水は緑色をしており、戦前まで近くに銅鉱山があったため、銅鉱石の影響ではないかといわれている。
119	ハブ池		●		5　6　31	●						小波布川の水源となる池。
120	西の谷池		●		6	●						木生谷の荒神社裏に築かれた池。
121	塩屋東屋台蔵		●		5　33		●	●				塩屋荒神社の秋祭りで使用される屋台が収納された蔵。塩屋荒神社屋台行事は市指定文化財。
122	塩屋西屋台蔵		●		5　33		●	●				塩屋荒神社の秋祭りで使用される屋台が収納された蔵。塩屋荒神社屋台行事は市指定文化財。
123	旧塩屋村(塩屋)		●		30　32　36		●					地名。古代は海潮の干満の地であった。後背山地には縄文時代以降の遺跡が点在する。8世紀中ごろに、ハブ谷周辺と思われるあたりが、東大寺領の塩山であった。横谷のお鐘石・荒神あたりの住民が製塩のため山麓や海岸部に移り潮家に住み始めたのが塩屋村の起源という。
124	山陽自動車道		●		6　27		●					兵庫県神戸市北区を起点に、岡山県、広島県を経由して山口県山口市へ、および山口県宇部市から同県下関市へ至る高速道路。
125	山陽自動車道 赤穂インターチェンジ		●		6　27		●					山陽自動車道の入り口で、敷設に伴って兵庫県教育委員会による堂山遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代以来の歴史が明らかとなっている。
126	山陽新幹線		●		6　27		●					新大阪駅から博多駅を結ぶ。昭和42(1967)年3月16日、赤穂市で山陽新幹線「新大阪 ～岡山間」の起工式が行われた。
127	JR赤穂線		●		6　27		●					播州赤穂～東岡山までの路線。昭和26(1951)年に国鉄相生～播州赤穂間が開業。昭和30(1955)年に播州赤穂～日生間が延伸開業。
128	赤穂ピクニック公園		●				●					高山にあり、牧場として使用されていた丘陵地を利用して、市街地から瀬戸内海にかけての展望、四季折々の花や実、紅葉が楽しめる公園として、平成12(2000)年にオープン。広場や野外ステージがあり、林間散策道や百花園(赤穂の森)には赤穂を代表する植物を主に、魏志倭人伝、万葉、生島樹林の植物探索コースが設けられている。
129	グリーンベルト		●		5		●					塩田跡の工業地帯と住宅地域との間の公害緩衝緑地事業としてつくられた、総延長4kmの緑地帯。昭和43(1968)年に着手、昭和52(1977)年4月に工事完成。
130	塩屋荒神社屋台行事			◎	5　33					●		10月25日に最も近い土日に開催される塩屋荒神社の秋祭で、東西2地区の大屋台のほか多数の子供屋台等が登場し、途切れることなく唄われる伊勢音頭を背景として練りや差し上げが行われる。明治に遡る歴史をもち、文化財的価値がある屋台等を維持している点で、市の無形民俗文化財に指定された。
131	宮大工の技術			◎								宮大工は近世以降家大工と分離して社寺専門大工となり、さらに文化財城郭建築などの改修も受け持つようになった。伝統的な技法を会得している和田貞一氏を選定保存技術保持者として選定している。
132	石塩生荘(赤穂荘)			●	5　30　31			●				製塩に関する荘園の名前。大治5(1130)年には東大寺が「石塩生荘」として50町9反172歩、塩山60町を保有していたと記録されている。仁平3(1153)年頃には、石塩生荘が「赤穂庄」と呼ばれ始めたらしい。
133	六百目			●	36	●						地名。昔からの度重なる水害により、肥沃な土が1丈(約3m)程度堆積したため、1反に600匁(六百目)も出さないと買えないほど値打ちのある上田になったとの云われがある。
134	聖生山			●	5　30　31		●					「ハブヤマ」と読み、天平勝宝8(756)年の古記録によると聖生山(塩山)30余町が東大寺に施入されている。塩山は製塩の材料となる薪を伐採する山。
135	大津			●	6　27　32　36	●	●					地名。古代にこのあたりは海で、大津は広い港の意味。帆坂から大津湾(荒前あたり)に入った舟帆を眺められたという。大津千軒井七ツの口碑が伝えられるのは港町として栄えたことを表す。
136	木生谷			●	32	●	●					地名。いわれは不明。『赤穂郡誌』には薩摩の浪士が木生谷に隠棲したとき、折方の住人が7戸移住して、木生谷に村ができたというが、詳細は不明。
137	船渡			●	6　27　36	●	●					地名。その名の示す通り、船が通った場所が地名となったものと推測される。
138	新田			●	32　36	●	●					地名。大津川河口に位置し、もとは沼沢や古浜であったが、正保2(1645)年、赤穂藩主浅野長直が入封の翌年から20年をかけて新田地100余町歩を開拓して成立した土地。そのため唯一の山なし村であった。
139	五軒家			●	36		●					地名。万治3(1660)年に5軒の入植があったことによる。
140	七軒家			●	36		●					地名。寛文5年(1665)年に入植した家数による。
141	十五軒家			●	36		●					地名。寛文5年(1665)年に入植した家数による。
142	若宮			●	36		●					地名。京都若宮神社の分霊を祀った。明治42(1909)年に荒神社へ合祀。
143	片浜			●	36		●					地名。塩田跡地。
144	西ヒジリコ			●	35		●					地名。石工が西ヒジリコの石山に砕石に出かけ、大蛇を退治する昔話がある。(赤穂の昔話)

塩屋地区　歴史文化の視点１

5．塩づくり発祥の地

【ストーリー】

堂山遺跡から出土した、古墳時代以来の多量の製塩土器や平安時代の塩田遺構によって、市内で最も古い製塩の地と目されている塩屋地区は、古代に東大寺の荘園「石塩生荘」も築かれているなど、赤穂の塩づくり発祥の地といえる。近世に入って藩の塩田開拓が本格化し、後には「西浜塩田」として一大製塩地となった。

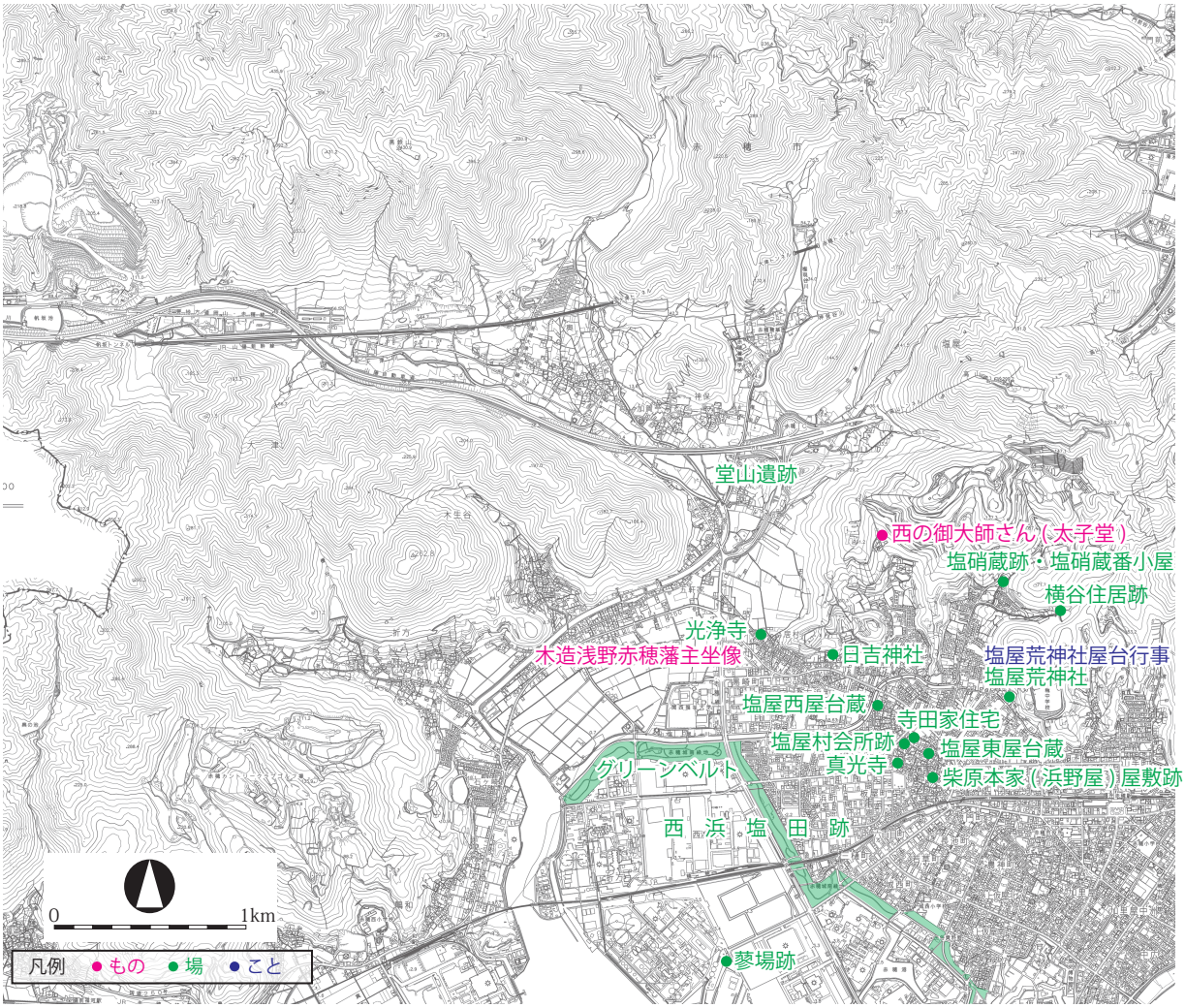
塩屋村は、赤穂城下町の西の押えとしての役割を果たす一方、塩田労働者の村として荒神社や真光寺などを崇拝しながら、赤穂の製塩を支えた。

「東の田淵、西の柴原」といわれ、赤穂藩の財政を大きく支えた柴原家は塩屋村で財を成した。現在では、西浜塩田の有力地主であった寺田家住宅が塩屋地区の隆盛を伝えている。


堂山遺跡


真光寺


塩屋荒神社屋台行事



塩屋地区　歴史文化の視点２

6. 備前街道


新田居村道標


光浄寺赤穂浅野藩主坐像


旧備前街道


荒神社（塩屋）


塩屋広道の道標


大津八幡神社本殿


木生谷三宝荒神社義士画像図絵馬

【ストーリー】

かつての塩屋村は、東の赤穂城下町から接続する備前街道の防備を固める村として位置づけられていたため、細い路地が複雑に入り組んだつくりをしており、現在もそのまちなみが残されている。

備前街道に面した家なみは板塀が続き、塩屋独特の景観を形成している。道を進むと阿弥陀堂や真光寺、観音堂、日吉神社、光浄寺といった歴史文化遺産に数多く出会える。これらには浅野家藩主にまつわるもの、塩屋の山論における三義人にまつわるものなど、それぞれのいわれや伝承が残されている。

備前街道沿いには道を指し示す道標が残され、地蔵も数多くあって、往時の景観を感じることができる。

西部地区

地　勢

赤穂市西部の一角を占め、岡山県と接する地域で、折方、鷆和、福浦がそれにあたる。福浦はかつて岡山県に属していた。

江戸時代に大規模な干拓が行われるまでは海が深く入り込んだ入江地形を呈し、特に福浦は「九艘泊」、「大泊」、「船隠」といった地名からも船の停泊する津としての役割をもっていたと考えられる。江戸時代になると干拓によって塩田や水田が整備され、現在のような平地が続く地形となった。

なお福浦一帯の山々では、赤穂市全体を覆う「赤穂コールドロン」の痕跡がよく視認できる。

歴　史

現在のところ、西部地区に古代遺跡はほとんど見つかっておらず、古墳が散見されるのみであるが、今後の詳細分布調査が待たれよう。

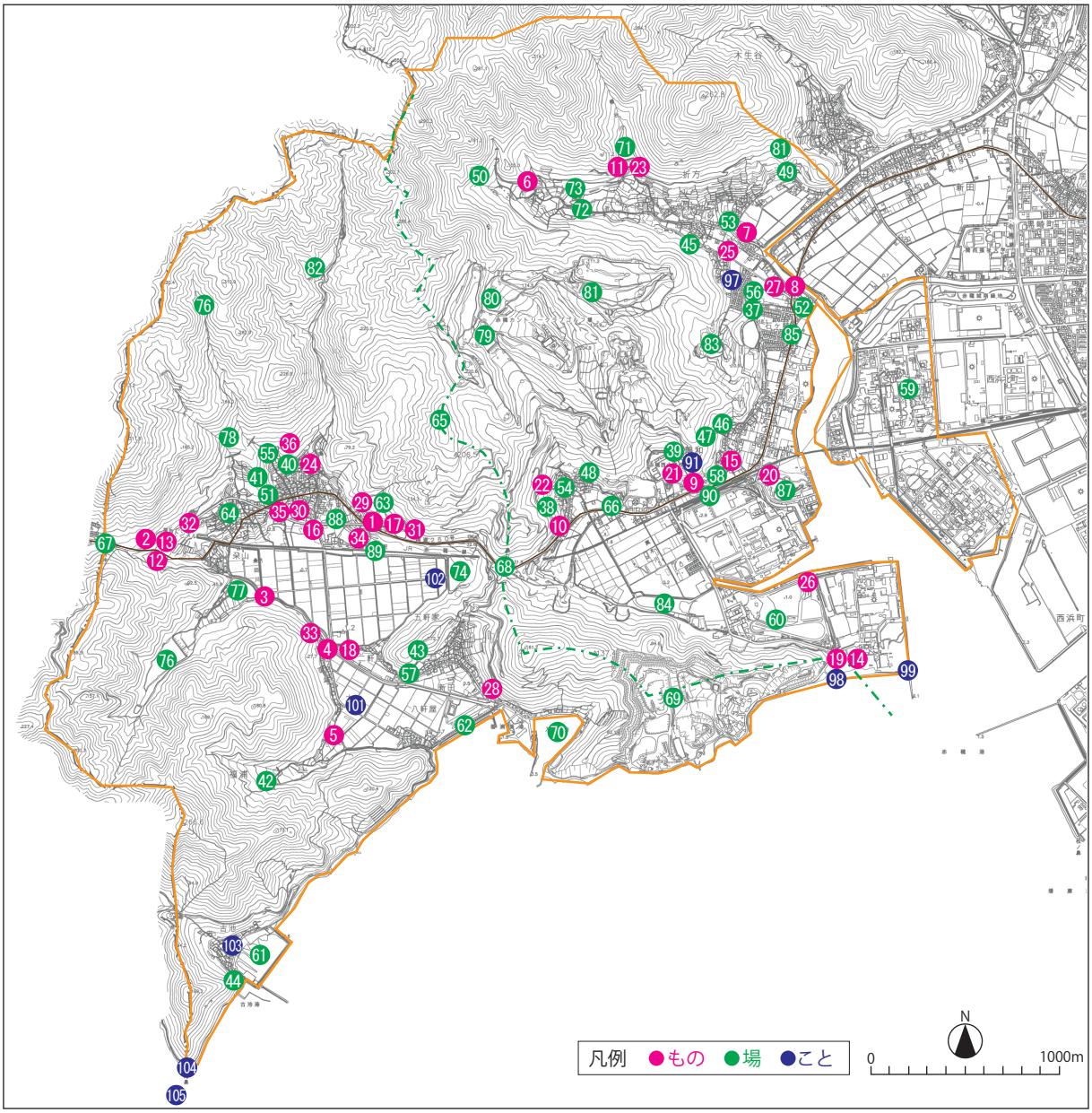
中世になると、折方、鷆和には貝塚が見つかっているほか、福浦は宇喜多氏領有の頃に干拓が進み、寺院も建てられていたという。江戸時代になると、福浦では岡山藩津田永忠による第 1 次干拓が寛永元（1624）年、第 2 次干拓が天和 2（1682）年にそれぞれ行われ、福浦新田村が生まれた。折方については、浅野長直が行った戸島新田の干拓によって広大な水田が出現したほか、西浜塩田の一角を形成して赤穂塩田を支えた。鷆和は、近代になって耕地整理や藤原新田の開発が行われ、耕地が整備された。なお、鷆和の地名は明治 9（1876）年に真木村と鳥撫村が合併する際、それぞれの頭字をとって「鷆」とし、「和」を付して名付けたものである。

福浦は昭和 38（1963）年に岡山県日生町より越県合併、赤穂市となった。

表 20　　西部地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
古墳時代後期	6世紀後半～7世紀	天神山古墳で横穴式石室が築かれる
	承平7(937)年	寒河・福浦の二村を「新田新庄」と呼んだ（和妙抄）
中　　世	永和2(1376)年	法光院、寺山（岡山県）から福浦へ移転
	文明5(1473)年	法光院、浄土真宗法光寺に改宗
	この頃	各地区に貝塚が築かれる
	大永元(1521)年	織方村に浄専寺、真木村に一向宗道場が開基
	天正10(1582)年	羽柴秀吉、中国征伐のため赤穂を通過、鳥打峠より福浦を経て伊部へ
近　　世	慶長8(1600)年	福浦、小早川秀秋の支配地となる
	慶長11(1603)年	福浦、池田領となり版籍奉還まで続く
	慶長10(1605)年	八幡宮を銭戸より尾崎村に移す
	元和元(1615)年	福浦入江の本格的な干拓はじまる
		干拓前の福浦は港の機能を果たしていた（船隠、九艘泊、大泊などの地名）
	寛永元(1624)年	福浦の第一次干拓
	寛永6(1629)年	福浦の古土手及び水門が完成
	天和2(1682)年	福浦の第二次干拓によって福浦新田の干拓が完成、福浦新田村が成立
	宝永6(1703)年	織方村、鳥撫村、真木村明細帳
	宝暦元(1756)年	恵照院建立
	天明6(1786)年	銭島の干拓始まる
	享和元(1801)年	福浦村・寒河村の百姓、古池周辺に塩田干拓を岡山藩に願い出る
	文政4(1823)年	福浦村に新開塩田ができる
近　　代	明治8(1873)年	福浦本村と福浦新田合併、福浦村となる
	明治9(1876)年	鳥撫・真木村が合併し鷆和村となる
	明治11(1878)年	福浦村の漁業始まる
	明治22(1889)年	市制・町村制施行による合併で塩屋以西がすべて塩屋村となる 福浦村、寒河と合併して福河村と改称
	大正2(1913)年	鷆和の耕地整理完了する
	大正5(1916)年	塩野製薬所が鷆和村戸島に岩井製薬所を設立
	大正8(1919)年	藤原新田の干拓完了
	昭和19(1944)年	藤原新田に海水が入り込み、使用不能となる
現　　代	昭和22(1947)年	藤原新田が流下式塩田となる
	昭和28(1953)年	福浦港防潮堤が施工される
	昭和29(1954)年	古池塩田で流下式による製塩が行われる
	昭和30(1955)年	国鉄赤穂線、赤穂－日生間開通。福河村は日生町と合併、日生町となる
	昭和37(1962)年	入電池の水門改修。国鉄赤穂線全線開通
	昭和38(1963)年	福浦地区が赤穂市に編入。
	昭和38(1963)年	鷆和に国鉄の無人駅「天和駅」開設
	昭和42(1967)年	国道250号線開通
	昭和43(1968)年	上水道完成
	昭和45(1970)年	兵庫、岡山の海の境界線調印 銭島の塩田が工場用地として買収される
	昭和46(1971)年	古池塩田廃止
	昭和50(1975)年	福浦、ほ場整備事業認可申請
	昭和52(1977)年	福浦漁港完成
	昭和58(1983)年	古池港完成

西部地区全図



西部地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	鳥打峠の地蔵	●			7　27		●			●		鳥打峠を福浦側へ下った街道筋にあったものが現在地に移されたもの。高さ約120cm、幅約60cmを測る半肉彫り立像で、明治3(1870)年の銘がある。
2	峠の地蔵	●			7　27		●			●		福浦から岡山県日生町寒河へ出る峠の国道沿いにある。地蔵堂の中に祀られ、像高42cmを測る丸彫りの坐像。台座には明治17(1884)年の銘がある。
3	迎えの地蔵	●			7		●			●		くちの池(別名・西のハス池)堤防南端の火葬上跡に東を向いて祀られ、高さ約127cmを測る板碑である。正面に「南無阿弥陀佛」と刻まれている。火葬場の迎え地蔵であった。
4	古土手地蔵	●			7　8　27		●					像高30cmの半肉彫り立像。下半部が欠損している。
5	大泊地蔵	●			7　27		●			●		天則荒神社へ至る山道の手前にあり、高さ約43cmの丸彫り立像である。現在はコンクリート製の堂に祀られ、歯痛に霊験があるとされる。
6	赤ノ峠の地蔵	●			7　27		●			●		像高87cmを測り、台石には「弘化二乙(1845)年巳正月」の銘がある。かつては旅人の安全を願って備前国へ抜ける寺山街道に通ずる赤ノ峠の八合目に建立されていたが、峠を通る人も少なくなり、昭和54(1979)年2月18日堂宇新築の際、現在地に移し安置された。
7	折方橋の地蔵	●			7　27	●	●			●		折方橋の正面に建立されていたが、道路拡張計画のため、昭和49(1974)年8月に堂宇を新築して現在地に移された。2体あり、一つは像高60cmの丸彫り坐像で、男子出産を祈願すると必ず男の子が生まれるといわれ、神戸・姫路方面からも参詣する人があった。台座は別の石仏のものを転用している。もう一体は半肉彫りの立像である。
8	長安家の地蔵	●			7		●			●		長安家のある当主がお迎え地蔵を寄進建立したが、火葬場統合により移転、堂宇を新築して安置された。像高73cm、寛政11(1799)年造立の丸彫り坐像。
9	延命地蔵	●			7		●			●		像高81cmを測り、両手で宝珠を持った丸彫りの地蔵。台石の正面には「延命地蔵菩薩」、右側面に「昭和二十八(1953)年建之」の銘がある。
10	真木地蔵	●			7　27		●			●		像高84cmを測る半跏像。台石正面には「南無阿弥陀仏」と刻まれている。右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。鳥打峠の頂上より東10mほど北側に建立されていたが、昭和45(1970)年頃に堂宇の新築の時、現在地に移された。
11	機ケ谷池の地蔵	●			7　8	●	●			●		機ヶ谷池の工事犠牲者の冥福、池の安全加護を祈願して池の堤西側に祀られたもの。昭和23(1948)年造立、像高80cmの丸彫り立像。
12	一本松の地蔵	●			7		●					明治11(1878)年に造立された、像高94cmを測る丸彫り立像。
13	見真大師石仏 (親鸞上人)	●			8		●			●		大きな自然石の上に祀られた像高52cmを測る半肉彫り坐像。側面に昭和12(1937)年1月の銘がある。
14	播磨備前国境石	●			7　27　32		●					鵜和の綱崎は、かつては砂嘴状に細長く砂地伸びる地形を呈しており、その砂嘴上に播磨国と備前国の国境石が建てられていた。表に「従是取揚島見通シ」とあり、下部に「東播磨國」「西備前國」と並記され、右に「従是東播磨國」、左に「従是西備前國」と刻まれている。
15	鳥撫の道標	●			7　27		●					播磨と備前とを結ぶ街道沿いにあった。高さ56cm、幅28cmを測る花崗岩製で、「右　かたかみ　左　は(カ)満　　道」とある。
16	旧街道の道標	●			7　27		●					旧街道に沿った田渕橋の際にあり、「東　是より東　赤穂へ二里」、「北　田渕橋　道標」、「南　旧街道　道標」、「西　是より西　日生へ二里」と刻まれている。福浦が岡山藩に属した時代から、赤穂との関わりの深かったことがうかがえる。旧街道は現在、狭い農道としてわずかに原形をとどめているにすぎない。
17	堤防水門扉	●			8	●						岡山藩池田忠雄の時代に実施された第1期干拓事業により、古土手堤防に取り付いていたと考えられる、長さ約178cm、幅約94cm、厚さ約25cmを測る花崗岩製の板状石造物である。「寛永六(1629)年四月十一日　川本村作ヱ門」と刻まれている。寛永橋付近の川底から見つかった後に火葬場に移され、棺台として利用されていた。
18	古土手石灯籠	●			8	●						自然石を組み合わせた灯籠で、道路改修で若干埋まり、現在の高さは約2.7mである。古土手とは岡山藩池田忠雄の時代に実施された第1期干拓事業の際の潮止め堤であり、石灯籠も当時のものであろう。
19	恋ヶ浜の石碑	●			8	●				●		綱崎にある恋ヶ浜は、美しい自然の砂浜で、かつては海水浴や、潮干狩り、キャンプなどで賑わったという。恋ヶ浜の名前の由来として次のような話が伝承されている。昔、この海辺に漁を生業とする若い夫婦が仲睦まじく暮らしていたが、嵐の日にもかかわらず夫は漁に出ていき、夫は帰らぬ人となってしまった。その後もしばらく夫を偲び嘆く妻の姿が見られたが、やがて夫を恋い慕う妻は、海に入水して果てたという。砂浜に出るまでの道の傍らに「恋能者滴」の石碑が建てられており、この碑から少し離れたところに1基の供養碑がある。碑の正面中央には「梵字(キリーク・阿弥陀)寒霜浄船信士零位」とあり、その右には「承応三(1654)年生国平安城中御カ美カ」と、左に「極月(12月)九日住国芸州　北川仁左衛門」とある。
20	力士の碑	●			8					●		昭和24(1949)年建立。昭和2(1927)年に大阪角力協会を合併し日本の相撲会を一本化した際、相撲協会を退き郷里の鵜和に帰った増勇吉五郎(正木吉五郎)は地方相撲に貢献したという。赤穂の地方相撲(草相撲)の地元力士を偲び石碑を建立した。
21	真木開拓記念碑 鵜和耕地整理記念碑	●			8	●				●		鵜和は元来平野が少なく、生産性に乏しかった。大正元(1912)年に耕地の拡大が計画され、翌年8月31日に耕地整理が竣工された。約17haであった耕地は約58haとなり生活は豊かになった。この恩恵を記念して、大正13(1924)年6月に、岡山県福河村の福浦に生れた漢学者水利有終によって撰された碑を建立したものである。右横には真木の開拓を記念して明治18(1885)年に建立された石碑がある。真木の国道沿いにあったが、国道改良工事に伴って現在地に移された。
22	簡易水道敷設完成 記念碑	●			8　28	●				●		天神山の山裾にあり、荒尾太郎吉らによって大池の水の流れを利用して専修寺裏に水源となる溜池がつくられ、昭和10(1935)年に簡易水道が完成したことを記念した石碑。石ヶ崎集落の水瓶として利用された。大正13(1924)年建立。
23	機ヶ谷池の記念碑	●			8	●				●		大正5(1916)年から昭和5(1930)年の約15年の歳月をかけた、ため池造成と8町歩余の水田開発の記念碑。昭和5(1930)年の建立。
24	玉垣階段完成記念碑	●			8					●		福浦八幡宮の玉垣・階段建設の寄付金の募集に尽力した枷本定吉氏等が発起人となり氏子、総代、委員などが三者一体となり神域の美化のために力を合わせて完成した記念碑。大正2(1913)年建立。
25	消防5分団詰所 移転新築碑	●			8					●		以前は字田中の集会所付近にあったが、昭和6(1931)年に石ヶ崎に新築移転。その時の消防組幹部、地区役員の名が刻まれている。昭和58(1983)年の詰所改築に伴って詰所前に設置された。国道改良工事により、平成14(2002)年に現在地の駐在所前に移設された。
26	藤原兵太郎翁頌徳碑	●			8	●				●		藤原兵太郎は、私財を投じるとともに身をもって土木工事に精励し、かつては湿地帯であったが、約20haの新田開拓を行った。開拓地は兵太郎の姓を取って「藤原新田」と呼ばれ、新田居住者は兵太郎の功績を讃えて昭和11(1936)年に頌徳碑を建立した。
27	紀元二千六百年記念碑	●			8					●		昭和15(1940)年建立。紀元2,600年を記念して塩屋国民小学校に奉建していたが、戦後の校舎改築の際に松崎中将が折方出身ということから現在地に移された。
28	花道山本先生碑	●			8					●		花道の師を忍び子弟有志が建立した。明治後期の建立。
29	水利先生旌徳碑	●			8	●				●		名は新五郎、真幹号を有終といい、万延元(1860)年に福浦で生まれ、幼くして学問を志し8歳で村塾に入った。東京帝国大学の古典科進学をあきらめ郷校教育に専念、赤松・片上・三石村の児童を教える傍ら私塾を開校し40年にわたり漢学を村の子弟らに教えた。また村社八幡宮の社掌(神職)としても晩年を尽くした。大正15(1926)年建立。
30	吉栖恩師碑	●			8					●		昭和2(1927)年、遠近の子女のために裁縫を教えたことに敬意を表してその子弟が建立した。
31	吉栖先生碑	●			8					●		昭和6(1931)年建立。
32	栄俊太郎旌功碑	●			8	●				●		安政3(1856)年福浦生まれ。壮年教育に従事し、相生小学校に在職後に福浦小学校で教鞭をとる。辞職後、村会議員など歴任し、後に福河村長に公選された。常に励精で特に土木工事に力を注いだ。さらに本村漁業組合、法光寺再建にあたりその力量を発揮した。亀山本願寺で急逝去。この死を悼み有志が旌徳碑を建てた。昭和2(1927)年建立。
33	額田先生之碑	●			8	●				●		額田氏は福河村の名家で、恵四郎は壮年になり小学校教員、3期12年福河村長を務め、その後も子弟を集め夜学を開校した。その徳を追慕して碑を建てた。大正7(1918)年建立。
34	故陸軍一等卒 吉栖君神道之碑	●			8					●		明治20(1887)年建立。

西部地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
35	岡先生之墓碑	●			8					●		子弟の教育に尽力し学務委員、村会議員などを歴任した幸平の優れた学徳を偲んで、塾生たちが記念に墓を建て恩人に報いた。明治27(1894)年建立。
36	八幡宮の楠木	●			8		●			●		福浦八幡宮の参道入口に氏子が植樹した幹周り4.8m、樹齢400～500年と伝わる市内最大のクスノキが並ぶ。
37	天神山古墳		●		34						●	かつて折方字天神山のミカン山の中央にあった後期古墳で、墳丘は流出し、石室の石組が露出していたという。残存していた石室は長さ4.5m、幅87㎝、高さ1.65mあり、須恵器小片が採集されている。昭和41(1966)年に工場敷地造成用の土取場となり、その後の宅地化のため消滅した。
38	真木貝塚		●		34						●	畑を開墾中に発見されたもので、ハイガイ・アサリ・ハマグリなどの貝類、室町期の壺形土器が出土し、室町時代初期から中葉にできた貝塚と推定されている。
39	天和田ノ浦貝塚		●		34						●	田畑を開墾中に発見されたもので、ハイガイ・アサリ・ハマグリなどが多量に堆積している。
40	正八幡宮(福浦本町)		●		8　33		●			●		祭神に仲哀天皇、神功皇后、応神天皇、日子穂手見命を祀る。また境内の荒神社は須佐之男命、金毘羅社は大物主命を祀り、祠の下には「荒」「金」の鬼瓦が置かれている。
41	愛宕神社		●		8		●			●		祭神は火産霊神。法光寺裏の山腹に立地し、火の神として崇拝されている。建立時期不明であるが、古老の話では八幡宮より前からあったとされる。一時期八幡宮に合祀され、村に火災が多発したため土砂降りの雨の日に元の場所に祀ったところ、火事が少なくなったとの云われがある。
42	天則荒神社		●		8		●			●		祭神は須佐之男命。地元では通称「宮谷」と呼ばれている。天和年間(1680年前後)に岡山藩による干拓事業の際、土地の氏神を祀るために建立されたと伝わる。旧本殿から邑久郡佐山村の宮大工5人が文政3(1820)年6月に建立と書かれた棟札が見つかっている。現在の本殿は昭和29(1954)年7月に再建。
43	龍神社(福浦新田)		●		8　33　35	●	●			●		祭神に少童神、大山祇神、道祖神を祀る。境内社として、稲荷神社と恵比寿神社があり、それぞれ宇迦之御魂神と恵比須を祀る。由来は宮崎刑部の龍退治による建立とする説（赤穂の昔話）と、神の大堤防構築工事の際に航行や工事の安全を祈願して建立とする2説がある。また戦時中には「玉よけ神社」として遠来からの参拝者で賑わった。
44	塩釜神社(古池)		●		8　30　33	●	●	●		●		祭神に塩土老翁、建御雷神、経津主神を祀る。古池塩田を干拓する際に、塩田の神様を祀るために建立したとされる。神社の裏には恵比須神社と首塚が祀られている。
45	八幡神社(折方)		●		8　33		●			●		由来は不明、祭神は仲哀天皇・応神天皇・神功皇后。かつては折方村の田中・南・奥・砂子・石ケ崎の各地区ごとに八幡神社・荒神社・権現神社・天王神社・天神社が祀られていたが、明治40(1907)年頃に八幡神社に合祀された。参道・境内には、各神社から移設された多数の石造物がある。拝殿には、明治45(1912)年に北條文信が描いた義士画像図絵馬が奉納されている。『播州赤穂郡志』には「八幡宮　山林境内五十間(約90m)六十間(約108m)、下畑一反(約900㎡)寛永二巳(1625)年除地」とある。
46	荒神社(鳥撫)		●		8　33		●			●		祭神は素戔嗚尊。太宰神社・銭島八幡神社を合祀。境内には「大正八(1919)年十月」銘の備前焼製の狛犬がある。10月の例大祭に舞う獅子舞は、平成8(1996)年に市の無形民俗文化財に指定されている。また境内下に「カワ」と呼ばれる湧水がある。
47	八幡神社(銭島)		●		8	●	●			●		慶長5(1600)年、播磨国の領主となった池田輝政は、翌年赤穂郡代に垂水半左衛門を任命し、領国西南端の守護神として弁財天・住吉・八幡を銭島(銭戸島)に祀った。その後、東浜の塩田開拓のため慶長10(1605)年に八幡神社のご神体は尾崎の地(赤穂八幡宮)に移され、社は鳥撫荒神社の西に移されたという。
48	荒神社(真木)		●		8　33		●			●		祭神は素戔嗚尊で、八幡神社を合祀する。境内には「宝暦六丙子(1756)年九月二十四日」銘の石灯籠や、備前焼製の狛犬などがある。真木の峠南方には、合祀された八幡神社の御神体が流れ着いたとされる大きな自然石が今も残されている。
49	天王神社跡		●		8		●			●		境内、本殿、拝殿の石垣が残されている。一村一社制のため明治40(1907)年に八幡神社に合祀され、鳥居などが移築されたという。
50	権現神社跡 (織潟権現)		●		8　32		●			●		参道の石段、拝殿あるいは絵馬堂があったと思われる境内の石垣、本殿の石垣・石段が残されている。明治40(1907)年に八幡神社に合祀され、鳥居などが移築されたという。
51	法光寺		●		8　29		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院。永和2(1376)年に真言宗法光院として創建され、文明5(1473)年に浄土真宗に改宗。当時は八幡宮の西に位置する小さな庵の寺院で、元和年間(1620年頃)に全焼後、元禄4(1691)年に再建。明治32(1899)年、栄俊太郎や額田恵四郎らの尽力により、現本堂が建立された。山号は聳香山。
52	恵照院		●		8　　35		●			●		臨済宗妙心寺派の寺院で、宝暦元(1751)年、加里屋の随鷗寺五世照山の隠棲として建立され、釈迦牟尼仏、観音菩薩、稲荷を祀る。観音菩薩は平安末期の作といわれ、九州の人の作と伝わる。菩薩が老婆の夢に現れ、海から拾い上げて祀ったという伝承がある。境内に安置される3体の地蔵は、昔から「乳の地蔵」と呼ばれ、文化3(1806)年、文化8(1811)年の銘があるもので、育児の無事成長を願う女性の参詣が多い。平成17(2005)年に石仏の堂宇新築。赤穂の昔話には、「きんこんさん」という旅の坊主を仮住まいさせた施設として登場する。(赤穂の昔話)
53	浄専寺		●		8		●			●		阿弥陀如来を本尊とする浄土真宗本願寺派の寺院。永正3(1506)年、本願寺八代の蓮如上人に帰依し、尊号を申し受け開基したと伝えられる。山号は大成山。境内には本堂をはじめ、鐘楼、庫裡、書院、山門(四脚門)、薬医門(通用門)がある。
54	専修寺		●		8		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院で、本尊は阿弥陀如来。織田信長が加賀越前を攻めた折に高田専修寺(本山は三重県津市一身田町、本寺は栃木県真岡市高田)より分かれて逃れ、本地に移ったといわれる。寺号の由来は、浄土系宗派の特徴である専修念仏による。山号は大谷山。境内には山門(薬医門)・本堂・鐘楼・庫裡がある。境内地の北西には、簡易水道敷設完成記念碑が建てられている。
55	薬師堂(福浦本町)		●		8		●			●		かつては堂前に湧水があり、産後に乳の出ない婦人が飲めば乳が良く出るとされ、近在の人々が水を求めに訪れた。昭和62(1987)年、正八幡宮参道前の公園に移築。堂内には薬師像のほか地蔵が2体安置されており、旧街道田渕橋北50mのところに旅人の安全を祈願して建立されたが、個人宅に祀られた後、台風で堂が壊れたため薬師堂内に移された。1体は丸彫り坐像、もう1体は舟形後背を持つ半肉彫りの地蔵である。
56	水神宮		●		8	●	●			●		西ノ井の端、天神山の山裾にあり、石ヶ崎集落の水瓶として古くから利用されていた。集落の水道としては赤穂では早く、昭和10(1935)年には簡易水道として完成した。天神山地区の造成によって埋没するのを避けるため、造成中の10年間は個人宅の大岩の脇に移転され、完成後に現在地に祀られた。傍らには旧井戸の側石を使った石碑が建てられている。
57	お大師堂		●		8	●	●			●		赤穂八十三番札所であり、大師座像を祀る。堂の右手裏に湧水があり「お大師水」と呼ばれて飲料水にされていた。新田地区の井戸水は塩分が多いため、二軒屋、八軒屋からも担い桶で水を汲みにきていた。
58	観音堂(日々庵)		●		8		●			●		元は、銭島(銭戸島)にあったが、昭和32(1957)年に現在地に移された。千手観音像を祀る。堂前に建つ「日々庵」の石碑には「天保五甲午(1834)年正月八日」「施主　木生谷栄三郎　恨々子小次郎」の銘がある。
59	西浜塩田跡		●		8　30	●		●				古代から製塩がおこなわれていた塩屋では、近世になり池田時代～浅野時代～森時代と塩田開拓を行った。尾崎地区・御崎地区の東浜塩田に対して、塩屋地区は西浜塩田と呼ばれ、宝永3(1706)年で95町2反8畝ほどあったとされ、西浜での平均生産高は約10万石と推定されている。西浜は主として「真塩」と称する上方向けの上質塩を生産し、大坂市場を得意先としていた。
60	藤原新田		●		8　28　30	●						鵜和の南は広大な葦原であった。住民が藤原兵太郎を招いて相談し、大正3(1914)年に干拓が起工され、大正8(1919)年に約20haの造成が完成した。
61	古池塩田跡		●		8　30	●		●				享和元(1801)年、備前国和気郡福浦村と寒河村の百姓が、福浦村字古池周辺の干潟の干拓を岡山藩に願い出た。その後文政6(1823)年には2町8反2畝25歩半(約2.8ha)の入浜塩田が完成したが、生産性は低く、製塩が何度か中止されることもあった。昭和29(1954)年になると流下式塩田による製塩が行われ、昭和46(1971)年の枝条架の全廃により製塩が中止された。現在も枝条架撤去時の様子をそのまま残しており、貴重な遺構となっている。
62	沖の大堤防		●		8	●						岡山藩の時代に実施された第2期干拓事業の際の潮止め堤であり、240間(約432m)にわたる長大な堤防である。構築には三段積み工法が用いられた。施工の数年前に入電山、八軒屋、黒鼻の岩石を投入して泥底の沈下を待ち、さらに捨石を敷いて、その上に石材を積んだ。干拓事業は新田開発で実績を残し、閑谷学校の経営や後楽園の造営などにも力を注いだ岡山藩郡代津田重次郎永忠が担当した。現在はコンクリート製になっている。
63	本町寺東火葬場跡		●							●		以前は市道新田線と備前福河駅道路の三叉路付近にあったが、昭和30(1955)年に国鉄赤穂線が赤穂・日生間に開通するため、山林に移転した。その後昭和38(1963)年の赤穂市との合併によって市営斎場を利用することとなり廃場となった。福浦にはほかに本町寺西、古土手、新田五軒家、新田八軒家、古池にも火葬場があったが、現在すべて廃場となっている。

西部地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
64	福浦小学校跡		●		8		●					明治6(1873)年に創立された。明治22(1889)年に福浦・寒河小学校が統合されて尋常福浦小学校と改称する。明治32(1899)年に福浦校舎が倒壊した後、明治35(1902)年に寒河東奥に移転した。
65	兵庫県・岡山県の旧境界		●		7		●					昭和38(1963)年に岡山県日生町福浦地区が赤穂市に編入合併したため、兵庫県と岡山県の境界は変更された。
66	旧街道		●		7　8　27	●	●					日生方面につながる街道。
67	福浦峠		●		7　27		●					兵庫県と岡山県の境界、赤穂市と備前市の境目にある峠。
68	鳥打峠		●		7　8　27　35		●					鵜和真木と福浦との間の峠。『撮要録』では「鳥居峠」と記載されている。赤穂市が福浦を越県合併するまでは播磨国（兵庫県）と備前国（岡山県）の境界にあたり、赤穂の昔話にはかつて番所があったことが記されている。（赤穂の昔話）
69	採石地		●		8		●					現在も採石場があるが、古くから採石が行われており、近代には阪神間へ庭石の需要もあった。
70	入電池		●		8　35	●						地名。民話によると宮崎刑部によって矢で両目を打たれた龍がもがき苦しんでのたうちまわっているところに、雷が落ちて池ができたとされる（赤穂の昔話）。現在は福浦漁港となっている。
71	機ケ谷池		●		8	●						7丁歩余りの水田開発のために築かれたもので、大正5（1916）年に着工し、昭和5（1930）年完成した。
72	古池（折方）		●		8	●						折方川沿いに築かれた池。
73	新池（折方）		●		8	●						折方川沿いに築かれた池。
74	鳥打峠池		●		8	●						鳥打峠西側に築かれ、満水時貯水面積16,000㎡を測る、福浦地区で最大級の池。
75	西の谷池		●		8	●						福浦本町の法光寺西の中の谷川沿いに築かれた池。
76	新池（福浦本町）		●		8	●						口の池よりさらに山側に築かれた、満水時貯水面積14,600㎡を測る、福浦地区で最大級の池。
77	口の池		●		8	●						福浦本町地区の共同墓地西側に築かれた池。
78	中の谷池		●		8	●						福浦本町の次郎太夫川沿いに築かれた池。
79	中河原池		●		8	●						赤穂カンツリークラブ内に築かれた池。
80	荷子台池		●		8	●						赤穂カンツリークラブ内に築かれた池。
81	荷子谷池		●		8	●						赤穂カンツリークラブ内に築かれた池。
82	奥の池		●		8	●						成瀬川沿いに築かれた、満水時貯水面積15,500㎡を測る、福浦地区で最大級の池。
83	南池		●		8	●						石ヶ崎天神山の山裾に築かれた池。
84	藤原新田池		●		8	●						藤原新田は大正8(1919)年に藤原氏による20余町歩の農地が開かれた。
85	戸島用水		●		8　28	●	●					山崎山山麓の戸島枡から導水された旧赤穂上水道は、鵜和まで敷設されていた。
86	取揚島		●		7　36	●	●					千種川河口先の播磨灘にある3,562㎡の小島。江戸初期に播磨国と備前国との間でこの島の領有権争いがあり、幕府が取り揚げたことによる。のち島の東を播磨、西を備前領と定められた。現在も島上の石標から綱崎海岸に建つ国境石を見通した海上線が岡山・兵庫県境である。往昔の景勝地。
87	銭戸島（船番所跡）		●		8	●	●			●		池田輝政は鳥撫村銭戸島に弁財天・住吉・八幡の三神を祀って海上安全を祈った。大津川河口地域の干拓を計画していたためと伝わる。慶長10（1605）年に八幡神は尾崎に遷された。また赤穂藩主浅野長直が新田開発の際、この地の土を採取して97町歩余りの水田を開いた。またこの地に船番所を設け内海航行の船を監視したという。
88	福浦塩田公園		●		8　30			●				国道2号沿いにあり、流下式塩田の枝条架のモニュメントが整備されている。広場は入浜塩田がモチーフであり、東屋は釜屋風となっている。
89	JR備前福河駅		●		7　27		●					JR赤穂線の駅名。合併により現在は赤穂市であるが、かつて備前であったことが駅名より慮れる。
90	JR天和駅		●		27		●					JR赤穂線の駅名。昭和38（1963）年に開設された。
91	鳥撫荒神社獅子舞			◎	8　33					●		獅子舞は伊勢系の神楽獅子であり、豊作を祝い、神に感謝する舞として明治後半頃に千種川筋の高野・木津・高雄等の獅子舞を習得して始められたもので、不作の年には舞うことはなかった。16種類の舞があり、梯子獅子など市内随一の芸獅子が特徴で、市指定無形民俗文化財となっている。
92	福浦			●	32　36	●	●					地名。自然地形と大字名（ふくら）から古代は大きな入海（湾）であったことがわかる。
93	折方			●	32		●					地名。詳細は不明であるが、江戸時代の記録には織潟・織方があり、機を織っていたことに由来するという。
94	鳥撫			●	32		●					地名。鳥撫村。
95	牧（真木）			●	32		●					地名。真木村。
96	鵜和			●	36		●					地名。明治9(1876)年に真木村36戸と鳥撫村68戸が合併した。頭文字の真と鳥を合体した「鵜」を選び、仲良く発展しようと「和」をつけた新地名である。
97	天神山			●	36		●					地名。古墳のところに天神社(明治後期に移した)があったことによる。現在は全山が宅地となっている。
98	恋ケ浜(恋ノ浜)			●	32　35	●	●					地名。広島浅野藩領より流されてここに住み着いた漁師があるとき遭難したのを悲しんで妻が入水したことによるという（赤穂の昔話）。また恋の松原備前境ともいわれた。
99	綱崎			●	7　32　35	●	●					地名。大津川河口右岸の地名。現在は埋め立て地となっているが、綱崎から南西の古池へ至る海岸線は、瀬戸内海の多くの海岸線と同様に、陸地が海の中に沈みこんだ状態を示す沈降性海岸である。赤穂の昔話「恋ヶ浜」の舞台となっている。（赤穂の昔話）
100	石ケ崎			●	36	●	●					地名。江戸時代の中ごろまでは大石の山が海中に突出していた景勝の地。
101	大泊			●	8　27　36	●	●					地名。泊まりとは、海辺で大風を防ぐ入江、船を係留するのに安全な場所をいう。大泊は40数軒の大集落であったようであるが、今は二軒屋、五軒屋、入電に移住している。
102	船隠			●	8　27　36	●	●					地名。干拓前、漁業者が風を避けて船を係留していた。風から船を隠したところから付いた地名。
103	古池			●	8	●	●					地名。300～400年前より人が住み着いたとされる。今の集落地は窪地（古池）で、沖は遠浅であった。
104	真尾鼻			●	8	●	●					地名。綱崎と真尾鼻を結んだラインが、今も赤穂市と岡山県日生町に関する漁業権の境界となっている。
105	九艘泊			●	27	●	●					地名。遣隋使時代からの風よけ、潮待ちのための船が停泊するための入江であり、当時一度に九艘の船が停泊したと伝わる。

西部地区　歴史文化の視点１

7. 播磨と備前の国境

【ストーリー】

ＪＲ備前福河駅は兵庫県赤穂市―。昭和 38（1963）年の越県合併までは、福浦は岡山県に属していた。この地区には、江戸時代に建てられたと思われる「播磨備前国境石」が今も残されている。ここから、瀬戸内海に浮かぶ取揚島を見通したラインが、播磨と備前の海の国境であった。

かつての国境には鳥打峠があり、旧街道が通っていた。備前街道ではないもう一つの街道として、旅人の安全を祈る地蔵や道案内の道標が、今も多く残されている。

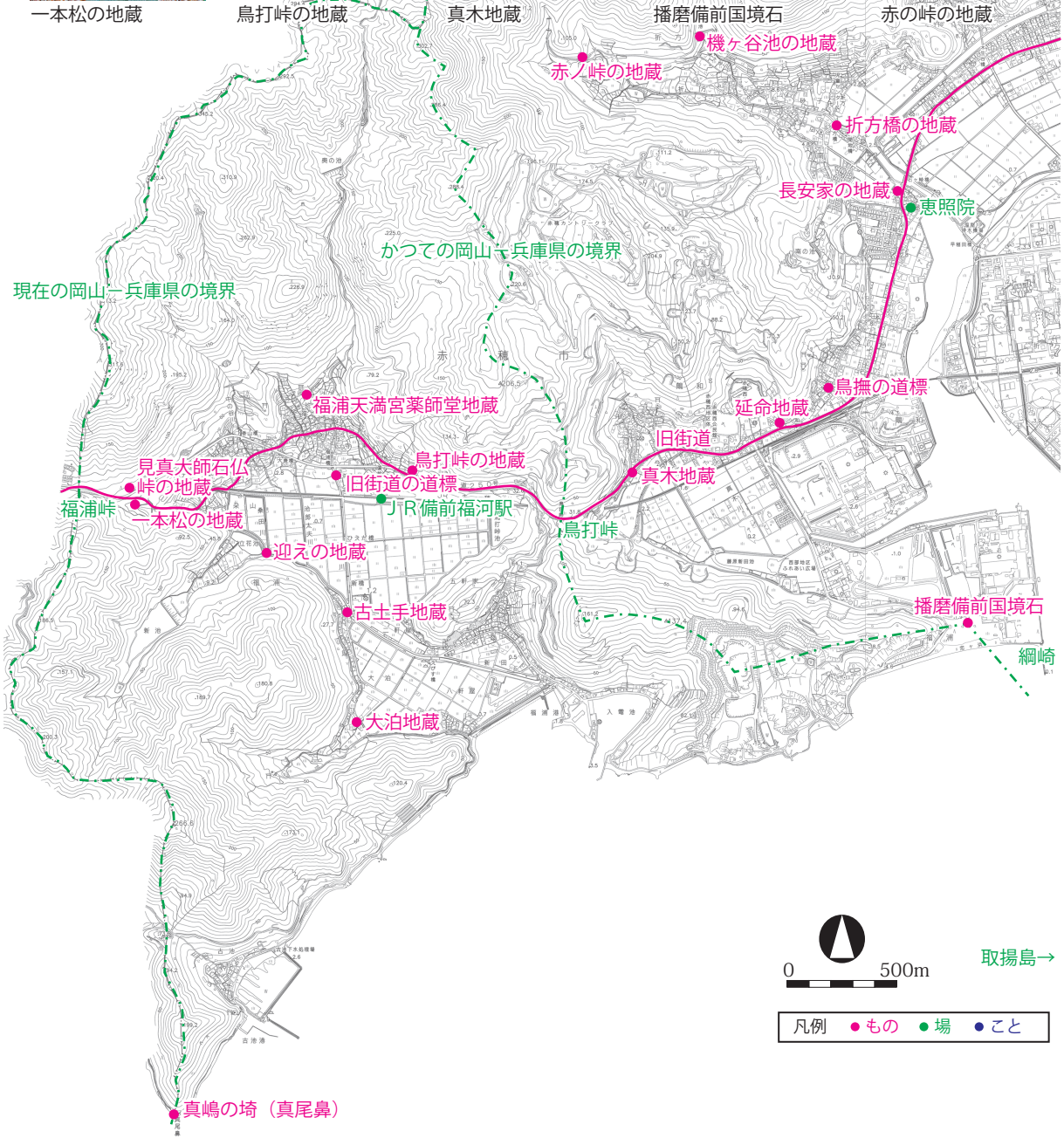

一本松の地蔵


鳥打峠の地蔵


真木地蔵


播磨備前国境石


赤の峠の地蔵



西部地区　　歴史文化の視点２

8. 開拓ものがたり

【ストーリー】

かつての西部地区は、海が山際まで入り込む平野の少ない地形であったが、中世から現代に至る干拓・開発によって、現在の景観ができあがった。

福浦の干拓開始は古く天正年間に遡るとされ、寛永 6（1629）年には福浦の古土手および水門が完成した。その後天和 2（1682）年には福浦新田が完成、しばらくして福浦新田村が成立した。

一方、鵜和については、江戸時代に西浜塩田が干拓されたほか、大正 8（1919）年に完成した藤原新田や、昭和 10（1935）年に石ヶ崎まで通水した戸島用水などがある。

土木事業は先人の知恵の積み重ねであり、現在見られる数多くの記念碑は、工事に携わった先人の犠牲や労力の結晶を称えたものである。



真木荒神社より集落を望む

入電池（撮影：出水伯明）

尾崎地区

地　勢、

千種川下流域の東岸にあり、宮山によって洪水の難を逃れた場所が尾崎の中心地である。宝崎神社のノット岩の存在は、このあたりがかつて流紋岩の岩盤が露頭していたことを想起させ、千種川の運び込んできた土砂とその後背湿地の形成によって生活地盤ができ、人々の居住が始まったことが推定される。

現在の尾崎地区に広がる新興住宅地は、かつての東浜塩田であり、北にある石指（イッサシ）の山を削って大造成がなされたもので、その景観は近代になって大きく変貌したが、水路や地名に名残を残す。一方、宮山周辺の旧市街地については、一部に街路整備が行われているものの、江戸時代とほとんど変わりない町割が残されている。

歴　史

尾崎地区には海岸沿いに縄文時代の猪壺谷遺跡や古墳時代の尾崎・大塚古墳が見られるが、その背景は明らかでない。中世も社寺の縁起や伝承によって歴史が語られているにすぎず、明確な歴史が明らかになっているのは江戸時代以降である。

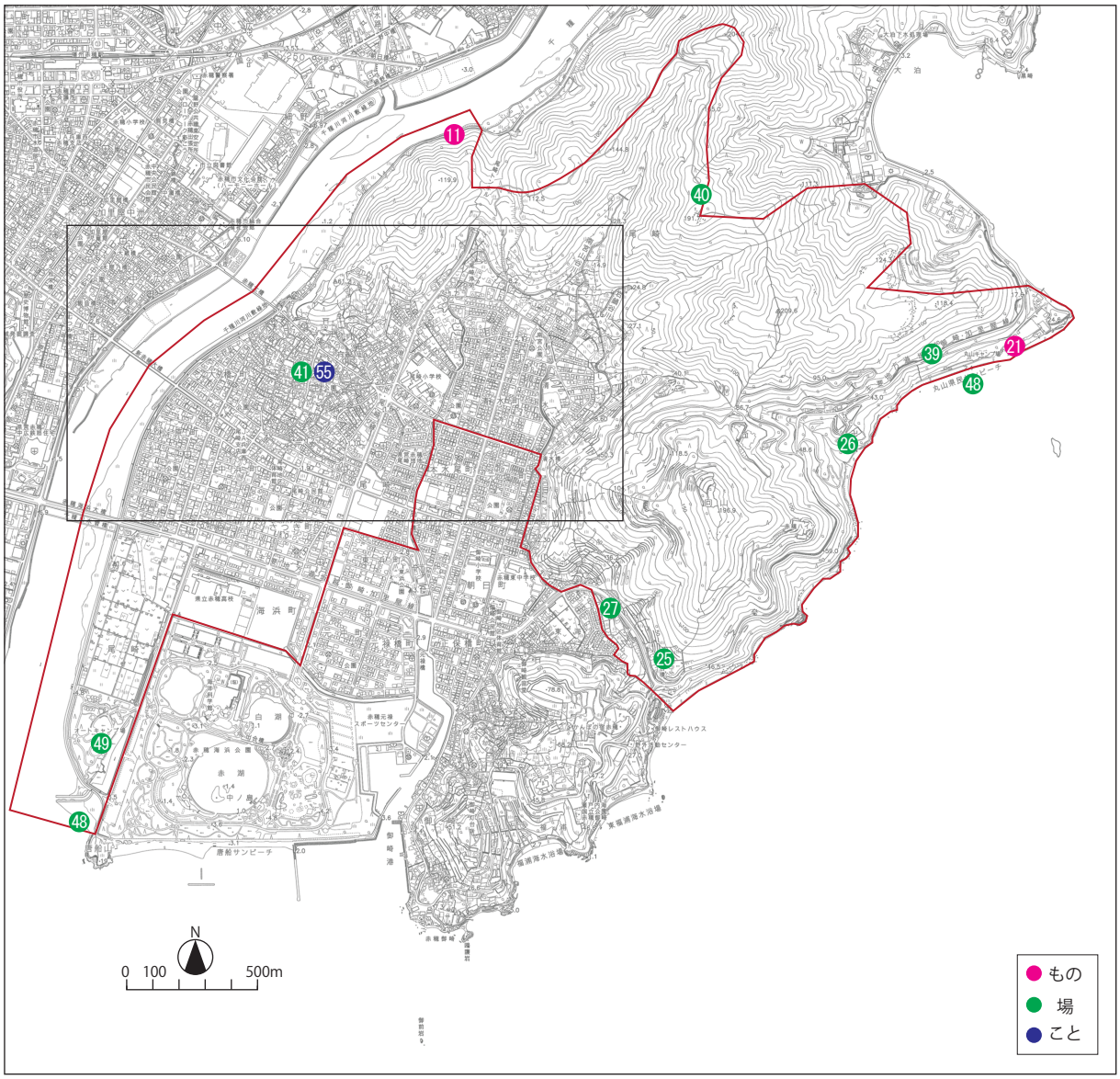
江戸時代になり赤穂を治めた池田家の代官、垂水半左衛門ははじめ尾崎に居を構えたといい、慶長 10（1605）年には赤穂八幡宮を西部地区の銭戸からこの地に遷したともいう。こうした背景には塩田開発があり、寛永 3（1626）年には池田家の家臣岡田弥兵衛が製塩技術を伝えたという。

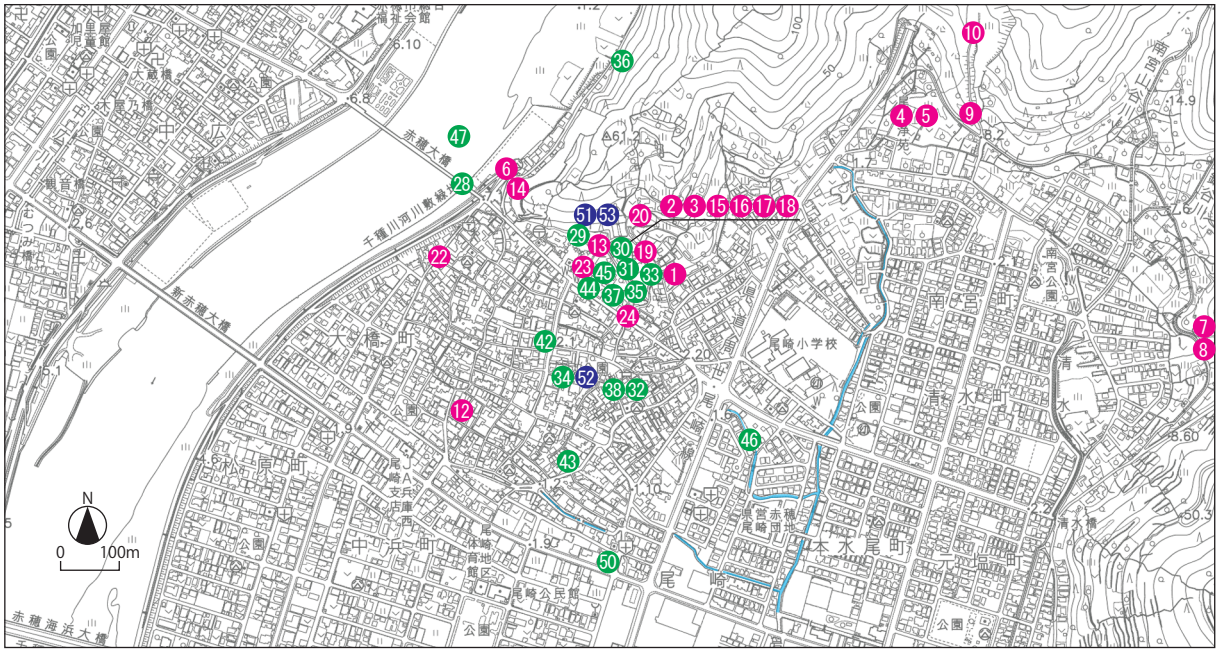
東浜塩田の大規模な干拓開始は、浅野長直が赤穂に入封してすぐの正保 3（1646）年といわれており、御崎新浜村とともに一大生産地となった。

表 21　尾崎地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
縄文時代後期	約4,000年前	瀬戸内海沿いの猪壺谷遺跡で縄文土器出土
古墳時代後期	6世紀後半～7世紀	瀬戸内海沿いに尾崎・大塚古墳が築かれる
中　世		ナンサマ・イッサシ山麓で中世雑器
	室町時代	宝専寺、如来寺、八幡神社など、社寺の縁起
	応永13(1406)年	八幡宮を鳥撫の銭戸から遷宮の伝承
	天正15(1587)年	宇喜多忠家、坂越・高野・中村・尾崎を地方知行か
近　世	慶長8(1603)年	垂水半左衛門、赤穂代官として赴任、尾崎に居を構える
	慶長10(1605)年	八幡宮を鳥撫の銭戸から遷宮ともいう（「播州赤穂郡志」）
	寛永3(1626)年	岡田弥兵衛が尾崎に入り、赤穂に製塩技術をもたらした伝承
	正保2(1645)年	浅野長直、尾崎八幡宮に社領を寄進
	正保3(1646)年	東浜塩田干拓開始
	寛文7(1667)年	唐船大土手の築造、翌年唐船塚の干拓始まる
	寛文11(1671)年	田淵家、尾崎村塩問屋に名を連ねる
	延宝元7(1672)年	田淵家、尾崎村より御崎新浜村へ移る
	延宝7(1679)年	赤穂八幡宮が大火、長矩が八幡宮本殿の再建開始
	元禄8(1695)年	尾崎、坂越と山論はじまる
	元禄14(1701)年	大石良雄が赤穂城引渡し後に、おせどに仮滞在する
	宝永3(1706)年	尾崎村明細帳
	正徳3(1713)年	尾崎村で出火、311軒焼失、赤穂八幡宮の鳥居1か所焼ける
	寛政7(1795)年	倶会塔が建立される
	文化6(1809)年	大坂送り塩の専売制開始(1821年まで)
	文化9(1812)年	赤穂塩田、休浜同盟に参加
	文政6(1823)年	製塩に石炭焚き開始
	嘉永3(1850)年	坂越・尾崎村間で山論起こる
	安政4-文久3(1858～1863)年	火事が続き、５年間で約420軒焼失
近　代	明治34(1901)年	今井三造、尾崎村に私立今井学校を開設
	明治38(1905)年	塩専売制施行
	明治41(1908)年	尾崎・大塚古墳で最初の埋蔵文化財発掘調査が行われる
	大正13(1924)年	赤穂東浜信用購買利用組合発足
	昭和4(1929)年	塩田の第二次整備始まる、一部廃田となる
	昭和10(1935)年	尾崎八幡宮前から新浜に通じる県道拡張工事第一期竣工
	昭和12(1937)年	赤穂、塩屋、尾崎、新浜が合併して大赤穂町になり、尾崎は赤穂町尾崎となる 赤穂大橋完成する
	昭和13(1938)年	東浜合同煎熬工場が完成、上荷舟が陸軍への徴用により消滅
	昭和15(1940)年	普門寺の木造千手観音坐像が国宝になる
現　代	昭和23(1948)年	東浜合同煎熬工場が全焼
	昭和25(1950)年	御崎から坂越の海岸が瀬戸内海国立公園に指定される 普門寺千手観音坐像が国指定重要文化財に指定される
	昭和32(1957)年	普門寺、加里屋から尾崎に移される 流下式塩田への転換工事完了
	昭和35(1960)年	赤穂海水工業(現在の株式会社日本海水)設立
	昭和44(1969)年	尾崎地区土地区画整理事業組合の設立
	昭和45(1970)年	新赤穂大橋が完成
	昭和46(1971)年	赤穂東浜塩業組合が製塩を中止、赤穂化成(株)設立
	昭和47(1972)年	赤穂東浜塩業組合解散
	平成 5(1993) 年	赤穂海浜大橋が完成
	平成18(2006)年	県道周世尾崎線（尾崎トンネル）開通 尾崎地区都市計画に基づく街路整備開始

尾崎地区全図





尾崎地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	木造千手観音坐像	◎			9					●		平安時代弘仁期(810～824年)の恵朝僧都の作とされ、京都の高雄山神護寺に祀られていたが、応仁の乱など幾多の兵火をのがれて普門寺に遷坐したと伝わる。十一面千手観音の坐像としては県下唯一のもので、昭和15(1940)年に旧国宝、昭和25(1950)年の文化財保護法制定により国の重要有形文化財に指定された。
2	木造不動明王立像 (光背を含む)	◎			10					●		像高106㎝で、一木調成、背刳りを施す。両手は肩部で矧ぐ。頂蓮は前半を欠き、右手首より先は失われ、両足先は虫食いのためひどく損じている。光背の修理墨書銘によれば、木像は慈覚大師(円仁)の作と伝え、もと赤穂郡周世郷の高雄山神護寺清篭院護摩堂の本尊であったが、現在は如来寺で保管されている。平安時代後期の木像として市指定有形文化財となっている。
3	木造毘沙門天立像	◎			10					●		木造不動明王立像と同様の経緯を持ち、平安時代末期の製作とされる。市指定。
4	三昧の迎え地蔵	●			9		●			●		尾崎共同墓地内にある像高105㎝の丸彫り坐像で、元文2(1737)年の造立。かつては木ノ下の元三昧にあったが、三昧の移転により現在地に移された。
5	迎え地蔵	●			9		●			●		尾崎共同墓地内にある像高62㎝の丸彫り坐像で、安永10(1781)年の造立。
6	子守地蔵	●			9		●			●		旧赤穂大橋東詰めの祠内にある像高65㎝の丸彫坐像。川遊びで毎年のように子どもが死んでいたので、昭和23(1948)年に建立された。
7	六地蔵(田尾)	●			9		●			●		清水の元三昧跡にある像高55㎝前後の六地蔵。自然石を含み、欠損が多いが、一般的な六地蔵の形態ではない。
8	地蔵(田尾)	●			9		●			●		清水の元三昧跡内に2体の地蔵菩薩像があり、像高98㎝の丸彫り坐像と、像高28㎝の頭部が欠損した坐像がある。後者は寛保2(1742)年の造立。
9	石指の首無し地蔵	●			9		●			●		石指にある像高59㎝の丸彫り立像。隣接して一石五輪塔もある。
10	首無し地蔵	●			9		●			●		石指にある像高37㎝の丸彫り坐像。頭部がコンクリートで補修されている。
11	小坂の地蔵	●			9		●			●		小坂の地蔵堂内に安置された像高62㎝の丸彫り坐像。明治26(1893)年に造立された。
12	三本松と倶會塔	●			9　10		●			●		医師尾崎玄度が、その先祖である尾崎伊賀守政顕らの墓を整備し、寛政7(1795)年に建てたものである。右・左・裏の3面にはその由来が記されている。上部は丸彫り坐像。
13	信仰之道石碑	●			9		●			●		赤穂八幡宮の脇から如来寺や普門寺へとつながる道沿いにある高さ192㎝の石碑で、昭和50(1975)年に建立された。
14	尾崎村道路元標	●			9　27		●					昭和12(1937)年5月に赤穂大橋が完成するまで、旧赤穂大橋東詰に建つ石標は旧尾崎村への玄関口を示し、高さ65cm、25cm角の花崗岩で、正面に「尾崎村道路元標」背面に「兵庫縣」と刻んでいる。
15	田淵丹仙句碑	●			9					●		江戸期における赤穂俳諧の証として、また庶民文学のさきがけとして寛政3(1791)年に建立された文学碑。
16	児島長年碑	●			9					●		赤穂における唯一の勤皇志士の碑で明治21(1888)年に建立された。
17	俊恵師之碑	●			9					●		明治29(1896)年、近江国百姓久次郎(のち慶心)の八世の孫、松居久右衛門が拾得金の美徳を知り、後世に伝えんと建立した。
18	芭蕉早苗塚	●			9					●		俳聖松尾芭蕉を偲びつつ門下生の広瀬惟然、井上寒瓜の遺徳を讃えたもので、天明8(1788)年に尾崎在住の柳田寒桃がこれを建てた。
19	塩竈神社社殿 改築記念碑	●			9　30					●		大正6(1917)年、塩竈神社の改築記念碑として建立。
20	忠魂碑	●			9					●		当初は日露戦争による戦死者8名を合祀するため、寺山に大正10(1921)年4月に建立していたのが、昭和10(1935)年、現在地に移転した。なお、現在は第二次世界大戦の戦死者も合祀している。
21	鱒介碑	●			9					●		捕獲した幾億兆の魚族を弔う石碑で、昭和3(1928)年の建立。
22	惜桜碑	●			9					●		昭和26(1951)年、次男の戦死を悼み父・桃井健三が鎮魂碑を建立したもの。
23	大石内蔵助 ゆかりのハゼ	●			9　10		●		●			延宝元(1673)年、大石内蔵助良雄の元服を祝って芸州(広島県)からハゼを取り寄せたと伝わり、かつては尾崎川(現在の千種川)の堤防にあったという。大正11(1922)年、堤防の改修に伴って赤穂八幡宮境内に移築され、昭和31(1956)年に由緒碑が建てられた。
24	おせどの牛石・馬石		●		9　10		●		●			おせどは、元禄14(1701)年の刃傷事件の後、大石内蔵助が城明け渡しの残務整理のため6月25日まで仮住まいしたところと伝えられる。池のほとりに二つの石があり、池に向かって右側は牛がうつ伏したような形の牛石、左側は馬が立ったような馬石とされ、かつて赤穂城内にあったとされている。
25	尾崎・大塚古墳 (付)出土遺物12点及び 『字大塚古墳調査書類綴』		◎		34		●				●	瀬戸内海に面した向山の南にのびる尾根上に独立して立地する。6世紀後半から7世紀に築かれた直径約20mの円墳で、両袖式の横穴式石室をもつ。須恵器のほか耳環が出土しており、明治41(1908)年に地元有志によって発掘され、その調査結果は「字大塚古墳調査 書類綴」として記録されている。市指定。
26	猪壷谷遺跡		●		34						●	尾崎字猪壷谷にあり、縄文時代の土器や石鏃、弥生時代のサヌカイト製の打製小型抉入り石包丁などが出土採集されている。
27	大塚遺跡		●		34						●	3点の縄文時代の石鏃が採集されたほか、発掘調査によって古墳時代、中世の土器類が出土しているが、遺構は見つかっていない。
28	赤穂大橋下遺跡		●		34						●	昭和35(1960)年に赤穂大橋の橋脚補強工事に伴って約3,500年前の縄文土器、約2,000年前の弥生土器、須恵器、石錘などが見つかった。
29	赤穂八幡宮(尾崎)		●		9　10　30　32　33		●	●	●	●		祭神は応神天皇、神功皇后、仲哀天皇であり、応永13(1406)年鳥撫村(現在の鵤和)銭戸島から移されたと伝わる(『播州赤穂郡志』では慶長10(1605)年に移すとある)。江戸時代には天台宗の神仏習合寺で神宮寺と称したが、明治政府の神仏分離令で八幡神社と改称し、戦後は現在の八幡宮となった。氏子域は千種川河口部一帯であり、御旅所に宝崎神社がある。同宮には大石内蔵助ゆかりの布袋額、ハゼの木・石灯籠などをはじめ、赤穂義士関係の書状などが数多く残されている。
30	如来寺		●		9　10		●			●		赤穂八幡宮の神宮寺であったが、神仏分離して仏道を観音寺に移し、寺号を金光山如来寺に改め、天台宗に属した。本尊は阿弥陀如来。寺内に薬師堂のほか、俊恵師之碑・岡田弥兵衛墓碑・早苗塚などの石碑、昭和12(1937)年造立の地蔵菩薩像などの石仏が建つ。寺宝として、神宮寺時代に可笑(大石良雄)画をはじめ、赤穂義士ゆかりの書簡などが残る。
31	塩竈神社(尾崎)		●		9　10　30		●	●		●		かつて東浜塩田に祀られていたが、大正6(1917)年頃に現在地に移され、その後金毘羅神社と天神社が合祀。通称「金毘羅さんの社」。
32	宝崎神社		●		9　10		●			●		赤穂八幡宮大祭の御旅所。境内にはノット岩と呼ばれる自然岩盤が露頭しており、神功皇后がここで祝詞を唱え台風がおさまったことから「ノット岩」と呼ばれると伝わる。
33	普門寺		●		9		●			●		寺縁起によると古来は雄鷹台山にあり、慈覚大師の創建といわれている。慶長2(1597)年、明王山普門寺は赤穂東組(橋本町)、大高山長安寺は赤穂西組(新町)に再建された。昭和32(1957)年、加里屋の区画整理事業により現在地に移築され、両寺が相合して明王山普門寺と改称された。本尊に国指定有形文化財の木造千手観音坐像があるほか、六地蔵をはじめとした地蔵菩薩像が境内に安置されている。地蔵菩薩像には文化2(1805)年造立の丸彫り立像、明治16(1883)年造立の丸彫り半跏像などがある。
34	宝専寺		●		9　10		●			●		かつて真言密教の霊場として7カ寺が上の山(寺山)にあったが、戦国時代には衰退して龍王山専福寺と龍馬山観音寺の2ケ寺だけが残っていた。天文5(1536)年、専福寺住職正善が浄土真宗に改宗し、寺号を宝専寺に、名も正空と改め、現在地に堂宇を移した。山号は龍王山。寛文年間(1661～1672年)には、本願寺より一寺二住職の免許を得て、東院と西院が1年交代制で寺務を行うようになった。一寺二住職の寺は、全国でも珍しい。
35	太地堂		●		9		●			●		普門寺の向いにあり、昭和4(1929)年に建築された。大師像、延命地蔵、子育て地蔵、聖徳太子像が祀られており、聖徳太子の「太」と地蔵の「地」をとって堂の名としたと伝わる。享保年間(1716～1736)造立の丸彫り坐像、「本尊千手観世音」「八十一番」と記載のある弘法大師像などが安置されている。
36	川馬の大師堂		●		9	●	●			●		弘法大師像、地蔵菩薩像が2体ずつ祀られている。
37	伝大石良雄仮寓地跡		◎		9　10		●		●			元禄14(1701)年の刃傷事件後、城明渡しの残務整理をする5月7日から6月25日の間、大石内蔵助とその家族が仮住まいしたところとして伝えられ「おせど」の俗称で親しまれている。現在は、甕篦池や、内蔵助が祀ったとされる稲荷社、

尾崎地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
38	ノット岩		●		9　10　32	●	●			●		宝崎神社の境内にある長さ約15m、高さ約1.7mほどの低く平らな溶結凝灰岩質の流紋岩で、赤穂八幡宮の秋祭りでは御旅所となり、神輿がこの岩の上に着座する。この岩については、次のような伝承が伝わる。神功皇后が三韓征伐の帰りに海が台風で大荒れになり、難破寸前の時、近くにあったこの岩に船を繋ぎ、波の静まるのを願って祝詞を唱えたところ、たちまち波は静まり、船を進めることができたという。そのためこの岩を「のりとの岩・ノット」というようになった。
39	弁慶のとめ岩		●		35		●			●		県道坂越・御崎・加里屋線の丸山付近にある。かつて山頂からこの大石が転がり落ち、一人の村人が下敷きになろうとしたその瞬間、ちょうど通りがかった弁慶がこの岩を支え止め、村人を救ったという。（赤穂の昔話）
40	尾崎・坂越山論石塁		●				●	●				元禄8（1595）年、尾崎村の者が坂越浦の南側、「丸山」と呼ばれる場所で松枝を刈っているとの届けが坂越村に入ったことを発端として、坂越村は赤穂藩へ吟味願いを提出、訴訟となった。この争いは114年間も続き、文化8（1809）年にようやく和解が成立し、両村の境界線が石塁によって築かれた。江戸時代には、山林を所有する村がそこから薪や肥料にする木材や落ち葉を調達できたため、このような争いが起きた。
41	旧尾崎村		●		30　32		●					宮山の麓、赤穂八幡宮の周辺に形成された、塩田を主な生業としたまち。かつての千種川が運んだ自然堤防上に築かれ、海側は塩田で占められていた。
42	尾崎尋常高等小学校跡地		●		9		●					明治40(1907)年、尋常小学校が高等科を併合して尋常高等小学校に移行し、修学年限が4年から6年に延長された。小学校名は、昭和16(1941)年に国民学校と改称されるまで続き、学校地としては明治32(1899)年から昭和10(1935)年まで存在した。
43	今井学校跡地		●		9		●					明治期の尾崎は、幼い頃から製塩労働に携わる者がほとんどで、多くの子は不就学で終わることを憂いた今井三造が、明治34(1901)年に私財を投じて私立今井学校を開校。尾崎尋常小学校に二部教授の夜間授業が行われるようになり、明治35(1902)年10月閉校となった。
44	中川家住宅		●		9		●					明治末期の建築と推定される。入母屋平入の屋根、建物と一体となった塀など屋敷型住宅の外観をもち、隣接する赤穂八幡宮と一体となり地区の景観を形成している。平成10(1998)年に赤穂市の市街地景観重要建築物に指定。
45	仙桃園（桃井家住宅）		●		9		●					素封家小川伝次郎が明治27(1894)年に画師の北条文信に庭園設計を依頼し、旧山陽道有年宿駅の柳原家の本陣御座所を書院として移築するなど、別邸として整えられて紅蓼園と称した。庭園中腹には、大正10(1921)年、2階建の茶室も増築したが、昭和22(1947)年桃井氏に譲渡され、仙桃園と改称された。この庭園は、明治時代中期に作られた赤穂地方の数少ない庭園として貴重なものである。
46	水尾跡		●		9　10　27　30	●	●	●				塩田に海水を導き入れる水路を「みお」と呼び、尾崎のまちを歩くとその名残を見ることができる。
47	旧赤穂大橋跡		●		9　27　34	●	●					明治25(1892)年に赤穂を襲った未曾有の大水害で橋が流失したため、旧赤穂大橋が明治28（1895）年に完成した。二つの橋からなり、ほぼ中央より尾崎側を厳津橋、赤穂側を赤穂橋と呼んでいた。その後は、千種川に旧赤穂大橋の橋脚が昭和35(1960)年頃まで建っていたが、今はなく東袂にその名残をとどめている。
48	海水浴場		●			●						御崎から尾崎にかけて3つの海水浴場があり、潮干狩りなども楽しめる。
49	オートキャンプ場		●		13		●					兵庫県立赤穂海浜公園に隣接した施設で、西日本最大級をうたうオートキャンプ場。
50	たでのはな美術館		●				●		●			江戸時代の歌川派の浮世絵をはじめ、平塚運一、棟方志功、竹久夢二など主として昭和期に活躍した版画家の作品を多数収蔵、展示している。平成17（2005）年に加里屋のお城通りに開館したが3年後に閉館。その後、平成24（2012）年から尾崎地区で運営されている。
51	赤穂八幡宮獅子舞			◎	9　10　33					●		赤穂八幡宮獅子舞は、寛文元(1661)年の赤穂城完成を祝って始まったとされ、「神幸式」の行列の露払を務める。囃子がなく、太鼓の打ち出しのみで鼻高に導かれた雌雄の獅子が、境内及びお旅所までの道中を清めながら荒々しく舞う。平成5(1993)年に市指定、平成17(2005)年に兵庫県無形民俗文化財に指定された。
52	赤穂宝専寺 恵比寿大黒舞			◎	9　10　33					●		江戸時代中頃からはじまり、塩田で働く人々の間に受け継がれてきた芸能で、毎年正月に家々を廻ってホギゴト（祝言など）を述べ祝儀を受けていた門付祭文の芸を伝えたものである。舞は、恵比寿および大黒の面をかぶり、恵比寿は大きい鯛をかかえ、大黒は小づちを手にして相対し、極めて大ぶりな身ごなしで舞う。昭和47(1972)年に兵庫県無形民俗文化財に指定された。
53	赤穂八幡宮神幸式の頭人行列 （付）祭礼次第等文書　75点			◎	9　10　33			●	●			赤穂八幡宮の頭人行列の歴史の詳細は定かではないが、寛文元（1648）年にはすでに頭人の記録が残されている。明治34(1901)年の衣装・諸道具の購入記事から、少なくとも近代以降、現在に至るまでほぼ同様の行列が保たれていると推測される。祭礼次第等文書と合わせて、市指定文化財となっている。
54	赤穂浜働き唄			◎	9　30			●				浜働きとは塩田作業のひとつで、海水の上昇を促すため牛犂・鉄万鍬などで固くなった地盤を働き回ることであり、その際に浜男たちによって唄われていた作業唄が「浜働き唄」である。現在は保存会が結成され、採譜された浜働き唄を民謡風にアレンジして新唄とし、尺八や三味線等も加わって当時のものとは異なっているが、元来の浜働き歌もあわせて伝承されている。市指定。
55	尾崎のまちなみ			●	9　10　30	●	●	●				尾崎は東浜塩田従事者のまちであり、千種川の自然堤防にあたる赤穂八幡宮周辺に人々が集住し、周囲は塩田として開発された。自然堤防上のまちは当時の海岸線に沿って道ができていたと思われ、曲線を描く道と細い路地が特徴である。特に幅1mにも満たない路地が多くみられる。
56	三本松			●	9　10		●					地名。赤松氏の末裔である尾崎伊賀守政顕が、この地に居住したため一帯の地名が「尾崎」になったと伝える。政顕の死後、生前の愛木であった松が3本植えられたのでこの地を「三本松」と呼んだ。
57	宮山			●	9　10		●			●		地名。赤穂八幡宮の鎮座地。「みややま」が詰まって「みやま」という。
58	猪壷谷			●	35		●					地名。縄文・弥生時代の石器・土器の出土する地。谷間の平地で塩を作っている人を見た逸話が残る。（赤穂の昔話）
59	向山			●	35		●					地名。集落の向井にある山。大蛇が出てきた昔話が残る。（赤穂の昔話）
60	川馬			●	36	●	●					川端と馬場町の頭文字をとったもの。
61	磯釜			●	36		●	●				磯ノ橋と釜屋本町の頭文字をとったもの。
62	明神木			●	36		●			●		地名。応神天皇が筑紫から帰途、船つなぎしたと伝える。その後に小社をつくる。

尾崎地区　歴史文化の視点１

9. 塩田とともに－浅野家が開いた塩田－

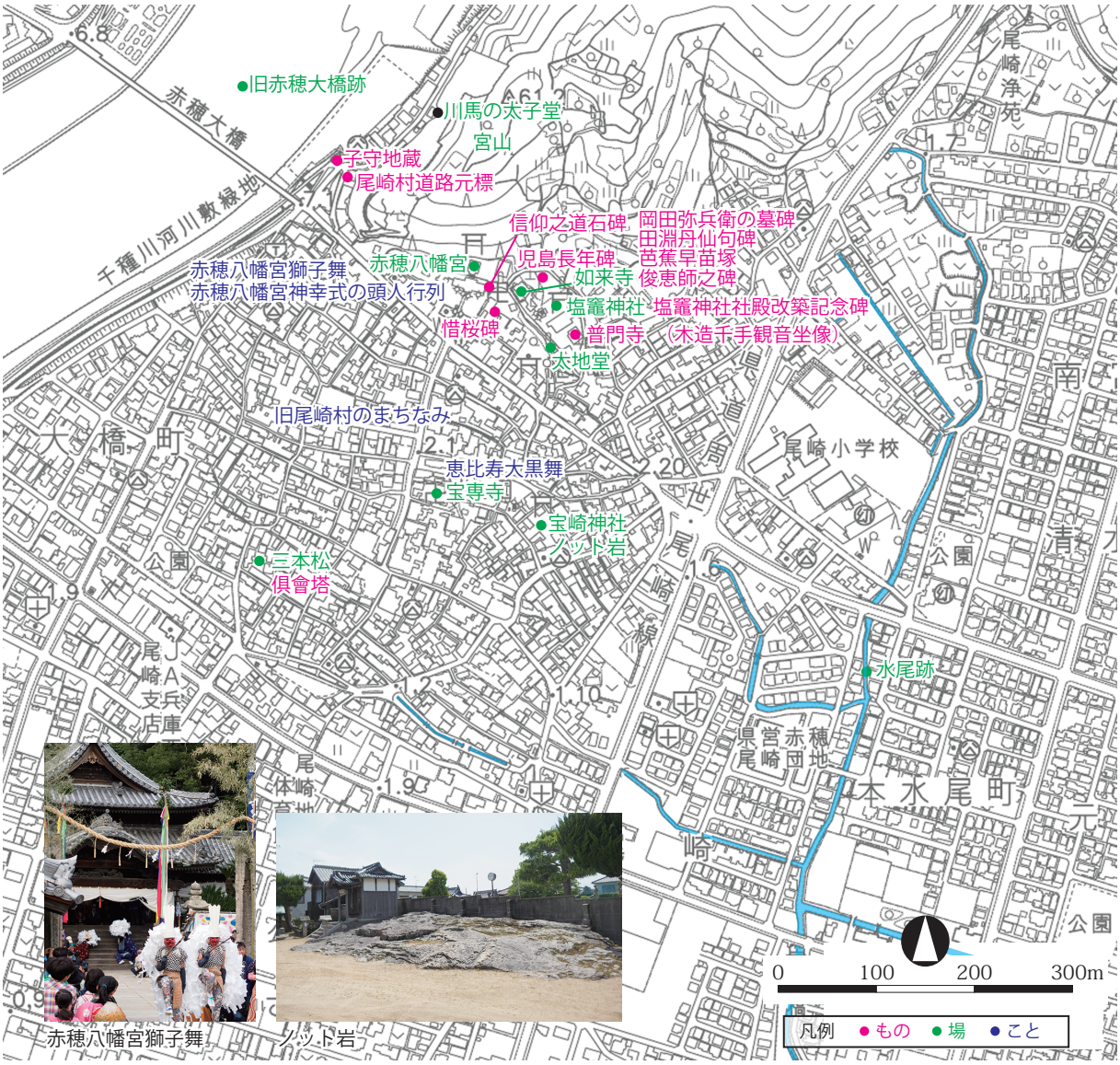
【ストーリー】

尾崎には、寛永 3（1626）年に池田光政の家臣岡田弥兵衛が製塩技術をもたらしたという伝承が残されており、一般的に言われる東浜塩田の干拓開始（1646 年）より古い。

浅野長直の赤穂への入封は正保 2（1645）年であり、技術者を招聘できたのは、池田時代にすでに下地があったためと言われているが、東浜塩田を開発して全国に知らしめたのは、間違いなく浅野家と言える。

尾崎地区には、塩田跡地を示す水尾跡とともに、赤穂八幡宮を中心とする旧市街地のまちなみと、塩田労働者の信仰の対象となった赤穂八幡宮があり、さらにその背後には如来寺、塩竈神社、普門寺などが立ち並ぶ「信仰之道」がある。周辺には忠魂碑、宝崎神社、宝専寺、尾崎という地名の由緒となった三本松といった歴史文化遺産が点在している。

赤穂八幡宮の秋祭りは、「赤穂八幡宮獅子舞」として県指定無形民俗文化財に指定された獅子舞に特徴があるほか、稚児頭人を肩車して練り歩く頭人行列（赤穂市指定無形民俗文化財）も著名である。いずれも塩業で栄えた尾崎地区の風情を色濃く残す。秋祭りの御旅所は宝崎神社にあるノット岩という露頭岩盤であり、塩田開発前の地形を物語っている。



赤穂八幡宮獅子舞

ノット岩

尾崎地区　　歴史文化の視点２

10．赤穂藩と尾崎

【ストーリー】

江戸時代に池田輝政が姫路城に入ると、赤穂はその末弟池田長政の知行地となった。慶長８（1603）年に赤穂代官として赴任した垂水半左衛門勝重は、はじめ尾崎に居を構えたという。

垂水勝重は、慶長 10（1605）年に八幡宮を銭戸から今の地に移したともいい、この頃がおそらく尾崎地区の本格的な開発の開始であり、その目的は製塩であったことだろう。

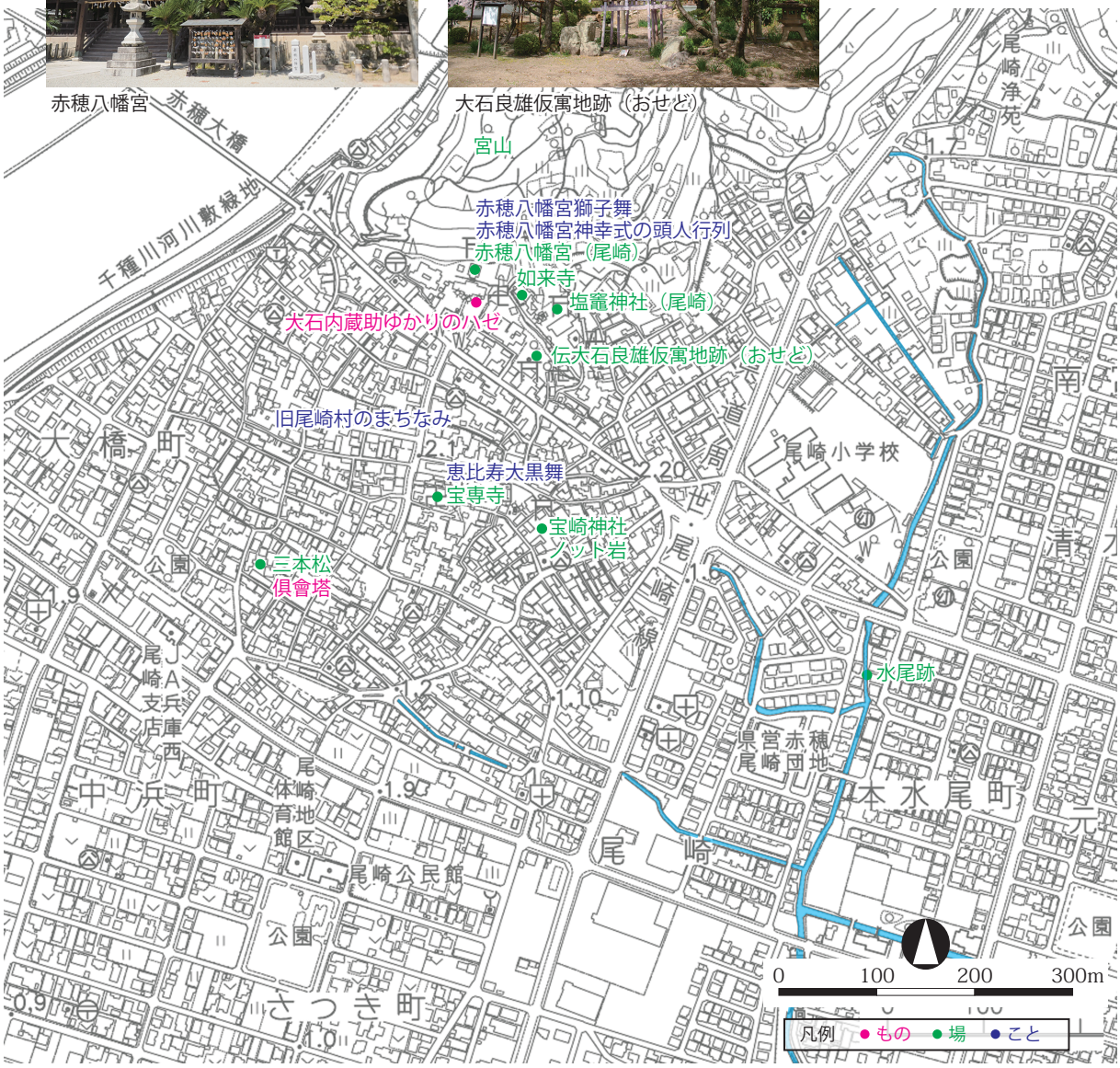
赤穂八幡宮は赤穂藩との関わりが深く、同宮には大石内蔵助ゆかりの布袋額、ハゼの木、石灯籠、屏風をはじめ、赤穂義士関係の書状が多く残されている。また刃傷事件後に赤穂城を開城した後、遠林寺で残務処理を行う際に大石内蔵助良雄が住んでいたのが、伝大石良雄仮寓地跡（通称おせど：市指定史跡）であったという。



赤穂八幡宮



大石良雄仮寓地跡（おせど）



御崎地区

地　勢

もともとは三崎新浜村といい、瀬戸内海に伸びる三つの崎から名付けられた景勝地である。東浜塩田の一角を占めており、現在の埋立地も標高で2.5mと大変低く、また平らである。瀬戸内海沿いには流紋岩の岩礁が見え、潮の干満で姿が変わる畳岩や、県内最低峰の唐船山を擁する。

歴　史

御崎の古代の歴史は明らかでなく、いくつか古墳が散見される程度である。一方、伊和都比売神社は延喜式にも登場する由緒ある神社であるが、現在の姿になったのは、天和２（1682）年に浅野長矩が社殿を遷した後のことであろう。

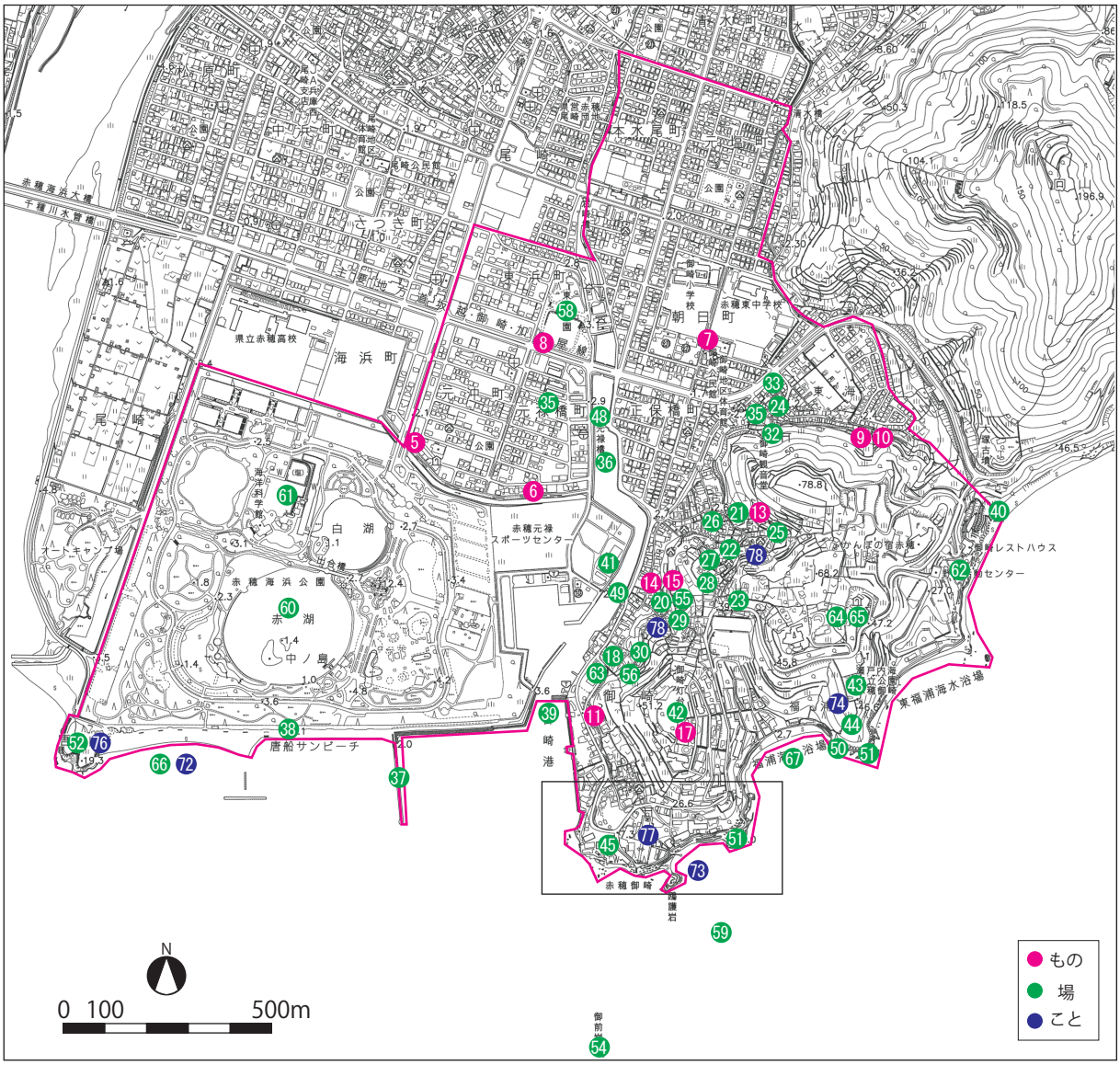
御崎地区における塩田の始まりは、正保３（1646）年にさかのぼり、中・東播磨からの製塩技術者の移住に起因するものであることがわかっている。浅野長直が積極的に干拓を行い、東浜塩田は浅野時代にほぼ整備が完了した。

近代になると、塩田の廃止に伴って広大な遊休地が発生した。御崎地区では尾崎地区と同様、石指（イッサシ）の山を削って大造成を行い、住宅地を中心とする文教地区として生まれ変わった。

表 22　御崎地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
縄文時代後期	約 4,000 年前	海岸沿いで縄文土器出土 (猪壷谷遺跡)
古墳時代後期	6 世紀後半～ 7 世紀	海岸沿いに後期古墳築かれる (尾崎・大塚古墳)
古　代		「延喜式」に小社として伊和都比売神社が記載される
近　世	寛永 3(1626) 年	池田光政の家臣、岡田弥兵衛が赤穂入浜塩田の開拓を開始する
	正保 3(1646) ～寛文 12(1672) 年	的形 (姫路) や荒井 (高砂) などより製塩技術者ら家族 498 名が招聘される
	明暦 3(1657) 年	日想庵（廣度寺）が開基
	寛文 7(1667) 年	唐船大土手の築造、翌年より唐船塚の干拓始まる、光徳寺が開基
	延宝元 (1673) 年	田淵家、尾崎村より御崎新浜村に移る
	天和 2(1682) 年	御前（御崎）大明神建立
	宝永 3(1706) 年	新浜村明細帳
	寛保 2(1742) 年	対馬の塩田開発指導に御崎新浜村弥次兵衛が出向する
	延享 5(1748) 年	田淵氏、赤穂藩の蔵元となる
	天明 8(1788) 年	司馬江漢が御崎を訪れる
	文化 6(1809) 年	大坂送り塩の専売制開始 (1821 年まで)
	文化 9(1812) 年	赤穂塩田、休浜同盟に参加
	文政 6(1823) 年	製塩に石炭焚き開始
	文久 3(1863) 年	御崎・唐船御台場普請につき触書を出す
近　代	明治 20(1887) 年	御崎の早川宗助、児島なかより赤穂緞通の指導を受ける
	明治 22(1889) 年	新浜村となる
	明治 29(1896) 年	対鴎館が茶店から料亭となる（明治末には御崎初の旅館となる）
	明治 31(1898) 年	赤穂緞通業が成長（織り子 176 名）、天皇の御召列車の敷物に採用される
	明治 34(1901) 年	赤穂緞通をニューヨーク・ロンドンへ輸出し始める
	明治 38(1905) 年	塩専売制施行、赤穂に塩務局が設置される
	明治 39(1906) 年	赤穂塩務局新浜出張所が設置される
	大正 3-4(1914-15) 年	専売局の指導により採鹹法導入
	大正 10(1921) 年	採鹹法を鹿忍式採鹹法に変更、鷗護岩の灯台が完成
	大正 13(1924) 年	赤穂東浜信用購買利用組合発足
	大正 14(1925) 年	赤穂土地合資会社による御崎開発開始
	昭和 2(1927) 年	御崎が「日本新百景」に選定される、県道御崎線改修整備
	昭和 3(1928) 年	川口線の拡幅、正保橋新設工事、学校・役場などの移転・新設
	昭和 4(1929) 年	塩田の第二次整備始まる、一部廃田となる
	昭和 6(1931) 年	元禄橋竣工
	昭和 12(1937) 年	赤穂、塩屋、尾崎、新浜が合併して大赤穂町になり、新浜は赤穂町御崎となる
	昭和 13(1938) 年	東浜合同煎熬工場が完成、上荷舟が陸軍への徴用により消滅
現　代	昭和 23(1948) 年	東浜合同煎熬工場が全焼
	昭和 25(1950) 年	御崎から坂越の海岸が瀬戸内海国立公園に指定される
	昭和 29(1954) 年	御崎－坂越間の観光道路が完成
	昭和 31(1956) 年	御崎海岸が瀬戸内海国立公園に追加指定される
	昭和 32(1957) 年	枝条架による流下式製塩への転換工事完了
	昭和 34(1959) 年	御崎観光道路が開通
	昭和 38(1963) 年	赤穂御埼灯台の設置・点灯
	昭和 45(1970) 年	赤穂御崎温泉の泉源開発に成功
	昭和 46(1971) 年	赤穂東浜塩業組合が製塩を中止、赤穂化成 (株) 設立
	昭和 47(1972) 年	赤穂東浜塩業組合解散
	昭和 48(1973) 年	赤穂化成 (株)、特殊用塩の製造販売を開始
	昭和 56(1981) 年	県立赤穂高等学校が城内から御崎に移転
	昭和 58(1983) 年	御崎土地区画整理事業開始
	昭和 62(1987) 年	塩田跡地に兵庫県立赤穂海浜公園開園、市立海洋科学館が開館
		田淵氏庭園が国名勝に指定
	平成 3(1991) 年	教育委員会が赤穂緞通織方技法講習会を開催
	平成 5(1993) 年	赤穂海浜大橋が完成
	平成 8(1996) 年	御崎土地区画整理事業完了
	平成 12(2000) 年	温泉を再掘削し、「赤穂温泉」に改称（名湯 100 選）
	平成 25(2013) 年	赤穂元禄スポーツセンター開園
	平成 27(2015) 年	赤穂海浜スポーツセンター開園
	平成 28(2016) 年	みなとひろば開園

御崎地区全図


N
0 100 500m
もの
場
こと
御崎山集会所
御崎公園管理事務所
伊和都比売神社
御崎
大石名残の松
赤穂御崎
唐船サンビーチ
赤穂海浜公園
赤湖
中ノ島
白湖
海浜町
尾崎
東福浦海水浴場

御崎地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	女房三十六歌仙画帖	◎										代表的な女性歌人36人の絵姿と、その和歌を描いた一帖の画冊。見開きの右に和歌を、左にそれぞれの女房の絵姿を書いている。女房の各図は、浜町狩野家初代狩野岑信(寛文2年～宝永5年・1662~1708)の作と知られる。和歌の筆者は「女房歌仙御筆者目録」が付属しており、外題近衛基熙を含め、36人の公卿が1人1首づつ書いている。市指定文化財。
2	田淵家文書	◎			11 30			●				赤穂塩田最大の塩業者・田淵家所蔵の文書類。田淵家は尾崎村から新浜村に移住し、延宝5(1677)年から塩問屋を経営した。延享5(1748)年には蔵元役に就任し、江戸後期には東西の塩田あわせて106町歩を有する日本最大の塩田地主に成長した。文書類は総数で1,137件、代々当主の造詣が深かった茶道等の諸冊子や藩主御成りに関する記録などが残されており、新浜村の発展、塩田地主の多角経営の実態、豪商の生活ぶりが窺える資料である。市指定文化財。
3	赤穂東浜信用購買利用組合文書	◎			11 30			●				東浜塩田は、明治38(1905)年の専売公社発足時には152町4反2畝21歩を誇り、生産高は133,000石(明治43(1910)年)に達していた。専売制度下で大正13(1924)年に赤穂東浜信用購買利用組合が成立したが、この組合が昭和47(1972)年に解散するまでの約半世紀の記録がこの文書であり、日本製塩業における激動を物語る貴重資料である。市指定文化財。
5	東浜塩田元沖郭跡石碑	●			11 30		●	●				兵庫県立赤穂海浜公園東駐車場入口近くの小公園内にある、高さ70㎝、幅2mの石碑。正面に「東浜塩田元沖郭七番跡」、裏には「平成七(1995)年三月建之」と刻まれている。
6	東浜塩田元沖郭一番跡石碑	●			11 30		●	●				赤穂元禄スポーツセンター近くの小公園内にある、高さ95㎝、幅2mの石碑。正面に「東浜塩田元沖郭一番跡」、裏には「平成七(1995)年三月建之」と刻まれている。
7	東浜塩田東海水尾七番跡石碑	●			11 30		●	●				かつての東海水尾七番跡であった御崎公民館前に建てられた石碑で、高さ153㎝、幅30㎝の石碑。正面に「東浜塩田東海水尾七番跡石碑」「昭和四(1929)年廃田」とあり、裏面には「昭和六十一(1986)年三月　赤穂市教育委員会建之」とある。
8	塩田風景磁石陶板	●			11 30			●				東浜公園の西南部、中広御崎線の横断地下道出入口の壁面に、入浜塩田の作業風景や枝条架の風景画が48枚の磁石陶板を用いて飾られている。高さ1.2m、幅2mの大きさで、平成6(1994)年に設置された。
9	東海北向地蔵	●			12		●			●		元禄16(1703)年に造立された丸彫り坐像。像高80㎝を測る。
10	六地蔵(東海)	●			12		●			●		昔の三昧跡に残された六地蔵で、像高85㎝を測る。
11	地蔵(三崎)	●			12		●			●		三崎の堂内にある、像高50㎝の丸彫り坐像。海から拾い上げた地蔵を祀っているという。
12	伊和都比売神社の手水鉢	●			12		●		●			刃傷事件の後、赤穂浅野家が断絶となり、大石内蔵助良雄が御崎から船によって京都へ向かった後、元禄14(1701)年に地域住民らがその記念に寄進したものと伝わる。
13	六十六部中供養塔	●			12					●		仏道を極めた人の供養塔であり、廣度寺は納経塔としている。文政8(1825)年建立。
14	其日庵句碑	●			12					●		天明(1781～1788)の頃から其日庵率いる川東社という俳諧グループがあり、文化・文政(1804～1892)にかけて活発に活動していた。其日庵宗匠については詳しく判っていないが、蕉村や一茶とおおむね同時代の人とみてよい。この句碑は現存する唯一のものである。念仏宗の信仰生活を後半生に送った人のようである。芭門の流れを汲む設立者柳田寒桃が正福寺境内に句碑を残した。文政8(1825)年建立。
15	禁葷酒碑	●			12					●		臭いのきつい野菜(ネギ・ニラ・ニンニク類)は不浄であり酒は浄念を乱すので、共に清浄な正福寺の門内には、入ることを禁ずるということ。文政4(1821)年建立。
16	御崎開発記念碑	●			13		●					大正14(1925)年に西本茂吉らによって赤穂土地合資会社が設立されて、道路敷設や宅地造成などの開発が行われたことを顕彰するために昭和22(1947)年に建立された。
17	忠魂碑	●			12		●			●		御埼灯台そばに建てられた忠魂碑。
18	田淵氏庭園		◎		11 13 30		●	●				田淵氏庭園は、茶亭露地と書院庭園から成り、三崎山の傾斜を利用して山際に茶亭を、平地に書院を配して構成されている。上部に明遠楼、中腹に春陰斎、下部に書院と池庭が配置され、春陰斎を中心とする露地から下部の書院庭園までは久田宗参の作庭とされている。建築、庭園ともに当代一流の造営がなされ、今日まで当時の姿をよくとどめた名庭として昭和62(1987)年5月、国名勝に指定された。平成18(2006)年5月19日、敷地すべてが名勝範囲に追加指定された。
19	伊和都比売神社		●		11 12 13 30 32 33	●	●	●		●		市内唯一の式内社で、祭神は伊和都比売大神。『播州赤穂郡志』によると、かつて畳岩(大園)にあった社が後に移されたという。境内には恵比寿神社・金比羅神社が合祀。本殿前の文化13(1816)年銘の狛犬は銘文のあるものでは市内最古。また元禄14(1701)年の手水鉢も残る。
20	正福寺		●		12			●		●	●	正保3(1646)年、浅野長直が城下に建立した後、寛文12(1672)年には花岳寺内に移設。元禄14(1701)年、良雪和尚が現在地に良雪庵を建て、永保3(1706)年に補陀山正福寺とした。良雪と大石良雄の囲碁「二良の対局」の寺として有名。明治6(1873)年、思誠小学校が当寺を仮校舎として開校。刃傷事件後の大石らの暇乞い状が残る。境内には天保10(1839)年造立の子安地蔵がある。
21	廣度寺		●		12 30 35			●			●	新浜村の開拓に伴い明暦3(1657)年に日想庵が開創、延宝2(1674)年に常光山廣度寺となる。開山は祈祷により干ばつを救った順誉孤念。元治元(1864)～明治4(1871)年に、僧成元によって読書を中心とした寺子屋が開かれ、本堂はかつて赤穂城下町に所在した遠林寺にあった本堂を移築したものと伝える。境内には明治40(1907)年造立の「馬頭観世音菩薩」と刻字された板碑石仏がある。赤穂の昔話には、塩田干拓等村の開発に大きく貢献した孤念の寺、海印寺(後の廣度寺)の言われが残されている。(赤穂の昔話)
22	光徳寺		●		12			●			●	浄土真宗大谷派の寺院で、本尊は阿弥陀如来。寛文7(1667)年に仰西寺として創建、延宝2(1674)年に東有年の黒沢山光明寺中の光徳院を移転し、寺号を光徳寺と改めた。開山は玄智で山号は白雲山。寝殿造の本堂は、享保7(1722)年に東有年の黒沢山光明寺中の光徳寺にあった堂を移築、二階建の楼門・隅楼は寛保2(1742)年に建立されたという。
23	法雲寺		●		12			●			●	昭和30(1955)年に建立された日蓮宗の寺院で、開山は牛尾文啓。山号は啓昌山。寺と御崎展望台広場との間に建てられた「南無妙法蓮華経」と刻まれた宝塔は昭和27(1952)年の建立である。
24	大師堂1（東海）		●		12			●			●	「十一面観音菩薩」と呼ばれる像高67㎝の弘法大師像。「本尊十一面観世音」「七十九ばん」の記載。
25	大師堂2（東寺）		●		12			●			●	大師堂内にある半肉彫りの弘法大師像が2体安置されている。「本尊薬師如来」「七十七ばん」の石仏と「本尊阿弥陀如来」「七十八ばん」の石仏が並んで安置されている。
26	大師堂3（東寺）		●		12			●			●	板碑形光背をもつ、半肉彫りの弘法大師像。本来は像高80㎝のものが切断されて地蔵部分のみ分離されている。「小豆島第十四番」の記載。
27	大師堂4（西寺）		●		12			●			●	像高67㎝を測る、半肉彫りの弘法大師像。「十一ばん」の記載。
28	大師堂5（西寺）		●		12			●			●	像高41㎝を測る、半肉彫りの弘法大師像。
29	大師堂6（西山）		●		12			●			●	「十一面観音菩薩」と呼ばれる像高60㎝の弘法大師像。「本尊十一面観世音」「八十六ばん」の記載。像と台石の石材が異なる。
30	大師堂7（山手）		●		12			●			●	大師堂内に安置されている像高32㎝の丸彫りの弘法大師像。像と台石の石材が異なる。
31	大師堂8（三崎山）		●		12			●			●	三崎山の大師堂内にある像高45㎝の弘法大師像。「十六ばん」の記載。
32	御崎観音堂		●		12 35			●			●	東海に7つの木製の観音像が流れ着き、それを拾って大塚屋が祀ったのが始まりと伝える。その後は岡本家が管理していたが、窮乏して木像は売却されたという。赤穂の昔話では、備前国の西大寺から流れ着いた観音様の話が残されている。(赤穂の昔話)
33	天理教赤穂分教会		●		12			●			●	東海にある赤穂市で最古の教会。早川宗助氏の子供の身上を守護いただいていたという。
34	旧岡本家屋敷跡		●		11 30			●				岡本善兵衛はもと荒井(高砂市)で塩業を営んでいたが、東浜塩田開拓に伴って正保3(1646)年、新浜村に移り住んだ。以降、姫路藩領内から入浜塩田の新技術を身に着けた塩民たちが移住し、新塩田の開拓によって新浜村は大きく発展していった。新浜村で財をなした岡本家も、現在ではその跡地が残されるのみとなっている。この屋敷跡は、赤穂森藩時代に津山から移住した岡本家のものという説もある。
35	東浜塩田跡		●		11 30			●	●			かつては水尾の張り巡らされた塩田であったが、現在は県立赤穂海浜公園や県立赤穂高等学校、住宅地となっている。
36	水尾跡		●		11 27 30			●	●			塩田に海水を入れる水路として、また上荷舟が用いる運河として築かれた溝を「水尾」と呼び、現在でもその名残をまちなみや風景の中に見ることができる。なお上荷舟は昭和13(1938)年、陸軍への上荷舟徴用により消滅した。
37	百間波止		●		11 30			●	●			水尾に千種川の運ぶ土砂が流れ込み、埋積しないように築かれた波止。
38	唐船土手		●		11 30			●	●			寛文7(1667)年、唐船山を起点として築造された東浜塩田の最も外側の防潮堤で、大土手と呼ばれた。現在は道になっている。
39	塩田水尾入口跡		●		11 30			●	●			かつての東浜塩田における水尾の入口で、ここから荷揚舟が出入りした。
40	塩田給水ポンプ跡		●		11 30			●	●			近代の東浜塩田において、濃度の高い海水を取り入れるために、山を越えて河口から遠い海岸から取水を行った施設。
41	みなとひろば(塩倉庫・製塩工場跡)		●		11 30			●	●			かつての東浜の製塩工場跡。現在では赤穂元禄スポーツセンターに隣接する県有地に、スポーツ施設、イベント広場として整備されている。

御崎地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
42	御埼灯台		●		13 27	●	●					播磨灘を航行する船舶の道しるべとして昭和38(1963)年に設置された。南は播磨灘に面し四国や島々を見ることができ、北に赤穂の市街地を一望できるスポット。
43	東御崎展望台		●		13	●	●					瀬戸内海の島嶼景観を望むことができる。大石内蔵助像あり。
44	桜・梅林		●		13	●	●					桜は三崎山一帯に、梅は御崎展望台広場(赤穂東御崎公園)の斜面に整備されており、観光スポットとなっている。
45	赤穂温泉街		●		13	●	●					昭和44(1969)年に開湯した赤穂御崎温泉は、平成12(2000)年に新しい泉源を開発し、「赤穂温泉」に改名。瀬戸内海に浮かぶ島々や四国を見渡せるロケーションで、宿の部屋や露天風呂から美しい夕日や風景が眺められる。瀬戸内海の美しさ、目の前の海から獲れる幸が堪能できる。
46	観光道路		●		13 27	●	●					昭和34(1959)年に開通。
47	海岸沿いの遊歩道		●		13 27	●	●					大正14(1925)年、赤穂土地合資会社(西本茂吉ら)による開発が開始されて以降につくられたと思われる。
48	元禄橋		●		11 27	●	●					赤穂市内において現存する唯一の鉄製トラス橋。昭和6(1931)年竣工、橋長24.9m、幅員5m。親柱は花崗岩製四角柱。橋の名前は元禄時代から採った。
49	大橋跡		●		11 27	●	●	●				御崎の旧市街地から、製塩工場へ行く際、水尾を渡るために設置された橋。船の通行のため、跳ね橋になっていた。昭和30年代に廃止されたが、現在も橋台が残っている。
50	赤穂コールドロン痕跡		●		13	●	●					「赤穂コールドロン」と名付けられた巨大なカルデラ跡の、陥入したマグマの痕跡が見られる。
51	沈降海岸		●		13	●	●					沈降海岸とは陸地の沈降によって生じた海岸のことで、尾根は岬に、谷は入江となり、複雑な海岸線をつくっている。赤穂の海岸線は埋め立ててできた場所を除き、ほぼこの海岸が見られる。
52	唐船山		●		11 13 35	●	●	●		●		兵庫県内で標高の一番低い山で、かつて社があった。昔話には、山の上で足踏みするとよく響き、昔の唐の船が埋まっている、または海賊の財宝が埋まっているなど、数々の言い伝えがある。(赤穂の昔話)
53	畳岩(大園)		●		12 13 32	●	●			●		『播州赤穂郡志』には「昔の社は大園にあり、僅の祠なり、天和(1681～1684)の此今の地に移す。大園は今の鳥井(鳥居)の東の大岩を云う」とある。現在は通称「畳岩」と呼ばれ、潮の引いた時には陸続きとなる。
54	鷁護岩(御前岩)		●		12 13 32	●	●			●		『播州赤穂郡志』には「神前の海中に大岩あり、潮乾く時は現われ、満るときは没す。回船これがために破損す。此海を過るもの懼れずと云うことなし。今そのために標木を建つ」とある。
55	思誠小学校発祥の地		●				●					明治5(1872)年の学制公布をうけて、明治6(1873)年3月20日に正福寺を仮校舎として新浜村(現在の御崎)に初めての小学校となる思誠小学校が発足した。
56	大師さんの井戸 腰掛け岩		●		12		●			●		御崎の山手地区に「大師さんの井戸」と呼ばれる共同井戸があり、この井戸の脇にある扁平な石を「大師さんの腰掛け岩」と呼ぶ。弘法大師が全国行脚の途中に御崎の地を訪れ、この井戸の傍らの岩に腰掛けたという。以来、この井戸があるところを「腰掛山」と呼ぶようになった。
57	大石名残の松		●		13	●	●		●			大石内蔵助は城を明け渡し、元禄14(1701)年6月半ばに妻子を新浜港より大坂に送った。自らも同年6月25日に京都山科に向けて同港から出立した際、何度も松を見返したことから、名残の松の伝承ができたという。
58	東浜塩田モザイクタイル絵図		●		11 30			●				東浜公園の中央にある、縦4.5m、横3mのカラータイルモザイクの東浜塩田絵図。東浜の各塩田がカラフルに色分けされ、名称が記されている。
59	瀬戸内海国立公園		●		13	●	●					昭和9(1934)年に雲仙、霧島とともに日本初の国立公園に指定された。備讃瀬戸を中心に紀淡・鳴門・関門・豊予の4つの海峡に囲まれ、広い海域と点在する島々、それらを望む陸地の展望地が公園区域として指定されている。範囲は1府10県、海域を含めると90万haを超え、国内最大の国立公園。大小数々の島で構成された内海の多島海景観が特徴で、沿岸の陸域に展望地が多数存在する。
60	兵庫県立赤穂海浜公園 (赤湖・白湖)		●		11 13 30	●	●	●				地域の自然環境や赤穂の歴史的背景を生かし、昭和62(1987)年、広大な塩田跡地につくられた公園。園内には、テニスコート、遊園地(わくわくランド)、塩の国(塩田を復元)などが整備され、西播磨地域の多様なスポーツ、レクリエーション需要を担う。
61	赤穂市立海洋科学館・塩の国		●		11 30		●	●				兵庫県立赤穂海浜公園内にあり、瀬戸内海と塩・海洋科学・赤穂の自然科学に関する資料が展示されている。隣接する塩の国では、揚浜式・入浜式・流下式塩田などの製塩施設が復元されており、釜屋での製塩作業の実演や、入浜式塩田での浜引き・集砂・潮かけなどの浜作業の体験、塩づくり体験が楽しめる。
62	赤穂市立野外活動 センター		●		13	●	●					キャンプ、野外炊飯、ハイキングなどの野外活動が楽しめる施設。瀬戸内海と桜を楽しめる。
63	赤穂市立美術工芸館・田淵記念館		●		11 13 30			●				江戸時代前期より塩田、塩問屋などを営んできた「田淵家」より平成6(1994)年10月に美術品、古文書類が赤穂市に寄贈され、それを展示保存する施設として平成9(1997)年に開館。寄贈された美術品は、日本画、書、茶道具、婚礼道具など多岐にわたる。中でも茶道具が多く、季節感を大切にした展示が行われている。
64	桃井ミュージアム		●		13		●					幕末から明治にかけて焼かれていた「幻の雲火焼」を復活させた桃井氏が、平成23(2011)年に開館した美術館。雲火焼のほか様々な美術品や、数多くの水琴窟が展示されている。
65	赤穂瀬戸内窯(雲火焼)		●		13		●					雲火焼は、嘉永5(1852)年に大嶋黄谷(九郎次)によって考案されたもので、「新土手焼」とも呼ばれた。独特の光沢のある肌色の焼き物で釉薬を施さず、夕日に映える雲の景色のような赤と黒の窯変が特徴的である。残された作品には茶入・水指・香合・手焙・火入・灰器などの茶器が多い。雲火焼は黄谷以降後継者がいなく断絶していたが、近年、この窯で技法が再現された。
66	唐船サンビーチ		●		13	●	●					瀬戸内海国立公園内にあり兵庫県立赤穂海浜公園に隣接している。瀬戸内海の景色と、潮干狩り、海水浴を楽しめる。
67	福浦海水浴場		●		13	●	●					瀬戸内海国立公園内にあり、赤穂温泉まで徒歩すぐという好ロケーションに位置する。全長150mの浜には海の家があり、シーズンには家族連れで賑わう。
68	恋人の聖地		●		13	●	●			●		瀬戸内海が一望できる赤穂御崎にある伊和都比売神社は、古くから縁結びの神様として知られており、平成25(2013)年にはその周辺がNPO法人地域活性化支援センターから「恋人の聖地」の認定を受けた。神社では「恋みくじ」もひける。
69	きらきら坂		●		13		●					伊和都比売神社一帯は前面に播磨灘が開け、磯伝いに遊歩道なども整備されている。神社から海へ向かう坂道が近年「きらきら坂」と呼ばれ、工芸関係のアトリエや人気の飲食店などが並ぶエリアとなっている。
70	赤穂緞通技法			◎				●				嘉永年間(1848～1854)、中広の児島なかは佐賀と堺の緞通を観察してその原料や織方を研究し、織機を製作。慶応年間(1865～1868)に現在の原型を考案。緞通生産を開始した。新浜村の子女を労働者として御崎に緞通場に開かれ、明治・大正時代に隆盛したが戦時中の綿花輸入制限によって衰退。赤穂市は残されていた技法を赤穂緞通技法として無形文化財(工芸技術)に指定した。平成3(1991)年からは赤穂緞通織方技法講習会を開催、後継者育成に努め、現在は復活している。
71	御大師講			●	12					●		新浜村の大師信仰はほとんど大正期以降に祀られたという記録と伝承を持ち、井戸などかつての水利共同体と深い繋がりがある。各地区の大井戸は個人ではなく共同井戸であり、村内合力のみでなく隣村や旅船からの援助によって掘られた。現在も4月にはお大師祭りが開催されている。
72	潮干狩り			●	13	●	●					唐船サンビーチで行われる赤穂の季節の風物詩。
73	日本の夕陽百選			●	13	●	●					御崎は景観に恵まれた土地で、御崎から望む夕日は、NPO「日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会」によって「日本の夕陽百選」に選定されている。
74	一目五千本の桜			●	13	●	●					赤穂御崎では、海岸の斜面約3kmにわたってソメイヨシノが植えられており、「一目五千本」のキャッチフレーズで桜の名所となっている。
75	鳥居からの眺め			●	13	●	●					伊和都比売神社の鳥居からの眺めは、御崎を代表する景観である。
76	唐船山からの眺め			●	13	●	●					瀬戸内海の島嶼景観が広がる。
77	赤穂御崎からの眺め			●	13	●	●					瀬戸内海の島嶼景観が広がる。
78	坂のまちと路地景観			●	11 13	●	●					御崎は平地を塩田とするため、江戸時代には丘陵地にまちを築いた。斜面を登る主要道と、そこから派生する路地道が特徴。
79	御崎			●	36	●	●					地名。市域の南端で播磨灘に突き出た三つの崎、つまり畳岩のある岬と、福浦と万五郎谷の間の岬と、鳥石(通称:ライオン岩)のある岬に由来する。
80	東海			●	36		●					地名。江戸中期は小舟も出入りしていた。渡海。
81	大塚			●	36		●					地名。東隣の尾崎大塚古墳による。
82	元塩町			●	36		●					地名。東浜土地区画整理事業によって昭和46(1971)年5月に新しくできた町名。塩田跡なので「塩」の字を残すために元塩町という町名を作った。
83	本水尾町			●	11 30 36		●	●				地名。東浜土地区画整理事業によって昭和46(1971)年5月に新しくできた町名。塩田地の字本水尾をとって町名とした。
84	元沖町			●	11 30 36		●	●				地名。塩田地の「元沖うつろ(土偏に郭)」から。
85	御崎マルシェ			●	13		●					赤穂温泉街の一角で、毎月第三日曜日に地元店舗の他、個人や作家など有志による市を開催。通称「きらきら坂」をメイン通りとして、伊和都比売神社の境内から東の海側へと店舗が並ぶ。

御崎地区　歴史文化の視点１

11．塩業の歴史を今に伝える－東浜塩田－

【ストーリー】

全国に名をはせた赤穂の塩。赤穂城の東西に整備された東浜・西浜塩田の面積は、最終的に約420ha を誇った。御崎は江戸時代前期に新浜村として開発され、東浜塩田の一大生産地となった。

塩田の廃止後は住宅地や県立公園になったが、製塩資材の運搬に利用された水路「水尾（みお）」や取水口周辺の堤防、そして平地を塩田とするため山の斜面に築かれたまちなみや、細い路地が当時の面影を残している。

また江戸時代後期、日本最大の塩田地主であった田淵邸の書院と庭園は国指定の名勝「田淵氏庭園」となり、隣接して赤穂市立美術工芸館田淵記念館が整備されている。さらに兵庫県立赤穂海浜公園内には赤穂市立海洋科学館および「塩の国」が整備され、復元された製塩施設において現在も塩の生産が行われており、体験学習などに広く利用されている。



塩の国の復元塩田（撮影：出水伯明）



水尾跡

赤穂市立美術工芸館田淵記念館

御崎地区　　歴史文化の視点２

12．御崎の信仰

【ストーリー】

伊和都比売神社は浅野長矩が岩礁「大園（現在の畳岩）」にあった祠を遷して建立したものである。比売神（姫神）はいつしか縁結びの神となり、現在は近隣のスポットが「恋人の聖地」の認定を受けて人気を集めている。

御崎地区には、伝統的な大師信仰が残されており、斜面地に広がる住宅地を中心に、８か所の大師堂がつくられている。このほかに民家それぞれでも崇拝されており、毎年４月21日には「お大師まいり」が開催されている。

このほか、江戸時代の絵図にも描かれた兵庫県内一低い山「唐船山」は、文字通り中国の「唐」からやってきた船がここで難破し、その後、島になったという伝説があり、足踏みすると内部が空洞のような音が聞こえることから、現在も船に積まれていた財宝が埋まっているとの伝説が残されている。このような景観は、人々の信仰とその歴史の蓄積を感じさせる。


廣度寺


光徳寺


正福寺


法雲寺


弘法大師像


唐船山


畳岩（大園）



伊和都比売神社

御崎地区　歴史文化の視点３

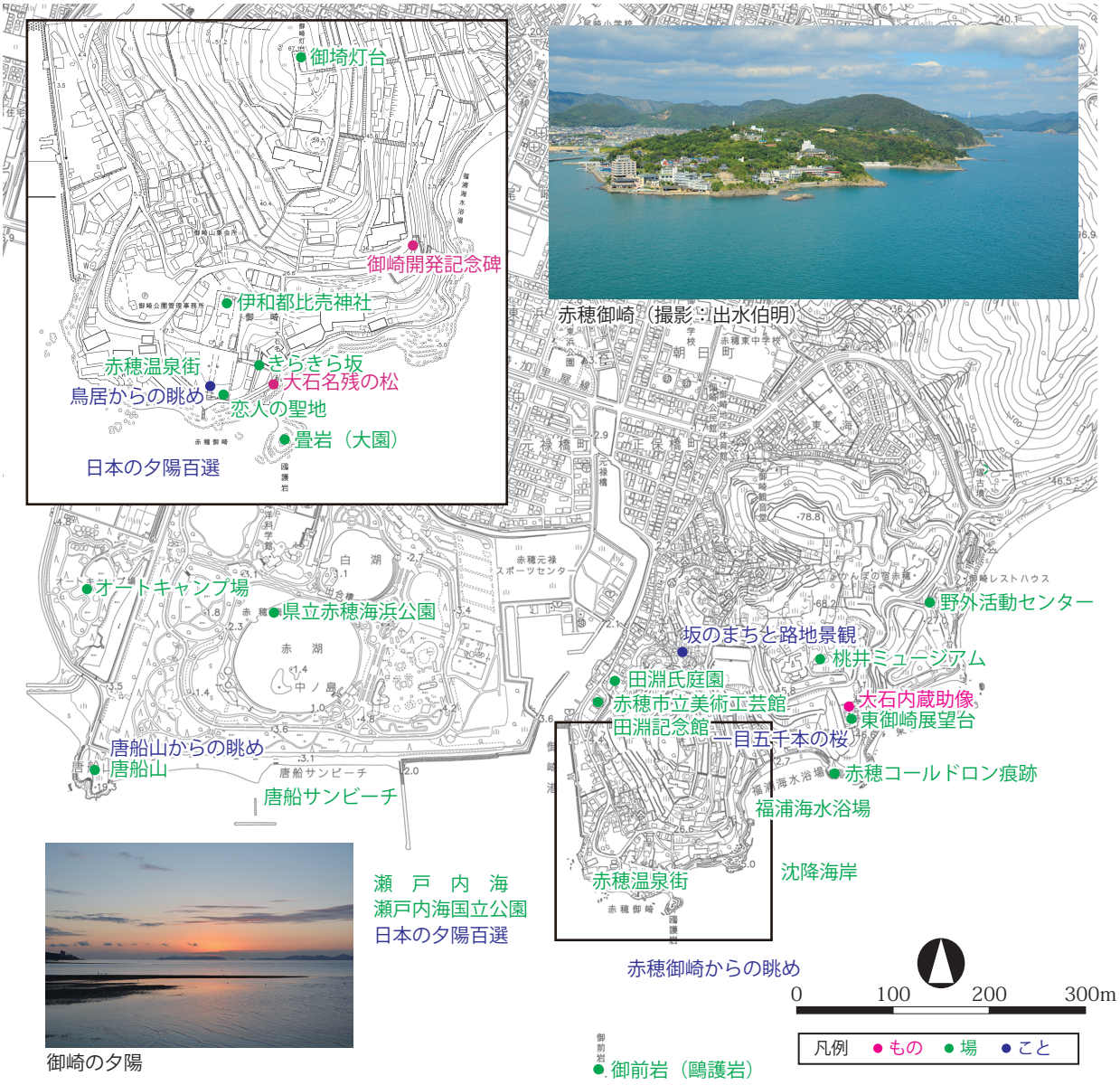
13. 景勝・赤穂御崎

【ストーリー】

赤穂御崎は、江戸時代に司馬江漢が訪れ、『播州名所巡覧図絵』にも描かれるなど、「風景奇絶」と評された景勝地である。しかし瀬戸内海を活かした景勝・観光地としての開発は、実はすべてが順調ではなく、先人の労苦の賜物であったことが、「御崎開発記念碑」に刻まれており、その発展には、江戸時代からの長い歴史がある。

明治時代には、海水浴場として知られていたほか、旅館が開業。日本新百景、瀬戸内海国立公園などに選定・指定された。昭和 45（1970）年、塩田跡地の開発と共に「赤穂御崎温泉」が開湯、後に再掘削を経て、現在では「よみがえりの湯」として名湯百選に選定されている。

近年、風光明媚な景観が「日本のナポリ」と評されて注目を集めており、「きらきら坂」を中心とした古民家再生による店舗も増えている。さらに、江戸時代に浅野長矩によって現在地に移された伊和都比売神社周辺が「姫神」つまり縁結びの神として「恋人の聖地」に選定されるなど、新しいまちの魅力となっている。



坂越（坂越湾周辺）地区

地　勢

坂越を天然の良港、船の風待ち港として発展させたのは、全長約 2km の円弧を描く坂越湾と、その湾内に浮かぶ生島の存在である。また、千種川東岸から鳥井坂を越えて坂越湾へとつながる大道の存在は、高瀬舟による物資流通の拠点としての役割を与えた。

さらに、坂越湾を見下ろす宝珠山には大避神社をはじめとした神社仏閣が集中しており、江戸時代の港町としての景観が、現在も凝縮してあらわれている。

歴　史

古くは 5 世紀の古墳が点在し、漁業を生業とした集団の存在が推定されているほか、聖徳太子の重臣、秦河勝の生島漂着伝説が残る。

坂越湾周辺を記した古文書としては、「坂越庄」として久寿元（1154）年の記事が見られ、このころには船や航海技術をもった集団の存在が推定されている。また、文安 2（1445）年には坂越の船が兵庫北関へ入船した記録があり、中世から港町として栄えていた。

江戸時代には「坂越浦」、「浦方」と呼ばれ、西廻り航路の寄港地として栄えたが、北前船にその主導権を握られた後は、赤穂の塩を江戸や上方へ運ぶ塩廻船として生き残った。近代には製塩の副産物を活かした化学工場の進出に伴い、その輸送手段としても活躍した。近年は、歴史的景観や牡蠣の養殖で知名度を上げている。

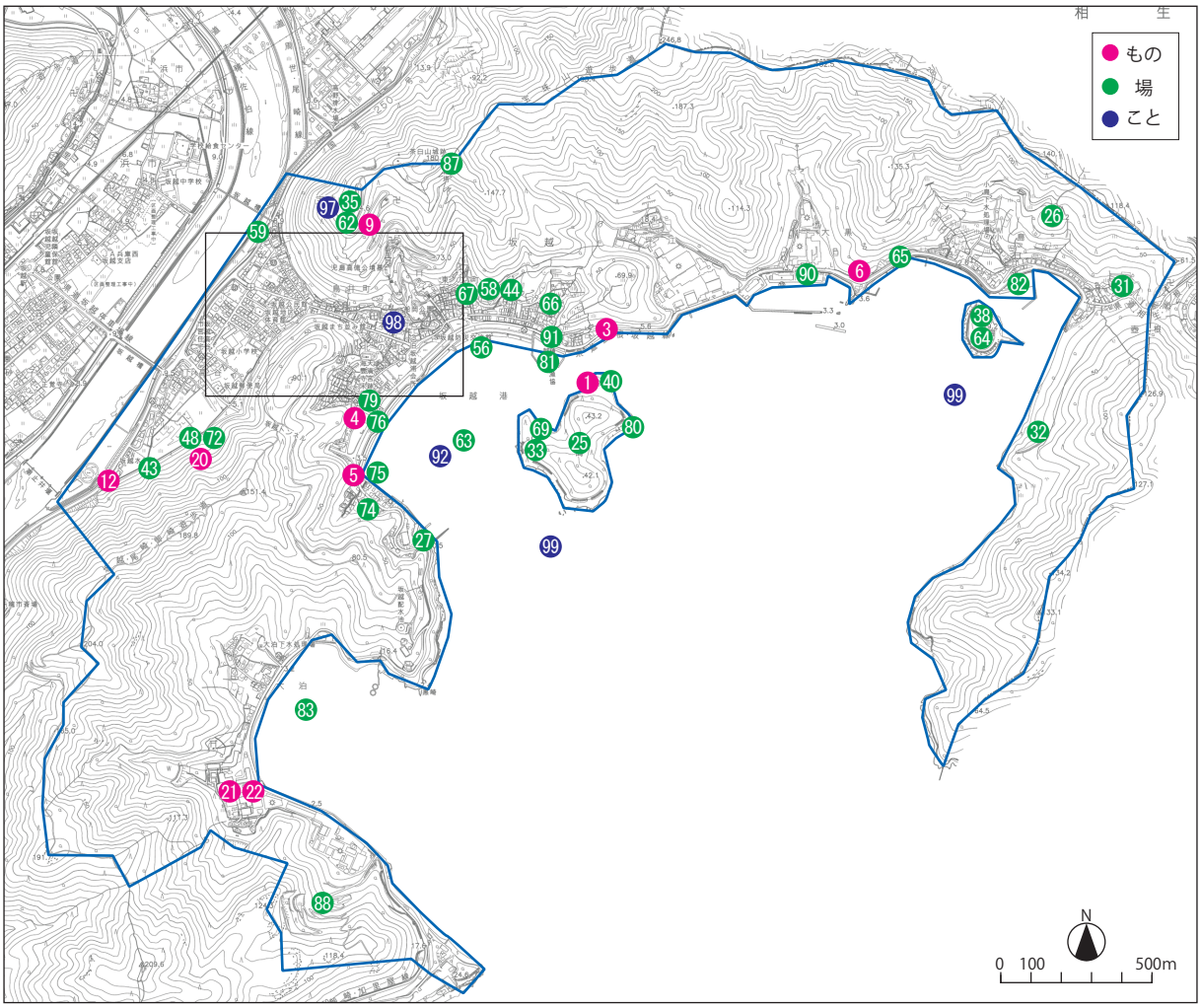


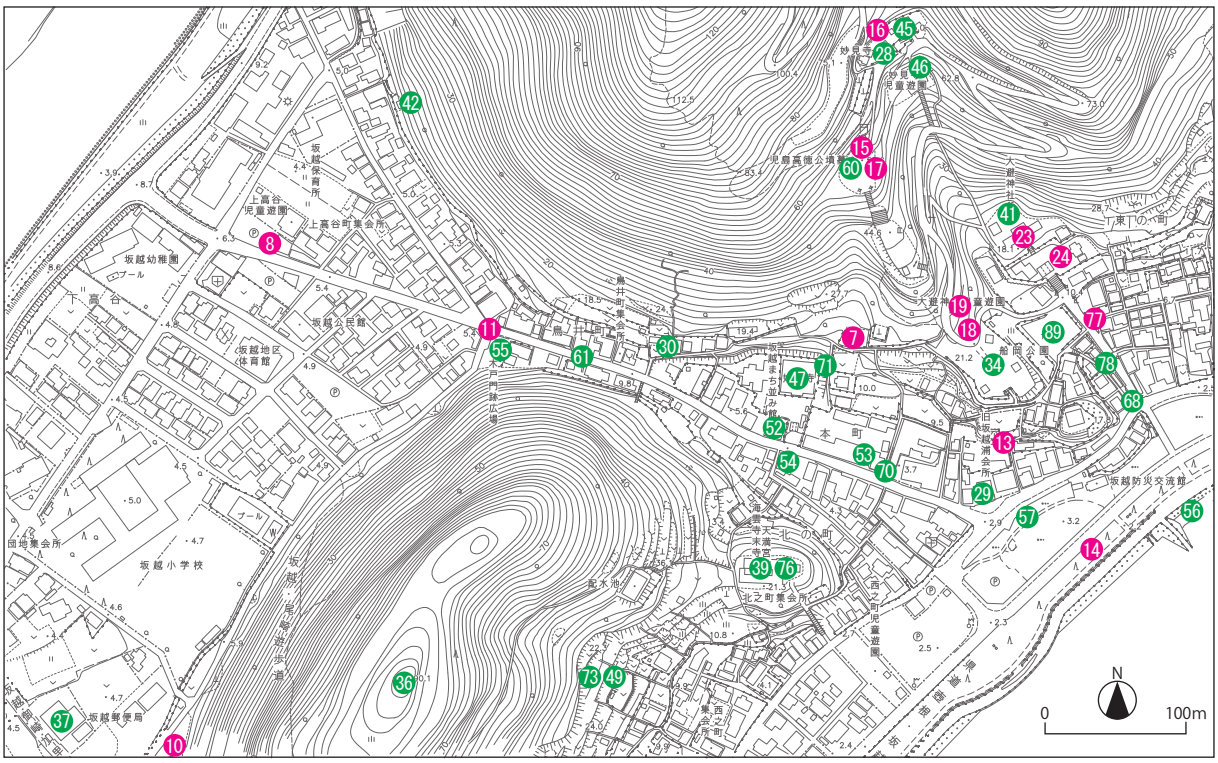
坂越浦絵図　文化２（1805）年（佐方直陽氏蔵）

表 23　坂越（坂越湾周辺）地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
古墳時代中後期	5 ～ 7 世紀	みかんのへた山古墳群、鍋島古墳、生島古墳、小島古墳群が築かれる
古　代		秦河勝、坂越の生島への漂着伝承
	延暦 12(793) 年	赤穂郡坂越郷と呼ばれていた（「播磨国赤穂郡坂越神戸両郷解」）
	長暦元 (1037) 年	古文献に「坂越庄」がはじめて登場する（「平安遺文」）
	11 世紀ころ	赤穂大領高屋越前前二郎為常（1107 年没）が常楽院を建立（「妙見寺沙門隆快記録」）
		下高谷遺跡で 11 ～ 12 世紀の建物跡
	久寿元 (1154) 年	坂越庄が藤原教長に預けられる
	仁安 3(1168) 年	坂越庄の問男が淀（大坂）の渡舟を設営する
		以後、1484 年までは摂関領であった記録がのこる（「御法興院雑事要録」）
	養和元 (1181) 年	太神二十四座に「大劈太神」（「播磨国総社縁起」）
中　世	正和 3(1314) 年	「坂越地頭飽間八郎泰継」の存在（東寺百合文書「矢野庄買得文書案文」）
	正中元 (1324) 年	坂越常楽庵、禅宗寺院常楽寺となる
	正平 20(1365) 年	児島高徳、坂越にて没の伝承
	15 世紀初頭	世阿弥が『風姿花伝』を記す（秦河勝の漂着記事）
	嘉吉元(1441)年	妙見寺が赤松下野守性忠より大般若経の寄進をうける
	文安2(1445)年	中庄、坂越の船が兵庫北関を通過（兵庫北関入舩納帳）
	天文元(1532)年	妙道寺開基
	永禄7(1564)年	ルイス・フロイス、坂越に寄港し堺行きの船に乗船
	天正15(1587)年	宇喜多忠家、坂越・高野・中村・尾崎を地方知行か
		細川幽斎、坂越にて「塩は唯よき程なれや　鍋のは　しゃくしを中へ入れてみつれは」と詠む
近　世	慶長5(1600)年	池田輝政が播磨一国を領有
	元和元(1615)年	鰤座が結成される
	元和4(1618)年	稲垣焼亡（坂越浦全焼）記事（「妙道寺来由記」「播磨鑑」「播州赤穂郡志」）
	元和5(1619)年	漁労のため6名が長崎の大浦に移住
	寛永16(1639)年	与七郎が一族16戸を引き連れ伊予国青島に移住
	正保 2(1645) 年	網子あわせて 23 名が長門国油谷に移住
	元禄 4(1691) 年	坂越浦の戸数 422 軒、人口 2,121 人、大型廻船 31 艘
	元禄 8(1695) 年	坂越・尾崎村間で山論起こる
	宝永 3(1706) 年	坂越村明細帳
	享保 6 (1721) 年	鳥井町地蔵堂が火葬場に建立される（明治 25 年に現在地に移転）
	享保 9(1724) 年	坂越にオランダ船入港
	享保 11(1726) 年	大避神社の祭礼における船渡御の最古記録
	天明 8(1788) 年	司馬江漢が坂越浦に立ち寄る
	天保 2(1831) 年	旧坂越浦会所が完成
	天保 9(1838) 年	「難風の節は百石以上の廻船百四、五十艘よく繋留申候」（「諸色書上帳」）
近　代	明治 10(1877) 年	坂越村に魚市場の開設許可される
	明治 16(1883) 年	大阪・坂越間に定期航路が開設される（1918 年まで）
	明治 22(1889) 年	市制・町村制により坂越村の成立
	明治 30(1897) 年	奥藤銀行が創設される
		坂越港から赤穂緞通が移出される
	明治 32(1899) 年	92 間の木橋（旧坂越橋）架設される
	明治 36(1903) 年	奥藤家、赤八商店を創設、塩問屋の経営も始める
	明治 43(1910) 年	木村製薬所が坂越村八ヶ谷に設立される
	明治 44(1911) 年	赤穂電灯株式会社設立される、赤穂・坂越間に電話線が新設される
	大正 3(1914) 年	船岡園が整備される
	大正 12(1923) 年	坂越橋が竣工
	大正 13(1924) 年	生島樹林、国の天然記念物に指定される
	昭和 4(1929) 年	坂越村海岸道路（西之町－大泊）が新設される
	昭和 5(1930) 年	坂越村役場を大改造し「越浦公会堂」とする
	昭和 6(1931) 年	宝珠山に八十八ヶ所石仏が建立される
	昭和 8(1933) 年	大日本紡績が設立される
		港地先海面埋立て工事完了
	昭和 10(1935) 年	坂越村に簡易上水道できる
	昭和 11(1936) 年	坂越町制が施行
	昭和 17(1942) 年	坂越町内の寺院の梵鐘、金属供出のため搬出される
	昭和 20(1945) 年	坂越に米軍機 10 機襲来して油送船を座礁させ、坂越国民学校に機銃掃射
現　代	昭和 22(1947) 年	鳥井、上高谷境より千種川堤防までの道路が新設される
	昭和 25(1950) 年	御崎～坂越の海岸、瀬戸内海国立公園に指定される
	昭和 26(1951) 年	赤穂町、高雄村と合併し、赤穂市となる
	昭和 29(1954) 年	御崎－坂越間の観光道路が完成
	昭和 30(1955) 年	新坂越橋が完成
	昭和 32(1957) 年	生島が瀬戸内海国立公園の特別保護区となる
	昭和 47(1972) 年	播磨灘初の牡蠣の養殖が開始される
	昭和 50(1975) 年	大泊の金鉱山の操業開始（1984 年まで）
	昭和 51(1976) 年	昭和 35 年の台風 16 号を受け 10 年かけて 2m の防潮堤完成
	昭和 57(1982) 年	八祖山バイパス（トンネル）開通
	昭和 63(1988) 年	生島樹林のモウソウチク伐採開始
	平成 4(1992) 年	坂越地区が赤穂市景観形成地区に指定される
	平成 6(1994) 年	旧坂越浦会所復元修理完了、公開開始
		大黒の埋立地に坂越漁協の牡蠣処理場が竣工
	平成 7(1995) 年	奥藤銀行を改修して坂越まち並み館を整備
	平成 9(1997) 年	国土交通省の都市景観 100 選に選定される
	平成 13(2001) 年	生島樹林の本格的な植生調査を開始、翌年にムベ伐採
	平成 17(2005) 年	坂越駅周辺地区の区画整理事業開始
	平成 18(2006) 年	平成 7(1995) 年から開始の坂越港ふるさと海岸整備完了
	平成 24(2012) 年	「坂越の船祭」が国指定重要無形民俗文化財となる
	平成 28(2016) 年	坂越大橋完成

坂越地区・坂越湾周辺全図





坂越（坂越湾周辺）地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	船祭り祭礼用和船 (付　船倉1棟)	◎			17　18　19	●				●		大避神社(坂越)の祭礼「坂越の船祭」において用いられる祭礼用和船。行列をつくる11艘のうち漕船(櫂伝馬)、楽船、御座船(神輿船)、警護船(議員船)、歌船の6隻が兵庫県指定有形民俗文化財となっている。
2	船賃銀定法 (付)大西家文書一括	◎			18　27　30	●						幅約181cm、高さ約25.3cmの板に、全国各地への船乗り賃銀定を朱漆書きしたもので、廻船業で栄えた坂越の実態をよく示した資料である。鞆、壱岐、対馬、加賀、酒田などの地名が書かれ、廻漕先までの距離に応じて賃金が定められている。市指定有形文化財。
3	潮見の地蔵さん	●			19		●			●		もと元文3(1738)年の地蔵があったが、地下に埋設され、新たな丸彫り坐像が安置されている。現在の地蔵は像高60cmを測る。
4	西の地蔵さん	●			19		●			●		坂越乳下に所在する、像高72cmを測る寛保2(1742)年造立の丸彫り坐像。釈尼妙壽(俗名　大西糸)の25回忌にあたり建立されたもので、かつては西よりの墓地にあったが、明治19(1886)年暴風雨により損傷して現在地に移された。
5	入江の地蔵さん	●			19		●			●		坂越湯殿町にある、像高46cmの丸彫り地蔵。
6	おたいしさん	●			19		●			●		大黒にある、半肉彫りの石造坐像。「弘法さん」とも言われる。平成10(1998)年に移転。
7	地蔵(本町)	●			19		●			●		妙道寺裏山の元高川家墓地内にあり、元和4(1618)年に起きた「稲垣焼亡」で死傷した人を鎮めたもの。建立年代不詳。
8	石仏	●			18　19　36		●			●		自然石を5段に積み上げたもので「高谷の霊石」とも呼ばれ、周辺の地名の始まりともいう。
9	八十八ヶ所石仏	●			19		●			●		妙見寺周辺にあり、昭和6(1831)年に宝珠山に安置されたもの。
10	迎え仏(高谷)	●			19		●			●		高谷共同墓地の迎え仏として安置されている石造の阿弥陀如来像で、天明3(1783)年に造立された丸彫りの立像。北陸から船で持ち帰ったと言われている。
11	道標	●			18　27		●					かつては高谷駐在所付近にあったが、平成3(1991)年に現在の木戸門跡広場の隅に移築された。高さ94mの凝灰岩製の道標で、「右　大坂　　左　城下　道」、他面には「右　み那と」とある。
12	下高谷の道標	●			18　27		●					下高谷の坂越水源地南の県道周世尾崎線の脇に建つ、高さ110㎝、18cm角の花崗岩製の道標。「右　さこし道　諸国出船所」、他面には「左　大坂道」とある。平成3(1991)年に現在地に移された。
13	小倉御前の墓	●			19　32　35		●			●		五輪塔が8基安置されており、南北朝の争いに敗れ坂越に隠棲していた南朝の皇族小倉宮(後亀山天皇の皇子)の墓と伝わる。小倉御前は、嘉吉の乱後の山名持豊が坂越に進出するに及んで、ことこれまでと坂越の海に入水自殺したといい、その場所の海底に「御前岩」と呼ばれる岩があり『播州赤穂郡志』にも載る。現在はふるさと海岸整備により埋立てられ陸地となっている。(赤穂の昔話)
14	小倉御前之碑	●			19　32　35		●			●		海岸沿いの敷地に、海からみて御前岩があった方向に建てられている。
15	児島高徳墓	●			19　32　35		●			●		『太平記』によれば、児島高徳は新田義貞とともに足利尊氏と戦い、妙見寺で傷を癒し各地を転戦し、晩年坂越で没したという。船岡園中に児島高徳の墓と伝えられる五輪塔があるが、五輪塔自体はその特徴から考えて近世初期のものである。
16	寿隆丸海難死没者墓碑	●			19　27	●				●		妙見寺境内にある。明治19(1886)年建立。高川家船寿隆丸は、和歌山県出雲浦沖で破船し乗り組みのうち竜野清七ら3人が救助されたが7人が死没。一周忌にあたり船主の高川家が建立した。救助にあたった三輪崎の長島松次郎に対し時の県令から渡された感謝状が残っている。
17	児島贈従三位之碑	●			19					●		南北朝の時、南朝に尽くしたという児島高徳の碑。海軍大将東郷平八郎が篆額。碑陰記は赤穂藩儒、赤松滄州が記す。児島贈従三位趾保存会名誉会員の藤野静輝敬書。大正3(1914)年建立。
18	山崎善吾君像	●			19					●		明治25(1892)年、赤穂・砂子生まれ。港湾埋め立て、工場誘致、水道敷設などに尽力した。村長29年、地方功労者。昭和32(1957)年に像を建立。
19	奥吉太平翁之墓碑	●			19					●		天保8(1837)年生まれ。奥藤家の番頭として主家の繁栄に尽くした。船岡園十三景の設計にも尽力する。大正7(1918)年に82歳で終寿。墓碑は大正7(1918)年に建立。
20	吾有禅師の墓	●			19					●		常楽寺境内にある。吾有禅師は本名を松本和右衛門行邦といい、もと高松藩士で柳斎、玉藻館と号し、剃髪して吾有玄道といった。坂越では妙道寺菖蒲庵に住み、多数門人に和歌や絵画、禅道を教えた。文化11(1814)年に讃岐で没するが、門人らが常楽寺境内に墓石を建て、遺品の鉄鉢と十得を葬った。
21	木村秀蔵君興業碑	●			19					●		東秀蔵として明治3(1870)年大阪に生まれ、幼くして母方の木村姓を名乗る。大阪の薬種問屋にっとめ、夜学に通って薬剤師免許を得、22歳で独立。明治43(1910)年、坂越に木村製薬所を設立、炭酸マグネシウムを製造したほか、昭和4(1929)年に除虫菊を原料に殺虫剤アースを発明した。木村氏の名は商標「地球印」として全国に広まったほか、坂越小学校建築費を寄付するなど地域にも貢献した。昭和20(1945)年没。昭和3(1928)年建立。
22	木村秀蔵翁之像	●			19					●		昭和29(1954)年建立。
23	船絵馬(大避神社)	●			18　19　30	●				●		大避神社の拝殿に奉納されているもので、最古のものは明和6(1769)年のものが見られる。
24	イスノキの虫こぶ (ヒョンの実)	●				●						大避神社の境内にあるイスノキの虫こぶ。虫こぶは虫の出た穴に息を吹き入れるとヒュー という音がして笛として遊びに使われる。イスノキの別名をヒョンノキ、実はヒョンの実ともいい、笛の音に由来する。
25	生島・生島樹林		◎		17　18　19　31　32　35	●	●			●	●	坂越湾に浮かぶ周囲2km余りの小島。秦河勝が漂着したと伝わる。島内西側には秦河勝の墓所、神水井戸、東側には浜辺に石鳥居を有し白壁に囲まれた御旅所と、祭礼船を格納する船倉が建っている。古来から神地であり樹木伐採や島内に入ることが禁忌されており、その信仰に守られて樹林が生育。国立公園特別保護区にも指定されている。島内の植物は190種余り、海浜植生から森林性のものまであり、国内の植物分布として貴重な樹林。国天然記念物。昔話では、生島の木を伐採した者への祟りが残されている。(赤穂の昔話)
26	みかんのへた山古墳		◎		17　31	●	●				●	標高79mの山頂に築かれた直径約38mの円墳は、海上から見ると「みかんのへた」のように見える。5世紀中頃、円形に隆起する地形を利用してつくられた古墳。坂越湾を眺望できる場所につくられていることから、海人の首長墓と考えられる。すぐ脇に2号墳もある。県指定史跡。
27	黒崎墓所 (附)黒崎墓所記・ 妙道寺過去帳 1冊		◎		18　19　27　30	●	●			●		坂越浦海域で遭難や病気などによって客死した人を埋葬した場所(他所三昧)。『妙道寺過去帳』等によると、北は出羽、南は薩摩種子島、西は対馬、東は伊豆までの29ヵ国の人が埋葬されている。文化4(1807)年墓域が拡張された。なお境内にある地蔵は、元禄12(1699)年に奥州酒田で死没した大西六之助の供養にと、同地の大信寺に持って行ったが許可が下りず、寺境内に放置されていたのを、文化8(1811)年の拡張改修にあわせて黒崎墓所内に安置されたものという。県指定史跡。
28	妙見寺観音堂		◎		18　19　29　32		●			●		妙見寺は、天平勝宝年間(749～757)に行基が開基し、のち大同元(806)年に空海が中興したと伝わる。観音堂は万治2(1659)年に宝珠山中腹に建立され「円通閣」とも呼ばれたが暴風で大破、享保7(1772)年に再建。近世には珍しい懸造りの建造物として、市指定建造物。
29	旧坂越浦会所		◎		18		●					天保2～3(1831～1832)年に建築、坂越浦会所として使用されたほか、赤穂藩主来浦の際の休憩所にもなった。昭和5(1930)年に大改造され、坂越公会堂となる。平成5～6(1993～1994)年にかけて解体復元整備を行い建築当時の姿に復元、一般公開。市指定建造物。
30	烏井町地蔵堂 (付)石造地蔵坐像及び名号石		◎		18　19　35		●			●		建築年代は妙道寺旧記に享保6(1721)年とあり、明治25(1892)年の修理以降も、平成9(1997)年まで小規模な修理が幾度か行われたが、建築的価値を示す細部はよく残されていて、市内の同種遺構のなかでは最古のものに属し、原形をよくとどめている。民衆の庶民信仰をよく示す建物として貴重な価値がある。市の文化財として指定後の平成24(2012)年に修理。堂内に安置されている地蔵は丸彫りの坐像で元禄11(1698)年の造立とされているが、風化が少ない。
31	小島遺跡		●		34						●	坂越湾の一部を形成する釜ヶ崎半島周辺にある
32	小島古墳群		●		17　34						●	坂越湾の一部を形成する釜ヶ崎半島周辺にある古墳群。横穴式石室墳と箱式石棺墓が混じっており、古墳時代後期の築造とされる。平野がない地区の古墳群であることから、漁労を生業とした人々の墳墓と考えられている。
33	生島古墳・生島古墳群 (伝秦河勝墓)		●		17　19　31　34	●	●			●	●	生島内に築かれている古墳群。このうち1号墳は標高44.2mのところにある生島古墳(伝秦河勝墓)であるが、未調査であり築造年代は明らかではない。ほか生島内には2基の古墳が確認されている。
34	坂越浦城跡		●		18　29　32　34		●					坂越港の北、上ノ山と呼ばれる標高約30mの小丘にあった。城跡はかつて小学校運動場に使用されて完全に整地されており、曲輪の跡は残っていない。現在は展望広場となっている。
35	茶臼山城跡		●		18　19　29　34		●			●		坂越湾の北にそびえる標高約130mの茶臼山(宝珠山ともいう)の山頂にあったという。現在はテレビ塔が建ち、整地されていて城跡の遺構は確認できない。

坂越（坂越湾周辺）地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
36	八祖山経塚		●		17 19 29 34					●	●	八祖山の尾根のほぼ中央にある。八祖山は坂越湾と千種川の間にある標高約70mの丘状の山。赤穂高校歴史研究部による発掘調査が行われ出土した土器片から、古墳ではなく経筒を埋めた経塚であることがわかった。
37	下高谷遺跡		●		17 34						●	現在の坂越郵便局建設に伴って兵庫県教育委員会が発掘調査を実施し、古代～中世の集落跡が見つかった。
38	鍋島古墳		●		17 34						●	坂越湾に浮かぶ鍋島に築かれている古墳。未調査のため詳細は不明。
39	天満宮跡		●		19 32					●		『播州赤穂郡志』によると、延喜元(901)年に菅原道真が左遷の際、坂越浦を愛し船を数日逗留させたという。天暦年中(947～957)に祀られ、曽根の天満宮と同じであると記されている。
40	大避神社御旅所		●		17 18 19 31 33	●	●			●	●	坂越大避神社の御旅所は対岸の生島内にある。御旅所は享保4(1719)年12月に再建された、瓦葺で仏教様式の建物。平成16(2004)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定された。隣接する船祭り祭礼用和船船倉には、坂越の船祭で使用される祭礼用和船が格納されている。
41	大避神社		●		17 18 19 31 32 33	●	●			●	●	祭神は天照皇大神、大避大明神(秦河勝)、春日大神。神社創建は不詳であるが、播磨国総社縁起によると養和元(1181)年には祭神太神24座に列せられていたという。本殿・拝殿・神門は江戸時代に再建され、絵馬堂には古絵馬が多く奉納されている。秋の例大祭の船祭は国重要無形民俗文化財に、その祭礼用和船は兵庫県有形民俗文化財に指定。神門の仁王立像・随神坐像や、享保4(1719)年に再建された仏教様式の建物である御旅所などに神仏習合の名残が見られる。
42	荒神社（上高谷）		●		19		●			●		上高谷集落の背後の山裾にある神社。
43	荒神社（下高谷）		●		19		●			●		下高谷集落の背後の山裾にある神社。
44	稲荷神社（潮見）		●		19		●			●		潮見集落の背後にある神社。
45	妙見寺		●		18 19 29		●			●		天平勝宝（749～757）年間頃に行基の創建、大同年中（806～810）の空海の再興と伝わり、盛時には16坊5庵を抱えた大山岳寺院であったが、嘉吉の乱等によって悉く焼失したという。その後、明応3（1494）年に再興されたが、慶応4・明治元（1868）年の神仏分離令によって衰退し、現在に至る。境内には観音堂や様々な弘法大師像や地蔵菩薩像があるほか、周辺の宝珠山には半肉彫りの石造不動明王像がある。
46	妙見寺妙覚院跡		●		18 19		●			●		宝珠山妙見寺の本坊であり、文明17(1485)年の焼失の後、明応3(1494)年に乗叶が再建。その後坊舎は明治6(1873)年に坂越初の小学校「松風校」校舎として使用され、小学校校庭整地のため明治41(1908)年に観音堂下に縮小移築された。昭和54(1979)年に老朽化のため大雨で倒壊、現在は天保3(1832)年に再建された山門が残るのみである。
47	妙道寺		●		18 19 35		●			●		浄土真宗本願寺派。享禄5(1532)年に善祐門徒学西が開基した。本尊の阿弥陀仏の木像は寛永9(1632)年に高砂沖で漁網にかかったものを奥藤又次郎が受けて本堂に安置したものと伝わる。山号は光明山。本堂は享保19(1742)年に、山門は宝暦3(1753)年にそれぞれ再建され、鼓楼は寛保2(1742)年に、鐘楼は寛延2(1749)年に建立されたもの。牡蠣殻のついた阿弥陀如来像の言い伝えが残る。（赤穂の昔話）
48	常楽寺		●		18 19 32		●			●		赤穂郡大領高屋越前二郎為経の常楽庵にはじまり、その後子孫の高屋生源景義が正中元（1324）年に京都の東福寺の渓深首座に請うて禅院となって常楽寺に改号し、よく栄えたという。しかし天文年間（1532~1555）に信徒が改宗したり、慶長年間（1596～1615）の初めに坂越荘三か村を領した浮田安心がみだりに山林田畑を押収したため、衆僧離散して廃寺となった。その後元禄15（1702）年、明和7（1770）年の2度にわたり小堂が再建される。山号は雲谷山。
49	海雲寺跡		●		18 19		●			●		宝珠山妙見寺の末寺で、天文年間(1532～1555)に廃寺となったという。山号は霊亀山。現在付近に残る井戸は「寺井」と呼ばれ、坂越三井の一つに数えられる。
50	清海寺跡		●		18 19		●			●		位置や開基は不明だが、山号が赤城山であり、旧坂越小学校周辺にあったと考えられる。
51	長明寺跡		●		18 19		●			●		位置や開基は不明だが、山号は八祖山であり、八祖山にあったと考えられる。
52	坂越まち並み館		●		18		●					大正末期の旧奥藤銀行坂越支店を平成6(1994)年に修景整備し、坂越地区のまちづくりの拠点施設としたもの。現在は一般公開され、建物内には銀行時代の金庫が現存している。
53	奥藤家・奥藤酒造郷土館 奥藤商事株式会社酒蔵群		●		18		●	●				300年前に築かれた母屋は、西国大名の本陣にもなった大規模な入母屋造り。現存する酒蔵は、寛文年中(1661～1673)の建物といわれ、高さ2m余りの石垣による半地下式の構造も保存されている。黒い羽目板に白い塗込め窓の酒蔵の一角にある郷土館では、大庄屋や船手庄屋も務めた奥藤家に残る昔の酒造道具、廻船業関係の資料、生活用具などを自由に見学できる。郷土館の開館は昭和61(1986)年。
54	山二家		●		18		●					明治6(1873)年に建築された厨子二階建ての町屋で、平成6(1994)年には赤穂市市街地景観重要建築物に指定されている。
55	木戸門跡		●		18 27 30		●					江戸時代には坂越浦の治安警護のため坂越大道に木戸門を設置し、番人を配して朝夕に開閉していた。平成7(1995)年にモニュメント整備された。
56	ふるさと海岸		●		18	●	●					昭和40（1965）年代前半の台風により海岸沿いの家屋が大きな被害を受け、その後防潮堤が建設された。平成5(1993)年4月、坂越港ふるさと海岸整備モデル事業(高潮対策事業)として工事着手。平成16(2004)年に護岸、養浜、飛沫防止帯の整備を終え、平成17(2005)年には旧防潮堤の撤去が完了した。
57	とうろん台		●		18	●	●					かつて坂越湾には、神戸海洋気象台からの気象情報に基づき、布製の吹き抜きを柱に掲揚して天候や風向きを知らせる施設があり、「とうろん台」と呼ばれていた。現在は失われたが、モニュメントとして整備されている。
58	鰛見の小屋跡		●		18	●	●					鰛とはボラの幼魚のこと。坂越では敷網を用いた鰛漁が盛んで、江戸時代には鰛座が結成されていた。鰛漁の際、坂越湾を一望できるこの尾根からの鰛の群れ具合を監視した。
59	高瀬舟船着場跡		●		18 27 30	●	●	●				千種川の南北流通を支えた高瀬舟運路が坂越上高谷に着岸していた場所。内陸部からは製塩に用いる薪のほか米・麦・木炭・こんにゃく玉・綿などを、臨海部(下流部)からは塩などの海産物が運ばれた。土手堤の荷扱い所は賑わい「坂越浦の裏玄関」とも言われたという。中土手(荷揚げ場)から本通りの土手に渡す石橋は「高瀬の石橋」と親しまれ、昭和60(1985)年にそのうちの3本を跡地に保存し、土手堤に「高瀬舟船着場跡」の記念碑を建立した。
60	船岡園		●		18 19 35		●			●		大正3(1914)年、児島高徳没後550周年にあたり開設された。十三景は高徳の命日である13日にちなんで藤野君山が命題したものである。現在は桜の名所となっている。
61	坂越大道		●		18 19 27 30	●	●	●				千種川を上下した高瀬舟の船着場と、坂越湾とをつなぐ道で、川の運搬と海の運搬の積み替えを担っていた。途中の鳥井坂については「二人の旦那はん」という話の舞台となっている。（赤穂の昔話）
62	宝珠山		●		18 19		●			●		山麓に大避神社を擁し、中腹には坂越浦城跡、船岡園、妙見寺、八十八ヶ所石仏を含む。散策路が整備され、サクラやツツジが多く植樹されている。山頂からは坂越湾を一望できる。
63	坂越湾		●		17 18 19 27 30	●	●	●		●		湾の形状は、瀬戸内海に大きく開いた沈降海岸。古くから港や漁場として栄え、現在は牡蠣養殖が盛ん。
64	鍋島		●		17 18 19 32	●	●					小島漁港の沖合に位置する島。豊臣秀吉が九州に出兵した際、細川幽斎が坂越へ寄港し「塩は早　よき程なれや　鍋が島　杓子の中へ　入れてみつれば」と詠んだという。
65	弘法の井戸		●		19	●	●			●		弘法大師によって見つけられたと伝わる。昔は10畳ほどの広さがあり、眼病によいとされた。この水を船で運び、沸かした風呂屋は「大師湯」と呼ばれ親しまれた。「弘法の霊水」とも呼ばれる。
66	げんなみさんの井戸		●		19	●	●			●		潮見町にあり今も使用されている。「げんなみさん」は「げんさんみ」が訛ったものと推測される。治承4(1180)年に平家追討の軍をおこした摂津源氏の源三位頼政は、宇治川で戦って敗れ自害したが、それに先立って愛妾・菖蒲前を播磨国に逃がしている。追われる身の菖蒲は坂越にたどりつき身を潜め、源氏の世になってから「げんなみさん」と親しまれたと伝わる。
67	荒神の井戸		●		19	●	●			●		東之町と汐見町の境にあたる荒神谷に沿って上に行くと荒神の井戸がある。以前は蛭子社、愛宕社が建てられていたが、後に荒神社を祀り、元禄5(1692)年には「東浦荒神敷地森六間、五間」と記録が残る。
68	宮の前の井戸		●		19	●	●			●		「妙見寺の寺井」ともいう。水を汲み上げた綱のあとが井戸の縁に刻み込まれており、共同井戸として長い間坂越の人々の喉をうるおし続けてきたことがわかる。
69	生島の船井		●		19	●	●			●		生島にあり、船乗りが毎日水をくんでいた井戸で、坂越三井の一つ。
70	大道井		●		18 19	●	●			●		坂越三井の一つ。文化年間(1804～1818)に掘り替えを行った井筒普請記録によれば星形もあったようである。昭和35(1960)年の道路拡幅のため地上より姿を消し、石の井戸枠だけが現地保存されている。

坂越（坂越湾周辺）地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
71	わゆみさんの井戸		●		19	●	●			●		寛政の頃、高松藩に松本和右衛門という武士がいた。武芸や学問に秀で、藩の子弟を教えていたが、修行僧として諸国行脚の途中坂越に立ち寄り定住。彼が学問を教えていた場所は妙道寺本堂の右奥で、明治の頃は「わゆみさんの井戸のところ」と呼ばれていた。昭和10(1935)年に水道が敷かれ現在は「わゆみさん」とだけ呼ばれる。
72	常楽寺の井戸		●		19	●	●			●		下高谷の南側、荒神山の山裾に常楽寺の井戸がある。この井戸水は生活用水としてだけでなく「イボを治す霊験あらたかな霊水」として遠く明石辺りまでも知られていた。現在も地域住民に利用されている。
73	海運寺の寺井		●		19	●	●			●		霊亀山海雲寺は宝珠山妙見寺の末寺で、天文年間(1532～1555)に廃寺になった。現在付近に残る井戸は「寺井」と呼ばれ、坂越三井の一つ。
74	乳の下の井戸		●		19	●	●			●		亭(ちん)の下の井戸が訛ったものと伝わる。坂越字洞龍の原鉄工所内に保存されている。この井戸の山の上に、南朝の皇族小倉御前の月見の亭があったので、「亭の下の井戸」とか「亭の清水」と言われ、水に不自由する坂越の人たちに大切にされてきた。
75	エイゴの井戸		●		19	●	●			●		井戸は2つあり、豊富な水が尽きることのない「永劫(えいごう)」を意味するものか。特に下の井戸は船の飲料水として利用されていた。
76	梅の木の井戸		●		19	●	●			●		梅の木の地名も場所も今では知る人がほとんどない。雑木林の深い茂みを分け入ると谷川の川底に土砂に埋まった石積みの遺構がわずかに確認できる程度である。かつて天満宮が祀られていたという。
77	イサラーの井戸		●		19	●	●			●		石材を縦方向に積んで築かれた珍しい井戸。
78	神石		●		19		●			●		大避神社参道の鳥居付近の路傍にあり、坂越三霊石の一つ。この石を動かしてはならず、小便など不潔なことをすると祟るといわれている。なお、坂越三霊石とは、この神石と西之町の天神岩、鳥井の民家に残る石をいう。
79	天神岩		●		19 35		●			●		かつて波打ち際から9m程先の海中に畳2枚分ぐらいの岩があり、菅原道真が太宰府に左遷された際に坂越に寄港し、この岩に上がって景色を賞したと伝わる(赤穂の昔話)。坂越三霊石の一つで、集会所前に説明板がある。
80	飛びつき岩		●		17 19 31 35	●				●		聖徳太子の死後、秦河勝が蘇我入鹿の迫害を避けて難波から船出し、皇極天皇3(644)年に坂越生島の東岸に漂着し、その際に生島の「飛び付き岩(鼻)」に上がったと伝わる。
81	坂越漁港		●		18 27	●						市内最大の漁港で、赤穂市全体の年間水揚量778tのうち674tを占める。漁船約66隻(2級18隻、3級48隻)が拠点としており、年間水揚量は674t(うち牡蠣が523t)である。(いずれも平成28年度実績)
82	小島漁港		●		18 27	●						小島は漁村で、明治までは海路か峠越えの道で坂越本村と連絡していた。『赤穂の民俗』には、鰯漁、定置網漁、さし網漁、こぎ網漁、建て網漁、しばり網漁、はえ縄漁、アナゴ筒籠漁等の漁法が記録されているが、鰮網漁は昭和35(1960)年に、しばり網漁は戦後廃業とある。
83	大泊		●		17 18 27 35 36	●	●					湾状地形を呈し、良好な港であった。現在も養殖牡蠣筏が波除けのために浮かんでいることが多い。昭和5(1930)年西之町より独立し、字をもって町名とした。菅原道真が船を泊めた伝説が残る。(赤穂の民俗)
84	洞竜		●		17 19 35 36	●	●					菅原道真が筑前に左遷された時、途中ここでしばらく「逗留(洞竜)」したことが地名の由来とする(赤穂の民俗)。南朝の皇族小倉御前が坂越へ来た時、はじめに住んでいた場所という言われもある。
85	潮見		●		18 36	●	●					鰮見の小屋があったところで、漁業者が潮の具合や魚の群れ具合を見るのに適した場所であった。潮見の小高いところに立つと、景勝地として知られる飛着や岩堂(岩戸)など坂越湾が一望できる。
86	牡蠣養殖筏		●		18	●						播磨灘における牡蠣養殖は昭和49(1974)年に坂越で始まり、その後、相生市やたつの市に広がった。坂越湾の沈降海岸が海流の緩やかな入り海を形成し、牡蠣養殖の最適条件となっている。様々な自然条件を考慮して移動する牡蠣筏は、坂越の重要な景観となっている。
87	宝珠山散歩道		●		19	●	●			●		宝珠山山頂から東方向へ延びる尾根上の登山道。ツツジ等の植栽が整備されており、瀬戸内海の眺望も良い。
88	坂越大泊鉱山跡		●				●					坂越丸山で操業していたロウ石鉱山が、昭和49(1974)年の台風8号による露頭サンプルの結果、高品位な金鉱山であることが判明。昭和50(1975)年から操業開始、昭和59(1984)年に閉山した。
89	坂越小学校跡		●				●					かつての坂越浦城跡が、小学校の運動場として使用されていたもの。
90	海の駅		●		18	●						季節によって旬の魚介類が堪能でき、購入できる。漁業体験も可能。別名:しおさい市場。
91	坂越漁業協同組合		●		18	●						潮見集落前の坂越漁港前にある。牡蠣の養殖等も行っている。
92	坂越の船祭			◎	17 19 31 33	●	●			●		大避神社の祭礼で、木造和船が行列を組んで海上を巡行する大規模な船渡御祭である。10月第2日曜に行われる本宮には、神輿船を中心とする11艘の木造和船が東之浜から坂越湾に浮かぶ生島の御旅所まで、坂越湾内を巡行する。国指定重要無形民俗文化財。
93	坂越盆踊り			◎	19	●	●			●		享和3(1803)年の『御役用諸事控』に、踊りを取り締まった記録があるが詳細はわからない。大戦中は中断し、戦後に青年団などによって復活。昭和52(1977)年に「坂越盆踊り保存会」が結成された。なお、寛永16(1639)年に伊予国青島(当時は馬島)に移住した坂越浦の漁師与七郎ら16家族が、ふるさと坂越を偲んで始めたという盆踊りが青島に伝わっている。市指定無形民俗文化財。
94	秦河勝漂着伝説			●	17 31	●				●		秦河勝は、聖徳太子の重臣として仕えたとされる人物で、蘇我入鹿の迫害を逃れて坂越生島に漂着したとの伝説が残る。秦氏は旧赤穂郡(現在の赤穂市、相生市、上郡町)と関係の深い渡来系氏族であり、古代には郡司層として活動していた。大避神社の祭神は秦河勝であり、神地である生島内には伝秦河勝墓もある。旧赤穂郡内にはかつて27社の大避神社があったとされる。
95	坂越桜祭り			●	19	●				●		桜の名所である坂越浦城跡及び船岡園周辺で催される。妙見寺観音堂では無料のお茶会が催され夜間は提灯が点灯し、夜桜が楽しめる。
96	坂越たこ祭り			●		●						地元の新鮮なたこを使った料理のふるまいなどが楽しめる地域の祭。坂越盆踊りも披露される。
97	宝珠山山頂の景観			●	18 19	●	●			●		山頂からは坂越湾を一望できる。散歩道からの風景も美しく、ツツジなどの植栽が整備されている。
98	瓦葺きのまちなみ			●	18	●	●					坂越の民家の特徴は、二階建て、木葺きの瓦屋根、平入の切妻で、道路に面する建物前には石垣が築かれ窓格子の板塀をめぐらすことが特徴である。
99	牡蠣養殖風景			●	18	●	●					坂越では昭和47(1972)年に播磨灘初の牡蠣の養殖を開始した。坂越湾や大泊等の地形を活かし、海流や水温等によって移動する牡蠣筏の風景は、冬の風物詩となっている。
100	つなし寿司			●		●						秋祭りの頃に食べられる郷土食。「つなし」はニシン科の魚「コノシロ」の別名。体長15センチよりも小さなものを「つなし」と呼び、赤穂では昔から寿司の具材として使われてきた。
101	チリメン、イカナゴ、タコツボ漁			●	18	●						坂越の養殖漁業の発達は戦後のことで、特に牡蠣養殖に関しては比較的歴史は新しい。古くから沿岸漁業が盛んで、底曳網や袋待網によるチリメン漁やイカナゴ漁、タコツボを使った漁法がある。

坂越（坂越湾周辺）地区　　歴史文化の視点１

14．古代の海人と秦河勝伝説

【ストーリー】

坂越には、文献で遡り得る 11 世紀よりはるか昔の 5 世紀に、大きな墓＝「古墳」を築いた人々がいた。平地の少ないこの地にあって、大きな権力を持っていた集団は、漁業や海上交通を生業とする「海人集団」だったであろう。

秦河勝を祭神とする大避神社の神地にある生島古墳は、聖徳太子に仕えた秦河勝の墓であると伝えられるなど、海と人との関係の深さを教えてくれる。

秦河勝は、当時の朝鮮半島から渡ってきた渡来人で、蘇我氏の迫害から逃れてこの島にたどり着き、赤穂の地を開発したという。旧赤穂郡には、この秦河勝を祭神とする神社（大避神社）がかつて約 30 あった。

大避神社の秋祭りは、瀬戸内三大船祭の一つ「坂越の船祭」（国指定重要無形民俗文化財）で、生島内にある御旅所まで、11 艘の船が船団を組んで坂越湾をめぐる。



みかんのへた山古墳群

伝秦河勝墓

坂越の船祭

凡例　●もの　●場　●こと

坂越（坂越湾周辺）地区　歴史文化の視点２

15．港町・坂越

【ストーリー】

文安 2 ～ 3（1445 ～ 1446）年における兵庫北関（現在の神戸市）への入船記録「兵庫北関入舩納帳」には、船出し港として「坂越」の名が登場する。湾状地形と生島によって荒波から守られた天然の良港坂越浦は、漁業とともに廻船業で発展した。

千種川では高瀬舟による流通が行われており、年貢米をはじめとした貨物は高瀬舟船着場で荷揚げされ、坂越の主要道「大道」を通って坂越湾で廻船に積まれ、大坂をはじめとした全国各地へと運ばれた。

また江戸後期になると赤穂で生産した塩を運び出す塩廻船が栄え、坂越は港町として活況を呈した。「黒崎墓所」（県指定史跡）は、坂越近海で客死した水夫などの墓地であり、埋葬者の出身地は北は出羽から南は種子島まで広い範囲にわたる。

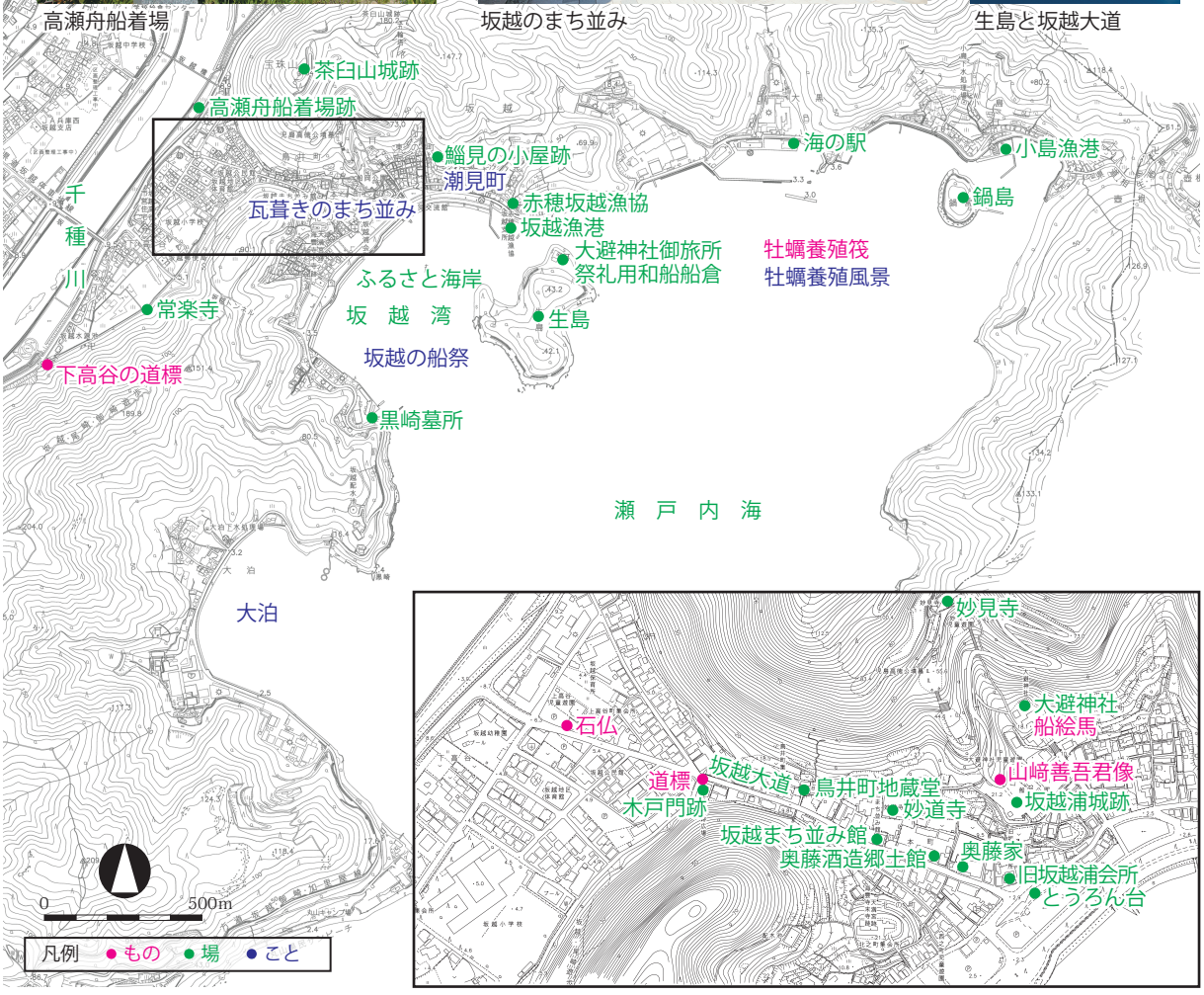
大避神社の秋の祭礼「坂越の船祭」は、近世海運の隆盛を今に伝えている。



高瀬舟船着場


坂越のまち並み


生島と坂越大道



坂越（坂越湾周辺）地区　　歴史文化の視点３

16. 伝説と信仰の山めぐり

【ストーリー】

坂越湾と生島が一望できる宝珠山には、山麓の大避神社から山頂付近の八十八ヶ所石仏まで多くの信仰施設が築かれ、また様々な伝説が生まれた。

秦河勝等を祀る大避神社、中世に山岳寺院として栄えた真言宗古義派の妙見寺、宝珠山山頂周辺にある八十八ヵ所石仏のほか、新田義貞とともに足利尊氏と戦った児島高徳の墓や、南朝方の皇族であった小倉御前の墓の伝承地がある。

坂越には、こうした伝説や信仰を大切に思う心が今も息づいており、児島高徳の 550 年忌を記念して船岡園が整備されて桜が植樹されるなどしている。坂越の伝説と信仰をめぐる山は、春には桜やツツジで満ち溢れ、現在も多くの人を惹きつけている。



宝珠山一帯（撮影：出水伯明）



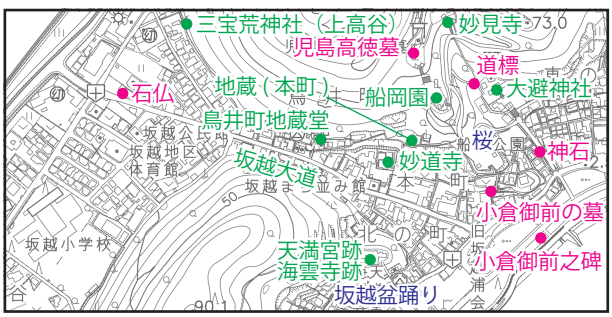
妙見寺観音堂



大避神社



船岡園



坂越（千種川流域）地区

地　勢

高雄地区から南流してきた千種川が山にぶつかって大きく南西に迂回し、赤穂地区へと流れていく延長約 3km の範囲である。平野と山地の間に緩斜面がほとんどなく土地も低かったため、古くから洪水に見舞われた。しかしこうした洪水は逆に、肥沃な土砂を運搬して、「庄内」と呼ばれる良好な水田地を生み出し、各村が自然堤防上に築かれていった。

江戸時代には、千種川の本流であった尾崎川（現在の千種川）を亀の甲でせき止めて赤穂城下町東に流し、高瀬舟の運航に活用していたが、明治 25（1892）年の大水害後は亀の甲が撤去され、現在の流路となっている。

歴　史

ＪＲ赤穂線より南については、中世に遡る遺跡が見つかっていない。おそらく、後世の洪水によって地盤ごと流されてしまったものと推定される。現段階では、浜市遺跡で弥生時代及び古代の集落跡が発見されているのみである。

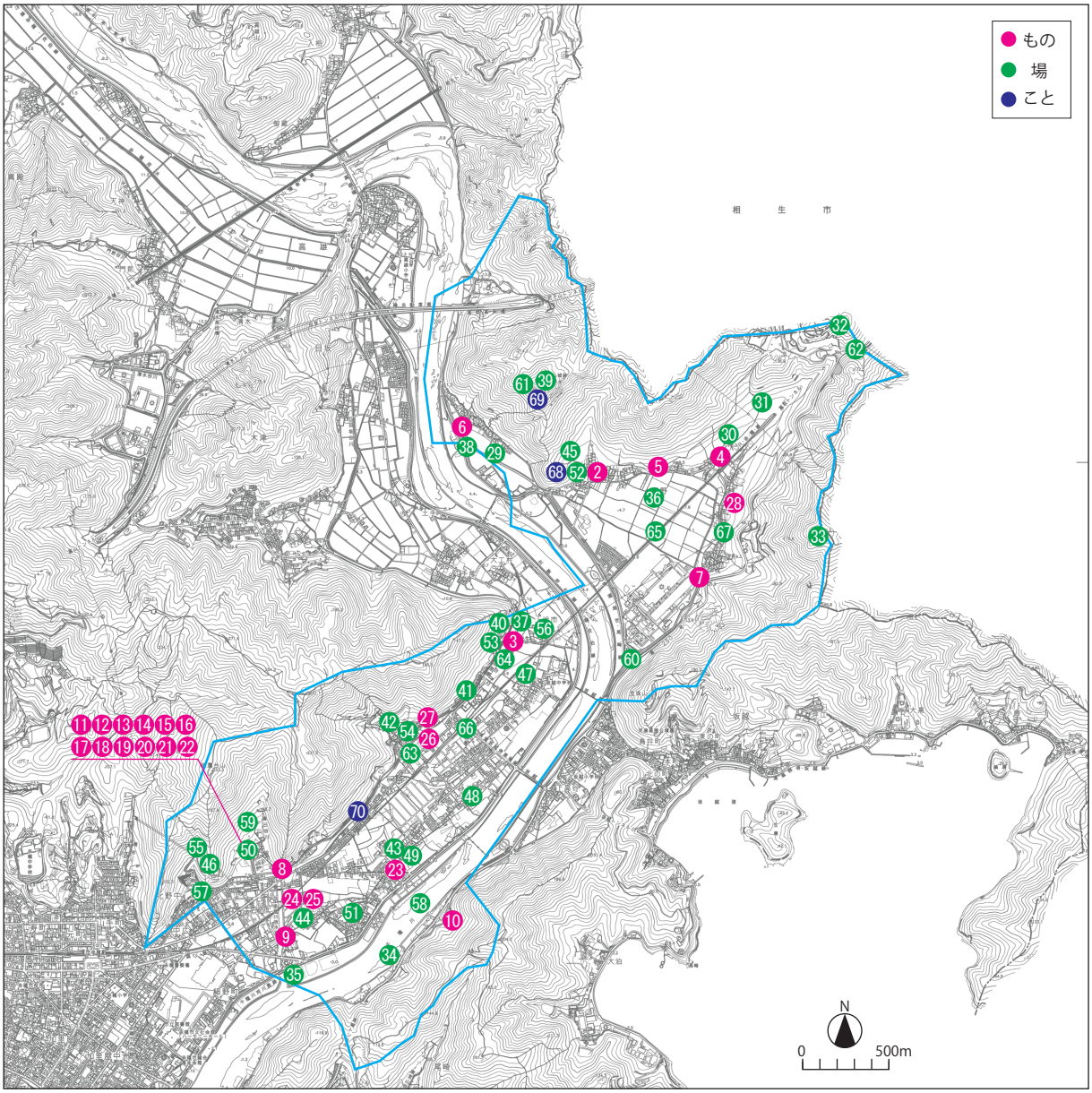
野中は、かつて一つの村であったが、洪水によって破られて北野中村と南野中村に分かれたという。江戸時代初期の絵図ではすでに二つの村が分かれているため、その歴史は中世に遡るのだろう。池田時代の絵図では、北の山裾を通るように姫路街道が記されているが、浅野時代の絵図では、ここは有年道となり、代わりに川南を通る道が姫路への主要道となっている。

近年に行われている区画整理事業によって、かつての道はほとんど失われてしまったが、各村々に建てられた社寺は今も残されており、その景観を伝えている。

表 24　坂越（千種川流域）地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
弥生時代中期	約 2,000 年前	定住の始まり（浜市遺跡、高野遺跡）
古墳時代後期	6 世紀後半～ 7 世紀	高取山古墳群、高伏山古墳群、八重山古墳
古　代		建物跡が見つかる（浜市遺跡、下高谷遺跡）
	天平勝宝 5(753) 年	赤穂郡坂越郷と呼ばれていた（「播磨国赤穂郡坂越神戸両郷解」）
	長暦元 (1037) 年	古文献に「坂越庄」がはじめて登場する（「平安遺文」）
中　世	天文 3(1534) 年	誓教寺開基（「万福寺総末寺帳幷邑郡附」）
	天文 9(1540) 年頃	このころ、尼子将監義久が尼子山城を築いたという
	天正 15(1587) 年	宇喜多忠家、坂越・高野・中村・尾崎を地方知行か
	このころ	野中村、洪水のため北野中村と南野中村に分かれる
近　世	このころ	亀の甲によって熊見川に導水
	正保 3(1646) 年	近藤正純、赤穂城の鎮守として城の北東に愛宕山社を建立
	慶安元 (1648) 年	盤珪永琢、野中村にて悟りを開く
	慶安 3(1650) 年	盤珪永琢、興福寺を開基
	宝永 3(1706) 年	南野中村、北野中村、砂子村、浜市村、高野村明細帳
近　代	明治 22(1889) 年	市制・町村制により坂越村の成立
	明治 25(1892) 年	大水害により、南野中村が最多の死者を出す
	明治 27(1894) 年	亀の甲を撤去等の千種川改修工事が完了 千種川堤防修復のため、赤穂城二之丸石垣を転用
	明治 32(1899) 年	千種川に 92 間の木橋が架設される
	大正 10(1921) 年	赤穂鉄道（赤穂－有年間）が開通
	大正 11(1922) 年	坂越橋（通称：旧坂越橋）が木橋として架設される
	昭和 11(1936) 年	町制度を実施し、坂越町となる
	昭和 15(1940) 年	国鉄赤穂線高取峠トンネル西口着工
現　代	昭和 26(1951) 年	高雄村、赤穂町、坂越町と合併し、赤穂市となる 国鉄赤穂線開通、赤穂鉄道廃止
	昭和 30(1955) 年	坂越橋が架設される
	昭和 37(1962) 年	大日本紡績第二工場が高野に設立、排水のため宝珠山トンネルが掘削される 木津水源地が完成
	昭和 38(1963) 年	高取峠新道が開通
	昭和 41(1966) 年	コンクリート製の坂越橋（通称：旧坂越橋）が架設される
	昭和 51(1976) 年	台風 17 号による大水害 上高野で石製銅鐸鋳型片が発見される
	平成 17(2005) 年	坂越駅周辺地区の土地区画整理事業開始
	平成 18(2006) 年	県道周世尾崎線（尾崎トンネル）開通
	平成 28(2016) 年	坂越大橋竣工、国道 250 号変更

坂越・千種川流域全図



坂越（千種川流域）地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
1	銅鐸鋳型片	◎			20					●	●	有年考古館の館長であった松岡秀夫は、昭和51(1976)年、上高野の地蔵堂に祀られている石製品が弥生時代の銅鐸石製鋳型片であることを発見した。砂岩製で高さ24㎝、重さ23.2㎏を測る。製品は発見されていないが、推定される銅鐸の全長は80cmに達し、弥生時代中期の銅鐸としては全国最大のものである。現在は赤穂市立歴史博物館に収蔵されている。県指定。
2	六道絵	◎			21					●		誓教寺に所蔵されている16幅からなる作品で、その制作年代は18世紀後半から19世紀中頃と考えられる。六道絵は恵心僧都源信の『往生要集』によって広まった、極楽や地獄といった世界の具体的なイメージを表したもので、鬼たちによる人々への拷問などの地獄の様子を実際に絵にしている。誓教寺では4月最終日曜日に「御絵解法要」が行われている。市指定。
3	尼子塚（采女塚）	●			20 32		●			●		尼子義久とも赤松一族の富田采女の塚とも伝えられている。五輪塔の火輪・水輪・地輪を積み上げたもので、元は数基の五輪塔があったと考えられる。
4	高野石地蔵	●			21		●			●		高野字高取に石仏が祀られている。地元の伝承によると、この石仏はもと高取峠にあったが、武士の試し切りによって頭部は上高野へ飛び、下半部は峠の坂を転げ落ちてここにとどまったので祀ってあるとのこと。花崗岩製で高さ51㎝、幅37㎝、上端の欠損部で34㎝ある。像は胴部以下が残っていてその高さは32㎝、蓮華座は幅28.5㎝、高さ11㎝。向かって左に「十月三日」と刻まれている。向かって右側に紀年銘があったと思われるが欠損のため不明。室町期の紀年銘石仏と推測される。なお、石の磨滅は坂を転がってきたものではなく、おそらく川の上流から流れてきた結果と推測される。
5	高野地蔵尊	●			21		●			●		高野共同墓地内にある迎え仏。元文3(1738)年に造立された像高105㎝の丸彫り立像。奉納者は大坂天満や堂島の在住者で、田端の高取峠地蔵と一部に同一人物の名が見られる。
6	地蔵(上高野)	●			21		●			●		上高野集会所敷地内の堂宇に安置された像高50㎝の丸彫り坐像で、かつて地蔵として祀っていた石仏が、松岡秀夫によって弥生時代の銅鐸鋳型片であることが判明し、歴史博物館に収蔵されたため、昭和58(1983)年の千種川堤防修復後の地蔵堂新築とともに新たに造立されたもの。平成10(1998)年現在地に移転。
7	高取峠地蔵	●			21		●			●		現在は田端集会所敷地内にあるが、かつては高取峠の街道沿いにあった。元文4(1739)年に造立された丸彫りの立像。平成15(2003)年に現在地に移転。「田端地蔵尊」とも呼ばれる。奉納者は大坂天満や堂島の在住者で、田端の高野地蔵尊と一部に同一人物の名が見られる。
8	地蔵(春日)	●			21		●			●		赤穂自動車教習所東にある、像高76㎝の丸彫りの石造坐像。
9	づれの地蔵さん	●			21		●			●		野中橋東詰めにある、文政12(1829)年造立の石造半跏像。かつては千種川左岸の赤穂市斎場北に安置されていたが、県道周世尾崎線の道路拡張工事に伴い現在地に移転した。平成9(1997)年に地蔵堂新築。
10	赤穂市斎場の石仏群	●			21		●			●		赤穂市斎場敷地内には、市内各地から移された六地蔵が計222体、地蔵菩薩像が7体安置されている。
11	中井君玄端甫之墓碑	●								●		興福寺境内にある。井上養山の子として正保2(1645)年に広島で生まれた中井昌直は、中井竹庵の養子となり、父とともに龍野藩主脇坂候に仕えたが、宝永3(1706)年官を辞して大坂に移り住む。享保元(1716)年、赤穂に移り医院を開業する。字を玄端と号した。墓碑は享保5(1720)年建立。
12	藤田乏悠君墓碑	●								●		興福寺境内にある。藤田宗短は、字を乏悠という。宝永4(1707)年に病で死去し、総州關宿邑(千葉県関市)にて葬られる。墓碑は宝暦6(1756)年に建立し、仏経を一巻埋めたという。
13	東閣先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。藤田東閣は赤穂森藩の医官であり、名を温信といった。字は恵淑、東閣はその号である。墓碑は明和6(1769)年に建立。
14	久保江雲墓碑	●								●		興福寺境内にある。姫路の生田先生に師事し、煮塩の業、医学を遂げた。寛保3(1743)年に大疫、翌年の延享元(1744)年に卒。墓碑は安永2(1773)年に建立、赤松滄州撰。
15	河野魯斎墓碑	●								●		興福寺境内にある。宝暦9(1759)年生まれ、赤松滄州の次男である。河野氏の養子となり、城郭、溝池の制から機械用兵に精通した漢学者。名を通綸、字は大経、通称は二郎平、魯斎と号した。天明6(1876)年没。墓碑は同年建立。
16	滄州先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。赤松滄州は享保6(1721)年生まれの漢学者。赤穂藩医、大川耕斎の養子。名を鴻、字を国鷺、通称を良平、滄州と号した。寛政13(1801)年没。墓碑は享和元(1801)年に建立。
17	柳田廣川先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。柳田武佐衛門は、明和6年(1769)年に三代武佐衛門の子として生まれ、領内にて講釈、教示を行った。墓碑は文政元(1818)年に建立。
18	文水逸菴墓碑	●								●		興福寺境内にある。藩医、藩公より号逸菴を賜る。明治26(1893)年に59歳で没。文水妣延原艶子(妙逸)大正5(1916)年没。墓碑は大正6(1917)年に建立。田淵淳蔵謹表。
19	斎月淳蔵先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。田淵斎月は文水先生の長子。東京大学で医学を学び帰郷後、尾崎、新浜、那波町の村医、小学校医、兵庫県知事の金碑、赤穂町長の銀盃を戴く。大正9(1920)年に56歳で死去。墓碑は同年建立。延原幹三謹識。
20	幹三延原先生夫婦の墓碑	●								●		興福寺境内にある。田淵逸菴の第3子。延原氏を嗣ぎ、東京斎生学舎の開業医試験に合格、米国クーパー大学の医学博士の学位取得。赤穂郡医師会長学校医会長。昭和15(1940)年に64歳で病没。墓碑は昭和17(1942)年に建立。花岳伯仙撰書。
21	貢斎先生久保一學墓碑	●								●		興福寺境内にある。内海藤太夫(常信)の次子で久保氏を嗣ぎ、柳田氏に子なく再娶、尾崎村を嗣ぐ。享和元(1801)年に52歳で病没。墓碑の建立年月日不明。久保為益謹誌。
22	友蘭田淵先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。田淵医院、父淳節の第4子。寛政8(1796)年生まれ、嘉永3(1850)年に55歳で病没。建立年月日不明。
23	御大典記念碑	●								●		北野中天満宮境内にある。昭和3(1928)年建立。
24	亀ノ甲旧石記念碑	●			32	●	●			●		春日神社境内にある。亀の甲井堰は赤穂藩森家時代にかさ上げ修理され、明治28(1895)年の千種川改修の時撤去された。築造のため石材を亀の甲より採掘すると、中世にも稀な一つの奇石があり、基盤の如く斑点がありこれを基盤石と名付けた。保存会を作り、大正13(1924)年に春日神社境内に記念碑を建立したことを記す石碑。
25	基盤石（亀ノ甲旧石）	●			32	●	●	●		●		春日神社境内にある。大正13(1924)年建立。亀の甲井堰より採掘された基盤石。従三位子爵源忠怒書。
26	蔵民露影碑（大本重太郎）	●								●		長楽寺境内にある。赤穂郡(上郡町)高田村に明治3(1870)年に生まれる。小学校訓導、高雄、赤松、岩木の各学校の校長、砂子区長となり村道改修などに尽力した。墓碑は昭和8(1933)年建立。
27	山崎寅三郎先生之墓碑	●								●		長楽寺境内にある。明治11(1878)年砂子生まれ。茶・華道師範。南山、茶道久田流師範代として狐峰庵宗延と、また華道本法未生流第二世として叡昌斎南甫と号す。息継ぎ井戸側に狐峰庵を構え、茶花を子女に教えた。墓碑は昭和25(1950)年建立。
28	杏屋仙吉墓	●								●		高野田端集落内にある、「勝負師」と呼ばれた杏屋仙吉の墓。明治12(1879)年建立。
29	上高野遺跡		●		34						●	上高野銅鐸鋳型片が見つかった周辺にあたるが、現在のところ集落跡は発見されていない。
30	高取山古墳群		●		20 34						●	21基の横穴式石室墳が発見されている。現在のところ出土遺物はそれほど多くないが、6世紀末～7世紀前半頃に築造されたものが多いとみられる。
31	高取山積石塚古墳群		●		34						●	高野・田端集落の裏山、高取山の南東斜面の山裾から中腹にかけて分布し、横穴式石室墳の間に交じって積石塚古墳が点々と6基発見されている。径はいずれも10m以下であるが、積石が崩れており円墳であるかは明らかでない。石室は箱式石棺というより竪穴式石室の性格をもつ。
32	八重山古墳		●		34						●	高取峠の頂上から旧道を西へ入った高野字八重山の斜面にある。古墳は封土の流出等によって消滅。
33	高伏山古墳群		●		20 34						●	高取山の南側の最高峰、標高280mの高伏山山頂から西方へ尾根伝いに200mばかり行ったあたりに3基散在している。いずれも崩壊・盗掘をうけている。このような高所に墳墓を構築していることから、山頂付近に生活基盤があったか、農業地帯の田端と海岸地帯の児島との中間にあり、両地帯と交流する集団であったのではないかと推測される。
34	南野中中洲遺跡		●		20 34						●	坂越橋から1.6kmほど下流に南野中地区に属する中洲がある。渇水時にはかなり大きな中州となり、千種川西岸に接するほどであるが、増水時には水没。昭和51(1976)年、この中州で砂利採取作業がおこなわれた時、多数の土器が出土。
35	南野中川岸遺跡		●		20 34						●	昭和51(1976)年の台風17号に伴う千種川大洪水による河川改修がおこなわれた際、赤穂大橋の上流700mの西岸において土砂に交じって数点の土器が採集された。
36	高野遺跡		●		20 34						●	千種川東岸の比較的広大な平野にある。未調査ながら土器が採集されている。
37	浜市遺跡		●		20 34						●	民間開発によって発見された遺跡で、弥生時代中期の集落跡のほか、古代、中世の掘立柱建物跡が発見された。
38	上高野銅鐸鋳型発見地		●		20 34						●	昭和51(1976)年、地域住民が祀っていた石仏が弥生時代の銅鐸鋳型片であることが判明した際、聞き取り調査によって発見地が推定された場所。
39	尼子山城跡		●		20 29 32 34		●				●	標高259mの山頂部にあり、尼子将監義久により築かれたという。山頂は平坦で中央部がややくぼれ、4段からなる曲輪が残り、井戸跡もある。永禄6(1563)年義久落城説もあるが、義久は出雲富田城落城後、出家して慶長15(1610)年まで生きているので、一族が在城したとも考えられている。
40	荒神社(上浜市)		●		21 33		●			●		西山寺に隣接してある。祭神は火魂神。
41	荒神社(浜市)		●		21 33		●			●		集落を見渡す山麓にあり、南向きの社殿が建っている。開拓の神でもある火魂神を祀る。境内には稲荷社のほか道祖神・縁結びの神も祀る。

坂越（千種川流域）地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
42	荒神社(砂子)		●		21		●			●		祭神は火魂神である。かつては現在地より100m東の山麓にあったが、大正末期か昭和の初めに移築されたという。この場所は砂子御山と呼ばれ、参道には大間・小間も建てられていた。境内には塞の神を祀る。
43	天満宮(北野中)		●		21 33		●			●		祭神は菅原道真である。境内には春日神社や荒神社を合祀する。かって春日神社は後山、荒神社は字新田に祀られていた。安政2(1855)年銘の手洗石がある。
44	春日神社(南野中)		●		21 33		●			●		祭神は天児屋根命で、南野中の鎮守の神として祀られている。境内には水神社と金毘羅社がある。金毘羅社はかつては亀の甲井堰の堤防上にあったものを合祀したものである。
45	尼子神社		●		20 21 33		●			●		祭神は尼子将監義久で、尼子山上にも祀られている。境内には三宝荒神社、ニイガキ社などがある。ニイガキ社は義久と運命をともにした側室ニイガキの君の霊を慰めるために建立されたという。山上の鳥居は安永3(1774)年、境内の手洗石は文政5(1822)年の紀年銘がある。
46	愛宕神社跡		●		21		●			●		浅野長直は、正保2(1645)年に赤穂に入封し、翌年正月24日近藤正純に命じて城の鎮守として愛宕山社を建立させた。この地は城の丑寅(北東)にあたり鬼門となるため、厄除けと武運繁栄・国家安全を祈って社を建立したといわれている。現在、社殿は朽ち果て玉垣と鳥居を残すのみである。
47	光蓮寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院。本尊は阿弥陀如来。創建は大栄3(1523)年、開祖は僧宗玄、寛文元(1661)年に山号紫雲山となっている。
48	正覚寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派に属し、本尊は阿弥陀如来。僧覚阿により正中2(1325)年に開基される。寛文元(1661)年に本願寺第九世実如上人から寺号を授かる。山号は宝林山。明治37(1904)年に火災、明治43(1910)年に再建。
49	真覚寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院で、本尊は阿弥陀如来である。寺伝によれば、永正5(1508)年に僧善入によって開基されたと伝えられている。山号は金剛山。
50	興福寺		●		21 32		●			●		臨済宗妙心寺派の寺院で、本堂に聖観世音菩薩像、開山堂には盤珪国師木像を安置している。平安末期頃に創建され、藤原氏と関係が深いと伝えられるが明らかではない。盤珪は慶安3(1650)年北野中に庵を設け、寺を中興し、弟子は5万人余りを数え、播磨一円のみならず全国に47寺を開創したともいう。山号は春日山。境内には赤穂藩家老森家、柴原家、柳田家の累代墓をはじめ赤松滄州、中井玄端、藤田東閣、柳田美郷等の文人の墓があるほか、文政元(1818)年造立の地蔵菩薩像、板碑形後背をもつ半肉彫り阿弥陀如来像がある。播州赤穂坂内33カ所と播州赤穂郡33観音霊場の12番札所である。
51	専光寺		●		21		●			●		浄土真宗大谷派に属し、阿弥陀如来を本尊とする。寛永6(1629)年開基。創建時は西本願寺に属していたが、浅野時代に東本願寺の布教所となり、浅野赤穂藩主より大谷派に転派を命ぜられ現在に至る。山号は亀甲山。
52	誓教寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院。本尊は阿弥陀如来。元文3(1738)年に僧無能の開基。山号は三光山。寺宝の三界六道図絵は16幅、色彩も鮮やかで保存状態も極めて良く、江戸末期頃の作と推察されている。かつては隔年で5月上旬に「御絵解法要」が行われ、赤穂周辺から多くの参詣者があり賑わった。現在は4月最終日曜日に「御絵解法要」が行われている。
53	西山寺		●		21 34		●			●		行基菩薩が開山、観照上人が中興と伝わる。尼子氏の所願寺となるが焼失し、元禄中頃に再建。享保年間に焼失、元文3(1738)年再建、現在に至るという。山号は宝壽山。参道には像高112cmを測る丸彫りの半跏像がある。
54	長楽寺		●		21 32 34		●			●		聖武天皇の神亀年間勅令を奉じて布教遊説し、神亀元(724)年に建立と伝わる。山号は宝性山。寺院として塩田を有したのはここのみという。
55	慈光寺跡		●		21		●			●		赤穂藩主浅野長直が、赤穂城築城工事成功を祈願して正保2(1645)年に建立した。開山は秀恕。願主は近藤正純。真言宗遠林寺末寺。山号は愛宕山。
56	三木家住宅		●				●					近代和風建築。
57	近藤三郎左衛門正純宅跡		●				●					近藤正純は浅野家の軍学師範、家老。慶安元(1648)年から寛文元(1661)年に及ぶ赤穂城築城の縄張りを行う。築城後は城内に屋敷を構えた。
58	亀甲跡		●		27	●		●				江戸時代には、熊見川の水を堰き止めて城下町側に川を流し、舟運の便を図った。また、石堤は道の役目を兼ねた。
59	盤珪和尚座禅岩		●		21		●			●		盤珪永琢は、元和8(1622)年、揖西郡網干浜田村(現在の姫路市)に生まれる。幼いころから仏門に入り、寛永15(1638)年に赤穂城下の随鴎寺の雲甫全祥のもとで得度。盤珪は慶安3(1650)年に北野中に一庵(現在の興福寺)を設け、雲甫の教えである座禅の難行修業を重ね、不生を説いた。興福寺の裏山の険しい山道を登ると中腹あたりに盤珪が座禅修業したと伝わる岩がある。
60	万歳所		●							●		出征する兵士、伊勢詣などで旅立つ人を身よりの者や近所の人々が見送り、別れを惜しんだところで、時には万歳三唱をしたという。当時の風習で、今はその面影はない。
61	尼子山の大岩		●		20		●			●		尼子山山頂にある大岩。眺望が良い。
62	高取峠		●		27 32 35		●		●			高野田端から相生方面に向かう峠で、赤穂市と相生市の境界に位置する。刃傷事件を伝える早かごが通った道として「早かごモニュメント」が設置されているが、昔のルートと現在のルートは違っている。昔話「二人の旦那はん」の舞台にもなっている。(赤穂の昔話)
63	砂子停車場跡		●		27 30		●	●				赤穂鉄道の播州赤穂駅から2.5㎞北にある停車場で、乗客がある場合のみ列車が停車していた。駅舎は待合所のみの簡便な建物であった。また、裏山には保線用の土取場があった。
64	赤穂鉄道坂越駅跡		●		27 30		●	●				赤穂鉄道坂越駅は浜市にあり砂子駅間0.8㎞、目坂駅間1.8㎞であった。駅には本家(事務所・待合所・社宅)と便所があった。また、駅前から坂越港行きの赤鉄バスが発着した。
65	JR赤穂線		●		27		●					昭和26(1961)年に播州赤穂－相生間が赤穂線として開通し、山陽本線と接続している。
66	JR坂越駅		●		27		●					昭和26(1951)年に播州赤穂－相生間に赤穂線が開通した際に設置された、坂越の玄関口。
67	大崎資料館		●		21		●					江戸時代より代々瓦師を務める大崎氏が、私設で開設した瓦の資料館。
68	誓教寺絵説き			●	21					●		寺宝の三界六道図絵は16幅。色彩も鮮やかで保存状態も極めて良く、江戸末期頃の作と推察されている。かつては隔年で5月上旬に「御絵解法要」が行われ、赤穂周辺から多くの参詣者があり賑わった。凄惨な描写により、見る人々へ地獄の恐怖心を強く焼きつけ、この世における善行を説く仏の教えを実現させている。
69	尼子山の雨乞い			●	20					●		尼子山は一名『雨乞い山』ともいい、干ばつの年は雨乞いをした山ともいう。
70	導水路と加里屋川の景観			●	28	●	●					浜市から山崎山麓までは、山側に上水道の導水路があり、平野側に加里屋川が流れており、旧赤穂上水道の導水路景観がよく残されている。周辺は赤穂鉄道軌道跡の桜並木などもあり、景観に優れている。
71	浜市			●	32 36		●					地名。上流の木津が材木の積出港で、その下流の浜に市がたったと推定される。

坂越（千種川流域）地区　　歴史文化の視点１

17．古代の謎

【ストーリー】

高野から南野中にかけては、様々な謎が残されている。

高野の平野は非常に広く、古代から集落が営まれてきたと推定されるが、今のところ、ムラの痕跡は見つかっていない。ただ千種川からは、当時としては全国最大の弥生時代の銅鐸鋳型や、完全な形の土器が発見され、また隣接する高取山古墳群には、市内でも珍しい積石塚古墳があるなど、特異なものが目を引く。さらに高伏山古墳群にいたっては、標高約 250m の山頂に古墳が築かれており、なぜこのような高い場所に築かれたのかは不明である。

これら群集墳の存在、及び河川から発見された遺物については、上流から流出してきたことなどが推測されているが、今なお事実が解明されていない。



上高野銅鐸鋳型片



尼子山城跡



高伏山古墳群からの眺望

坂越（千種川流域）地区　　歴史文化の視点２

18．村ごとの社寺と伝承

【ストーリー】

「庄内」と呼ばれた、ここ千種川下流域は、かつての自然堤防ごとに村が営まれ、水田地帯が広がっていた。地区内に多数見られる神社や寺院は、江戸時代に営まれていた村ごとに祀られていたものであり、区画整理事業が行われた現在でもそれぞれに残されていて、鎮守の森としての役割を果たしている。

こうしたなか、「不生禅」と呼ばれる独自の仏法を説いた盤珪が悟りを開いた座禅岩や、高野の誓教寺では、六道絵による絵説きが今も行われるなど、その伝承が続けられている。


荒神社（砂子）


尼子山からの眺望


春日神社（南野中）


誓教寺六道絵
（誓教寺蔵）

高雄地区

地　勢

赤穂市を南北に貫流する千種川が、有年地区の平野を抜けて蛇行しながら河口部へ向かうまでの流域部分にあたる。中山から木津までを範囲とし、平地部は、千種川を中心として約 1km の幅を保ちながら、南の坂越地区へと続く。

もっとも大きな地形の転換部は、高雄集落西側の西山であり、千種川が西山にぶつかって北側の周世へと迂回し、蛇行して再び南流をはじめる一帯は、人々が生活するうえで肥沃な土壌を提供し、また江戸時代には、貴重な上水道の取水口となった。現在も、中山には赤穂市の統合取水井堰が、木津には上水道の取水口があり、赤穂市の水甕となっている。

歴　史

高雄・根木遺跡出土の土器片から、この地に人々が住み始めたのは、縄文時代晩期（約 3,000 年前）にまで遡る。弥生時代中期になると、周世・入相遺跡、高雄・根木遺跡、木津・段ノ上遺跡など千種川流域のあちこちで集落が営まれるようになる。古代には周勢郷に属し、高雄・根木遺跡で建物跡が見つかっている。

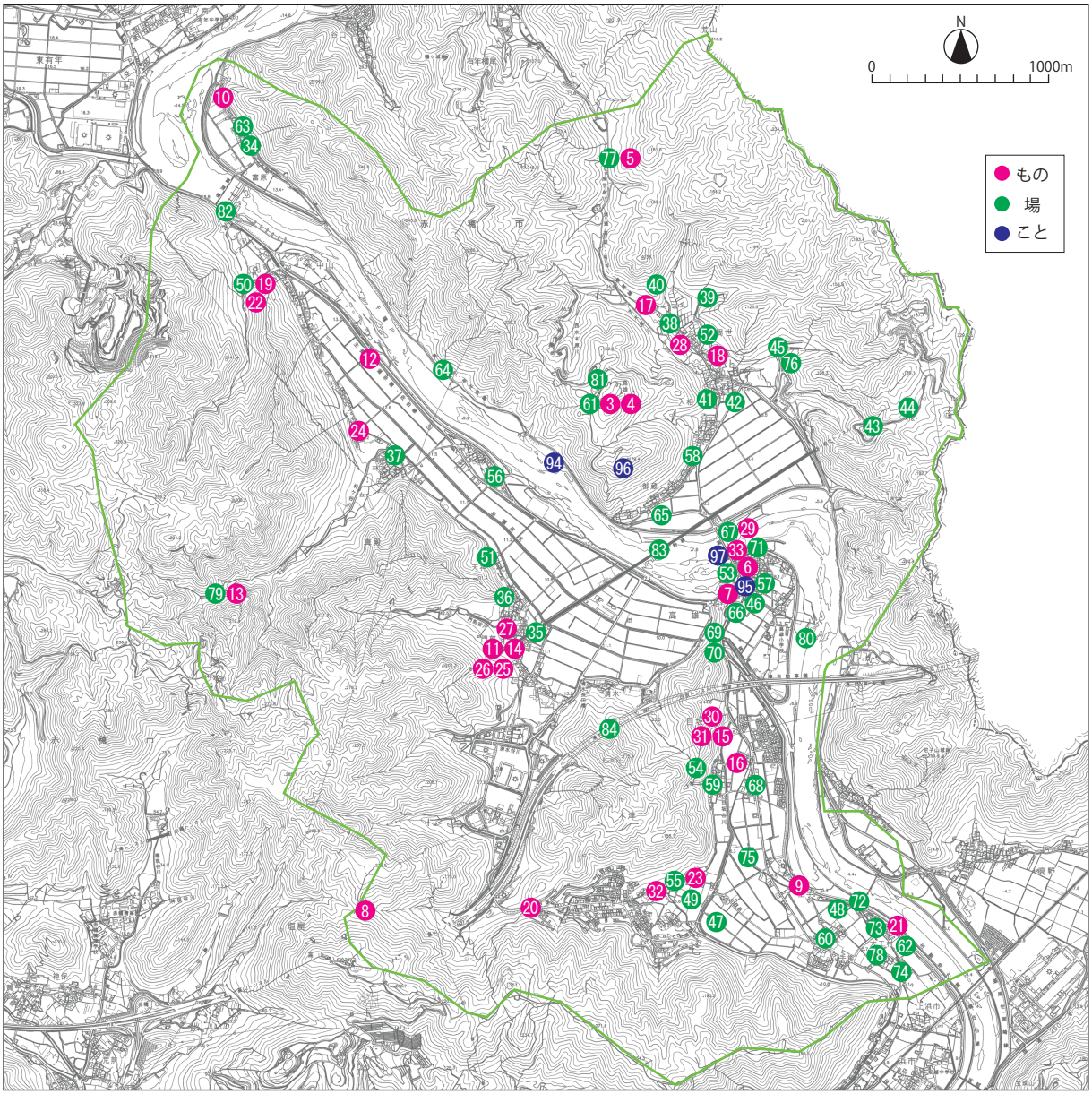
鎌倉時代には京都の大原法華堂領となり、御厩田があったという。南北朝期頃には山岳寺院として神護寺や安楽坊が築かれるなど、寺院との関係が深く、真殿には「門前」の地名も残る。

江戸時代の木津には、大工の集住する村があって、旧赤穂郡内を中心に木津大工の手による神社仏閣が残るほか、この地は大工村を中心として上流から木材を集積し、製材・加工のうえ下流部から域外へ送る港としての機能が推定されており、下流には市場としての「浜市」の地名が残る。

表 25　高雄地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
縄文時代後期	約4,000年前	高雄・根木遺跡で縄文土器出土
弥生時代中期	約2,000年前	周世・入相遺跡、高雄・根木遺跡、木津・段ノ上遺跡等でムラが築かれる
古墳時代後期	7世紀	真殿・門前古墳群、周世・黒谷古墳、周世・水木原古墳、周世・宮裏山古墳群、周世・船戸山古墳群が築かれる
古　代	8～9世紀	高雄・根木遺跡で掘立柱建物跡が6棟見つかる
	10世紀ころ	「周勢郷」と呼ばれていた（「和名類聚抄」）
	長暦元(1037)年	古文献に「坂越庄」がはじめて登場する（「平安遺文」）
	文治年中(1185-1190)年	神護寺の創建（神護寺縁起）
中　世		木津・段ノ上遺跡で多数の大型掘立柱建物、中国輸入の青磁・白磁が出土
	正嘉元(1257)年	このころ、周世は京都の大原法華堂領となっていた
	正和2(1313)年	寺田氏が「坂越庄内浦分堤木津村畠二町」の地頭職（「東寺百合文書」）
	明応4(1495)年	安楽寺開基（「万福寺総末寺帳并邑郡附」）
	文亀元(1501)年	龍泉寺開基（「万福寺総末寺帳并邑郡附」）
	天文12(1543)年	専念寺開基（「万福寺総末寺帳并邑郡附」）
	天文15(1546)年	常徳寺開基（「万福寺総末寺帳并邑郡附」）
近　世	元和2(1616)年	切山隧道が完工し、旧赤穂上水道が完成する
	寛永15(1637)年	これ以後、木津大工の社寺建立記録が残る
	元禄15(1702)年	この頃には旧赤穂上水道の取水口が木津に移動する
	宝永3(1706)年	根木村・目坂村・木津村・真殿村・中山村明細帳 木津村は人口961人のうち大工が68人であった
	享保6(1721)年	木津村ほか4ヵ村に水論起こる
近　代	明治22(1889)年	市制・町村制により高雄村の成立
	明治25(1892)年	千種川氾濫により大被害
	明治27(1894)年	高雄村役場焼失、千種川改修工事完成
	大正9(1920)年	赤穂鉄道千種川架橋工事竣工
	大正10(1921)年	赤穂鉄道（赤穂－有年間）が開通
	昭和7(1932)年	高雄橋が竣工
近　代	昭和26(1951)年	高雄村、赤穂町、坂越町と合併し、赤穂市となる 国鉄赤穂線開通、赤穂鉄道廃止
	昭和41(1966)年	中山に赤穂市統合井堰が完成
	昭和42(1967)年	富原橋、高雄橋が竣工、目坂に月見草団地ができ、自治会発足
	昭和47(1972)年	山陽新幹線、新大阪－岡山間開業
	昭和48(1973)年	高雄トンネル開通
	昭和49(1974)年	台風8号の集中豪雨により高雄橋が陥没流失
	昭和54(1979)年	1976年の台風17号で被害を受けた高雄小学校の新校舎完成
	平成3(1991)年	木津に清水工業団地が竣工、千種ハイランドの造成が進む
	平成12(2000)年	赤穂ふれあいの森が完成

高雄地区全図



高雄地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	真殿村検地帳 (付)真殿村方文書一括 (村301点)(自治会227点)	◎			16							文禄3(1594)年以降、昭和30(1955)年代に至る長期にわたる真殿の村方文書。中でも文禄3(1594)年の宇喜多の検地帳の存在が注目される。村方をめぐる領主の領民支配の推移をたどりうる資料がすべてそろっている村は、播磨においては真殿村をおいて他になく、村方資料として極めて貴重である。市指定。
2	三十六歌仙絵扁額 (付)布袋図絵馬1面	◎			16							寛文6(1666)年、浅野長直によって、赤穂の周世にある高雄山の神護寺に奉納された6面の絵扁額である。扁額絵は藩主の奉納物にふさわしく、板面に金箔を張りつめ、その上に扁額1枚に6名づつの歌仙が濃彩によって描かれている。各歌仙がやまと絵の手法によりながら、それぞれに個性豊かな相貌で表されていることから江戸時代初期の作風を伝えるものである。市指定。
3	神護寺石造物 大石良欽寄進手洗石1基 大石良重寄進石燈籠2基(1対)　大石良雄寄進石燈籠2基(1対)	◎			16		●			●		神護寺は、寛文3(1663)年に山王権現の神宮寺として浅野長直によって再建されたと伝えられる。神護寺境内の山王神社に至る石段上にある石灯籠2基一対は寛文6(1666)年銘、社殿前にある石灯籠2基一対は貞享4(1687)年銘、手洗石は寛文5(1665)年銘がある。周世が赤穂城の鬼門にあたることから、浅野長直が築城工事の完成祈念等のために神護寺を再興したと伝わる。市指定。
4	水神	●			16		●			●		神護寺跡境内の山王神社前にある井戸脇に祀られている、像高42㎝の半肉彫り石仏。
5	周世坂峠地蔵	●			16 27		●			●		周世坂の峠にあり、高さ185㎝、像高147㎝。造立年月日不明。立像、丸彫り、前座の正面には「教忍　南無阿弥陀仏　真心」左には「妙専　妙善　恵聞　義超　義奥　願西」とあり、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。前座は別の地蔵の台座である可能性がある。峠の地蔵が悪党を追い払った昔話が残る。(赤穂の昔話)
6	高雄薬師地蔵	●			16		●			●		高さ58㎝、像高33㎝。座像、丸彫り、台石正面には「薬師如来」、右に「明治四十(1907)年」、左に「施主大崎嘉平同人ハル」と刻む。左手に宝珠を持つ。像と台石の石材が異なる。
7	高雄切山地蔵	●			16		●			●		高さ166㎝、像高90㎝。立像、丸彫り。台石正面に「明治三(1870)年　南無阿弥陀仏　庚午正月日」　右に「尼師良道　カ□コや六兵ヱ　世話人　吉久喜平」　左に「村中　前田弥五郎　吉久徳右ヱ門」と刻む。地蔵は合掌している。
8	枯木地蔵	●			16		●			●		塩屋と木津とを、結ぶ山道の頂上にある身の丈96㎝の立像で、基壇等を含めると1.8mある。仏身を完全に造り出した一尊丸彫の石仏で、右手に錫杖、左手に宝珠をもつ。慶応2(1866)年7月23日、大津屋善右衛門他8名によって建立された。かつては8月23日に地蔵盆が行われ、農作業を休んで村の代表が参る日とされていた。
9	道標地蔵	●			14 15 16 27 28	●	●			●		千種川沿いの県道赤穂佐伯線を木津井堰から400mほどの上流側に遡ったガードレール脇にある。高さ68㎝、20㎝×18㎝を測る花崗岩製のもので、正面上部には半肉彫りの地蔵、その下に「右　城下道　　左　阪越浦　下道　牛馬無用」と刻まれている。「下道」に牛馬が入ってはならないのは、城下への道の脇を流れていた水道の導水路の衛生管理のためである。別名：上河原道標地蔵。
10	六地蔵(富原)	●			16		●			●		富原共同墓地内にあり、安政2(1855)年に造立された。1体のみ石材が異なる。
11	六地蔵(門前)	●			16		●			●		門前共同墓地内にあり、像高61～68㎝を測る。もともとは真殿門前に建てられていたが、新幹線建設に伴って移転した。
12	出口地蔵	●			16		●			●		中山地蔵ノ下堤防ノ外に安置されている、半肉彫りの立像。像高54㎝。
13	釣瓶落し地蔵	●			16		●			●		真殿村の住民によって中山林谷に祀られた、明治21(1888)年造立の半肉彫りの立像。像高87.5㎝。
14	迎え仏(門前共同墓地)	●			16		●			●		真殿の門前共同墓地に祀られた迎え仏。享保17(1732)年造立、像高77㎝の丸彫りの立像。
15	迎え仏(目坂共同墓地)	●			16		●			●		目坂の共同墓地に祀られた迎え仏。像高160㎝の丸彫り立像。
16	地蔵(稗田)	●			16		●			●		もともとは坂越にあったとされるが、明治の終わりから大正初めに工事の際に移された。像高45㎝の半肉彫りの立像石仏。
17	周世黒谷刻印石	●								●		黒谷の西側尾根中腹、周世黒谷古墳より上方20mのところに不思議な刻文のある石がある。約1m×0.6mの規模の石材で、いくつかの正円に直線が貫通している図柄が複数描かれている。
18	高雄村道路元標	●			14 27		●					周世の八幡神社鳥居前の県道高雄有年横尾線脇に立つ。高さ66㎝、25㎝角の花崗岩製で、正面に「高雄村道路元標」背面に「兵庫縣」と刻む。
19	大避神社記碑	●			14					●		大避神社(中山)境内にある。明治32(1889)年建立、明治初年に社殿を改築したことが書かれている。
20	大山積大明神碑	●			14					●		木津ハイランド頂上にある。建立年月日不明。
21	太子堂縁起碑	●			14					●		大正10(1921)年建立。聖徳太子による乾坤山隆魔寺の創建以来、1,337年目にあたる大正15(1926)年5月21日と刻まれている。
22	中山地蔵跡碑	●			14					●		大避神社(中山)境内にある。明治42(1909)年建立。
23	御大典記念植樹碑	●								●		大避神社(木津)境内にある。大正4(1915)年に在郷軍人らによって建立された。
24	梅流軒花香翁碑	●			14					●		赤穂郡中山村の人。華道教授で農業の傍ら弟子を薫陶したとある。明治33(1900)年建立。
25	室井治平先生の墓	●			14					●		真殿門前墓地内にある。江戸末期から学校創立までの間、子供たちに勉強を教えていたとされる。明治19(1886)年建立。
26	室井林助先生の墓	●			14					●		真殿門前墓地内にある。お花の先生で、その一方村の指導者として村会議員、助役、村長ならびに郡会議員など30年近く村のために活躍。事業家としてブドウ栽培、酒・醤油の販売業も手掛けていた。晩年は真殿夕雲寺の僧侶となった。大正13(1924)年建立。
27	敬神表功碑	●			14					●		刻まれた文字の揮毫は大石神社の宮司となっている。昭和5(1930)年建立。
28	里正大谷甚右衛門墓	●			14					●		周世墓地内にある。明治14(1881)年、周世村の村長。治水工事をして洪水から村人を守るため堤防を築くなど、村のために功績を残したことに感謝し、墓碑を立てた。
29	中原先生墓誌銘	●			14					●		建立年不明であるが、碑文の中に明治22(1889)年と刻まれており、学問に切磋し数十人の弟子に教授したとある。
30	里正山本直治郎碑	●			14					●		明治39(1906)年建立、里正とは村長の意。
31	室井資吉頌徳碑	●			14					●		建立年月日不明。村の庄屋で、土木工事などの功績が刻まれている。
32	山本源左衛門墓碑	●			14					●		建立年月日不明。池坊流の先生の墓。
33	高雄橋銘板	●			14 27	●						昭和26(1951)年の赤穂鉄道廃止後、根木鉄橋は道路橋として改修された。昭和54(1979)年に新橋が架け替えられた際、現・高雄橋の南詰め付近のコンクリート柱に銘板が埋め込まれた。
34	富原遺跡		●		34						●	昭和61(1986)年のほ場整備に伴って発掘調査され、弥生時代後期や中世の土器片などが出土した。
35	真殿・門前遺跡		●		34						●	昭和40(1965)年に、山陽新幹線建設に先立って兵庫県教育委員会による発掘調査が行われ、須恵器、土師器、宋銭などが出土している。
36	真殿門前古墳群		●		34						●	集落の西側に迫る山裾から山中の雑木林の中に4基の古墳がある。このあたりの山の字名は門前奥である。門前奥の南側の谷を清水谷とよび、この谷の奥にも古墳が1基ある。この谷の入口付近にも古墳があったようで、須恵器や勾玉が採集されている。古墳はいずれも横穴式石室墳。
37	真殿・林遺跡		●		34						●	真殿字林にある土器採集地。
38	周世宮裏遺跡		●		34						●	周世八幡神社の裏側にある土器採集地。
39	周世宮裏山古墳群		●		34						●	周世八幡神社の裏山斜面にあり、古墳群は27基で構成されるが、ほぼすべて小型の横穴式石室墳であることが特徴である。
40	周世黒谷古墳		●		34						●	当初、周世宮裏山28号墳と呼ばれていたが、築造時期が早く性格も異なることから別記された。遺物は、石室の入り口近くで10片以上に壊れた須恵器の破片が重なりあって出土した。
41	周世水木原古墳		●		34						●	高雄山の東、山裾に連なる民家のすぐ裏にある。墳丘の前半部は削りとられているが、後半部は残っており径は約13m。遺物などがないため築造年代は明らかでないが、同じ周世の宮裏山にある群集墳に比べて著しく大きい。
42	周世・入相遺跡		●		34						●	現在の周世集落と山陽新幹線との間の沖積平野にある。県道敷設に伴って兵庫県教育委員会による発掘調査が行われ、弥生時代中期にはじまる遺跡が見つかっている。特に弥生時代後期では良好な土器群が見つかった。
43	船戸山古墳群		●		34						●	周世集落東方の山には、横穴式石室を埋葬主体とする5基の古墳がある。これらは6～7世紀前半にかけての群集墳である。

高雄地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
44	船戸山遺跡		●		34						●	古墳時代から平安時代にかけての土器が散布する。千種川流域において貴重な資料である。
45	周世開遺跡		●		34						●	周世集落東側の山中にある土器採集地。
46	高雄・根木遺跡		●		34						●	ほ場整備と公民館、体育館新築工事に伴って発掘調査された遺跡で、縄文時代後期から江戸時代までの遺物、遺構が見つかった。特に弥生時代後期の竪穴住居内の土器群や、古代の官衙に関係すると思われる均整な配置をもつ掘立柱建物群が注目される。旧千種川の護岸や旧赤穂上水道導水路跡なども確認されており、西山に守られた比較的安定した土地で、営々と集落が営まれてきたことがよくわかる。
47	木津・原遺跡		●		34						●	千種川の氾濫原及び中州の微高地に立地する遺跡。鎌倉時代以降の建物跡が見つかっている。鎌倉時代の遺構として掘立柱建物跡7棟、土坑8基、溝跡1条、柱穴跡多数があり、室町時代の遺構として掘立柱建物跡10棟、土坑8基、柱穴跡多数がある。赤穂市内では室町時代の建物跡の調査例が少なく、貴重である。
48	木津・野垣内遺跡		●		34						●	ほ場整備事業に伴い発掘調査された遺跡で、江戸時代頃の掘立柱建物跡が発見されている。
49	木津・段ノ上遺跡		●		34						●	弥生時代中期から始まる集落跡で、中期末の竪穴住居跡4棟、後期の竪穴住居跡4棟が検出された。また中世になると、多数の掘立柱建物跡とともに青磁、白磁などの多種多様な遺物が出土し、周辺地域との交流が活発であった集落の存在が明らかとなっている。
50	大避神社(中山)		●		16 31 33		●			●		江戸時代、中山は尾崎の八幡宮を氏神としていたが、明治に東有年の八幡神社の氏子に変わる。明治7(1874)年5月奉納の鎧武者絵馬が一番古く、それ以前に建てられたと推定。明治9(1876)年9月17日に神前形の石灯籠が、明治32(1899)年に狛犬、玉垣が奉献されている。境内には享保16(1731)年造立の餓鬼地蔵と呼ばれる舟形後背をもつ半肉彫り石造地蔵などの石仏が見られる。
51	天満宮(真殿)		●		16 33		●			●		千種川の東側周世から有年へ通ずる道路沿いに祀られていたのを現在地に移したものである。真殿はかつて周世の八幡宮の氏子だったが、「村の鎮守の神」として天満宮を移しかえたと伝わる。
52	八幡神社(周世)		●		16 31 33		●			●		祭神は、誉田別命、息長足姫命、武内宿祢。境内には荒神社、右には火魂神と秦河勝を合祀、左には火魂神を祀るほか、土俵が設置されている。現在は毎年の秋祭りで獅子舞が舞う舞台となっている。
53	荒神社(高雄)		●		16 33		●			●		祭神は火魂神で、千種川の流れを緩やかにする西山の中腹にある。高雄村にとって、西山は千種川の洪水から守ってくれる堤防の役割を果たし、人々が洪水回避祈願として建立と伝わる。元は西山の南にあったという伝承あり。
54	荒神社(目坂)		●		16 33		●			●		祭神は素戔嗚尊、境内に稲荷社がある。かつての目坂から真殿へ通ずる山道の峠に鎮座している。真殿から峠を越えて移住してきた人々が祀ったものではないかと推測される。
55	大避神社(木津)		●		16 31 33		●			●		明暦2(1656)年大工山の麓に建立と伝わる。皇極天皇3(644)年蘇我氏の迫害から逃れるため難波津を船出した秦河勝は、坂越に漂着後、鳥井の坂を超えて船で千種川を上り、この地に上陸したという。上陸地点に祀られているのがこの神社で、境内には稲荷神社、荒神社がある。
56	夕雲寺		●		16		●			●		真殿村民の希望により寛政11(1799)年に万福寺内の夕雲坊を移したものである。明治11(1878)年に寺号の公証が許可された。真宗大谷派で山号は播龍山。
57	安楽寺		●		16 29		●			●		安室荘の大聖寺城主安室五郎（文安5年＝1448卒）が発心し、真殿村本西門前に一坊を建てて、安楽坊と号したといわれ、現真殿門前の字名は安楽坊が在ったことに由来。寺は明応4(1495)年8月13日に道誓が開基。真言宗から真宗大谷派に改宗し現在地に移転。明治31(1898)年、平成元(1989)年の大改修を経て現在に至る。山号は佛日山。
58	専念寺		●		16 29		●			●		真宗大谷派。文亀3(1503)年、僧玄誓の開基。玄誓は俗名山名三郎左衛門時氏といい、白旗城の戦で敗れ家来36人とともに周世に逃れて仏門に入り、草庵を結び開基したとされる。『万福寺総末寺帳幷邑郡附』では天文12(1543)年開基とする。第三世玄智が本願寺より寺号を賜った山号は一乗山。境内のイチョウは巨木で有名。明治26(1893)年に本堂再建。
59	常徳寺		●		16 29		●			●		開基は文亀元(1501)年、釈順正による。万福寺下で真宗大谷派に属する。文亀元(1501)年、目坂村字清水に一宇を建て、龍永寺と号す。後に真宗に改め寺号を山号にし、さらに寺号常徳寺をうけ、以後現在地に移して西本願寺派に属していたが、元禄12(1699)年には東本願寺派に入った。『万福寺総末寺帳幷邑郡附』では天文15(1546)年開基とする。山号は龍永山。
60	龍泉寺		●		16 29		●			●		開基年月不詳。『龍泉寺略縁起』によると文亀元(1501)年3月、住職の教祐は高野村田端にあった釈善寺が零落するにつけ、壇頭平松三郎左衛門と村内の郷士とで相談し、真宗大谷派への改修の旨を本願寺第9世實如上人に届け、木津村の柳地区に一宇を建てたという。現在は手能に移転、万福寺の末寺。山号は七夕山。境内には子安地蔵（像高78㎝の丸彫りの坐像地蔵）がある。
61	神護寺跡		●		16 29 32		●			●		周世集落の西方山頂にあり、文治2(1186)年、文覚が開創。『播磨鑑』によると同寺を天台宗の寺とし天平神護の元号(765～767)にちなんで寺号が付けられ、和気清麻呂が建立したとある。その後、豊臣秀吉の中国侵攻で兵火にかかり、後年に再建されたと伝わる。浅野長直寄進の扁額、大石良欽寄進の手洗石の他、大石内蔵助良雄寄進の石灯籠などがある。山号は高雄山。内には昭和7(1932)年に造立された半肉彫りの立像石仏がある。
62	太子堂(木津)		●		16		●			●		旧大工村の東の堤防のすぐ下にある。境内には大正11(1922)年に奉納された太子堂縁起を書いた碑がある。境内正面には太子堂が建てられており、壁を隔てて北側に観音堂（護摩寺）があるほか、本堂の東側には稲荷社が祀られている。創建は寛文2(1662)年で龍泉寺の支坊となっている。
63	富原停車場跡		●		14 27 30	●	●	●				大正10(1921)年に播州赤穂－有年間を結ぶ軽便鉄道が開通した。富原駅跡は真殿駅間1.5㎞、有年駅間2.3㎞の停車場で、乗客がある場合にのみ列車が停車していた。駅舎は無人で、待合所のみの簡便な建物であった。
64	真殿駅跡		●		14 27 30	●	●	●				大正10(1921)年に播州赤穂－有年間を結ぶ軽便鉄道が開通した。真殿駅は乗客の乗り降り用の駅ではなく、蒸気機関車に給水したり、石炭を積み込むための駅であった。駅舎は本屋と便所のほか、設置軌道脇に給水場としての貯水槽が設置されていた。
65	周世停車場跡		●		14 27 30	●	●	●				大正10(1921)年に播州赤穂－有年間を結ぶ軽便鉄道が開通した。周世駅は根木駅間0.8㎞、真殿駅間1.5㎞の停車場で、乗客がある場合にのみ列車が停車していた。駅舎は無人で、待合所のみの簡便な建物であった。
66	根木駅跡		●		14 27 30	●	●	●				大正10(1921)年に播州赤穂－有年間を結ぶ軽便鉄道が開通した。根木駅舎は駅長が常勤していた。ここから千種川を渡った山裾に線路が通っていた。
67	根木鉄橋基礎跡		●		14 27	●		●				赤穂鉄道が千種川を渡る時に設置されていた鉄橋の石造基礎跡。
68	目坂停車場跡		●		14 27 30	●		●				大正10(1921)年に播州赤穂－有年間を結ぶ軽便鉄道が開通した。目坂駅は坂越駅間1.8㎞、根木駅間1.1㎞の停車場で、乗客がある場合にのみ列車が停車していた。この駅から根木駅にかけて登り坂となり、しばしば列車が立ち往生した。
69	切山隧道		●		15 28	●	●					切山隧道は赤穂上水の水路の基点で、池田輝政時代、慶長19(1614)年から3年の歳月をかけ、時の代官垂水半左衛門勝重の指揮のもと完成。その後、取水口は高雄の船渡井堰に変更され、さらに元禄15(1702)年までには木津取水井堰に変更された。隧道は昭和38(1963)年に拡幅や出入口部の強化等の改修工事が行われた。
70	高雄川堰道		●		15 28	●						昭和51(1976)年の豪雨災害を受けて実施した河川改修事業の一環で、昭和60(1985)年に完成した。切山隧道の水量拡大のため隧道の拡張が兵庫県によって計画されたが、赤穂市が旧赤穂上水道関連施設の保存を図っていたことから、計画を変更して切山隧道に隣接して新たに高雄川堰道を築いたもの。
71	高雄船渡取水井堰		●		14 15 28	●	●					旧赤穂上水道の取水口は、浅野時代は切山隧道から高雄船渡へと移動した。千種川護岸に築かれていた高瀬舟の船渡を活用し、水を引き入れて旧赤穂上水道の取水口としたものである。今も千種川の中に散乱する井堰の石を見ることができる。
72	木津取水口・取水井堰		●		14 15 28	●	●					旧赤穂上水道の取水口は、元禄15(1702)年までには木津へと変更されていた。ここでは水を一部堰き止めて西側に取水し、浜市の山裾まで導水されていた。高瀬舟の通行の妨げになることから、一部の堤を開けていたという。
73	導水路跡		●		15 28	●	●					地下1.5mのところから木津取水井堰と旧赤穂上水道とを結ぶ導水路跡が見つかった。導水路は幅約5mを測り、4段の石垣(深さ約1m)によって護岸されていた。
74	悪水路との交差		●		15 28	●						木津取水井堰から導水された上水と周辺の農業用水(悪水)が交差する地点で、この上水は城下北の戸島枡まで山裾を流れていた。
75	三ケ村の樋跡		●		15 28	●	●					上水道の取水口が高雄船渡から木津に変更されると、それまで木津井堰から取水していた浜市・砂子・北野中への農業用水は高雄取水井堰からの導水路に接続され、「三か村の樋(溝)」と呼ばれるようになった。

高雄地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
76	猪垣と坊主開き		●		16		●					段々畑の四方を石垣で囲み，集水施設・貯水池・井戸などが見られる。この地を「坊主開き」と呼び，高雄山神護寺の僧侶が薬草園として開拓したものと伝える。
77	周世坂峠		●		16 27 32 35	●	●					赤穂市南部より有年へ通じる陸路で、かつては川沿いではなくこのルートが主要道だったという。峠に地蔵が安置されている。
78	大工村		●		14	●						旧集落名。18、19世紀頃、赤穂城下の大工とは別に堂宮建築を得手とする、独立した大工集団が木津に集まっていた。木津大工の構成については『永富家住宅普請帳』に詳しい。現在は太子堂が江戸中期の様式を保ち、小さいながら凝った造りで、その歴史を偲ばせている。
79	釣瓶落しの滝		●		16	●	●					真殿・中山林地区から大津へ通ずる山道を1.2kmあまり登ると、2段になった約8mの滝がある。滝の上には明治21(1888)年5月に真殿・中山の世話方、室井定四郎と前田弥四郎が寄進した地蔵尊が祀られている。
80	ハマウツボ自生地		●		16	●	●					高雄地区を流れる千種川流域一帯は、水辺の風景だけでなく、河川敷や湿地・氾濫原など、自然度が高く、護岸工事された河川流域では見ることができない動植物が生息し、貴重な生態系が保持されている。ハマウツボは兵庫県レッドデータブックでは絶滅危惧種ランクAに指定されている。高雄地区には自生地があり、地域での観察会や学習会が実施されている。
81	赤穂ふれあいの森		●		16		●					有年横尾の験行寺から周世の神護寺跡までを含む約180haの森林区域。シイ・アカマツ・コナラ・シリブカガシといった植生を見ることができ、遊歩道、休憩所、展望台やキャンプ場などが整備されている。神護寺近くにはロッジ「高雄山荘」、モリアオガエルのいるひょうたん池、シイ林、ヒノキ林があり、森林散策を楽しめるようになっている。
82	赤穂市統合取水井堰		●		15 28	●						かつて農業用水は村ごとに引かれていたため、その権利をめぐって対立が起こるなどしていた。昭和42(1967)年に中山に赤穂市統合取水井堰ができ、ようやく解消された。
83	山陽新幹線		●		27	●	●					昭和47(1972)年に新大阪－岡山間が開業した。
84	山陽自動車道		●		27	●	●					昭和57(1982)年に開通した。なおインターチェンジ設置の際に調査されたのが堂山遺跡である。
85	中山			●	32		●					地名。中世は有年庄に属し、はじめ尾崎の八幡宮の氏子であった。村の北端にある鍋子城(中山城)は赤松満祐の一族岡豊前守らの居城で、城郭の井戸には霊水が湧くという。
86	周世			●	32 36		●					地名。周世の地名は『和名類聚抄』に周勢(須世)と初出する。
87	真殿			●	32 36		●					地名。13世紀に土豪真殿氏が住んでいた。背後の山には5基の古墳があることから、地名の起源はその数世紀も以前であろう。この土地が古代～中世は周世郷に属していたことは「周世郷真殿村」と『文禄検地帳』に記載されていることからわかる。
88	門前			●	36		●					地名。門前の名は15世紀の初めに大聖寺城主安室五郎義長が背後の山裾に安楽坊を建立していたことによる。
89	高雄			●	32 36		●					地名。鎌倉時代の僧文覚の開基と伝える高雄山神護寺に由来する。江戸時代は根木村といったが明治維新以後、周世村と合併し立巌村となった。明治22(1889)年には目坂、木津、真殿、中村の各村と合併して高雄村となった。
90	根木			●	32 36		●					地名。根木のおこりは昔、周世八幡神社の神官(禰宜)の居住地から変化したものと推測される。
91	目坂			●	32		●					地名。古い昔の交通は、奥の谷から大谷平へ峠越えであったので、木の芽(目)と峠の(坂)より目坂となった。
92	木津			●	27 32 36	●	●					地名。木津の字源から木の集散港の意で、千種川河口の材木集散地であった。大工山・奥山から材木を伐り、積み出していたのであろう。自然堤防ができてから、平地に移り住んだところに大工村・手能(手斧)の名が残る。
93	立巌			●			●					地名。たていわ、りゅうがん。千種川の流れを遮り立ちはだかる岩山のようであり、深淵・奇岩・老松の景勝地であった。大正時代頃には絵葉書にも写真が使われていた。現在の高雄小学校の前身である立巌小学校の由来にもなっている。
94	タデの原風景			●	16	●	●					赤穂の語源は、タデの花が咲く様子を赤い穂に見立てているとの説がある。千種川河川敷に広がるタデの群生地。
95	輪中集落			●	16	●	●					現在の高雄集落は、千種川の堤防に囲まれた景観を見せている。
96	神護寺跡周辺からの眺め			●	16		●					南を臨むと、千種川とそれに寄り添う集落、新幹線が見渡せる眺望が得られる。
97	荒神社(高雄)からの眺め			●	16		●					北を臨むと、山、千種川、新幹線の広大な眺望が広がる。
98	新幹線スポット			●	16 27		●					山陽新幹線の撮影スポットからは、千種川や高雄地区を一望でき、眺望が良い。

高雄地区　　歴史文化の視点１

19．高瀬舟と赤穂鉄道

【ストーリー】

市内を南北に貫流する千種川には、かつて舟運が発達し、高瀬舟による南北流通が活発に行われていた。「木津」は、文字通り大工村へ運び込むための「木の津（港）」であり、木津・段ノ上遺跡では、中世の輸入陶磁が出土するなど、河口に立地する港のような性格をもっていたようだ。

高雄地区では、かつての波止は失われているが、旧赤穂上水道の木津取水井堰跡には、高瀬舟通行路として使われた堤の名残を見ることができる。

高瀬舟による舟運は、大正 10（1921）年に敷設された、軽便鉄道の赤穂鉄道による陸運によってその役目を終えた。赤穂鉄道の軌道跡の多くは市に寄付されて現在は道路となっており、根木鉄橋の基礎が現在も残るほか、周世から富原そして北の有年地区に抜ける道は、現在も鉄道路線の景観、雰囲気をそのままに残している。

このように、高雄地区には現在も舟運や陸運の景観、名残がみられ、今にその歴史を伝えている。



千種川



赤穂鉄道真殿駅跡



根木鉄橋基礎跡



木津取水井堰跡

高雄地区　歴史文化の視点２

20. 農業用水と赤穂城下の水甕

【ストーリー】

400 年前、池田家が加里屋に城と城下町を新たに築く際、低地であったために水の確保が大きな課題となった。当時の代官、垂水半左衛門は 7km 上流の山にトンネル（切山隧道）を掘削し、ここから千種川の水を取水することによって、城と城下町への導水を可能とした。

江戸時代の水道は、飲用水と農業用水を兼ねているのが一般的であり、赤穂でも浅野長直が戸島新田村の開発のため、上水道に戸島用水を接続した。

近代までの農業用水は村ごとに築かれており、渇水時には水争いなど、緊迫することもあったが、昭和 41（1966）年に赤穂市統合取水井堰が中山に完成し、問題は改善された。

かつての上水道を取水した木津には、今も取水口が設置され、赤穂市の水甕となっている。

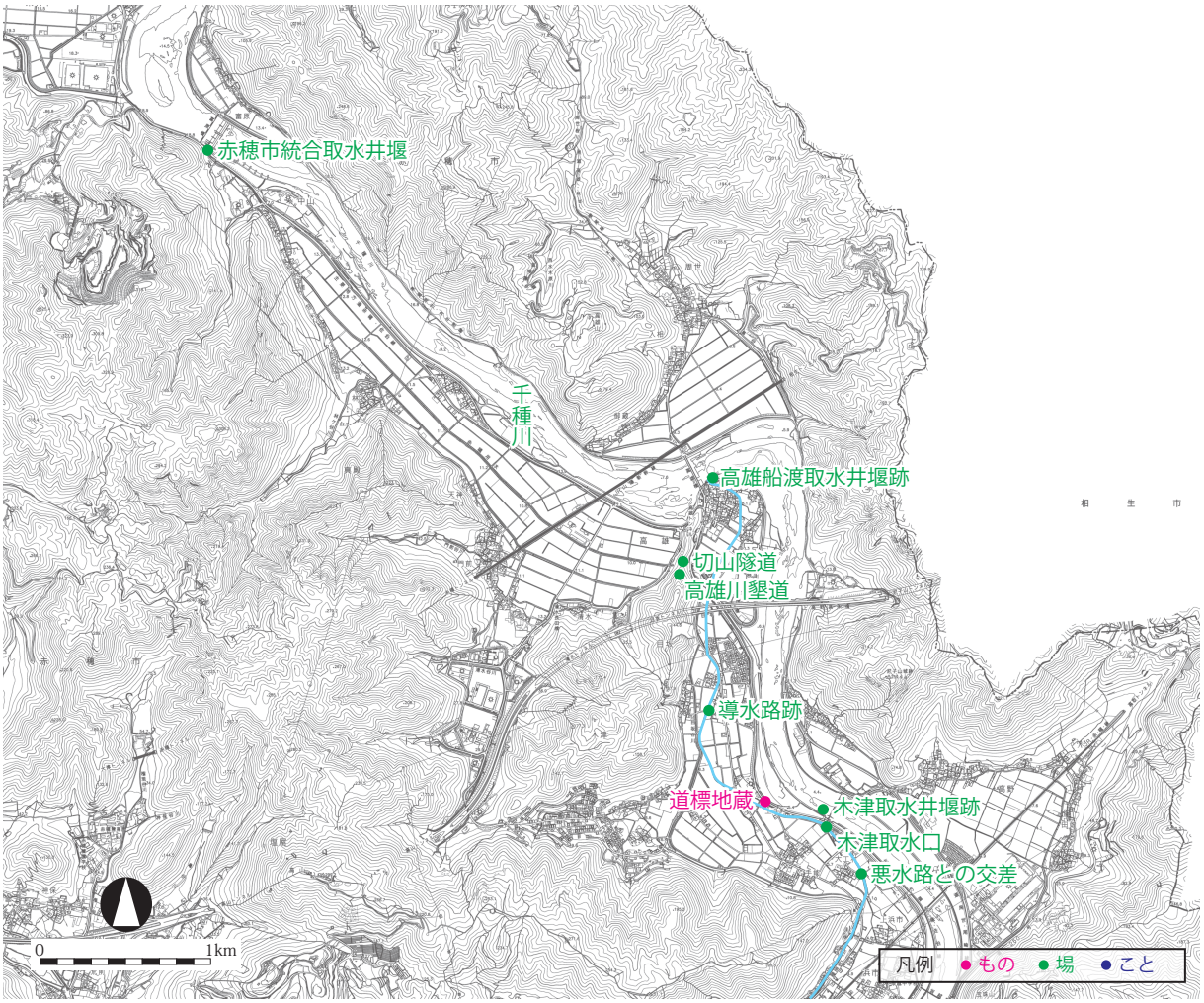


高雄船渡取水井堰跡


切山隧道


導水路跡


道標地蔵



高雄地区　　歴史文化の視点３

21．里山の景観と村々の社寺

【ストーリー】

高雄地区は、千種川と山に挟まれた平野が狭く、集落は洪水の被害を受けにくい、千種川が生み出した自然堤防上に営まれていた。江戸時代には、一村ごとに神社と寺が築かれ、山に寄り添う社寺景観、旧村落の信仰のよりどころとして築かれた社寺景観など、自然と調和した集落と里山の景観が保たれている。

高雄地区は、清流千種川と森の景色が融合した景観が素晴らしく、特に、神護寺跡周辺から南側を望む、千種川と山々の景観は絶景である。

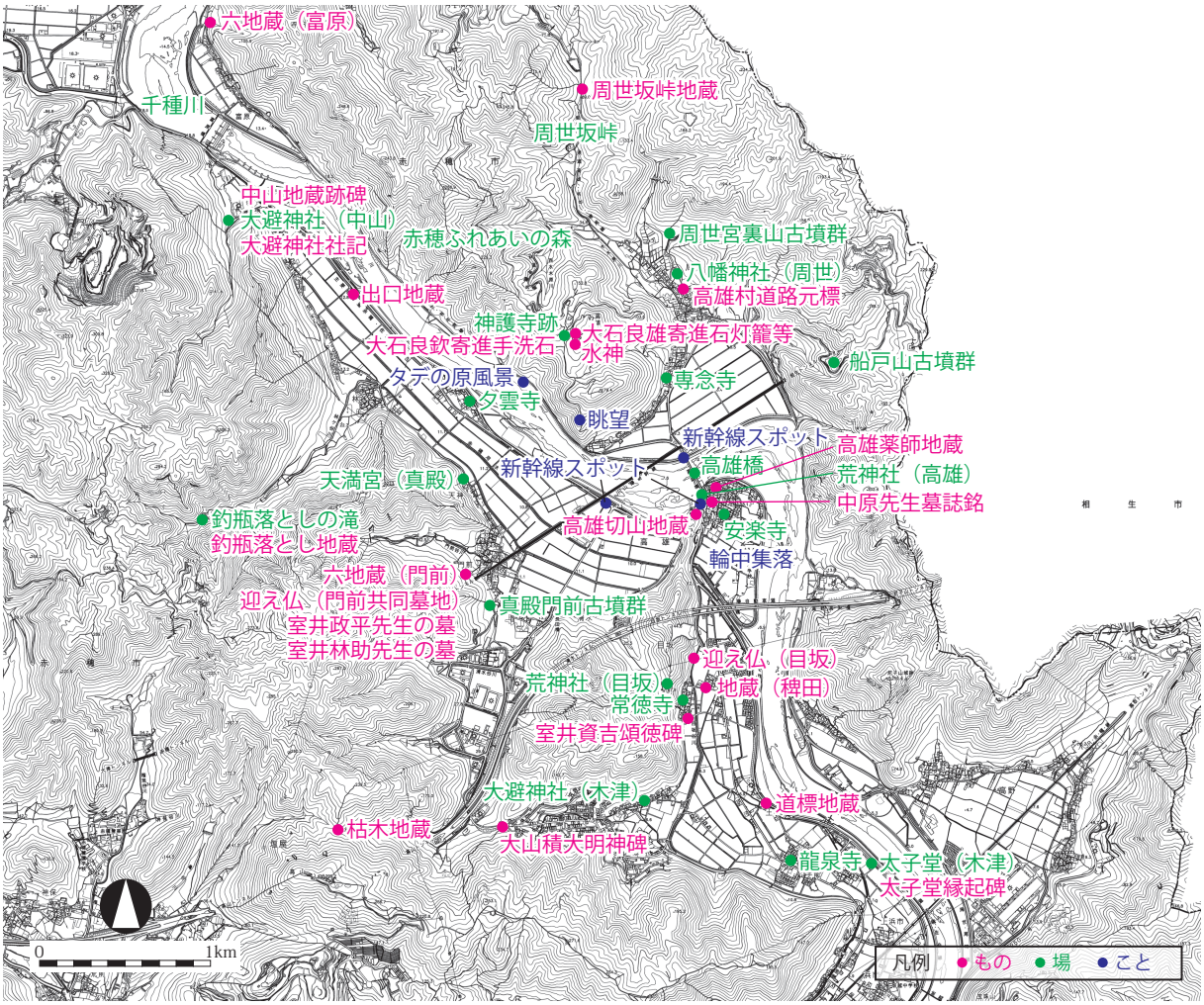
さらに高雄橋とその周辺は新幹線の撮影スポットとしても著名であり、千種川の美しさを体感できる地区となっている。


赤穂ふれあいの森からの眺望


大避神社（中山）


八幡神社（周世）


荒神社（高雄）



有年地区

地　勢

有年地区は、市面積の約 40% を占め、そのほとんどが山林部である。千種川を挟んで東西に長い平野があり、東西からそれぞれ矢野川、長谷川が千種川に注ぎ込んで肥沃な土地を生み出し「文化財の宝庫」と呼ばれるほど多くの古代遺跡が存在する。北は上郡町、東は相生市と接し、西方にはしばらく平野地形がないため、中世の筑紫大道、近世の西国街道が通って宿場町が栄えた。

歴　史

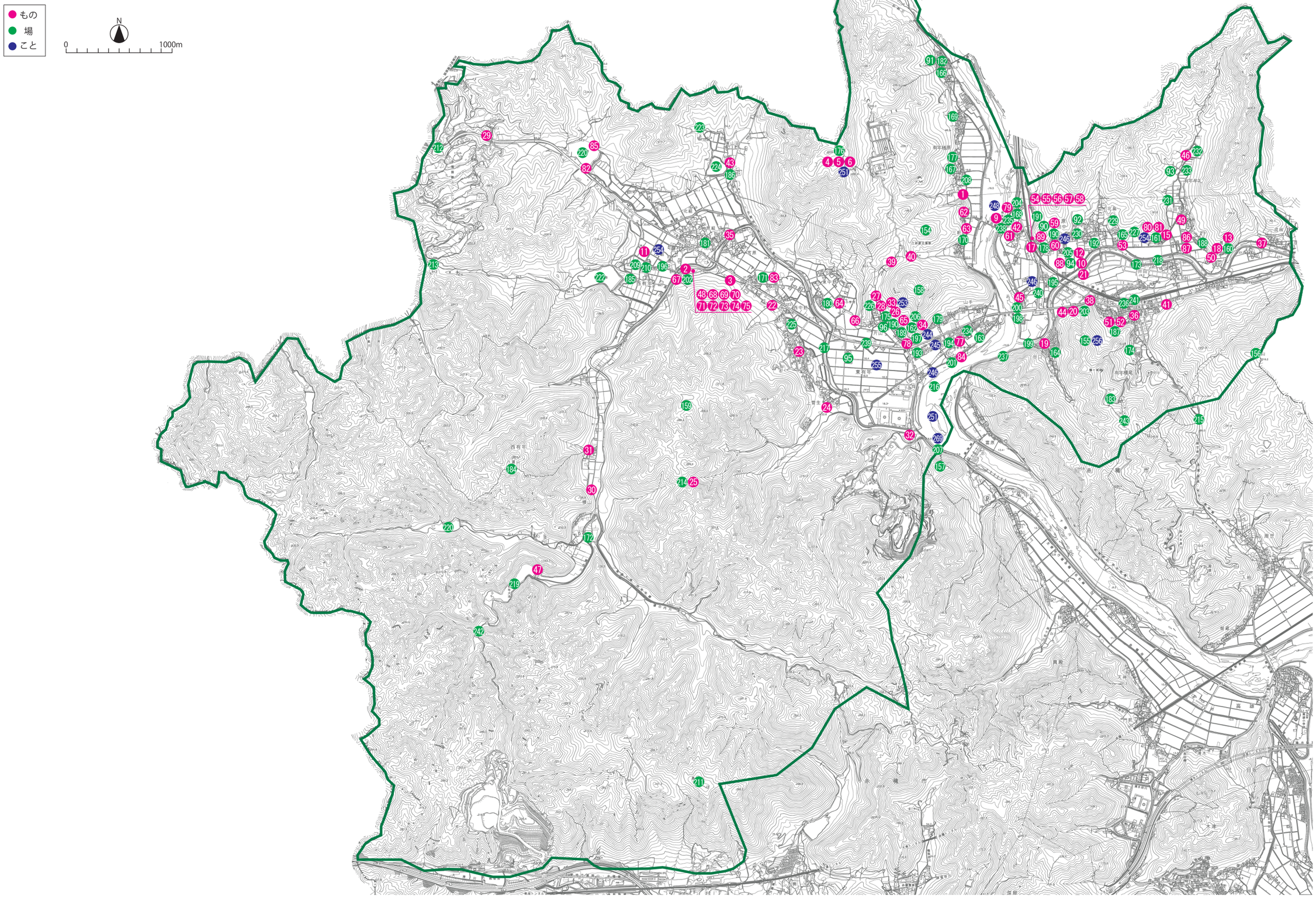
西有年・馬路池遺跡では約 10,000 年前の石器が採集されている。人々の本格的な居住開始は縄文時代後期（4,000 年前）であり、その後は弥生時代中期以降の多くの遺跡が見つかっている。また、市内唯一の前方後円墳である放亀山 1 号墳（古墳時代前期）、千種川流域最大の中期古墳である蟻無山 1 号墳が所在するほか、古墳時代後期には有年原・有年牟礼の奥山一帯には 150 基以上の古墳が築かれるなど、当時の隆盛を物語る。

古代には周世郷と大原郷に属し、平城宮出土木簡中に大原郷と秦氏の記載がみられるなど、渡来系氏族の痕跡がうかがえる。中世になると山岳寺院として遍照院や光明寺などが栄えたほか、中世山城が多数築かれていることから、地理的に重要な地であったことがうかがえる。近世には、有年宿が置かれて西播磨最大の宿場町となり、近代には山陽鉄道や赤穂鉄道が敷設されるなど、交通の要衝として発展した。

表 26　有年地区　年表

時　代	年　代	で　き　ご　と
縄文時代早期	約10,000年前	西有年・馬路池遺跡で石鏃出土
縄文時代後期	約4,000年前	ムラが営まれる（クルミ遺跡、上菅生遺跡、有年牟礼・井田遺跡、東有年・沖田遺跡）
弥生時代中期	約2,000年前	有年各地で大規模なムラが営まれはじめる（東有年・沖田遺跡、有年原・田中遺跡、有年牟礼・井田遺跡など）
弥生時代後期	約1,800年前	大型墳墓が築かれる（有年原・田中遺跡、有年牟礼・山田遺跡）
古墳時代中期	5世紀初頭	蟻無山1号墳が築かれる
古墳時代後期	6世紀後半～7世紀	横穴式石室をもつ古墳が150基以上築かれる（塚山古墳群、木虎谷古墳群など） 大規模集落が営まれる（東有年・沖田遺跡、有年牟礼・井田遺跡など）
古　代	7世紀～8世紀	官衙的な掘立柱建物群が築かれる（有年原・田中遺跡、西有年・長根遺跡）
	8世紀	赤穂郡大原郷の秦酒虫、秦造吉備人に関する木簡出土（平城宮出土木簡）
	9～10世紀	有年牟礼・山田遺跡で「秦」線刻土器出土
	10世紀ころ	「大原郷」「周勢郷」と呼ばれていた（「和妙類聚抄」）
	長和4(1015)年	「有年庄」は藤原公任家の所領となっていた（有年庄の初出） この時の有力農民層（寄人）41名のうち12名は秦姓であった（「朝野群載」）
	建長5(1253)年	「有年庄」は京極殿（藤原師実）領となっていた（「近衛家所領目録」）
中　世	興国6(1345)年	黒沢山光明寺に題目笠塔婆が建てられる
	享徳年中(1345～1350)	本郷掃部守直頼、有年大鷹山に城（有年山城跡）を築く
	延文3(1358)年	有年楢原中所に地蔵立像板碑が建立される
	14～15世紀	西有年に六道山遍照院が築かれ、向山五輪塔、西有年宝篋印塔、光明寺町石が建立される
	天文6(1537)年	本願寺証如、善祐門徒の赤穂郡宇念(有年)庄井内村惣道場に方便法身尊形を下付
	天文20(1551)年	明源寺開基
	永禄11(1568)年	鍋子城主小河丹後守、鴾ヶ堂城の太田治内を攻めるが敗れる
	天正5(1577)年	高野須城主赤松正澄、羽柴秀吉軍に攻められ上月城で戦死 山内一豊が秀吉から有年に知行700石をうけたとされる
近　世	慶長5(1600)年	池田輝政、播磨1国を領有
	慶長16～17年(1611～1612)	このころ、西有年に宿駅がおかれていた（「慶長播磨国絵図」）
	寛永12(1635)年	参勤交代制の実施に伴い、東有年に宿駅が移されたと推定される
	宝永3(1706)年	赤穂藩として森長直入封、有年は一部支配から外れる
	文政元(1818)年	このころ、有年宿街道両側に100戸を超す人家が並ぶ（「有年宿絵図」）
	文政2(1819)年	黒沢山の龍生坊を栗栖村に移し、山上を奥の院とする
近　代	明治3(1870)年	栗栖村と黒沢村とが合併、東有年村となる
	明治22(1889)年	市制・町村制により有年村成立
	明治23(1890)年	山陽鉄道龍野－有年－三石間が開通し、有年駅が設置される
	明治25(1892)年	千種川氾濫により大被害
	明治43(1910)年	千種川に木橋の有年橋が架けられる
	大正9(1920)年	旧道路法施行により国道2号が認定される
	大正10(1921)年	赤穂鉄道開通、有年駅設置
	大正111922)年	有年村楢原地区において姫路水力電気株式会社から電灯線を引く工事が行われる
	大正13(1924)年	有年楢原に松岡病院が開設される
	昭和6(1931)年	松岡與之助「郷土研究」を発刊する
	昭和16(1941)年	有年文化協会が発会
	昭和18(1943)年	横山の開拓がはじまる
現　代	昭和25(1950)年	松岡秀夫、有年楢原に財団法人有年考古館を設立
	昭和26(1951)年	赤穂鉄道、運行を終える
	昭和30(1955)年	有年村、赤穂市に合併する
	昭和35(1960)年	現在の有年橋が架橋される
	平成7(1995)年	有年原・田中遺跡公園開園
	平成8(1996)年	東有年・沖田遺跡公園開園
	平成11(1999)年	「かぶ～んうね」が完成
	平成12(2000)年	赤穂ふれあいの森が完成
	平成17(2005)年	有年土地区画整理事業はじまる
	平成23(2011)年	財団法人有年考古館が解散、赤穂市立としてリニューアル開館
	平成29(2017)年	旧JR有年駅(明治23年建築)が撤去され、橋上駅舎となる

有年地区全図



※埋蔵文化財包蔵地は未掲載。

有年地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	地蔵立像板碑	◎			24 25 29 35		●			●		中世の石仏では市内最大で、延文3(1358)年の紀年銘をもつ。この石仏は彫られた石が地中から生え出たように見えることから「はえぬき地蔵」もしくは「歯抜け地蔵」と呼ばれている(赤穂の昔話)。近隣には阿弥陀如来と地蔵菩薩の石仏がある。県指定。
2	石造宝篋印塔(往来南)	◎			22 24 25 29		●			●		西有年の旧西国街道に沿った北側にあり、もとは300mほど西の街道筋にあったが、ほ場整備に伴い平成7(1994)年に現在地に移築。紀年銘がないが、隅飾突起の反りや切込みの具合、塔身内の月輪や梵字の大きさ、薬研彫りの彫法、反花座の蓮弁の様式、基礎の格狭間の形などから見て南北朝時代中期ごろ(14～15世紀初頭)のものと推測される。地元では、大将軍の墓と伝わる。市指定。
3	向山五輪塔	◎			22 24 25 29		●			●		向山の北麓、中世の筑紫大道(近世の旧西国街道)に面して立地する、鎌倉時代末から室町時代初頭頃と推定される五輪塔。花崗岩製の高さ約1.7m大形のもので、地輪・水輪・火輪・風輪・空輪のそれぞれの四面に梵字が刻まれている。市指定。
4	石造題目笠塔婆	◎			24 25 29		●			●		黒沢山山頂にある、光明寺本堂跡を取り巻く五輪塔や宝篋印塔群に混じって建立されている。「康永四(1345)年乙酉七月十三日」と刻まれている。市指定。
5	石造宝篋印塔 (光明寺跡)	◎			24 25		●			●		黒沢山山頂の光明寺跡には宝篋印塔や五輪塔が多数残されており、その多くは南北朝期前後の形式を備えていて、寺が最も栄えていた時期を示している。その一つに正面右東部に「建武二(1335)乙亥五月日」、左東部に「金剛佛師良円」の銘をもつ宝篋印塔がある。市指定。
6	光明寺町石	◎			22 24 25 27 29		●			●		光明寺奥の院参道にあり(一部は赤穂市立有年考古館に移設)、五輪塔の地輪部(基礎)を長くした長脚五輪卒塔婆形式のもので、基礎部に経典名や町数、願主名などが刻まれている。市指定。
7	楢原村文書及び 楢原自治会文書 (村1,083点)(自治会1,375点)	◎					●					近世・近代にわたる楢原村文書2,139点、近現代の楢原自治会文書319点からなり、市内最多の村文書である。森赤穂藩が出した領域支配のための藩法・触書が年次を追って書き写されており、藩の行政・経済政策の推移を詳細に捉えることができる。村方の状況に関する多年にわたる史料が連続して遺されているところは希で、楢原自治会文書には、田畑ばかりでなく山林原野の地租改正、地価修正に関する帳簿も西播地域では珍しく揃って残されている。市指定。
8	原村文書	◎					●					寛永2(1625)年以降、昭和初年に至る同地の村方文書(村会所文書)で、長期にわたる村方支配の様子を示したもの。なかでも土地関係では江戸時代を通じての土地台帳が保存されている。山陽道の宿場(東有年)に隣接し、千種川水運の中継地でもあったため、交通運輸に関する通達書などの史料も多い。市指定。
9	有年考古館 収蔵考古資料	◎			23 34						●	松岡秀夫によって昭和25(1950)年に設立された考古・民俗資料館に収蔵された資料で、収蔵資料は地域の歴史文化を理解する上で極めて重要なもの。市指定。
10	有年原・田中遺跡 出土柱部材	◎			23 34						●	発掘調査によって旧河道内から発見された、掘立柱建物の柱部材。材質はヒノキ、時代は弥生時代後期と考えられており、上部に梁をかける凹みがあり、貫を通す穴があけられていることから、倉庫の柱と考えられている。市指定。
11	西有年・長根遺跡 出土木摺臼	◎			23 29 34						●	室町時代の井戸内に投棄されて見つかった木製の木摺臼。全国的に出土例が珍しく、出土遺物としては国内最古の資料である。市指定。
12	有年原・田中遺跡 墳丘墓出土土器	◎			23 34						●	ほ場整備事業に伴う発掘調査によって発見された、大型墳墓群出土の装飾土器群。有年原・田中遺跡墳丘墓は、弥生時代から古墳時代の移行期における埋葬施構として極めて重要であり、墳丘墓の年代を決定づけ、同時期の葬送儀礼の様相を示すものとして貴重である。市指定。
13	黒尾須賀神社義士画像図 絵馬及び奉納額	◎			26				●	●		嘉永2(1849)年に地域住民を施主として奉納された絵馬群。京狩野派とされる菅原永得画の義士絵馬49枚とその奉納額1面で構成される。旧赤穂郡内最古の義士絵馬として市指定文化財(歴史資料)に指定されている。現在、劣化のため歴史博物館に寄託されており、現地にはレプリカが展示されている。市指定。
14	前句集額	◎								●		明和5(1768)年に奉納された前句集額で、当時の庶民の文芸隆盛の様子がうかがえる資料。市指定。
15	牟礼八幡神社 農耕図絵馬	◎			33					●		明治10(1877)年代に奉納された木製扁額で、農作業絵や祭礼絵が九区画に分割して描かれている。描かれた農具と用法がよくわかり、江戸時代末期の農業の実態をよく伝えている。市指定。
16	六地蔵	●			25		●			●		赤穂市南部にあった六地蔵のほとんどは南野中の斎場付近に移築されているが、有年地区については現在も墓場周辺に六地蔵が残り、横山墓地、上北原宮(2か所)、東中野、西中野、上菅生、光明寺、中所、原、河原、谷口、横尾、片山、野田、新田、北畠、井田、山田、黒尾、中島の20ヵ所の分布が知られている。
17	地蔵(田中)	●			25		●			●		蟻無山山麓にあり、舟形後背をもつ半肉彫りの石仏。像高117cm、正徳2(1712)年2月9日の造立。
18	地蔵・阿弥陀如来像 (円明庵跡)	●			25		●			●		かつての庵寺跡に丸彫りの地蔵坐像(像高30cm)、板碑形後背をもつ阿弥陀如来像(像高47cm)がある。
19	月見地蔵	●			25		●			●		かつては戦時中に有年横尾谷口に疎開していた人々によって信仰されていた。像高24cmの丸彫りの石造地蔵。
20	塚の元地蔵	●			22 25		●			●		旧西国街道の一里塚があったところに像高100cmの丸彫りの石造地蔵が祀られている。享保9(1724)年の造立。
21	蛇淵の薬師石仏	●			22 25 35	●	●			●		矢野川の深淵の底から引き揚げられたものと言われ、病気・怪我の治癒や、雨乞いの神として信仰されている。(赤穂の昔話)
22	向山裾地蔵	●			22 25		●			●		国道2号沿いにあるガソリンスタンド造成中に発見された、高さ40cmの花崗岩製の座像。磨滅が激しいが現在はこのガソリンスタンドの東隅に安置されている。
23	清水山登り口の地蔵	●			22 25 27		●			●		はりま台の宅地造成中に発見された、明和9(1772)年銘の地蔵。現在は、はりま台の公園内に安置されている。
24	大山登り口地蔵	●			22 25 27		●			●		上菅生から西有年へ越す峠の入口にあり、大山峠方面へ行く人々や山仕事へ行く村の人の安全を祈願して建立されたもの。50cmと70cmの2体の地蔵でともに座像。建立年代は不詳だが江戸時代のものと推定される。
25	清水峠地蔵	●			22 25 27		●			●		上菅生から横山へ抜ける道の頂上にある、高さ70cmの自然石の立像。光背には「天保九(1838)戊年六月　世話人谷中」と刻まれている。
26	傍示ケ鼻地蔵	●			22 25 27		●			●		旧有年小学校跡地の西、細長く突出した尾根の先端付近を傍示ケ鼻といい、東有年と西有年の境界となっている。地蔵はもと旧国道坂折峠に祀られていたが、この尾根の先端東側の中腹に移築された後、現在は光明寺の境内に移されている。「さかおれ峠の地蔵」とも呼ばれ、高さ2m余りの立像で、当時交通の難所であった坂折峠の安全を願って、時の庄屋であった有年良左衛門が施主となり天保8(1837)年に建立した。
27	寺山地蔵	●			22 25 27		●			●		片山から光明寺への参道、奥池の堤にある。高さ95cmほどの石造で、表に『理覚宗純　本覚知純』裏に『光屋長次良父』の銘がある。
28	共同墓地地蔵 (片山共同墓地)	●			25		●			●		半肉彫りの地蔵菩薩像・阿弥陀如来像がある。像高はそれぞれ36cm、40cm。
29	鮫峠の地蔵 (馬路の地蔵)	●			22 25 27		●			●		かつて交通の難所であった鮫峠の道中安全を願って建立された、高さ1.2mの立像。明治13(1880)年ごろ建立され、明治37(1904)年に再建された。
30	湯の内地蔵	●			25　27		●			●		かつて西有年から大津へ抜ける山道に祀られていた高さ1.6mほどの立像。現在は横山集会所脇に安置されている。
31	地蔵(横山)	●			22 25 27		●			●		かつて大山西峠に祀られていたが、現在は県道横山線沿い六軒家付近に移されている。高さ43cmの半肉彫り地蔵。
32	不動山石仏	●			22 25 27	●	●			●		千種川と長谷川の合流点を不動ケ淵といい、かつては交通の難所であった。迫るような断崖絶壁の岩陰に高さ30cmの不動明王像が祀られていたが、近年は落盤のため現在地に社が建立され、移された。
33	八十八ヶ所石仏	●			25		●			●		光明寺の奥まった山の斜面に、左右に整然と88体が並んでおり、明治明治8～10(1875～1877)年にかけて建立された。ほかに明治10(1877)年頃に建立された三十三ヶ所石仏もある。
34	重ね荒神	●			25		●			●		巨石を二つ重ねた祠。塞の神、稲荷社を祀っているという。
35	原組の道標	●			22 25 27		●					高さ60cm、幅28cmの道標には『是ゟ　右ハ　かみこを里　　左ハ山のさと　道」と刻まれている。現在は原組集会所に移設されている。
36	有年村道路元標	●			22 25 27		●					JR有年駅の南「有年駅前」交差点から県道高雄有年横尾線を南に入り、かつての旧道との交差点付近に建つ。戦後の県道拡幅時に撤去されていたが、平成3(1991)年にもとの位置近くに立て直された。高さ67cm、25cm角の花崗岩製の石標で表「有年村道路元標」、裏「兵庫縣」と刻む。
37	道標(中島)	●			22 25 27		●					矢野川にかかる中島橋の右岸に建つ、高さ62cm、21cm角の道標。『右　上郡　　左　ウネエキ』と並び刻まれ、その中央下には『道』が同記されている。他面には『大正十二(1923)年十月』とある。
38	道標(塚の元)	●			22 25 27		●					国道2号拡幅改修時に取り除かれていたが、地元の協力により平成3(1991)年に元の位置近くに建て直された。「右　上郡鳥取道」「左　岡山広島道」「御大典記念　昭和三(1928)年」と刻んでいる。
39	寺山道標(片山)	●			22 25 27		●					東有年の片山から谷筋の道を登り、砂防ダムから北東へ100mほどのところにあり、かつて楢原と黒沢への道を示したものである。高さ66cm、17cm×15cmの花崗岩製で、「右ならはら　左くろさは」と刻む。
40	寺山道標(三軒家)	●			22 25 27		●			●		有年楢原の三軒家の谷筋を登ったところにあり、かつて片山と黒沢への道を示したものである。高さ56cm、15cm×14cmの花崗岩製で、「右　くろさは　　左　うね」と刻む。
41	村境の道標	●			22 25 27		●					旧山陽道沿いの高山宅屋敷隅にある。高さ50cm、26cm角の村境の石標で、正面に「東　牟礼東村　　西　横尾村」と並び刻まれている。
42	道標(宮前)	●			22 25 27		●					旧国道沿いに東有年集落を西に出たところにあったが、現在、赤穂市立有年考古館に移設されている。左に行けば赤穂城下まで三里、右へ行けば西国街道という内容が刻まれている。

有年地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
43	池魚塚（西有年）	●			25	●	●			●		高さ約1.5mほどの自然石を加工したもので、表に「南无阿弥陀仏」と記された下に横書きで「池魚塚」、側面に「安政五（1858）年戊午三月　□原　宮原中」と刻まれている。目の前にある木ノ目池の池魚に対する供養塔。
44	池魚塚（塚の元）	●			22 25 27	●	●			●		道路改修資金のために売られた池の魚への感謝と供養の塚。天保7（1836）年の年号が見られる。
45	西川須賀神社移転記念標碑	●			25 27	●				●		明治25(1892)年7月23日の千種川大洪水の後、須賀神社(西川)を原村に合祀したことにより、明治42(1909)年に祠跡に記念標を建てたもので、高さ150㎝、幅87㎝を測る。
46	奥池増築記念碑	●			25	●				●		昭和15(1940)年、奥池の増築を記念して建立された。
47	有年大池竣工の碑	●			25	●				●		戦前から食糧不足、農地の開拓、農業用水の確保のために県事業によって竣工した有年大池の竣工記念碑。昭和28(1953)年建立。
48	山林保護記念之碑	●			25					●		西有年は山林所有者が多く、野山も1,300町歩と広大な面積を持っているが、鋸を持って山に入ることは快く思われておらず、時々村役人によって取締りが行われていた。この碑文からは、違反者を取り締まった安藤佐太郎の数々の労苦に対する感謝の念を知ることができる。明治34(1901)年に建立。
49	岩本吉太郎崇徳碑	●			26	●				●		昭和27(1952)年、若くして神戸で米商店を営んで収入を得、郷里の有年牟礼八幡神社、山田地区の池改修等に多額の寄付を行った岩本吉太郎を顕彰して建てた石碑。
50	立花裁縫先生墓碑	●			26					●		明治35(1902)年建立、上郡町大枝新より牟礼立花氏に嫁ぎ、近郷の子女に裁縫、行儀作法を教えた。台石に門下生60余名の名を刻む。
51	里正甚蔵之墓碑	●			26					●		安政2(1855)年、里正甚蔵の功績を讃え村の人々が集まって建てた。
52	谷口庄三碑	●			26					●		明治35（1902）年、赤穂郡長古田庸によってその業績が漢文で刻まれており、里正甚蔵の墓とともに建ち並んでいる。
53	沼田蘭山先生之碑	●			26					●		須賀神社(有年原)南西の矢野川土手沿いにある沼田宅庭先に建てられている。学問・多芸に優れ、地元有年の人々のみならず、遠く船坂・三石・高田の人々にも源氏流活花・算盤・習字などを指導。大正8(1919)年、門弟たちが業績・徳を慕って碑を建立。碑文の揮毫は当時、赤穂郡長であった古田庸によるもの。
54	三宅先生墓碑	●			26					●		三宅光広は通称新助といい、木生谷の人。有年牟礼原村に移り住み、寺子屋「正訓堂」で教えた者800余人という。明治4(1871)年の光広死去後、明治5(1872)年に門弟が建立した。高さ192cmを測る。
55	三宅光政先生墓碑	●			26					●		三宅光政は如山と号し、明治7(1874)年から原村時習小学校の教員となり、明治34(1901)年に校長を務めた。明治42(1909)年に死去。明治43(1910)年に建立された墓碑は、高さ216cmを測る。
56	大嶋先生墓碑	●			26					●		加里屋に生まれ、41歳で有年に住み子弟に教授した。天保10(1839)年2月に病卒。嘉永元(1848)年に墓碑を建立。
57	平井先生之墓碑	●			26					●		赤穂城下の人、大島万助長直の次子。幼少より数学を好み赤穂算学を修める。門人甚だ多く、石碑建立に際しては300人が関係したという。天保4(1833)年建立。
58	山崎先生之碑	●			26					●		赤穂郡原村、室井定五郎の七男として生まれ、幼い頃から文学、算術が好きであった。奥義を極め郷里に帰り、弟子千余人、教授となって各村の公務所を助けた。明治9(1876)年の地租改正令の後、山林原野の調査測量を監督した。明治17(1884)年に78歳で亡くなり、明治23(1890)年に墓碑建立。
59	江見裁縫先生碑	●			26					●		鞍居野桑より原村江見氏に嫁ぎ、近郷の子女に裁縫を教えた。大正2(1913)年建立。
60	生花源氏流家本千葉龍弐墓碑	●			26					●		明源寺住職で源氏流活花家本であった千葉龍弐の墓碑。明治23（1890）年建立。
61	松岡博士之像	●			26					●	●	松岡奥之助医学博士は、松岡兼助の長男として明治21(1888)年に生まれ、大正14(1925)年に松岡眼科病院を創立、医学研鑽に努めるかたわら地元青年の指導・育成や郷土史の探求を行った。有年考古館初代館長であった松岡秀夫氏の兄にあたる。像は赤穂市立有年考古館の東に建ち、碑文は市川博士による424文字に及ぶ漢文銘。
62	大田松岳翁寿碑	●			26					●		京都六角堂池之坊に入門し、挿花の道を学び研鑽に努め、奥儀を究めるとともに重要な職につき、その道の発展に尽力した。大正10(1921)年建立。
63	小河先生墓碑	●			26					●		小河孫右衛門は本名を秀臣といい、幼児から原村の寺子屋素行堂で大島長直に学んだ。17歳になる天保6(1835)年に楢原に「雲龍堂」と称して寺子屋を創立、読み書きを教える。門人は有年を中心に上郡・相生から岡山県にまでおよび、最盛期は200人以上に達したという。墓石には先生を讃えた碑文と歌3首が刻まれ、台座には建立した門人らの名前が刻まれ、往時の寺子屋の隆盛がうかがわれる。
64	寺田翁之碑	●			26					●		淳泰寺を創建した寺田弥治郎（法名淳泰）の顕彰碑。明治30(1897)年建立。
65	谷内裁縫先生寿碑	●			26					●		上郡町竹万より上菅生谷内氏に嫁ぎ、近郷の子女数百名に裁縫、行儀作法を教えた。大正2(1913)年建立。
66	二本杉力士の碑	●			26					●		東有年と西有年の境を「傍示ケ鼻」といい、舌状にのびた尾根が平野に突出している。尾根の先端を西有年側にまわったところに数基の墓がある。ひとつは二本杉茂兵衛の墓で、明治9(1876)年に門人たちが建立したもの。幕末から明治にかけて西有年の大避神社では宮相撲が盛んで、二本杉茂兵衛は勧進元であった。
67	安井先生墓碑	●			26					●		安井敏一は代々庄屋職の傍ら安井塾と称する寺子屋を拓き、村人に造花・三味線・浄瑠璃の諸芸を伝授した。明治2(1869)年に59歳で没し門人たちが明治14(1881)年に建立。墓碑に和歌を一首刻む。
68	馬嶋先生碑	●			26					●		馬嶋盈則は有年村で医業の傍ら教鞭をとり、有年小学校で学業を教えた。明治37（1904）年に71歳で没。同年に石碑が建立された。
69	三村先生碑	●			26					●		嘉永2(1849)年、西有年に生まれ、代々農業を生業とし諸芸に巧みで造花・池坊の道を深く究め、鶴涙軒琴山の号を受ける。村会議員、村総代の職を久しく勤める傍ら青年を教導した。明治43(1910)年に墓碑を建立。
70	西田先生寿碑	●			26					●		信奉厚く、仏教教育の傍ら、茶道・音曲・生花・造花の技を広く門弟に指導、共有林の紛議解決に従い難局を重ね平和に処した功績を組合長から表彰された記録。明治45(1912)年に建立。
71	清水裁縫先生寿碑	●			26					●		旧赤穂藩に生まれ明治5(1872)年に有年村に転住、家事の傍ら子女に裁縫を教授した。教えを受けた針子は二百余人を数えた。大正3(1914)年に門弟らが建立。
72	高橋先生碑	●			26					●		明治20(1887)年、西有年生まれ。幼少より華道に志し西田先生門下で学び、池の坊、立正華、盛花、造花、料理を学び、広く青年有志に教授した。昭和31(1956)年建立。
73	西川勝岳軒寿碑	●			26					●		大正11(1922)年建立。
74	政家先生之碑	●			26					●		大正13(1924)年建立。
75	本田先生之墓碑	●			26					●		昭和11(1936)年建立。
76	福本先生之墓碑	●			26					●		福本嘉藤治は雲軒主人と号し、池の坊流派に学び、門人は300名を超えた。昭和6(1931)年建立。
77	明治天皇駐輦記念碑	●								●		大正13(1924)年、明治18(1885)年8月8日、元本陣柳原逸郎邸にて御休憩された栄を後世に伝えるために建立。
78	明治天皇聖徳碑（東有年）	●								●		大正元(1912)年、東有年、中山、楢原の在郷軍人が明治天皇の徳を偲んで建立。
79	明治天皇聖徳碑（有年楢原）	●								●		明治天皇の徳を偲んで大正6(1917)年に建立した。
80	明治天皇聖徳碑（有年牟礼）	●								●		大正4(1915)年、牟礼・原・横尾の三か村の氏子が明治天皇を称えて建てた碑。
81	今上天皇即位記念碑	●								●		大正4(1915)年、大正天皇が天皇の位についたのを記念して牟礼・原・横尾の在郷軍人が建てたもの。
82	今上天皇駐蹕之碑	●								●		明治18(1885)年、明治天皇中国地方巡幸の帰路、鯰峠越えの休憩の場所となったことを記念し地元住民が明治29(1896)年に建立。
83	大避神社(西有年)のケヤキ	●			25		●			●		幹周り4.3mの巨木。ケヤキとして赤穂第1位と思われる。
84	有年中学校東土手のケヤキ	●			25					●		幹周り3.5mの巨木。ケヤキとして赤穂第2位と思われる。
85	西有年・馬路池遺跡採集石鏃	●			23 34						●	有年考古館には、馬路池で採集されたいくつかの凹基式石鏃が収蔵されており、形状から約10,000年前のものと推定されている。
86	有年牟礼・山田遺跡出土「秦」線刻須恵器	●			23 31 34						●	有年牟礼・山田遺跡の発掘調査によって、「秦」と線刻された平安時代頃の須恵器の坏片が出土している。赤穂郡と秦氏との深い関わりを示す遺物である。
87	有年牟礼・山田遺跡出土装飾土器群	●			23 34						●	有年牟礼・山田遺跡の発掘調査では、弥生時代後期末における一辺19mの大型方形周溝墓が発見され、有年原・田中遺跡例と類似した装飾器台のほか、装飾壺、大型壺が出土した。
88	有年原・田中遺跡出土初期須恵器群	●			23 31 34						●	有年原・田中遺跡の発掘調査では、5世紀前半の須恵器甕、高坏や瓦質高坏、土師室甑などが出土しており、渡来人との直接的な関わりが指摘されている。
89	蟻無山古墳群採集埴輪	●			23 34						●	蟻無山古墳は、発掘調査こそされていないが、円筒・朝顔形埴輪のほか、馬・鳥・盾・船・蓋・家形埴輪など多様な形象埴輪が見つかっており、5世紀前半の盟主墳であることがわかっている。

有年地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
90	蟻無山古墳群		◎		23 31 34 35						●	1号墳は、蟻無山山頂（標高70.4m）に所在する全長52mの帆立貝形古墳で、東に造り出しを持つ。最古級の馬型埴輪のほか船形埴輪や初期須恵器などが出土。墳頂からは有年地区から上郡町、相生市までを臨む眺望が広がる。古墳時代中期前半に築造されたものと推測され、この時期の古墳としては千種川流域で最大の規模を持つ。県指定。ほかに小墳が2基あり。1号墳は県指定史跡。赤穂の昔話では、古墳の築造にかかわる蟻の話が残る。（赤穂の民俗）
91	野田2号墳		◎		23						●	野田古墳群中の1基で、玄室に間仕切りを持つ特徴のある「祇園塚型石室」の標識遺跡。県指定。
92	木虎谷2号墳		◎		23						●	木虎谷古墳群中の1基で、墳丘の直径15.6m高さ6.5mの円墳で市内最大の横穴式石室墳。石室の全長9.5m、そのうち玄室の長さ5.3m、幅2.2m高さ2.4mあり、羨道は両袖式。「棚」と呼ばれる石の下にほぼ同じ大きさの板石が敷かれていたと伝わることから、前方に蓋石を立て、側壁・奥壁を利用して石棺として用いたものと思われる。棚のある横穴式石室墳は播磨地方では比較的まれである。県指定。
93	塚山6号墳		◎		23						●	塚山古墳群56基中最大の古墳。墳丘規模は15.8m×17.5mの円墳で、玄室間仕切りをもつ大型横穴式石室を持つ。出土土器は須恵器の蓋付杯、台付長頸壺など5点。県指定。
94	有年原・田中遺跡		◎		23 25 29 31		●				●	弥生時代中期から室町時代まで続く複合遺跡。建物跡として弥生時代中・後期の竪穴建物跡群、古墳時代の竪穴建物跡群、飛鳥・奈良・平安時代の掘立柱建物跡群等が検出されている。弥生時代後期の大型墳丘墓とそこから出土した装飾土器が著名。県指定史跡で、公園として整備されている。
95	東有年・沖田遺跡		◎		23 24 25 29 34	●	●				●	縄文時代後期から室町時代に至る複合遺跡で、長谷川周辺から細長く南東にのびる沖積地の最南端に立地し、東は千種川、西と南は長谷川、北は有年山に囲まれている。千種川流域最大級の集落遺跡で、特に弥生時代、古墳時代、中世の集落跡が著名。県指定史跡で、公園として整備されている。
96	有年家長屋門		◎		22 25		●					有年家は江戸時代には柳原家と同様に代々庄屋を務めた。石垣上に構えた長屋門は江戸時代後期に建てられたもので、庄屋格の風格を見せる。市指定建造物。
97	塚山古墳群		●		23 34						●	総数56基の横穴式石室が集中する市内最大の群集墳。県史跡の塚山6号墳のほかにも間仕切りをもつ古墳が4基見られるほか、良好な遺存状況を見せる。
98	片山古墳群		●		23 34						●	平成26（2014）年以降の分布調査で発見された後期古墳群で、2基からなる。
99	二又古墳群		●		23 34						●	平成26（2014）年以降の分布調査で発見された後期古墳群で、2基からなる。
100	ハトカ茶畑遺跡		●		23 34						●	荒神社（北畠）のある新宮ケ鼻と八幡神社（有年牟礼）のある八幡山との間の谷間の台地を「ハトカ」という。谷の奥にある池の辺りは「茶畑」と呼ばれ、この付近から弥生土器片が採集された。
101	有年牟礼・宮ノ前遺跡		●		23 29 34		●				●	ほ場整備に伴う発掘調査が行われ、鎌倉時代頃の掘立柱建物跡が見つかり、輸入青磁碗なども出土した。
102	有年牟礼・山田遺跡		●		23 31 34						●	昭和61(1986)年から昭和63(1988)年にかけてのほ場整備工事に伴う発掘調査で見つかった弥生時代中期から鎌倉・室町時代に至る複合遺跡。弥生時代中・後期の竪穴住居、古墳時代・飛鳥・奈良・平安時代の掘立柱建物跡群などの遺構やそれに伴う数多くの遺物が出土し、有力者が長い年月にわたって住んでいたことが判明した。平安時代の「秦」のヘラ描き須恵器片は、千種川流域における秦氏伝承の存在を裏付ける。弥生時代後期の方形周溝墓は、有年原・田中墳丘墓同様貴重な遺構。
103	有年牟礼・井田遺跡		●		23	●	●				●	平成17（2005）年から行われた有年地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で、縄文時代後期以降の複合遺跡であることが判明した。特に弥生時代中期、古墳時代後期の竪穴建物跡群が多く見つかり、焼失住居や鍛冶関連遺構などが発見されている。また集落縁辺部では古墳時代中期の石製模造品等を用いた祭祀跡も検出された。
104	奥山田古墳群		●		23 34						●	塚山の谷を北へ登る斜面及び山頂尾根上に散在する3基からなる後期古墳群。うち1基は祇園塚型石室である。
105	ハトカ古墳群		●		23 34						●	有年牟礼字ハトカの谷にある8基で構成される後期古墳群。
106	荒神山古墳群		●		23 34						●	有年牟礼字藤ケ谷の荒神山にある12基で構成される後期古墳群。残存状況は悪く、石材の散乱から判断しているものが多い。
107	山田奥窯跡		●		23 34						●	市内唯一の古代の窯跡。『赤穂市史』では9世紀まで操業した灰原（灰捨て場）を確認したとされ、平成26（2014）年以降に実施した分布調査では、7～9世紀代の土器類が多く採集されている。
108	北原遺跡		●		23 34						●	山崩れのため遺跡は大きく破壊されており、戦後の砂防工事により遺跡は完全に破壊された。遺物は砂防工事中に採集されたもので、石鏃・石錐・磨製石斧・土器などが見つかっている。
109	北原古墳群		●		23 34						●	奥山の西側斜面一帯に広く分布する古墳群で、6基で構成されるが、うち3基は箱式石棺で現在確認できない。5号墳は両袖式もしくは祇園塚型の横穴式石室と推定されている。
110	奥山古墳群		●		23 34						●	原小学校裏山の奥山にある中後期の古墳群であるが、昭和20年代の砂防工事によって、かなりの改変を受けている。これまでの調査記録から15基は存在していたと思われるが、現在確認できるのは11基である。1号墳からは埴輪、須恵器、鉄鎌が、4号墳からは埴輪、鈑留短甲等が出土したとされる。
111	有年原・北畠遺跡		●		23 34						●	有年原・北畠遺跡は、有年原字北畠の台地にある。東は惣計谷を越えて津村に接し、西は木虎谷と境している。民家や田畑のある扇状台地からその裏山にあたる北山一帯に広がる遺跡。採集遺物は、石器・土器など数十点に及ぶ。
112	有年原・クルミ遺跡		●		23 34						●	縄文時代後期以降の遺跡。縄文時代晩期や古墳時代初頭の竪穴建物跡が見つかったほか、奈良時代の墨書土器が発見された。また、8～9世紀に形成された土坑列が条里型地割に並行して検出され、これまで不明だった地割の設定時期が同時代である可能性が高まった。
113	惣計谷古墳群		●		23 34						●	木虎谷古墳群の東側尾根上から原地区共同墓地北西部の丘陵斜面一帯にある、21基で構成される後期古墳群。うち2基は祇園塚型石室である。
114	惣計谷奥古墳		●		23 34						●	直径12mの円墳で、玄室幅1.9mの両袖式横穴式石室をもつ。祇園塚型石室であり、市内有数の大型古墳である。
115	津村古墳群		●		23 34						●	北山池北側の丘陵斜面にある、9基で構成される古墳群。6号墳は「津村古墳」として報告されており、箱式石棺内から鉄鎌が出土した。
116	玉堀古墳群		●		23 34						●	蟻無山の北東あたりにある5基からなる後期古墳群で、現状は4基が確認できる。
117	有年原・田中墳丘墓		●		23 34						●	1号墳丘墓(円形周溝墓)は直径約19m、陸橋部と突出部をもち、弥生時代後期の多量の装飾土器が出土した。。出土遺物の中で壺や器台は、後に出現する特殊壺・特殊器台の祖形とみられ、葬送儀礼に使用された供献土器であり、墓遺構とともに兵庫県下でも類を見ない遺跡である。
118	木虎谷古墳群		●		23 34						●	西池の北側斜面に広く分布する後期古墳群で、21基で構成される。2号墳は石棚をもつ両袖式横穴式石室、8号墳は祇園塚型石室、11号墳は発掘調査後消滅した。16号墳と呼んでいるものは箱式石棺2基である。
119	木虎谷遺跡		●		23 34						●	木虎谷は奥山と北畠北山との間にある谷。緩い斜面に横穴式石室墳があり群集墳を形成している。群集墳に交じって谷の東よりに2基の箱式石棺墓が頭を接して並んでいる。
120	野田遺跡		●		23 34						●	昭和52(1977)年に道路拡張工事が施されるにあたり事前調査がなされた。磨滅の激しい弥生土器が多く、上流から流れてきたものと推測される。その他石鏃などの石器類が採集されている。
121	野田古墳群		●		23 34						●	野田地区はかつて弥生の大集落があったところで、弥生中期の土器が採集されている。集団の首長の墳墓として山地地区に残っている竪穴式石室墳があり、その後、横穴式石室を造ることが波及したと考えられる。
122	上所二又溝遺跡		●		23 34						●	昭和57(1982)年、ほ場整備事業の時に、数点の土器を採集。
123	上所山田遺跡		●		23 34						●	山麓の東斜面にあたり、高坏形土器を1点発見。
124	三軒家遺跡		●		23 34						●	昭和15(1940)年頃、付近の西斜面開墾中に数片の土器片が発見され、その後に石鏃1点が見つかる。峠上の立地から高地性集落の可能性が考えられる。
125	三軒家古墳群		●		23 34						●	後藤陣山の南側一帯に散在している。峠の山頂に至る間に8基ある。林道工事によって峠頂上部に近い3基は失われている。全8基。
126	中所古墳群		●		23 34						●	北は精谷山から南は後藤陣山に至る東側の斜面に7基の古墳が築かれている。
127	番ヶ瀬古墳群		●		23 34						●	東有年から黒沢山へ登る道の西側山裾に円墳が並んで築かれている。この古墳を築いた集団の生活基盤は片山地区の山麓にあったと思われる。
128	精谷山遺跡		●		23 34						●	精谷山は教専寺の裏にそびえる標高200mほどの山。頂上に横穴式石室墳があり、その南側下方へ20mほど下った平坦地の北隅に箱式石棺墓の崩れとみられる2つの平石が立っている。
129	下菅生遺跡		●		23 34						●	西有年から流れていた長谷川が東有年の谷口で千種川と合流するあたり一帯の地。砕石工場ができて山容は著しく変わったが、作業場のあるあたりが「下菅生」とよばれるところである。採石作業場建築にあたり整地中に土器1点が採集された。
130	上菅生遺跡		●		23 34						●	清水山の南東山裾に位置し、山からの土砂堆積によって形成された扇状地と長谷川の氾濫原上に立地。弥生時代後期の竪穴住居跡や柱穴跡などが検出されたことから集落跡と考えられ、長谷川を挟んで対岸の東有年・沖田遺跡との関係が注目される。竪穴住居跡からは、弥生土器以外に柱状片刃石斧や鉄鏃などが出土。縄文時代後期の土器を包含した層が確認されたおり、周辺に当時の営みがあったことが推測される。

有年地区の歴史文化遺産一覧（4）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
131	東有年・沖田古墳群		●		23 34						●	東有年・沖田遺跡は古墳時代後期の竪穴建物跡が多数見つかっているが、それとは別に横穴式石室を主体部としたと思われる後期古墳群の痕跡が3基発見されている。
132	放亀山古墳群		●		23 34 35						●	大鷹山から東へのびる尾根が一段低くなって千種川岸に達するあたりを放亀山という。尾根上に4基、南斜面中腹に1基の古墳がある。全5基。1号墳は全長約40mを測る古墳時代前期前半の前方後円墳。
133	西有年・遠古殿遺跡		●		23 34						●	有年小学校付近に広がる遺跡で、ほ場整備事業に先立って平成5(1993)年に発掘調査が行われた。弥生時代中期の竪穴住居跡をはじめとする多くの遺構・遺物が発見され、弥生時代中期の大集落であることが判明した。
134	西有年・往来南遺跡		●		23 34						●	上組集落の周辺に広がる遺跡。平成4(1992)年にほ場整備に先立つ発掘調査が行われた。南北朝時代ごろの掘立柱建物跡13棟と鍛冶工房3基が見つかった。掘立柱建物跡群の中には2棟1組の長屋風の建物と他の1棟がコの字型に配置されているものがあり、鍛冶集落を知る上で興味深い。鍛冶工房跡には炉が備えられており、フイゴの羽口・鉄滓・金床石・砥石などの鍛冶道具や鉄釘・刀子などが出土。
135	西有年・垣内田遺跡		●		23 34						●	ほ場整備に先立つ発掘調査によって見つかった。弥生時代中期にはじまる集落跡。規模は小さいが、このような小集落が付近一帯に転々と存在するものと思われる。
136	西有年・宮東遺跡		●		23 34						●	大避神社(西有年)の東に位置し、平安時代末期と思われる掘立柱建物跡3棟などが発見された。
137	西有年・玄形遺跡		●		23 34						●	ほ場整備に先立つ発掘調査によって見つかった。弥生時代中期にはじまる集落跡。規模は小さいが、このような小集落が付近一帯に転々と存在するものと思われる。
138	西有年・香山遺跡		●		23 34						●	西有年長根から横山に抜ける街道沿いにあり、土器類が採集されている。
139	黒鉄山土器片出土地		●		23 34						●	赤穂市内最高峰、標高430.9mの黒鉄山の山頂から少し東へ下った斜面から土器破片出土。
140	西有年・柴床遺跡		●		23 34						●	馬路池の近くにある。ほ場整備事業に先立って調査された近世の遺跡。
141	西有年・長根遺跡		●		23 29 34		●				●	平成3(1991)年にほ場整備事業に先立ち発掘調査が行われ、多数の遺構・遺物が見つかった。7～8世紀の掘立柱建物跡15棟と、付近から出土した円面硯や「大」とヘラ描きされた須恵器皿が特に注目される。この地には律令時代の役所があったと思われる。このほか室町時代の井戸跡からは日本最古の出土例である木摺臼が出土。
142	長根古墳群		●		23 34						●	1号墳は長根山の東斜面中腹にあり、2号墳は南斜面にあった。
143	西有年・堂場ヶ市遺跡		●		23 34						●	東中野集落に位置し、中世の掘立柱建物跡が多数見つかっている。
144	西有年・堂免遺跡		●		23 34						●	北組集落周辺にある奈良時代から平安時代の遺跡。
145	馬路池遺跡		●		23 34						●	市内最古の遺跡で縄文時代早期・前期にまで遡ることができる。松岡秀夫らにより発掘調査が行われ、石鏃など多数の石器類が出土している。
146	西有年・畑田遺跡		●		23 34						●	ほ場整備に先立つ発掘調査によって見つかった。弥生時代中期にはじまる集落跡。規模は小さいが、このような小集落が付近一帯に転々と存在するものと思われる。
147	西有年・北遺跡		●		23 34						●	昭和63(1988)年に、工場建設予定地内の発掘調査で発見された鎌倉時代の集落遺跡。2棟分の掘立柱建物跡等が見つかった。
148	北山古墳群		●		23 34						●	西有年北山一帯にある古墳群で、西山田に2基、山田に2基ある。いずれも集落地の北の山の中腹斜面である。全4基。
149	西有年・木ノ目池の下遺跡		●		23 34						●	古墳時代後期の流路が検出され、土器や木製品が多量に出土。古墳時代後期の竪穴住居跡も発見されている。
150	西有年・木ノ目池遺跡		●		23 34						●	原組集落周辺にある縄文時代から室町時代にかけての遺跡。
151	与井谷口古墳群		●		23 34						●	全33基の小規模な積石塚群。一部が発掘されて須恵器が出土し、古墳時代後期とされている。
152	西有年・与井谷口遺跡		●		23 34						●	東中野集落に位置し、中世の掘立柱建物跡が多数見つかっている。
153	西有年・大山遺跡		●		23 34		●				●	坂折池南の丘陵谷部にあり、初期備前焼とともに窯壁片が採集されたことから、窯が築かれていたと推定されている。
154	高野須城跡		●		23 24 29 32 34		●				●	相生市との境にある荒山(標高316m)の頂上にある。石垣の一部が残り、谷には馬洗場と伝わるところもあるが、規模構造は不明。城主は赤松右馬助正澄、上月城主赤松政範のおじにあたる。天正5(1577)年に羽柴秀吉軍が上月城を攻めた時、政範とともに戦死。頂上には「龍王山の祇園さん」とよばれた祇園神社があり、雨乞いの神として地元から信仰を集めていたが、現在は八幡神社(有年牟礼)に合祀。龍王山の名は雨乞いの神・龍神が住むと伝わることから、海神社とも言う。
155	鴉ヶ堂城跡		●		23 24 29 32 34		●				●	験行寺裏山の三重山の山頂(標高196m)に鍵形梯郭式の山城跡がある。三重山は小さな山が三つ重なり一直線に見えることから呼ばれ『播磨鑑』には「影なしの峯」と書かれている。その昔は山頂に傘松(からかさまつ)と呼ばれる巨木があり、山頂が円錐の先端のようにとがっていたため、一日中松の影が見えないことからつけられた名で、験行寺の七不思議の一つ。山頂から南へ尾根づたいに曲輪、石垣、堀がある。現在山頂には、鴉ヶ堂城展望台がある。城主は赤松氏の出の太田(小田)弾正。
156	後藤陣山城跡		●		23 24 34					●	●	有年楢原の三軒家集落の背後、標高150mの山頂にある。一部に石垣を備えた広い曲輪が東西に並び、これを帯曲輪が2段に巡っている。城主は後藤某と伝えられるのみで、詳しいことはわからない。
157	鍋子城跡		●		23 24 29 34		●				●	東有年と中山の境、標高147mの急峻な山頂にあり、別名を大鷹山城、谷口城、中山城ともいう。『播磨鑑』によれば、最初の城主は岡豊前守と呼ばれた土豪であるらしい。その後赤松秀光の三男小河丹後守秀泰や富田右京などが居城したという。城跡には、鍵形梯郭式に配置された曲輪の跡が残り、室町時代と思われる瓦片も見つかっている。城跡の下方の岩盤には湧水があり、現在これを霊水とし「大龍権現」が祀られている。
158	有年山城跡		●		23 24 29 34		●				●	八幡神社裏の標高220mの山頂にあり、八幡山城・大鷹山城ともいう。現在曲輪となる平坦地や土塁・堀などの痕跡が認められる。曲輪の配置は鍋子城と同じく鍵型梯郭式で、市内最大の規模を誇る。古書によれば、この地に最初に城を築いたのは赤松信濃守範資の三男本郷掃部介直頼で、貞和年間(1345~50)のことという。直頼のあとこの城に居城したのは富田右京である。富田右京は有年山城の南に位置する鍋子城からこの城に移ったが、その後浦上宗景に攻められて滅ぼされたという。
159	清水山廃寺跡		●		23 24 29 34		●			●	●	東有年山手にある浄泉寺は元清水山にあった。削平地や池が残る。
160	須賀神社(黒尾)		●		25		●			●		「黒尾の荒神社」と呼ばれ、農耕の神として素戔嗚命を祀っている。社には、赤穂市指定有形文化財である黒尾須賀神社義士画像図絵馬が奉納されていた。
161	八幡神社(有年牟礼)		●		25 31 33		●			●		周世八幡神社からの分霊。祭神は応神天皇、仲哀天皇、神功天皇の三神。「農耕図絵馬」をはじめ法橋義信画、清原千古画の絵馬が数多く残っている。大避神社を合祀。
162	八幡神社(東有年)		●		22 25 33	●	●			●		祭神は誉田別命(応神天皇)、帯中津日子命(仲哀天皇)、息長帯姫命(神功皇后)。上郡町山ノ里安室川畔に鎮座していたが洪水のため流れ、東有年中河岸の大杉にかかっていたのを土地の人が祠をたて奉斎したという。境内には竹内宿祢命を祀る社、水神社、荒神社3社、もと黒沢にあった須賀神社を合祀。
163	御旅所		●		22 25 33	●	●			●		有年保育所西側にある八幡神社(東有年)の御旅所。かつて上郡町山野里にあった八難神社の社殿が洪水で流され、ここにあった松の大木に流れ着き、これを現在の場所に祀ったという八幡神社(東有年)の伝承地である。
164	須賀神社(谷口)		●		25		●			●		明治4(1871)年奉遷。小祠に稲荷、荒神、猿田彦の三神を合祀。
165	須賀神社(有年原)		●		25		●			●		寛政5(1793)年、八幡神社(有年牟礼)の改築古材で建て、有年原全村の荒神を合祀した。別名「北畠の荒神さん」。
166	須賀神社(野田)		●		25		●			●		祭神は素盞嗚命、倉稲魂命。
167	須賀神社(中所)		●		25		●			●		祭神は素盞嗚命と天照大神。
168	須賀神社(楢原新田)		●		25		●			●		祭神は稲倉魂命、素盞嗚命。境内に明治天皇聖徳碑がある。「くもじ祭り」が毎年7月に境内でおこなわれていた。
169	須賀神社(上所)跡		●		25		●			●		上所の須賀神社は明治42(1909)年、中所の須賀神社に合祀された。跡地には記念碑が建つ。
170	須賀神社(三軒家)跡		●		25		●			●		三軒家の須賀神社は明治42(1909)年、中所の須賀神社に合祀された。跡地には記念碑が建つ。
171	大避神社(西有年)		●		22 25 31 33		●			●		創立年代不詳。『播磨鑑』に紅葉の名所と紹介される西有年野々宮にあり、祭神は秦河勝。その他、寄せ宮に天照皇大神、菅原道真、素戔嗚尊、牛頭天王、少将井宮などが合祀されている。絵馬堂には、法橋に叙せられた北条文信画の赤穂義士絵馬、宮相撲力士番付表が奉納されている。なお須賀神社本殿の床下から発見された前句集額は市指定文化財に指定された。
172	大避神社(横山)		●		25 31		●			●		戦後の横山地区の開拓に伴って移されたと伝わる。
173	大避神社跡(有年牟礼)		●		31					●		かつて大避神社が鎮座していたが、明治38(1905)年3月18日に有年牟礼の八幡神社に合祀された。近年までは、社と池状地形のほか、水路と陸橋が残されていたが、有年地区土地区画整理事業によって整地された。
174	山王神社		●		25		●			●		元は験行寺にあり、有年横尾の上の山に横尾荒神社、稲荷神社、塞之神社を境内社として合祀し、現在地の須賀神社と併せ移された。

有年地区の歴史文化遺産一覧（5）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
175	光明寺		●		25		●			●		もとは黒沢山山頂にあったが、文化3（1806）年に現在地に移った。境内の石仏としては西国八十八ヶ所石仏、西国三十三ヶ所石仏のほか阿弥陀三尊像、馬頭観音菩薩像、弘法大師像、地蔵菩薩像（延命地蔵・子守地蔵・水子地蔵）がある。山号は黒澤山。
176	光明寺跡 （奥の院）		●		24 25 29 32 34		●			●	●	東有年片山背後の標高332mの黒沢山山頂にあり、真言宗高野山派。創建は大同元(806)年に弘法大師が唐から帰郷の途、この寺を建立と伝わる。南北朝時代の『峰相記』に名がみえ、既に播磨でも有力な寺院であったことがわかる。山頂一帯にあった堂宇や僧坊は永禄年間(1558～1569)の初め頃に尼子晴久の乱により焼失。以後江戸初期に姫路藩池田輝政に田畑の寄進を受け、いくつかの建物が再建されたが、文化3(1806)年に現在の東有年片山に移った。現在もいたるところに多数の五輪塔や宝篋印塔のほか、不動明王像、阿弥陀如来像、地蔵菩薩像など数多くの石造物があ
177	教専寺		●		25		●			●		創立は戦国時代、赤松則村の家臣、清水権太夫の孫源之進、上郡町細野白旗山の合戦に敗れ仏門に入り、釈祐教と称し精谷山教専寺なる一宇を永享2(1430)年に建立した。山号は精谷山。
178	明源寺		●		25		●			●		元験行寺にあったが、中世頃蟻無山の麓に下山したという。天文元(1551)年、浄土真宗東本願寺派十代証如時代、真言宗より転じ浄土真宗となる。山号は霊應山。境内には源氏流活花の家元、千葉龍弐の墓碑や、半肉彫りで舟形後背をもつ石造地蔵菩薩像（像高47cm）がある。
179	浄泉寺		●		25		●			●		大永2(1522)年、僧了専法師が東有年清水山に創立。後に東有年山手に移す。浄土真宗本願寺派。山号は清水山。
180	淳泰寺		●		25		●			●		西有年東中野にある浄土真宗本願寺派の寺院。代々西有年の庄屋を勤めていた寺田家の弥次郎が明治8(1875)年に開基。山号は小亀山。
181	大円寺		●		25 32		●			●		浄土真宗大谷派の寺院で、大永2(1522)年に宗誓による開基とされる。もとは西有年横山の六道山にあり、本堂は5間4面で鐘楼等もあったという。山号は六道山。
182	阿弥陀寺		●		25		●			●		有年楢原にある浄土真宗本願寺派の寺院。山号等は不明。
183	験行寺		●		24 25 29 35		●			●		医王山上にある真言宗古義派の寺院で、天平2(730)年に行基が築いたと伝わる。境内は室町時代の五輪塔が多く残りその隆盛がうかがえる。山号は医王山。境内や参道には阿弥陀如来像（双体仏）や半肉彫りの阿弥陀如来像3体がある。周辺は県の自然環境保全地域に指定されており、シイ・ヒノキ・クスノキなどの自然林が残る。
184	遍照院跡		●		22 24 25 29 32 34		●			●	●	『赤穂郡誌』や『播磨鑑』によると、創建は高麗の僧恵便が推古天皇8(600)年にこの地に一堂を建てたことに始まるという。寺跡には礎石や五輪塔などが多数残る。採集された備前焼の壺は鎌倉時代末期から室町時代初頭のものと見られ、五輪塔や採集土器から判断すれば、室町時代の寺院である可能性が高い。西有年原組の大円寺がこの六道山にあり、現在の塩屋の阿弥陀堂に安置されている阿弥陀仏が、この遍照院の本尊であったと伝わる。
185	小山稲荷		●		25		●			●		最上稲荷小山大明神と称する。昔、西有年清水にあったが上組の人が不便だったのか昭和11(1936)年に上組河本氏所有の上組小山に移築し祀られている。
186	末広稲荷（西有年）		●		25		●			●		池魚塚(西有年)の横にある稲荷神社。昭和20（1945）年代の初めに建立され、もと長谷川に架かる新橋付近にあったものが国道拡幅の際に移転されたもの。
187	末廣稲荷（横尾）		●		25		●			●		有年横尾の山裾に多数の鳥居とともに祀られている。
188	薬師堂（山田）		●		25		●			●		本尊の薬師如来像には「寛永十一（1634）年卯月（6月）八日近藤普済作」の銘がある。境内には五輪塔、宝篋印塔がある。東方に「薬師の清水」と呼ばれる湧水井戸がある。
189	薬師堂（片山）		●		25 35		●			●		片山の背後の山の中腹にあり「承応3(1654)年法眼康智七条大仏師」と銘のある木造の薬師仏を祀る。境内の片隅には五輪塔が数基祀られている。堂の付近に清水があり、眼病・疣によく効いたという。（赤穂の昔話）
190	妙見堂		●		25		●			●		本尊は約10cmの木像。由来等は不詳。元は明源寺の西にあった。
191	小鷹の観音堂		●		25 35		●			●		浅野長直の建立と言われる。『播磨鑑』によれば、岩に鷹の爪跡があることから「小鷹」の名が付いたと伝わる。昔話に本尊を千種川から拾い上げた説話が残されている（赤穂の昔話）。境内には地蔵菩薩の石仏が2体安置されている。
192	北畠家屋敷跡石門		●		25		●					有年原村の庄屋北畠家の門跡、巨石が残されている。
193	有年宿番所跡 （旧松下家宅跡）		●		22 25		●					寛永年間（1624～44）頃、東有年に有年宿が移された。赤穂藩役人は出張の際ここに宿泊し、前庭を白洲にして番所として利用したと伝えられる。周囲の人たちは「御番所」とも呼んだ。
194	有年宿本陣跡 （旧柳原家宅跡）		●		22 25		●					柳原家は有年家と並び代々庄屋を務めた家であり、建物は参勤交代の大名の宿泊施設として使用された。有年宿は多くの旅籠屋、茶屋でにぎわった。なお本陣跡の建物は赤穂八幡宮南側の桃井邸に移築された。
195	寺子屋「正訓堂」跡		●		25		●					赤穂木生谷出身の三宅光能によって創建された。明治6（1873）年には「時習学校」と改名した。現在の原小学校の前身のひとつである。原本村の中程にあった。
196	立場跡		●		22 25		●					立場は有年の宿を出て西に進み、難所の峠にかかる前でここで駕籠を修理、人足・伝馬の休息や交代に使われたところである。この建物は駕籠が軒下まで入るよう軒が深く縁が狭い造りとなっていたが、現在は解体されている。
197	高瀬舟灯台		●		22 25 27 30	●	●	●				八幡神社(有年)の境内には「山の灯台」があり、かつて千種川を上下した高瀬舟に便を与えた。
198	旧有年橋橋台		●		22 25 27	●	●					江戸時代には有年宿東の千種川には橋が架けられていなかったが、明治43(1910)年になって全長202mの県下最初の鉄製橋が架けられた。現在もレンガ製の橋台が残されている。
199	船着場跡		●		22 25 27 30	●	●	●				江戸時代に有年横尾は安志藩小笠原領に属しており、その安志藩の船着場が千種川と矢野川の合流から上流約100mの山沿いにあった。
200	亀の甲		●		22 25 27	●	●					千種川にかかる国道2号有年橋左岸上流約100m間の石畳を亀の甲と呼んだ。現在は千種川の河川改修でその面影はない。赤穂藩浅野時代の護岸兼高瀬船の荷積み場で、城代家老大野九郎兵衛の陣頭指揮によるものと伝わる。
201	大波止・小波止		●		22 25 27 30	●	●	●				有年中学校の南、千種川のほとりに大小の波止があり大きい方を「大バト」、小さい方を「小バト」と呼ぶ。波止という名の通り水流を逃し高瀬舟が着岸できる施設があった。明治以降の堤防改修の際に手が加えられ、現在大バトは間知積みの堅固な石垣を見ることができるが、小バトは土砂に埋もれている。
202	一里塚跡(西有年)		●		22 25 27		●					江戸日本橋を起点として、全国諸街道の一里ごとに土を盛り多くはエノキを植えて旅人の目印とした。有年横尾の塚の元からここまでが一里である。
203	一里塚跡（塚の元）		●		22 25 27		●					「原村文書」にある絵図に描かれた一里塚の場所。「塚の元」という地名の由来でもある。
204	一里塚公園		●		22 25 27		●					国道373号沿いの須賀神社の北東隣にあり、平成2(1990)年に建設。国道沿線の市町観光ポイントを陶板タイルにはめ込んだイラストマップや藤棚休憩舎が設置されており、千種川を臨むドライバーの休憩スポットとなっている。
205	とんぼ塚跡		●		25 35		●					昭和初め頃には直径4m、高さ1mぐらいあったと伝えられ、とんぼのすみかとしての昔話が語り継がれている。（赤穂の昔話）
206	さいじょうはん （弁慶の足がた）		●		35		●			●		八幡神社（東有年）の上に大きな岩が重なりあったものを「さいじょうはん」と呼び、そこに弁慶の足跡があるという。（赤穂の昔話）
207	大龍権現		●		25 35	●				●		中山集落の北、鍋子山の中腹に祀られている。麓に建てられた鳥居をくぐり山道を登ると、途中に大師堂があり、そこから更に登ると右手に大龍権現と書かれた石碑が、その下の清水湧いているところに祠がある。昭和10(1935)年ごろ、湧き出る清水を使うと足の病がなおると夢見せがあったと伝わる。ここには龍が水を飲みに来たといい、万病に効くとされている。（赤穂の昔話）
208	水車と用水路		●		25	●	●			●		田んぼに水をひくための水車のある風景はかつては有年の田園地帯でよくみられたが、現在は有年楢原に一基を残すのみである。
209	旧西国街道		●		22 25 27		●					江戸時代の街道の一つで、「近世山陽道」ともいう。京都から下関までの経路。
210	筑紫大道		●		22 24 27		●					中世における山陽道。元寇に備え、博多湾岸の石築地とともに設置された軍用道路。京都六波羅探題から博多まで約600kmに及んだと考えられている。ルートは旧西国街道と一致していると考えられる。
211	黒鉄山		●		35		●					大津地区の北側にそびえる黒鉄山は標高430.9mを誇る。頂上からは北は中国山脈、南は淡路島・四国が望める。第二次世界大戦までは山麓で銅鉱石の採掘が行われていた。大正時代初期頃まで、早ばつ時には降雨の祈りをこめて村人総出で山頂にうず高く積み上げた薪を焚いて雨乞いを行った。氏神様を崇めなかった大津への天罰に関わる昔話がある。（赤穂の昔話）
212	鮫峠		●		22 25 27 35		●					有年と上郡町梨ヶ原間の峠。若い男女に化けた鮫の説話から鮫峠と言われている。（赤穂の昔話）
213	有年峠		●		22 25 27		●					西有年立場から梨ヶ原へ抜ける旧西国街道の峠。
214	清水峠		●		22 25 27		●					上菅生から横山へ至る峠。
215	周世坂峠		●		22 25 27		●					周世より有年へ通じる陸路で、かつての主要道であった。
216	千種川		●		25 27 30	●	●	●				加古川・市川・揖保川・夢前川と並び播磨五川の一つ。清流で知られ名水百選にも選ばれている。水深が浅く流速が速いために川底の石の苔の育成が良く、兵庫県下で屈指のアユ釣り場。
217	長谷川		●		22 25 27	●	●					横山から西有年を経て上菅生から千種川へ流れる。
218	矢野川		●		22 25 27	●	●					相生若狭野方面から有年牟礼、有年原等を経て千種川へ流れる。

有年地区の歴史文化遺産一覧（6）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
219	有年大池		●		25	●	●					長谷川の上流に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。12年かかって昭和28(1953)年に完成。満水時貯水面積51,800㎡を測る。
220	馬路池		●		25 35 36	●	●					鮭峠の谷に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。満水時の貯水面積が55,800㎡を測る、千種川流域最大の池。
221	長谷池		●		22 25	●	●					長谷川の上流に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。
222	坂折池		●		25	●	●					上組の谷に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。満水時貯水面積54,200㎡を測る。
223	木ノ目新池		●		25	●	●					山田地区の谷に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。
224	木ノ目池		●		25	●	●					山田地区の谷に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。
225	稗田池		●		25	●	●					清水山麓に、西有年地区農地の水不足対応のために築かれた。
226	片山池		●		25	●	●					片山地区の谷に、東有年地区農地の水不足対応のために築かれた。
227	ハトカ池		●		25	●	●					牟礼地区農地の水不足対応のために築かれた。
228	猪垣		●		25		●					各地の山麓にあり、鹿、猪その他獣類の侵入を防ぐために築かれた土練塀。
229	東池		●		25	●	●					有年原地区農地の水不足対応のために築かれた。
230	西池（有年原）		●		25	●	●					有年原地区農地の水不足対応のために築かれた。
231	西池（有年牟礼）		●		25	●	●					有年牟礼地区農地の水不足対応のために築かれた。
232	奥池		●		25	●	●					有年牟礼地区農地の水不足対応のために築かれた。
233	中池		●		25	●	●					有年牟礼地区農地の水不足対応のために築かれた。
234	有年村役場跡		●		25		●					明治22(1889)年、東有年に建てられていたが昭和30(1955)年に有年村は赤穂市に編入され旧村役場の玄関部分と門柱は有年考古館の玄関として移築保存されている。
235	松岡医院病棟跡		●		25		●					大正4(1915)年、松岡與之助が松岡眼科病院を創立し、当時多発したトラホームの早期治療とその予防のため学童の定期検眼、生活改善に寄与した。病棟は木造2階建、桟瓦葺、寄棟屋根、外壁下見板張であった。現在は解体された。
236	赤穂鉄道有年駅跡		●		22 25 27 30	●	●	●				大正10(1921)年に開通した赤穂軽便鉄道の有年駅。国鉄有年駅に隣接する形で配置され、軽便鉄道のルートは南部からのかつての高瀬舟のルートをほぼなぞるように設定されていた。
237	赤穂鉄道線路跡		●		22 25 27	●	●	●				赤穂鉄道の線路跡は、昭和26（1951）年に国鉄赤穂線が敷設されて後、赤穂市へ寄付され、市道として現在も市民の生活に役立っている。
238	赤穂市立有年考古館		●		23						●	昭和25（1950）年に松岡秀夫によって開設された考古館。あわせて民俗資料館とも称した。旧赤穂郡内の考古資料を中心に収集されており、1,250点は赤穂市指定有形文化財となっている。平成23（2011）年に赤穂市へ寄贈され、赤穂市立有年考古館としてリニューアルオープンした。
239	国道2号		●		22 25 27		●					旧西国街道を前身としつつ、ほぼ直線を通すように敷設された国道。
240	国道373号		●		22 25 27		●					山陽地方と山陰地方を結ぶ路線で、赤穂市から岡山県を経由して鳥取県鳥取市に至る。
241	JR有年駅		●		25 27		●					明治23(1890)年、山陽鉄道有年駅として開設。隣接して赤穂鉄道有年駅も建てられた。駅舎は県内現存最古であったが、平成29(2017)年に解体された。
242	あこう河鹿の森		●		25	●	●					有年大池の上流一帯約54haに河鹿が生息していることから「あこう河鹿の森」と命名し、平成13・14年度に森林空間総合整備事業として遊歩道約2.7㎞や林相整備が行われた。上流には百間滝や百間岳があり、さらに進むと大津帆坂の砕石採取場に通じている。
243	赤穂ふれあいの森		●		25		●					赤穂市の北部に広がる約180ヘクタールの広大な森林。シイの自然林、人々の生活に深くかかわってきたアカマツ・コナラの里山、県下では珍しいシリブカガシの林などが見られる。毎夏期間限定でカブトムシ観察施設「かぶ～ん うね」がオープンし、山の斜面を利用した観察場で昆虫に触れながら遊べる。
244	東有年八幡神社 頭人行事 (付)東有年鎮座八幡 神社祭礼絵馬1面			◎	33					●		秋祭りは神事・頭人行列が行われ、神社の東約800 mにある御旅所まで練り歩く。頭人行列は「お渡り」と呼ばれ、屋台1基と頭人の乗った豪華な神輿3基が行列をなして御旅所へ向かう。頭人は小学生が務める稚児頭人で、頭人の家であることを示す「オハケ」とよばれる目印を設置するなど、古い祭礼の形態が残り、市の無形民俗文化財に指定されている。絵馬は、山頂の八幡神社から東有年の街道筋を、神輿が御旅所まで練り歩く様子を描いたもの。
245	旧有年宿のまちなみ			●	22 25 27	●	●					江戸時代の参勤交代で栄えた宿場町の風情が残る。『慶長播磨国絵図』には西有年に有年宿が置かれており、その後の参勤交代実施にあたって、橋の架けられなかった千種川の川待ちのための宿場町として移転したと考えられる。
246	彼岸花（しぶら）			●	25		●					「しぶらの里」とよばれる所以となったヒガンバナが自生する風景は、有年を代表する秋の農村風景である。
247	源氏流活花			●								明源寺の開祖千葉龍卜によって創流され、一時は江戸に三千余名の門人があったいう。
248	アユ釣り			●	25	●	●					千種川漁業協同組合により保護区、釣場や遊漁期間が定められている。おとりを使った友釣りが一般的で、釣りを楽しむ人々の光景も千種川の季節の風物詩である。
249	タバコ			●			●					大正11(1922)年に西有年で栽培がはじまると急速に普及した。有年駅近くにも煙草収納所が設けられ近隣の村でも葉タバコ栽培が盛んになった。
250	横山の開拓			●			●					昭和16(1941)年に食糧自給強化を目指す農地開発法により開始。翌年には神戸より4戸、養父郡より3戸が入植、その4年後には18戸になり開拓村が組織された。戦後は食糧難と海外からの引揚者の就労対策事業として継続され、昭和24(1949)年に有年開拓農業協同組合が組織された。
251	千種川の景観			●	22 25	●	●					千種川とその支流である矢野川、長谷川は自然豊かな景観を残す。
252	光明寺跡からの眺望			●	25		●					光明山山頂の光明寺跡からは、有年原・有年横尾の一帯が広く望める。
253	光明寺の紅葉			●	25		●					光明寺境内の八十八箇所石仏周辺の秋の景観。
254	八幡神社(有年牟礼)の紅葉			●	25		●					有年牟礼を見下ろす神社の秋の景観。
255	田園風景			●	25		●					ほ場整備は実施されているものの、水田風景が残されている。
256	鴾ヶ堂城跡展望台からの眺望			●	24 25		●					中世城郭の鴾ヶ堂城跡の郭内には展望デッキが設置されており、有年牟礼・有年横尾・有年原の3地区を広く望むことができる。
257	放亀			●	35		●					地名。百姓が亀を助けた（放った）おかげで、洪水によって肥沃な土が運び込まれたという。（赤穂の昔話）
258	木虎			●			●					地名。キタウラが訛ったものという説あり。
259	西有年			●	32 36		●					地名。近世は有年庄。水田面積1,194,437㎡を測り（兵庫県2013『西播磨西部(千種川流域圏)地域総合治水推進計画』）、千種川流域で最大の面積を誇る。
260	東有年			●	36		●					地名。
261	有年牟礼			●	36		●					地名。
262	黒沢			●	32		●					地名。近世は有年庄。かつて黒沢山中腹に黒沢村があったが、昭和30（1955）年頃より人口が減りだし、廃村となった。
263	楢原			●	32		●					地名。近世は有年庄。
264	栗栖			●	32		●					地名。近世は有年庄。
265	宿村			●	32		●					地名。近世は有年庄。
266	原			●	32		●					地名。近世は周世郷。
267	東			●	32		●					地名。近世は周世郷。
268	横尾			●	32		●					地名。近世は周世郷。
269	不動の淵(おけじゃ山)			●	22 27 32 35	●	●			●		黒鉄山から流れる長谷川が千種川にそそぐところを不動の淵といい、その裏山に建てられた山小屋で不思議なできごとがあったという。（赤穂の昔話）

22. 東西・南北の交通－近世山陽道と千種川－

【ストーリー】

千種川は、古くから南北の交通を担った川の道。近世に川を上下した高瀬舟は、米や塩など生活物資を運ぶ重要な手段であった。一方、陸路は東西を結ぶ街道や古道があり、中世に筑紫大道が、近世には参勤交代で利用された西国街道が通じていた。

近代になるまで千種川に橋は架けられず、交通の障壁であったが、その一方で、川待ちの人々を泊めるための宿場町「有年宿」が栄えた。

近代には、高瀬舟による物流は軽便鉄道の赤穂鉄道に取って代わられた。明治 23（1890）年に開通した国鉄有年駅は、軽便鉄道の貨物の積み替えの拠点となり、駅前の有年横尾は多いに栄えた。現在も国道 2 号が東西を貫く有年地区には、古代から現代に至るまで交通の要衝であったことを示す歴史文化遺産が数多く残されている。


高瀬舟灯台


池魚塚


旧有年宿のまちなみ


旧有年橋橋台


往来南の宝篋印塔


向山の五輪塔


有年家長屋門

有年地区　　歴史文化の視点２

23．古代の遺跡めぐり－文化財の宝庫－

【ストーリー】

遡ること約 10,000 年前からの遺跡が数多く残され「文化財の宝庫」と呼ばれる有年地区。

市内唯一の前方後円墳である放亀山 1 号墳、千種川最大の中期古墳である蟻無山 1 号墳、山一つに 150 基以上の古墳が眠る有年原・有年牟礼地区、「祇園塚型石室」と呼ばれる赤穂市周辺特有の石質構造をもつ古墳群など、かつての有年地区の隆盛と特徴を物語る貴重な文化財を今も見ることができる。

こうした豊かな文化財を守ったのは、昭和 25（1950）年に創立された有年考古館初代館長の松岡秀夫氏。有年考古館には、播磨国風土記から漏れている旧赤穂郡（現在の赤穂市・相生市・上郡町）の歴史を明らかにするための鍵が隠されている。


東有年・沖田遺跡公園

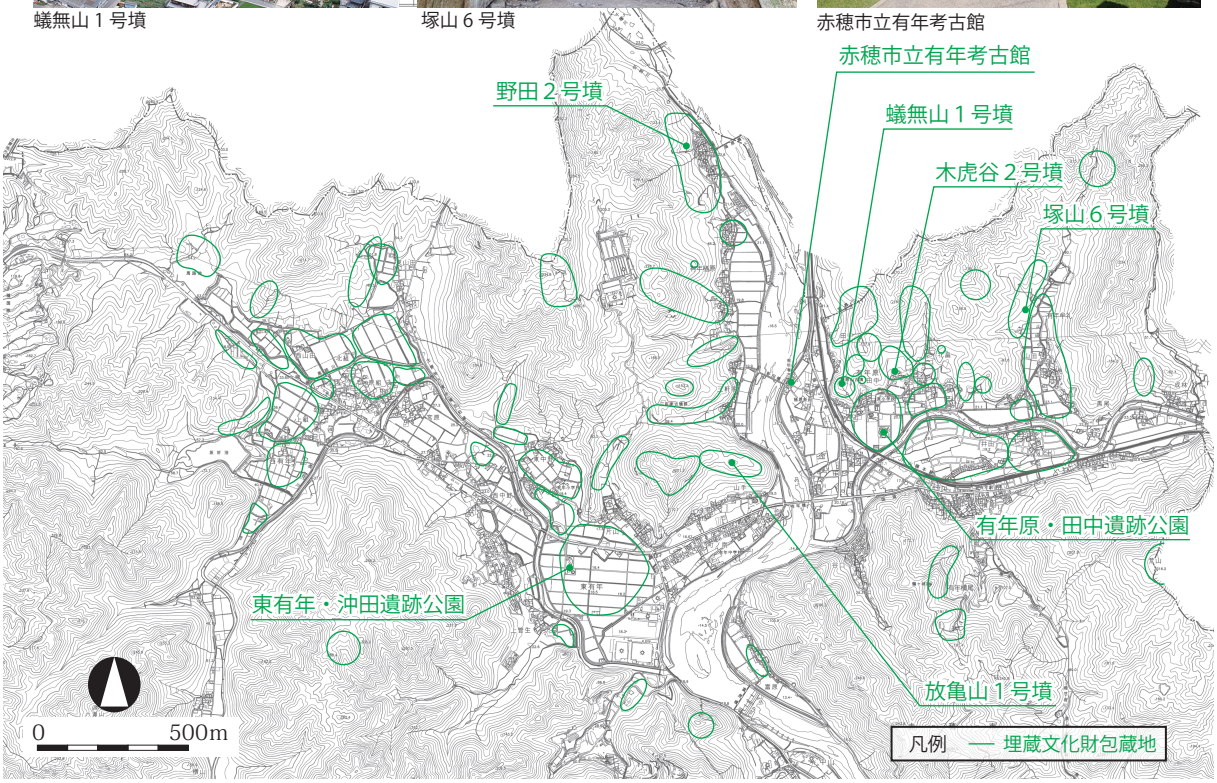

有年原・田中遺跡公園


野田 2 号墳


蟻無山 1 号墳


塚山 6 号墳


赤穂市立有年考古館



有年地区　歴史文化の視点３

24．夢のあと－山城と山岳寺院の風景－

【ストーリー】

中世、筑紫大道が東西に貫いていた有年地区には、山岳寺院が多数築かれた。山岳寺院とは、平安時代以降に仏教の教えの一つ、密教（天台宗・真言宗）が厳しい修行をするため山に寺院を築いたもので、有年地区には光明寺跡（現在の光明寺奥の院）と遍照院跡があり、現在も多数残された石造物や建物礎石が当時の様子を偲ばせる。

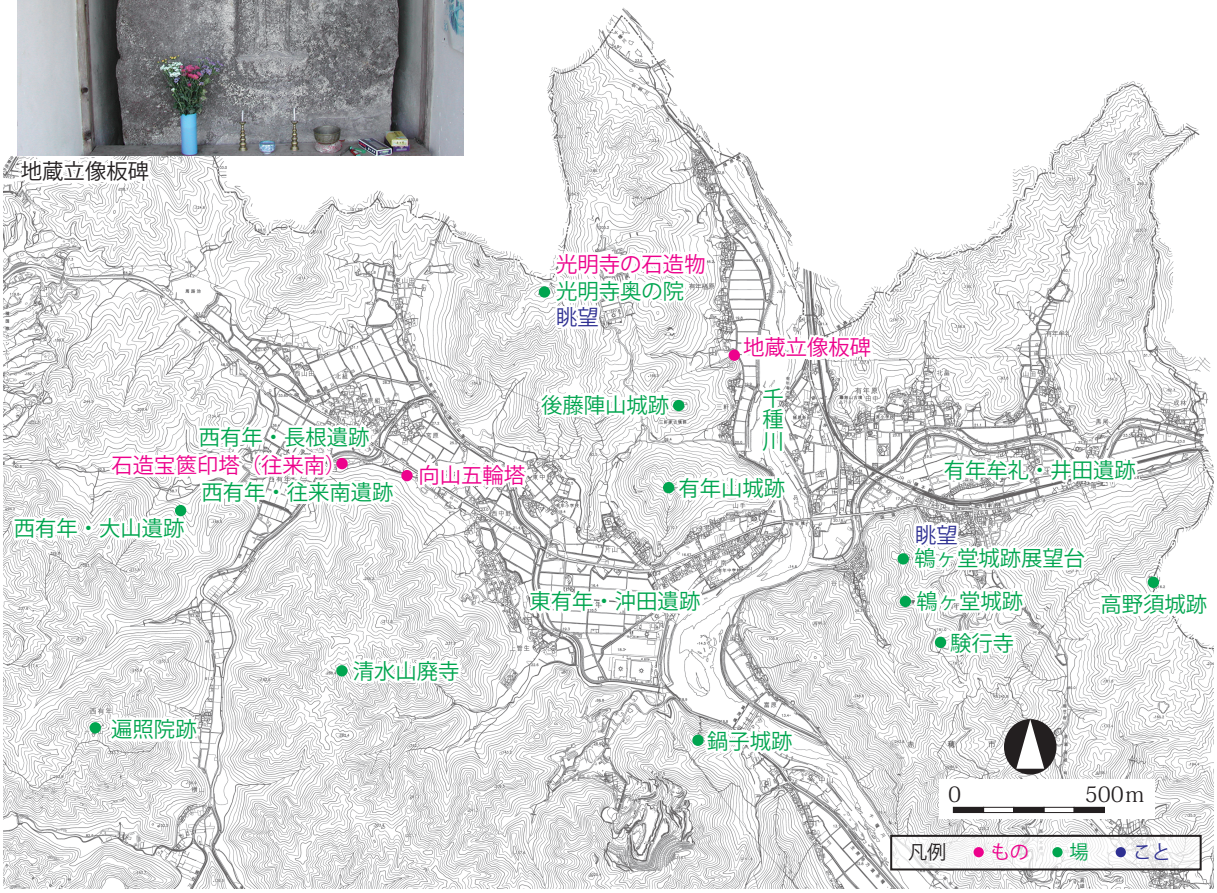
同じく山に築かれたものとして中世山城跡があり、赤松氏の時代に築かれた城跡は現在、山の中に眠ってしまっている。その眺望は昔も今も変わっていない。


有年山城跡


鴉ヶ堂城跡展望台


六道山遍照院跡


地蔵立像板碑



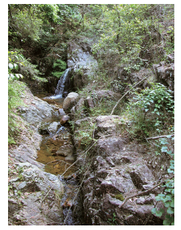
25．しぶらの里－豊かな農村風景－

【ストーリー】

かつて江戸文化研究者の西山松之助氏は、著書の中で有年地区を「しぶらの里」と呼んだ。「しぶら」とはヒガンバナのことで、毒を持つが、毒を抜くことで救済作物となった。西山氏は緑の農村風景に映えるヒガンバナの豊かな色彩に魅せられたのであろう。

有年地区は、現在でも豊かな農村・里山風景が広がり、時間が止まったかのような感覚を覚える。道中そこかしこにある歴史を重ねてきた多くの遺産、そしてヒガンバナがそこに歴史と彩りを与えてくれる。


八幡神社（東有年）


あこう河鹿の森


光明寺（東有年）


農村風景（有年楢原）


矢野川とヒガンバナ


大避神社（西有年）

有年地区　　歴史文化の視点５

26．有年の先人に出会う旅

【ストーリー】

有年地区を旅すると、必ず巡り合える石碑の数々。これは、昔の人々が地元の先人をたたえて建てたものである。その業績は活花、裁縫、力士、教育など多様な分野に広がっており、有年地区の文化や芸術の豊かさ、そして先人の顕彰を行う人々の心に触れることができる。


立花裁縫先生墓碑


沼田蘭山先生碑


江見裁縫先生碑


小鷹の墓碑群


松岡與之助像

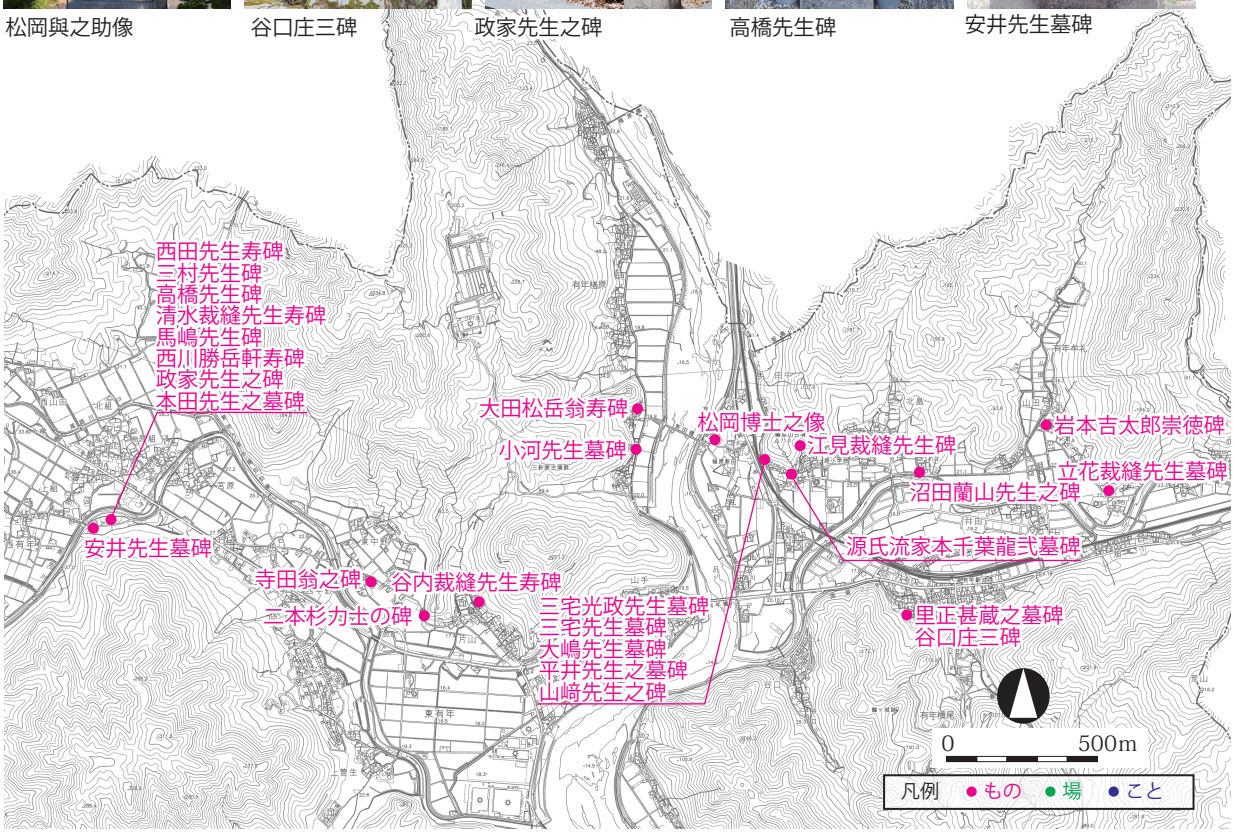


谷口庄三碑


政家先生之碑


高橋先生碑


安井先生墓碑



４．地域を越えた歴史文化の視点

本章で検討してきた「地域に根差した歴史文化の視点」は、市内各地区に注目することによって明らかとなる小テーマ群であった。これらは、各地区の歴史文化の特徴をよく表すテーマとして、今後の地域づくりの素材となることが期待されるものである。これらの中には、赤穂を代表する歴史文化とすべきものも含まれるが、その前に今一つ確認しておかなければならないのが、「地域を越えた歴史文化の視点」である。

地域を超えた歴史文化の視点とは、地域をそれぞれ個別に見ているだけでは、まとめることができない視点であり、また地域を越えて把握することによって、その意義がより明らかとなる視点である。地域の歴史文化を把握する作業によって明らかにしたのは、図 29 に示した 10 の視点である。以下、これらの概説をまとめていく。

27. 陸路・水路・海路の交通
28. 旧赤穂上水道をたずねて
29. 中世城郭と山岳寺院
30. 塩の道
31. 秦氏・渡来人伝承
32. 江戸時代の赤穂を歩く―『播州赤穂郡志』の世界
33. 秋祭りと獅子舞
34. 遺跡の宝庫
35. 赤穂のむかしばなし
36. 地名の生きるまち

図 29　　地域を越えた歴史文化の視点一覧

地域を越えた歴史文化の視点

27.　陸路・水路・海路の交通

【ストーリー】

山、川、海の豊かな自然に恵まれた赤穂では、古来よりこれらを活かした交通が発達していた。赤穂市北部の有年地域は、中近世には筑紫大道や西国街道が、現在は国道 2 号が通る重要な交通路であるが、かつてはこの東西交通に加え、千種川の舟運「高瀬舟」が南北を往来しており、交通の拠点として栄えていた。

高瀬舟が南下してたどり着くのは河口部にある坂越であり、また江戸時代の赤穂城下町であった。当時の赤穂は製塩の一大産地として栄えており、高瀬舟によって上流から製塩資材や年貢となる米が運ばれた。城下町や坂越からは、全国各地へ廻船が出帆し、他国からの船も頻繁に寄港した。その一つの証拠となるのが、坂越にある黒崎墓所（県史跡）であり、北は出羽、南は種子島、東は伊豆、西は対馬までを出身とする水夫らが、坂越浦周辺で客死したものを葬ったものである。

近代になると大正 10（1921）年に敷設された赤穂鉄道が市内の南北をつなぎ、高瀬舟に代わって物流を担ったが、国鉄（現在の JR）赤穂線の開業によって廃線となった。赤穂鉄道の線路跡の多くは市に寄付され、現在も人々の生活を支える主要道として、あるいは桜並木などを楽しめる散歩道として利用されている。江戸時代以来の旧道もその多くが残されており、まち並みとともに往時の風情をしのぶことができる。


千種川


高瀬舟灯台


旧赤穂鉄道軌道跡


根木鉄橋基礎跡

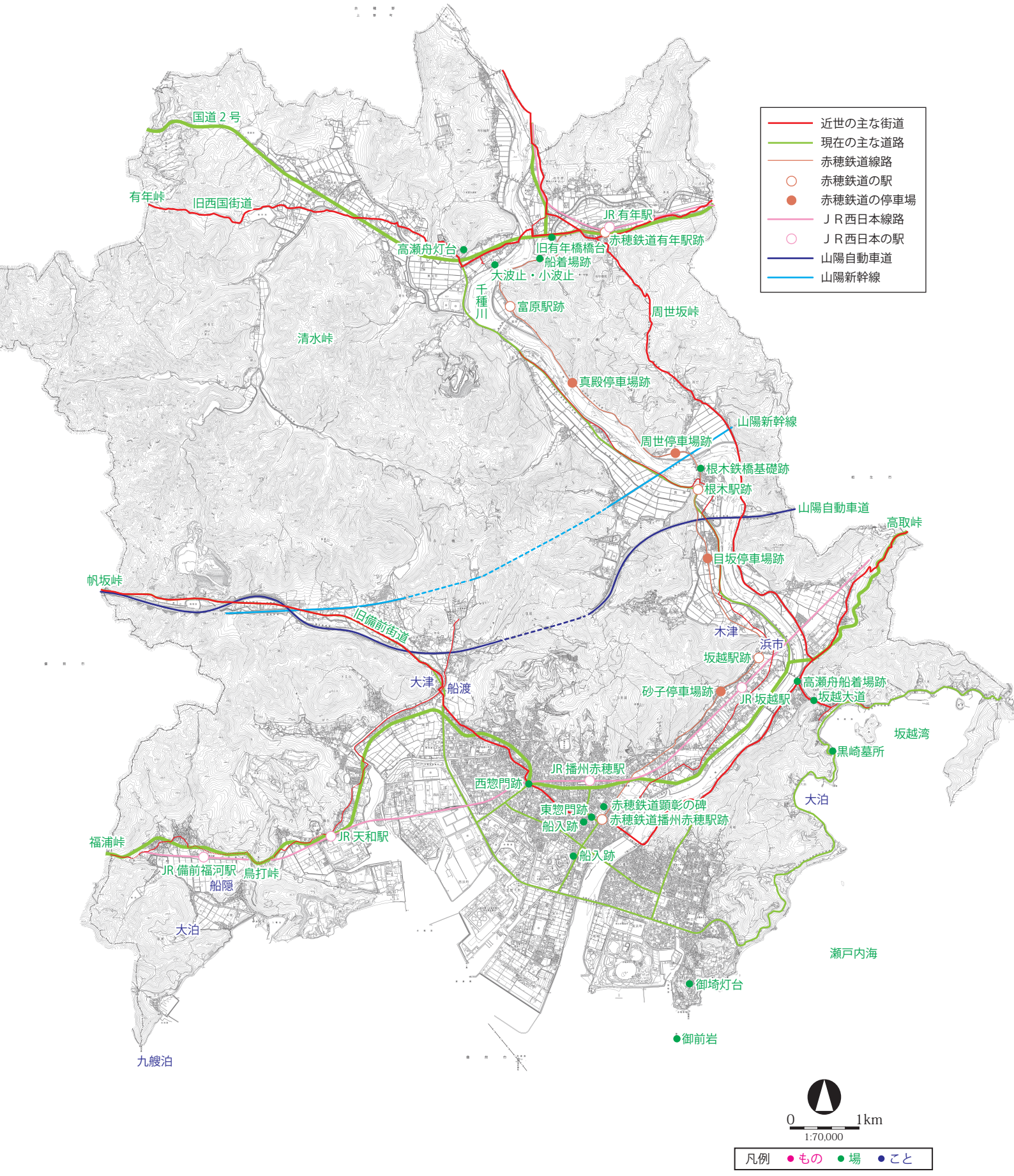

坂越湾


塩屋のまちなみ


加里屋川護岸の雁木


旧備前街道


御崎灯台


近世の主な街道
現在の主な道路
赤穂鉄道線路
赤穂鉄道の駅
赤穂鉄道の停車場
ＪＲ西日本線路
ＪＲ西日本の駅
山陽自動車道
山陽新幹線
国道２号
有年峠
旧西国街道
JR有年駅
赤穂鉄道有年駅跡
旧有年橋橋台
高瀬舟灯台
船着場跡
大波止・小波止
千種川
富原駅跡
周世坂峠
清水峠
真殿停車場跡
山陽新幹線
周世停車場跡
根木鉄橋基礎跡
根木駅跡
山陽自動車道
高取峠
目坂停車場跡
帆坂峠
旧備前街道
木津
浜市
坂越駅跡
大津
船渡
砂子停車場跡
JR坂越駅
高瀬舟船着場跡
坂越大道
坂越湾
黒崎墓所
JR播州赤穂駅
西惣門跡
大泊
東惣門跡
赤穂鉄道顕彰の碑
船入跡
赤穂鉄道播州赤穂駅跡
福浦峠
JR天和駅
船入跡
JR備前福河駅
鳥打峠
船隠
大泊
瀬戸内海
御崎灯台
御前岩
九艘泊
0
1km
1:70,000
凡例　●もの　●場　●こと

地域を越えた歴史文化の視点

28.　旧赤穂上水道をたずねて

【ストーリー】

江戸時代になって播磨を支配した池田家の代官、垂水半左衛門は、陸地化が進んでいた千種川河口部に城と城下町を築くことになったとき、都市のインフラとして必要不可欠な上水の確保に悩まされた。当時の河口部の標高は約1.0mであり、井戸を掘削しても塩水が出てくるため、飲み水さえ得ることができなかったためである。

そこで垂水半左衛門は、約 7km北方にある西山に熊見川（現在の千種川）がぶつかって淵をつくっていることを利用し、そこにトンネル（隧道）を掘削することで上水の確保を行った。

その後、取水場所は高雄船渡取水井堰、木津取水井堰へと変遷したが、それは現在の赤穂城を築いた浅野長直が、戸島新田を開拓するための農業用水を確保するためであったとされる。この頃には、取水された水は、戸島枡で城下町への導水と農業用水路とに分岐し、まちと田を潤していた。

この水道は昭和 19（1944）年に近代的水道が整備されるまで使用された。江戸時代から近代にいたるまで使用可能であったのは、清流千種川の恩恵であろう。

現在も、導水路の多くは残されており、自然豊かな景観を保つとともに、農業用水として利用されている。


切山隧道


高雄船渡取水井堰跡


三ヶ村の樋跡


木津取水井堰跡


戸島枡

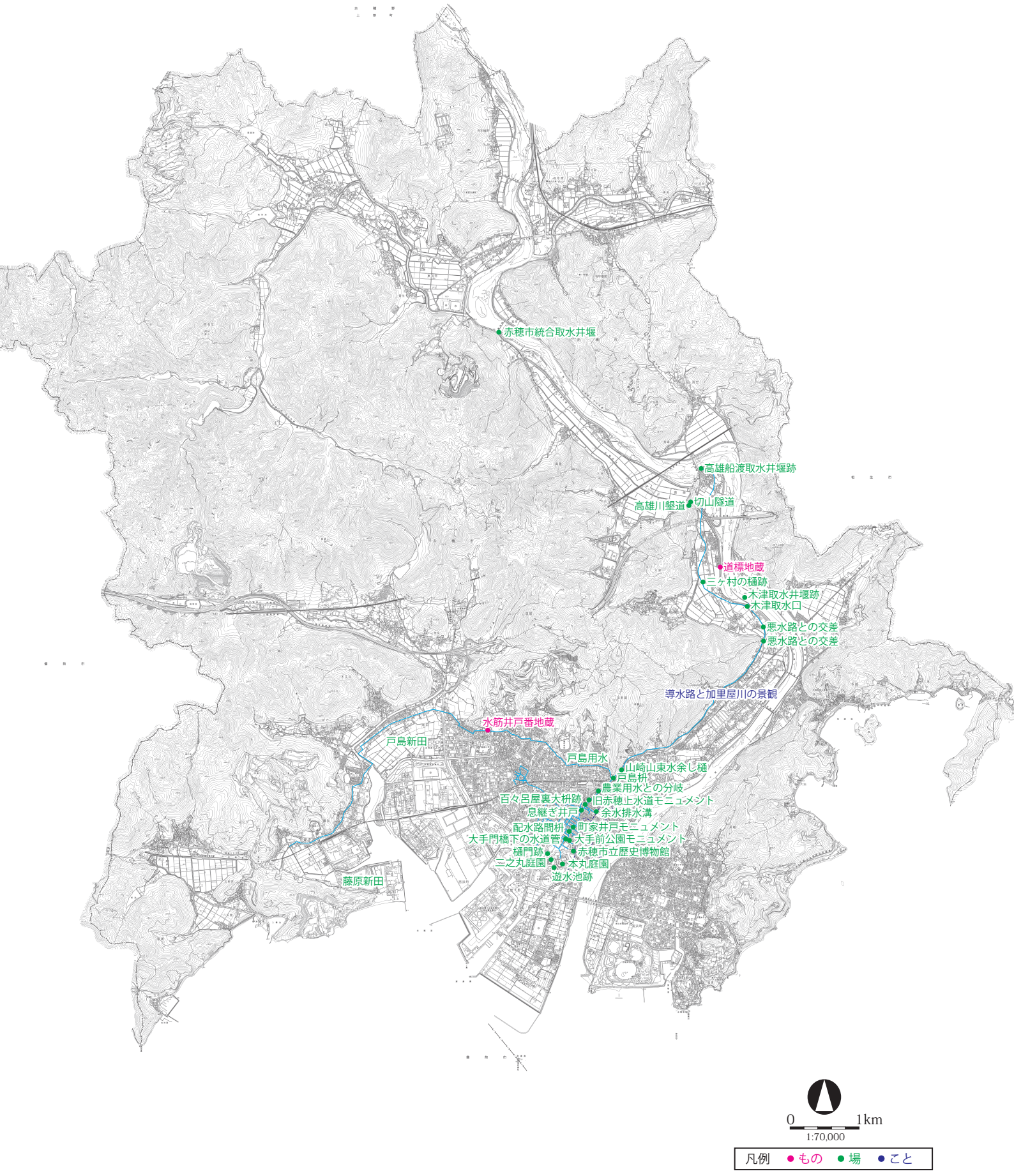

戸島用水


旧上水道保存区域


町屋井戸モニュメント


赤穂市立歴史博物館の展示


民家に残る汲出枡


赤穂市統合取水井堰
高雄船渡取水井堰跡
高雄川塁道
切山隧道
道標地蔵
三ヶ村の樋跡
木津取水井堰跡
木津取水口
悪水路との交差
悪水路との交差
導水路と加里屋川の景観
水筋井戸番地蔵
戸島新田
戸島用水
山崎山東水余し樋
戸島枡
農業用水との分岐
百々呂屋裏大枡跡
旧赤穂止水道モニュメント
息継ぎ井戸
余水排水溝
配水路間枡
町家井戸モニュメント
大手門橋下の水道管
大手前公園モニュメント
樋門跡
赤穂市立歴史博物館
三之丸庭園
本丸庭園
遊水池跡
藤原新田
0
1km
1:70,000
凡例　●もの　●場　●こと

地域を越えた歴史文化の視点

29.　中世城郭と山岳寺院

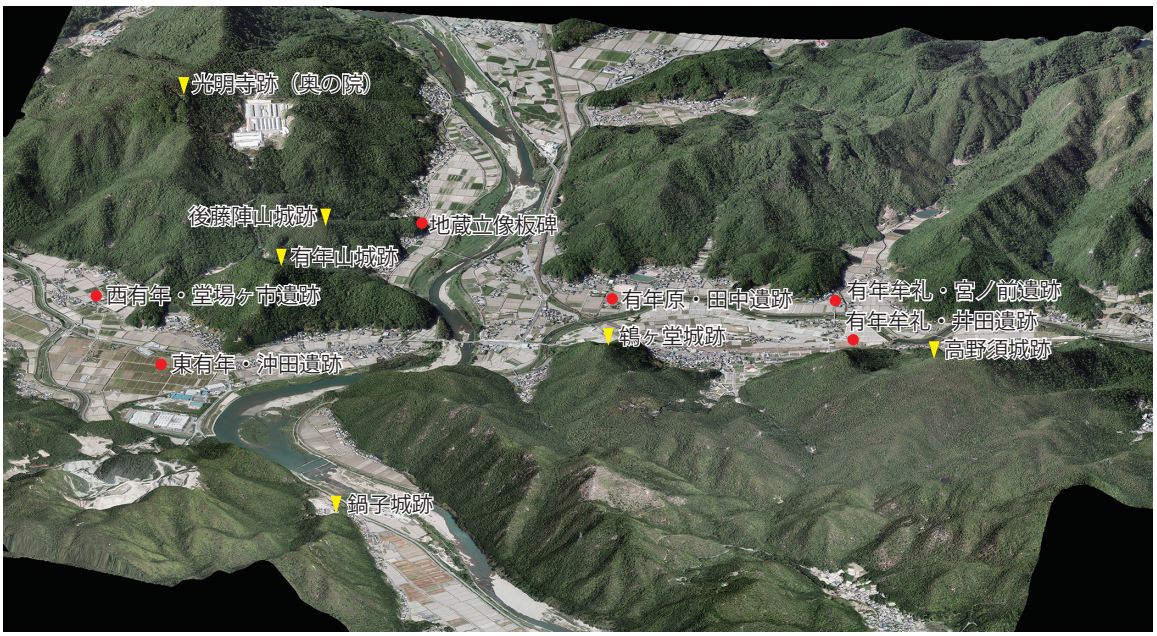
【ストーリー】

鎌倉時代から室町時代の播磨は、戦乱に明け暮れた時代であった。市内には、陸上交通の要であった有年地域や、海上交通の拠点であった坂越地域に山城が多数築かれたほか、当時急速に陸地化していた河口部には加里屋古城が築かれるなど、赤穂が戦略的な拠点として機能し始めていた。

これらの山城を築いた有力者たちの居館として、東有年・沖田遺跡において大規模な建物跡が発見されている。

戦乱にあけくれた時代はしかし、祈りの時代でもあった。このころには、山にこもって厳しい修行に励む山岳信仰が流行しており、赤穂でも、特に有年地域を中心として複数の山岳寺院が築かれるようになった。

山岳寺院が山を下りて営まれるようになるのは中世でも末期頃であり、この頃に出来たのが、加里屋古城周辺（現在の市街地）の寺院であった。

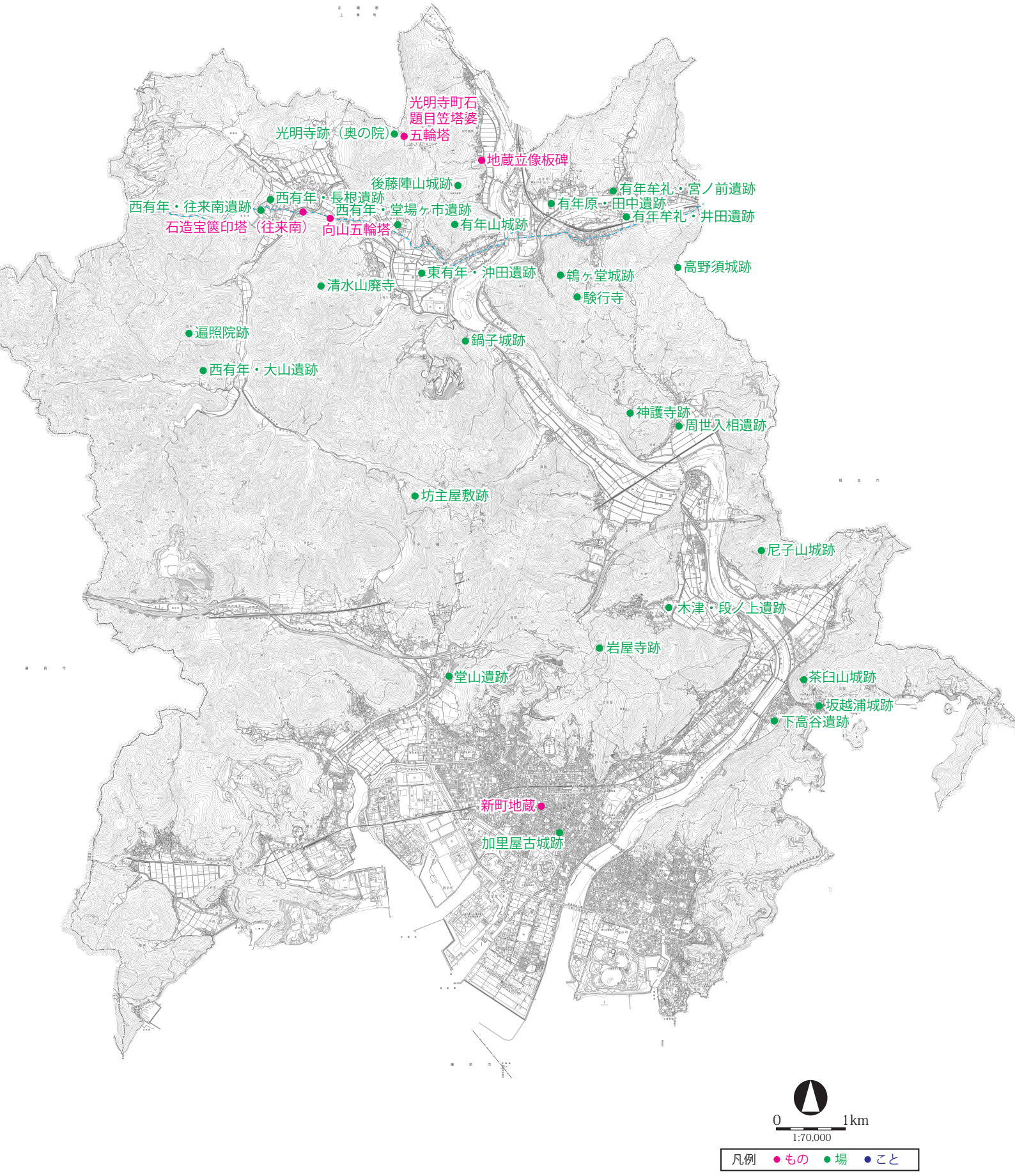


有年地区の山城跡等の分布


新町地蔵


茶臼山城跡・坂越浦城跡　（撮影：出水伯明）


尼子山城跡


光明寺町石
題目笠塔婆
光明寺跡（奥の院）
五輪塔
地蔵立像板碑
後藤陣山城跡
有年牟礼・宮ノ前遺跡
西有年・長根遺跡
有年原・田中遺跡
西有年・往来南遺跡
西有年・堂場ヶ市遺跡
有年牟礼・井田遺跡
石造宝篋印塔（往来南）
向山五輪塔
有年山城跡
高野須城跡
東有年・沖田遺跡
鴾ヶ堂城跡
清水山廃寺
験行寺
遍照院跡
鍋子城跡
西有年・大山遺跡
神護寺跡
周世入相遺跡
坊主屋敷跡
尼子山城跡
木津・段ノ上遺跡
岩屋寺跡
堂山遺跡
茶臼山城跡
坂越浦城跡
下高谷遺跡
新町地蔵
加里屋古城跡
0
1km
1:70,000
凡例　●もの　●場　●こと

地域を越えた歴史文化の視点

30.　塩の道

【ストーリー】

赤穂では、弥生時代終末期から土器製塩が行われていた。その後、塩田を構築する技法が確立してくると、晴れの日が多く、遠浅の海が広がり、干満の差が激しいなどといった条件を備えた、赤穂を含む瀬戸内海沿岸が塩づくりに最も適した産地として栄えた。

赤穂では、平安時代にすでに東大寺の荘園として塩田が経営されはじめ、江戸時代に入ると池田家が塩田干拓に着手した。その後は浅野家によって主に東浜塩田の本格的な開発が行われ、続く森家時代になると西浜塩田が開発されるなどして塩田面積は拡大していった。塩田干拓は近代まで積極的に行われ、昭和 10（1935）年には東浜、西浜あわせた塩田面積 367.2ha を誇った。

近世の入浜塩田は、近代になると流下式塩田に転換し、さらにイオン交換膜による化学製塩の実現によって、塩田は廃止された。

江戸時代から近現代に至る生産関連の遺構はもとより、塩の生産、販売にかかわる輸送関連の遺構も多く見ることができ、まさに「塩の道」をたどることができるのが、赤穂の特徴である。



高瀬舟船着場跡
千種川沿いの上高谷に設置された船着場は、千種川と坂越湾とをつないだ。



坂越大道
高瀬舟の船着場から坂越湾とをつなぐ大動脈で現在も歴史的なまちなみが残されている。



黒崎墓所
全国各地の水夫らの墓地。墓石が故地から運ばれたものもある。



千種川河口部
河口部には赤穂城と城下町があり、高瀬舟が行き来した。



旧日本専売公社赤穂支局
明治 41（1908）年に建築された建築で、現在は民俗資料館となっている。



塩の国の復元塩田
兵庫県立赤穂海浜公園内にあり、現在も枝条架による塩づくりが行われている。



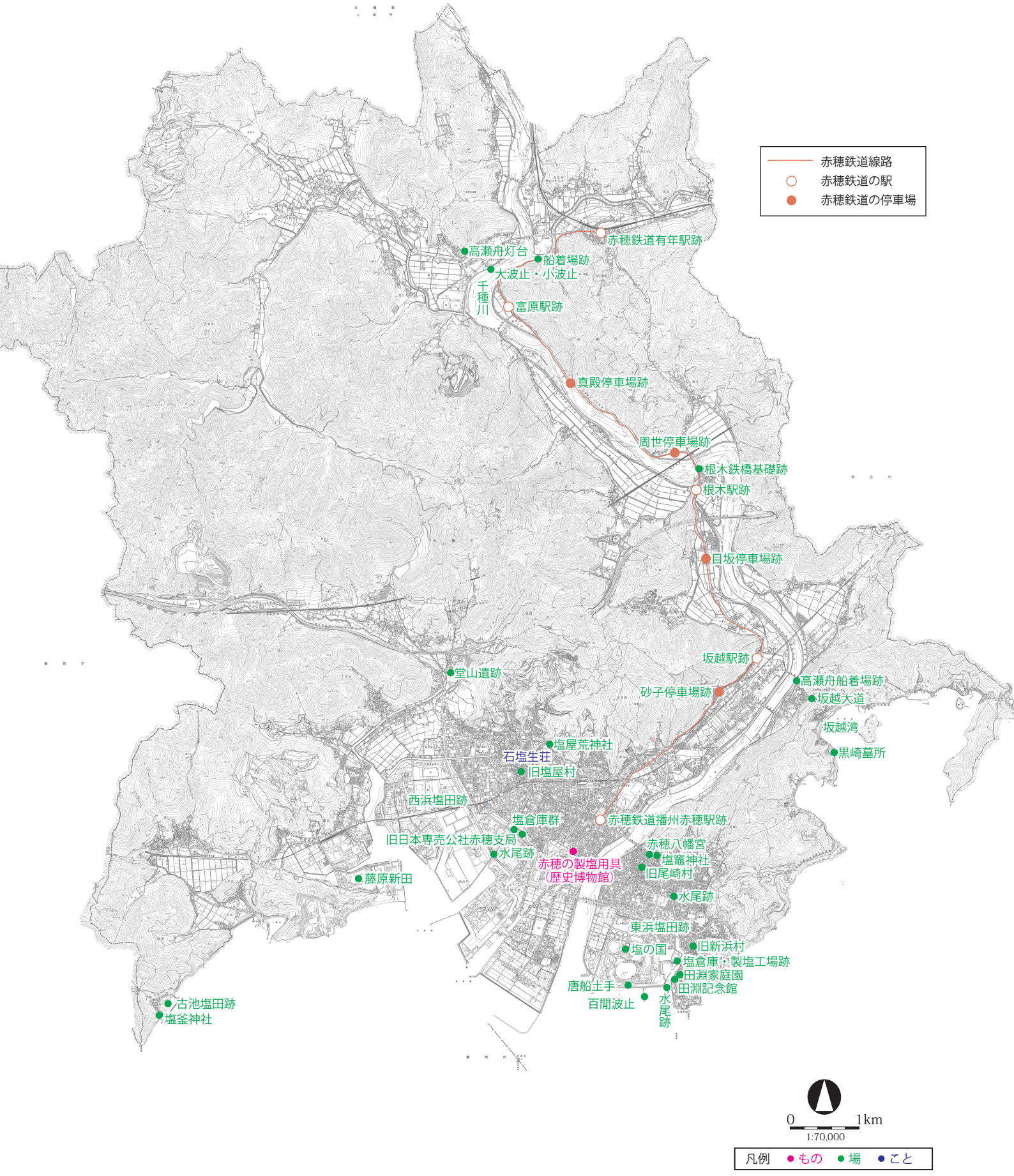
塩倉庫・製塩工場跡
東浜塩田の製塩工場跡。現在は塩倉庫の一部が残る。



古池塩田跡（撮影：出水伯明）
文政 6（1823）年完成の塩田で、昭和 46（1971）年の廃止後、そのまま残されている。



廻船模型（赤穂市立歴史博物館）
坂越を中心とし、赤穂の塩運送などに利用された。実物の 3 分の 1 模型。


赤穂鉄道線路
赤穂鉄道の駅
赤穂鉄道の停車場
赤穂鉄道有年駅跡
高瀬舟灯台
船着場跡
大波止・小波止
千種川
富原駅跡
真殿停車場跡
周世停車場跡
根木鉄橋基礎跡
根木駅跡
目坂停車場跡
坂越駅跡
堂山遺跡
砂子停車場跡
高瀬舟船着場跡
坂越大道
坂越湾
黒崎墓所
塩屋荒神社
石塩生荘
旧塩屋村
西浜塩田跡
塩倉庫群
赤穂鉄道播州赤穂駅跡
旧日本専売公社赤穂支局
水尾跡
赤穂の製塩用具（歴史博物館）
赤穂八幡宮
塩竈神社
旧尾崎村
藤原新田
水尾跡
東浜塩田跡
塩の国
旧新浜村
塩倉庫・製塩工場跡
田淵家庭園
田淵記念館
唐船土手
百閒波止
水尾跡
古池塩田跡
塩釜神社
0
1km
1:70,000
凡例　●もの　●場　●こと

地域を越えた歴史文化の視点

31.　秦氏・渡来人伝承

【ストーリー】

坂越の生島に漂着した伝説をもつ、聖徳太子の重臣、秦河勝。旧赤穂郡（現在の赤穂市・相生市・上郡町）には、かつて秦河勝＝大避大明神を祭神とする神社が約 30 あったと言われている。現在でも、赤穂市内でゆかりの神社として 8 社が確認でき、千種川流域にその分布が広がっていたことがわかっている。

秦氏伝承は、朝鮮半島から様々な文化を伝えた渡来人伝承のひとつであり、奈良県平城宮跡の発掘調査で見つかった木簡からは、赤穂郡の秦氏に関する記録が見つかっているほか、8 世紀から 12 世紀くらいまでの古文献に、赤穂郡を治めていた秦氏の記録が残されている。さらに、有年原・田中遺跡や蟻無山古墳からは、朝鮮半島からもたらされた文物の一つである初期須恵器が、また有年牟礼・山田遺跡からは、「秦」と線刻された土器が出土するなど、渡来人や秦氏との深いかかわりを予感させるに十分な資料に恵まれている。



蟻無山１号墳出土土器
5 世紀前半の渡来系文物として知られる。



有年原・田中遺跡出土土器
5 世紀前半の渡来系文物として知られる。周辺に窯跡が想定されている。



「秦」線刻土器
赤穂郡と秦氏との関わりを示す平安時代の須恵器碗の破片。



大避神社（西有年）
秦河勝を祭神とする神社。周辺には社叢林が広がり鎮守の森となっている。



大避神社（中山）
中山集落の北方山裾にある、秦河勝を祭神とする神社。天満神社、荒神社を合祀している。



八幡神社（周世）
周世集落の背後にあり、大避神社を合祀している。



大避神社（木津）
秦河勝を祭神とするもので『赤穂郡誌』（明治 41 年刊）によれば、明暦 2（1656）年の鎮座と伝える。



生島
秦河勝漂着伝説をもち、伝秦河勝墓が所在する。



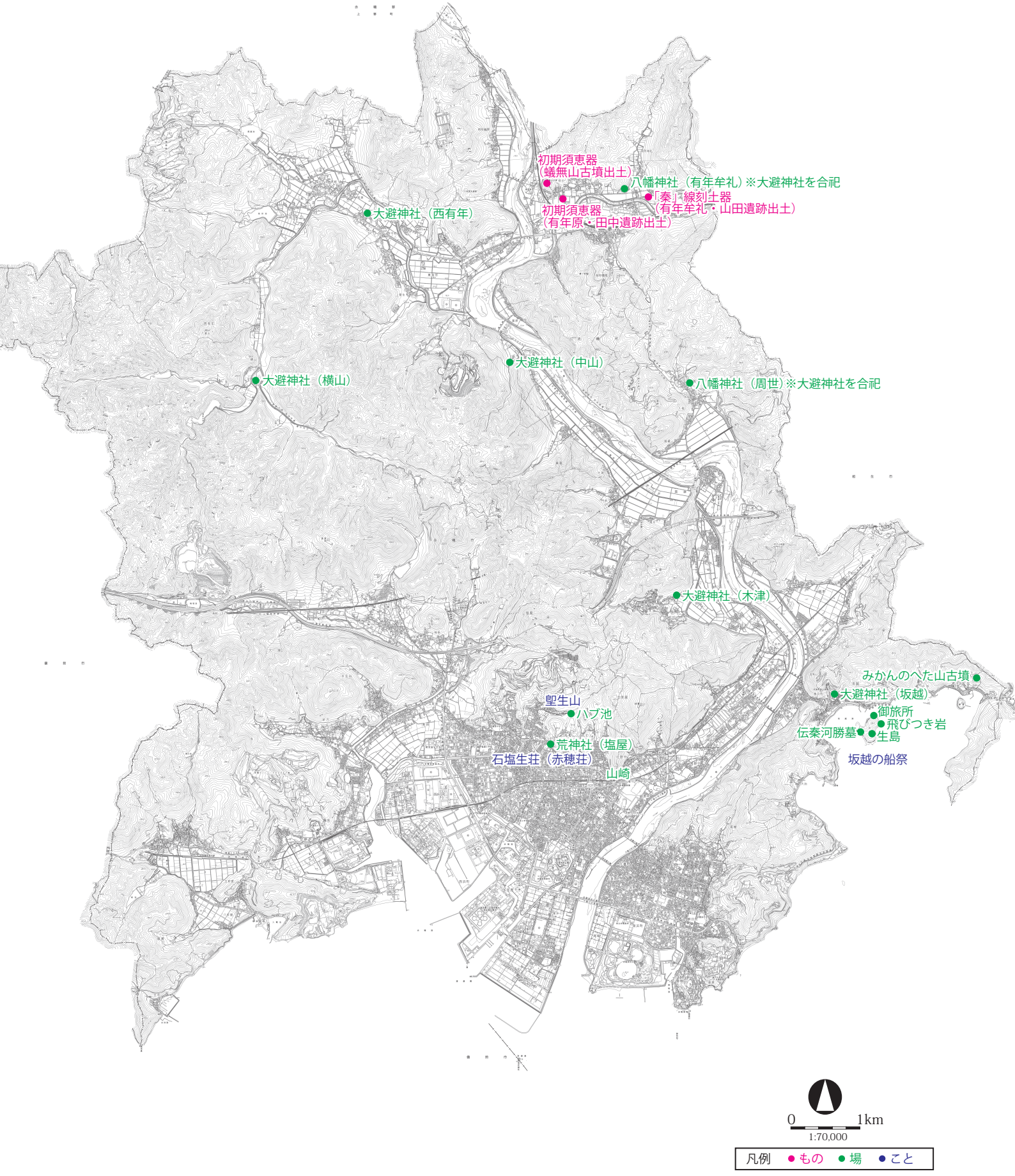
大避神社（坂越）
秦河勝の漂着地である坂越に鎮座し、生島内に御旅所をもつ。



御旅所
生島内にあり、隣接して「坂越の船祭」で使用される和船の船倉が立地する。



生島古墳（伝秦河勝墓）
生島内にある径約 21mの円墳。築造年代は明らかでない。


初期須恵器
（蟻無山古墳出土）
八幡神社（有年牟礼）※大避神社を合祀
「秦」線刻土器
（有年牟礼・山田遺跡出土）
初期須恵器
（有年原・田中遺跡出土）
大避神社（西有年）
大避神社（中山）
大避神社（横山）
八幡神社（周世）※大避神社を合祀
大避神社（木津）
みかんのへた山古墳
大避神社（坂越）
御旅所
飛びつき岩
伝秦河勝墓
生島
坂越の船祭
聖生山
ハブ池
荒神社（塩屋）
石塩生荘（赤穂荘）
山崎
0
1km
1:70,000
凡例　●もの　●場　●こと

地域を越えた歴史文化の視点

32. 江戸時代の赤穂を歩く―『播州赤穂郡志』の世界

【ストーリー】

享保 12（1727）年、藤江熊陽（忠廉）によって記された『播州赤穂郡志』は、旧赤穂郡（赤穂市、相生市、上郡町）における、主に中世以降の歴史を記した地誌である。

テーマは、赤穂郡の庄郷、領主、城郭、町割・諸村、川筋、道筋、古城、古跡・古人、神社、仏閣、土産、風俗に分かれており、昔の村、城や城下町の様子、地形、当時の神社仏閣などが、どのような姿であったのか、詳細に記されている。

約 300 年前に書かれた「現在」の記録。そこに記載されたものの多くが、現在も残されていることに気づく。

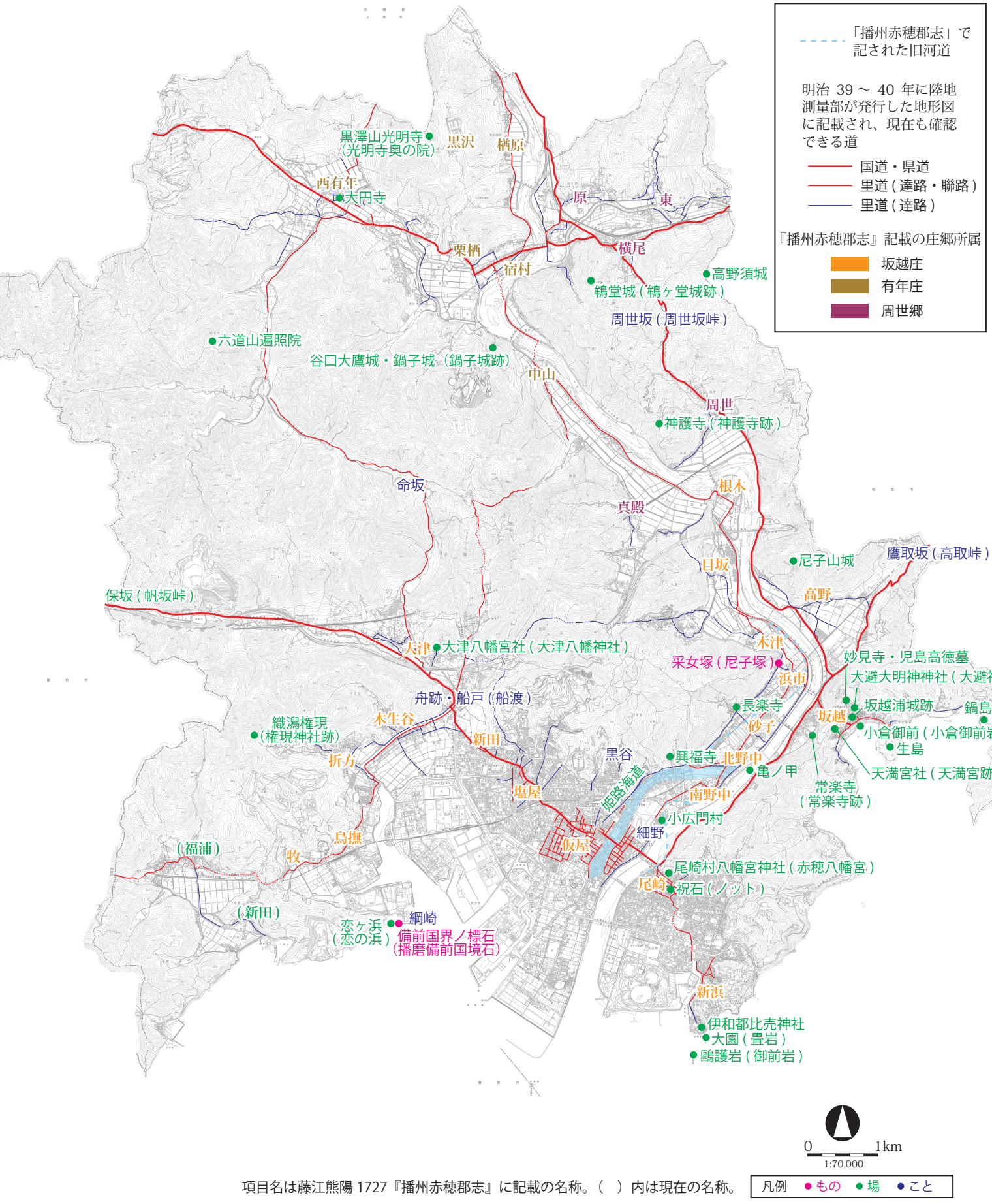
たとえ、区画整理やほ場整備が行われた場所であっても、旧街道の多くは変わりなく見ることができる。また社寺をはじめ、地名等にいたってはその多くが残されており、300 年前と変わらぬ風景、景観、社寺、地名が多く残っていることを教えてくれる。


百目堤跡


播磨備前国境石


畳岩（大園）





項目名は藤江熊陽 1727『播州赤穂郡志』に記載の名称。（　）内は現在の名称。

地域を越えた歴史文化の視点

33.　秋祭りと獅子舞

【ストーリー】

「獅子どころ」と言われる播磨地域のなかでも特に旧赤穂郡では獅子舞が盛んである。赤穂市内 39 地区のうち、秋祭りで獅子舞を奉納している地区は 25 あり、残りの地区も、かつて実施していたか隣の地区に舞ってもらっていたというから、本来は、すべての地区の秋祭りに獅子舞があったと言える。

獅子舞のうち、獅子と同様重要な役割を占めるのがハナダカ（天狗）で、各地区の獅子舞では行列の先頭に立ち、場を浄め先導する役割を担う。さらにカラコ、オタヤン、ボンサン、サル、キツネといった地区ごとに多様な「役」が登場し、それぞれ特徴のある舞が奉納される。

赤穂では、秋祭りの 1 ヶ月以上前から各地区で練習が始まり、幼児から大人までが共に練習し、その結果、地区内において顔の見える関係が形成され、地区コミュニティが保たれている。その名残が「頭人（当人）」と言われる制度であり、現在も一部の祭りに残っている。

また、瀬戸内海に面した赤穂らしく瀬戸内三大船祭の一つに数えられる坂越の船祭（国重要無形民俗文化財）など、多様な祭りが見られる。


坂越の船祭
（大避神社／坂越）


赤穂八幡宮獅子舞
（赤穂八幡宮／尾崎）


塩屋荒神社屋台行事
（荒神社／塩屋）


鳥撫荒神社獅子舞
（荒神社／鵤和）


東有年・八幡神社頭人行事
（八幡神社／東有年）

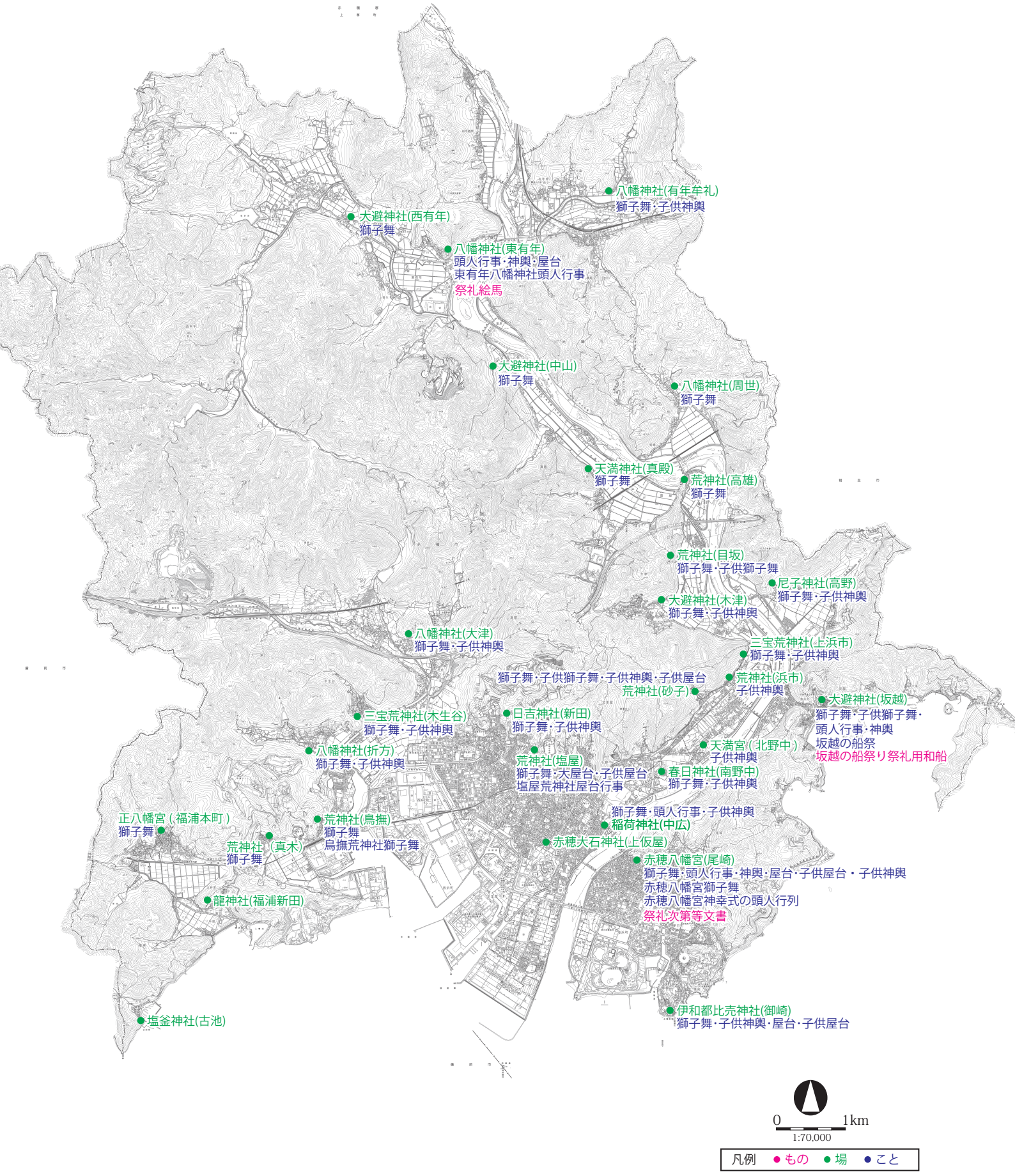

西有年獅子舞
（大避神社／西有年）


中山獅子舞
（大避神社／中山）


有年牟礼獅子舞
（八幡神社／有年牟礼）


有年原獅子舞
（須賀神社／有年原）


真殿獅子舞
（天満宮／真殿）


八幡神社(有年牟礼)
獅子舞・子供神輿
大避神社(西有年)
獅子舞
八幡神社(東有年)
頭人行事・神輿・屋台
東有年八幡神社頭人行事
祭礼絵馬
大避神社(中山)
獅子舞
八幡神社(周世)
獅子舞
天満神社(真殿)
獅子舞
荒神社(高雄)
獅子舞
荒神社(目坂)
獅子舞・子供獅子舞
尼子神社(高野)
獅子舞・子供神輿
大避神社(木津)
獅子舞・子供神輿
八幡神社(大津)
獅子舞・子供神輿
三宝荒神社(上浜市)
獅子舞・子供神輿
獅子舞・子供獅子舞・子供神輿・子供屋台
荒神社(砂子)
荒神社(浜市)
子供神輿
大避神社(坂越)
獅子舞・子供獅子舞・
頭人行事・神輿
坂越の船祭
坂越の船祭り祭礼用和船
三宝荒神社(木生谷)
獅子舞・子供神輿
日吉神社(新田)
獅子舞・子供神輿
八幡神社(折方)
獅子舞・子供神輿
天満宮(北野中)
子供神輿
荒神社(塩屋)
獅子舞・大屋台・子供屋台
塩屋荒神社屋台行事
春日神社(南野中)
獅子舞・子供神輿
正八幡宮(福浦本町)
獅子舞
荒神社(鳥撫)
獅子舞
鳥撫荒神社獅子舞
荒神社(真木)
獅子舞
獅子舞・頭人行事・子供神輿
稲荷神社(中広)
赤穂大石神社(上仮屋)
赤穂八幡宮(尾崎)
獅子舞・頭人行事・神輿・屋台・子供屋台・子供神輿
赤穂八幡宮獅子舞
赤穂八幡宮神幸式の頭人行列
祭礼次第等文書
龍神社(福浦新田)
塩釜神社(古池)
伊和都比売神社(御崎)
獅子舞・子供神輿・屋台・子供屋台
0
1km
1:70,000
凡例　●もの　●場　●こと

地域を越えた歴史文化の視点

34.　遺跡の宝庫

【ストーリー】

赤穂市は、その地形から山、川、海の恵みを享受でき、さらに住みやすい瀬戸内型気候も相まって、古来より人々が生活を営んできた。その歴史は約 10,000 年前にまで遡り、縄文時代後期（4,000 年前）には、市内各地で人々の生活痕跡が発見されている。

集落が特に激増するのは、弥生時代中期（約 2,200 年前）になってからで、この頃の中心部であった市北部の有年地区には、全国的に知られた遺跡も存在している。

市南部は、中世頃になって千種川の運んだ土砂が堆積し始め、陸地が拡大していった後に港町が営まれるようになり、赤穂城や城下町の建設に伴って発展する。このように遺跡の分布は、地区の成り立ちを物語っていると言える。


蟻無山１号墳


木虎谷２号墳


塚山６号墳


真殿・門前古墳群


周世宮裏山古墳群

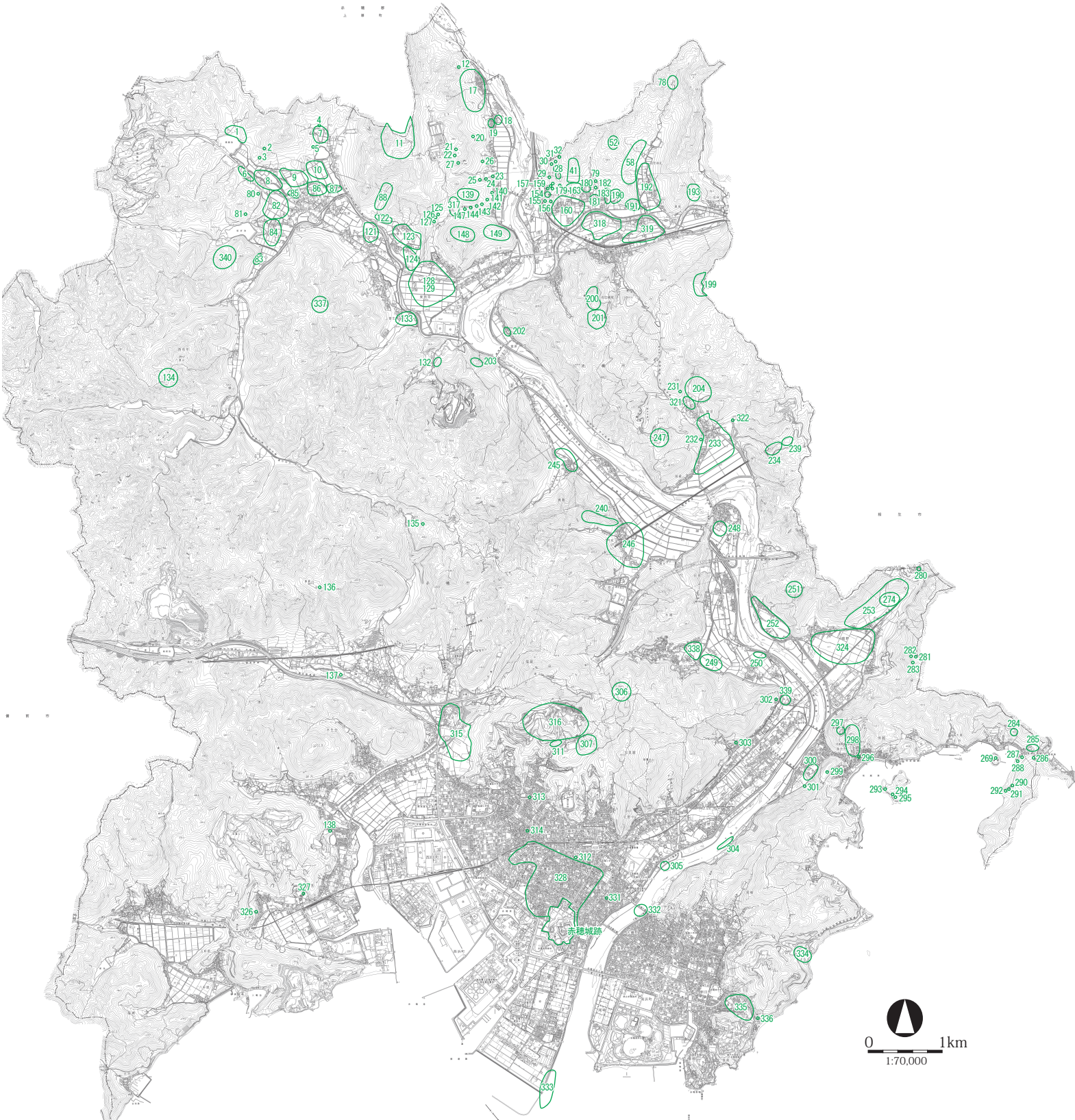

みかんのへた山古墳


高取山古墳群


赤穂城下町跡


赤穂城跡

1　西有年・馬路池遺跡
2-5　北山古墳群
6　西有年・柴床遺跡
7　西有年・木ノ目遺跡
8　西有年・堂免遺跡
9　西有年・玄形遺跡
10　西有年・木ノ目池下遺跡
11　黒沢山光明寺跡
12-16　野田古墳群
17　野田遺跡
18　上所二又溝遺跡
19　上所山田遺跡
20　精谷山遺跡
21-27　中所古墳群
28　北原遺跡
29-33　北原古墳群
34-40　奥山古墳群
41-51　惣計谷古墳群
52-57　奥山田古墳群
58-77　塚山古墳群
78　山田奥窯跡
79　津村古墳
80-81　長根古墳群
82　西有年・長根遺跡
83　西有年・香山遺跡
84　西有年・往来南遺跡
85　西有年・北遺跡
86　西有年・垣内田遺跡
87　西有年・畑田遺跡
88-120　与井谷口古墳群
121　西有年・宮東遺跡
122　西有年・与井谷口遺跡
123　西有年・堂場ヶ市遺跡
124　西有年・遠古殿遺跡
125-127　番ヶ瀬古墳群
128　東有年・沖田遺跡
129-131　東有年・沖田古墳群
132　下菅生遺跡
133　上菅生遺跡
134　六道山遍照院跡
135　坊主屋敷跡
136　黒鉄山土器片出土地
137　大津出口貝塚
138　天神山古墳
139　後藤陣山城跡
140-147　三軒家古墳群
148　有年山城跡
149-153　放亀山古墳群
154-156　蟻無山古墳群
157-159　玉堀古墳群
160-162　有年原・田中遺跡
163-177　木虎谷古墳群
178　木虎谷遺跡
179　奥山遺跡
180　有年原・北山遺跡
181　有年原・北畠遺跡
182　津村２号墳
183-189　ハトカ古墳群
190　ハトカ茶畑遺跡
191　有年牟礼・宮ノ前遺跡



192　有年牟礼・山田遺跡
193-198　荒神山古墳群
199　高野須城跡
200　鴾ヶ堂城跡
201　医王山験行寺跡
202　富原遺跡
203　鍋子城跡
204-232　周世宮裏山古墳群
231　周世黒谷古墳
232　周世水木原古墳
233　周世・入相遺跡
234-238　船戸山古墳群
239　船戸山遺跡
240-244　真殿門前古墳群
245　真殿林遺跡
246　真殿・門前遺跡
247　高雄山神護寺跡
248　高雄・根木遺跡
249　木津・原遺跡
250　木津・野垣内遺跡
251　尼子山城跡
252　上高野遺跡
253　高取山古墳群
274-279　高取山積石塚古墳群
280　八重山古墳
281-283　高伏山古墳群
284　みかんのへた山古墳群
285　小島遺跡
286-292　小島古墳群
293-295　生島古墳群
296　坂越浦城跡
297　茶臼山城跡
298　宝珠山妙見寺跡
299　八祖山経塚遺跡
300　下高谷遺跡
301　雲谷山常楽寺跡
302　宝寿山西山寺
303　宝性山長楽寺
304　南野中中州遺跡
305　南野中川岸遺跡
306　岩屋寺跡
307-310　大林古墳群
311　烏谷布目瓦出土地
312　赤穂市役所遺跡
313　塩屋築田遺跡
314　塩屋阿弥陀堂貝塚
315　堂山遺跡
316　高山遺跡
317　三軒家遺跡
318　クルミ遺跡
319　有年牟礼・井田遺跡
321　周世宮裏遺跡
322　周世開遺跡
324　高野遺跡
326　真木貝塚
327　天和田ノ浦貝塚
328　赤穂城下町跡
330　大島山万福寺
331　朝日山永応寺
332　赤穂大橋下遺跡
333　千鳥ヶ浜土器採集地
334　猪壺谷遺跡
335　大塚遺跡
336　尾崎・大塚古墳
337　清水山廃寺跡
338　木津・段ノ上遺跡
339　浜市遺跡
340　西有年・大山遺跡

※数字は周知の埋蔵文化財包蔵地番号

地域を越えた歴史文化の視点

35.　赤穂のむかしばなし

【ストーリー】

市内各地に残る民話や伝承。これらは文字に記録されることなく、口伝えの物語として赤穂の人々の心に残されてきた。

つくられた時代がいつなのかはわからないが、内容は人々にとって理解を越えるもの、日常生活の教訓めいたもの、また身近な歴史を偉人と結びつけたものなど、さまざまなものがある。

私たちは、こうした民話・伝承を通じて、当時の人々の生活や思考に思いをはせるとともに、今もその場に立つことによって、赤穂の歴史的蓄積に触れることができる。


地蔵立像板碑（はえぬき地蔵）


小鷹観音堂（小鷹の観音さま）


不動山石仏（おけじゃ山）


周世坂峠地蔵（ととまの地蔵・枯れ尾花）


げんじょの岩（お伊勢まいり）


小倉御前の墓（小倉御前の墓）


鳥井坂の道標
（二人の旦那はん）


唐船山（謎を秘める島）

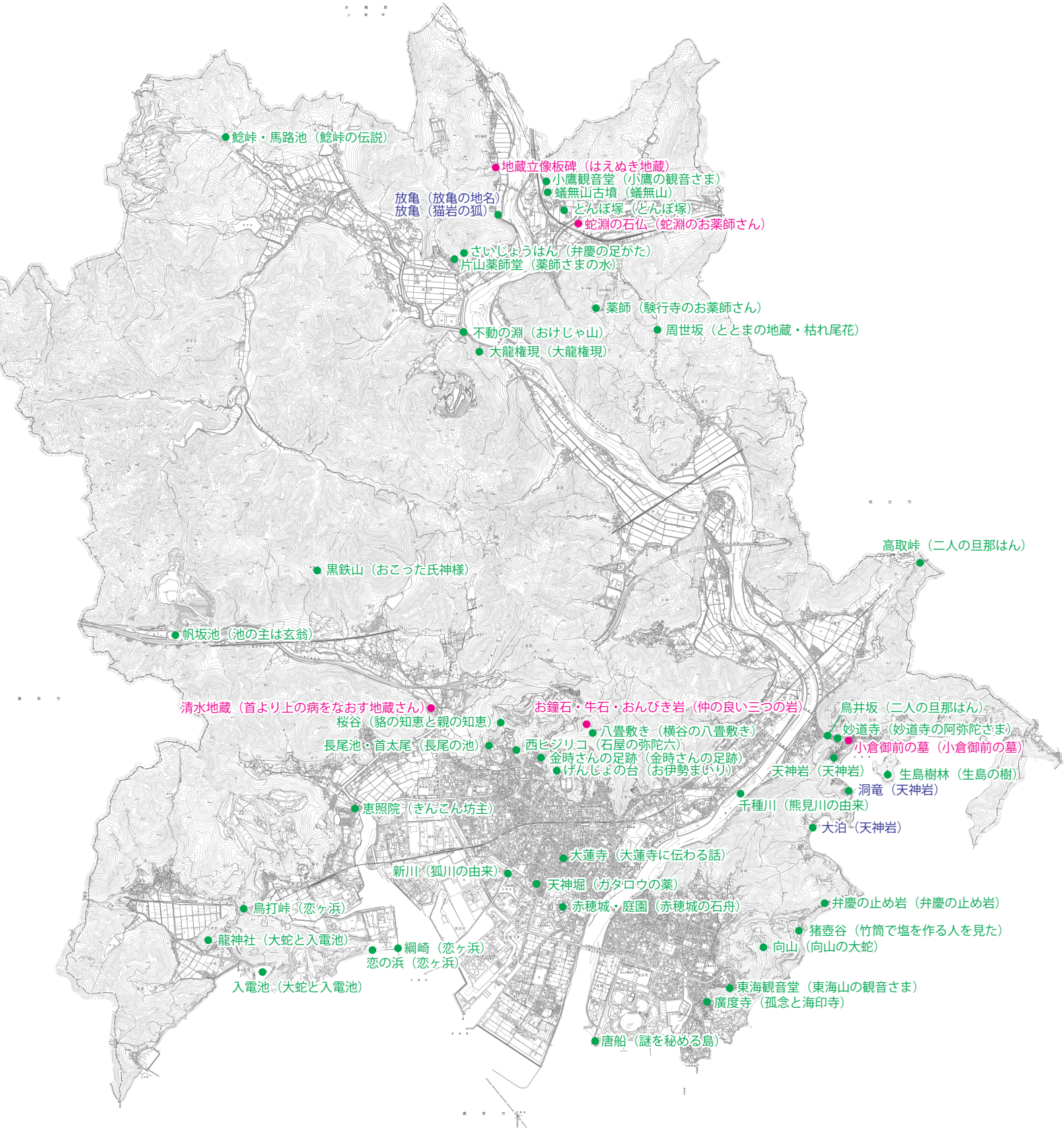

龍神宮（大蛇と入電池）


清水地蔵（首より上の病をなおす地蔵さん）


大蓮寺（大蓮寺に伝わる話）


妙道寺（妙道寺の阿弥陀さま）


入電池（大蛇と入電池）



項目は赤穂市教育委員会 1984・1985『赤穂の昔話』その１・２に記載の歴史文化遺産。（　）内は昔話の題名。

地域を越えた歴史文化の視点

36. 地名の生きるまち

【ストーリー】

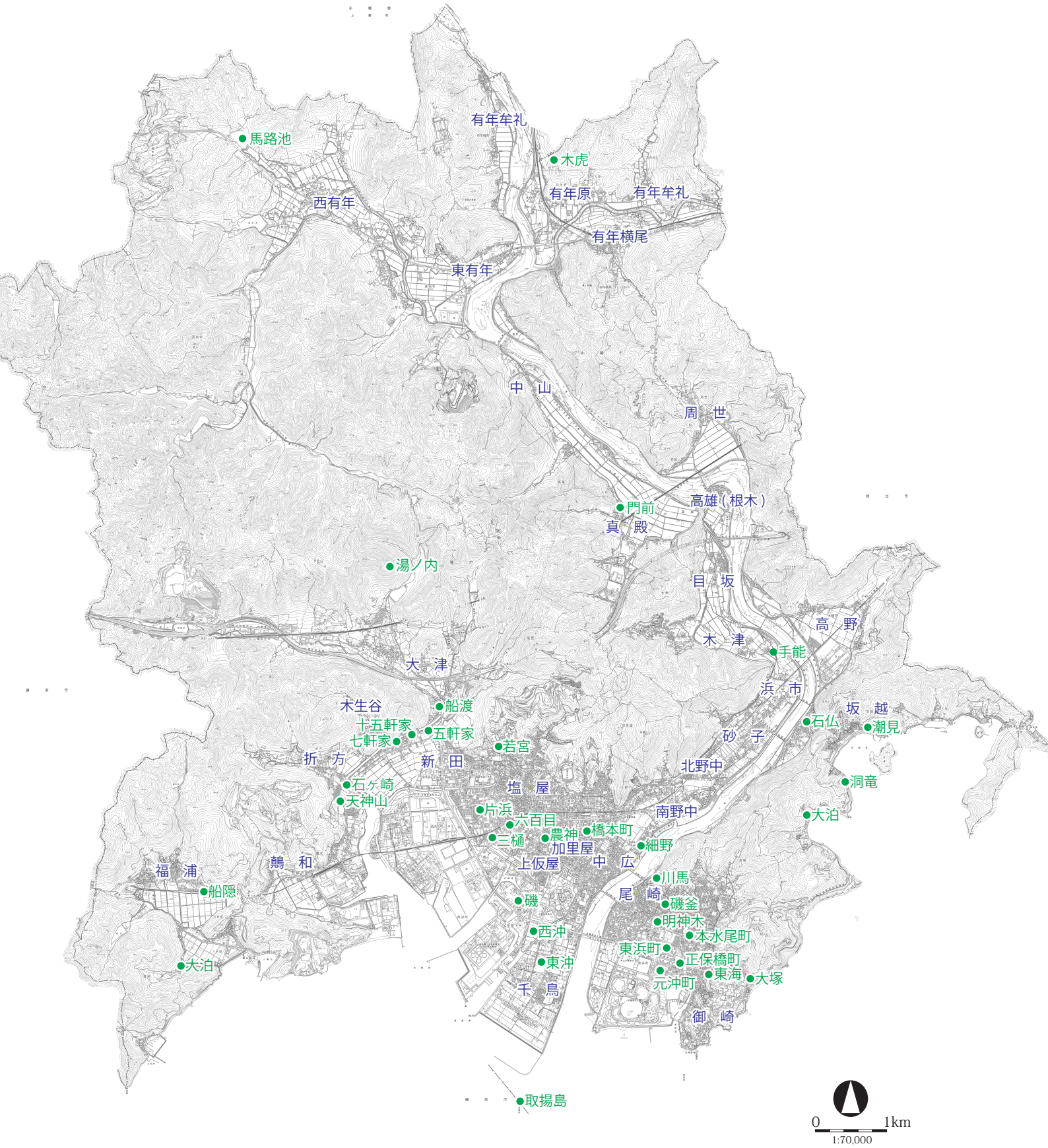
私たちが何気なく使用している地名。実はこれらの歴史はかなり古く、中世に遡ると推定されるものも少なくない。

地域それぞれが持っている自然的背景のもと成立したものや、歴史的な事由によって成立したもの、さらには伝承によるものなど、その成立原因は様々であるが、私たちが日常的に地名を呼ぶことによって、未来への継承に一役買っていることを考えると、今も私たちが歴史の真っただ中にいることを実感させてくれる。

特に赤穂では、江戸時代の事象に由来する地名や、塩田に関する地名が多く残されており、近現代に成立した町名であっても昔の地名を採用したり参照したものも少なくない。

地名を見れば、その地域の自然や歴史が想像できるまち。赤穂では今も地名が生きている。

東有年・西有年　傍示ヶ鼻を境として分けた。有年は田畑の「畝」が転じたものか。
馬路池　山越えのため馬が用意された「馬路」の近隣の池であったため。
木虎　楢原新田開拓に際し藩主から「意気虎の如し」と褒められて姓を与えられたためという。
有年牟礼　古代朝鮮語の「山」が起源か。
真殿　13 世紀に土豪真殿氏が住んでいたためという。
門前　15 世紀に安楽坊の門前であったため。
周世　洲瀬か。かつては周勢であった。
根木　周世八幡神社の神官（禰宜）が住んでいたためという。
木津・手能　千種川河口の材木集積地であったという。大工村には手能（手斧）の地名も残る。
加里屋・上仮屋　明応・永正 (1492 ～ 1521) 年間ころに雄鷹山の西の加庄村から人々が仮の家をつくって移り住んだためという。上仮屋は「上」＝侍屋敷。
南組・西組・北組・東組　旧城下町を方位で区分したもの。
農神　森時代に農神社があったため。
橋本町　もとは池田時代の船つなぎ場という。浅野長直が慶安２（1649）年に埋め立てた。
中広　中世以来の中村の名による。
磯　森時代初期に開墾した塩田。
西沖・東沖　大正 6 年から耕地整理事業で整備された敷地。
千鳥　千種川河口に浜千鳥が多くいたため。
塩屋　製塩のための施設（塩屋）があったため。
六百目　塩屋の上田で一反六百目の値打ちから。
三ツ樋　池田時代の古塩浜で片浜・加藤・新川の三樋門があったため。
片浜　浅野時代の承応 2(1653) 年の開浜。
若宮　京都若宮神社の分霊を祀っていたが、明治 42(1909) 年に荒神社に合祀された。
新田　浅野長直が新田開発をした。
五軒家・十五軒家・七軒家　それぞれ江戸時代に入植した家数による。
大津　かつてこの一帯は海で、港であったため。
湯ノ内　往昔は山中に湯がわき出ていたという。
船渡　対岸の長尾と舟で交通していたため。
天神山　天神社があったため (明治後期に移転)。
石ヶ崎　江戸時代の中頃までは大石の山が海中に突き出ていた景勝地であった。
鷆和　明治 9（1876）年に真木村と鳥撫村が合併した際、頭字の真と鳥を合体させて名づけた。
大泊　入江であって船を繋いでいたという。
船隠　古新田の干拓前の入江であり、船を風から隠す場所であった。
水尾　塩田に入り込むように築かれた水路（水尾) にちなむ。
坂越　鳥井坂を越して坂越浦に行くことにちなむ。秦河勝が「難を避け来し地」の説もある。
潮見　坂越湾内の鰮漁の旗振り場であったためという。
石仏　現存する石塔から。近くの荒神社に移しても、いつの間にか元の場所に戻るという。
洞竜　菅原道真が大宰府左遷の際に逗留したためという。大泊も同じ。
浜市　地勢から古代は千種川河口であって魚市があったためという。
細野　南野中と中村にはさまれた細い帯のような形のため。明治 26（1893）年の千種川改修によって半分が河川敷となった。
西ノ町・南ノ町・東ノ町・北ノ町　宝専寺を起点として町割りされたもの。
大塚　古墳があり、弁慶穴とも言われた。
明神木　応神天皇が筑紫から帰途、船つなぎしたと伝える。
川馬　川端と馬場町の頭文字をとったもの。
磯釜　磯ノ橋と釜屋本町の頭文字をとったもの。
御崎　三崎山に由来。
東海　江戸中期に小舟が出入りしていた（渡海）ためか。
取揚島　江戸初期に播磨・備前国の間で島の領有権争いがあり、幕府が取り上げたため。
正保橋町　浅野長直入封の正保 2（1645）年の年号にちなんだもので名づけられた正保橋（昭和３（1928）年設置）から。



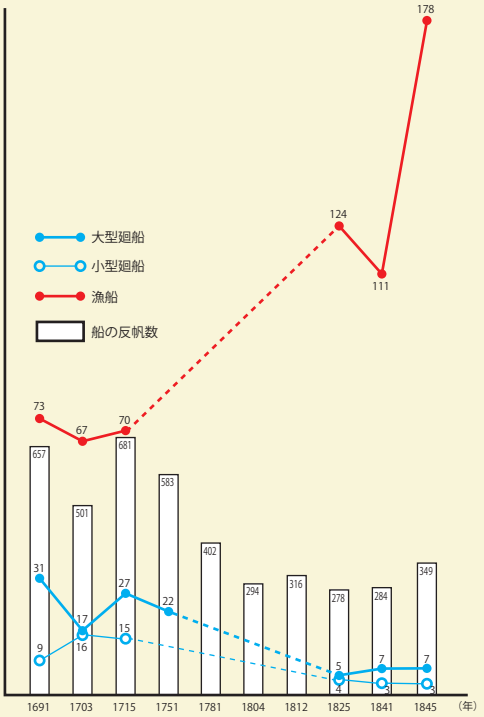
主に、赤穂市 1985『赤穂の地名』記載の地名から抜粋。

コラム

北前船の寄港地、坂越浦

坂越は、湾状を呈する地形と、湾内に浮かぶ生島によって、天然の良港であったため、古くから港町として栄え、天候改善や追風（順風）を待つ「風待ち港」として利用されてきました。

古文献によると、仁安 3（1168）年には船や航海技術をもった集団が坂越に存在したこと、また文安 2（1445）年には坂越の船が兵庫北関へ入船した記録が見られるなど、主に瀬戸内海沿岸を行き来する船の港として機能していたようです。



坂越廻船数の変化

（西畑俊昭 1991「幕末・維新期における赤穂塩廻船の動向」『柴田一先生還暦記念論文集　幕藩制下の領主と民衆』）より作成

北前船の出現によって、大坂・瀬戸内の廻船業者の多くは没落しましたが、坂越では、廻船業者は赤穂塩を江戸市場に運び販売する「塩廻船」として命脈を保つとともに、北前船の寄港地として栄えることとなりました。北前船の寄港地となった坂越は、全国の文物を赤穂に呼び込む窓口となったのです。

平成 30 年 5 月には、日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」の構成文化財として、市内 7 件の遺産が追加認定されました。

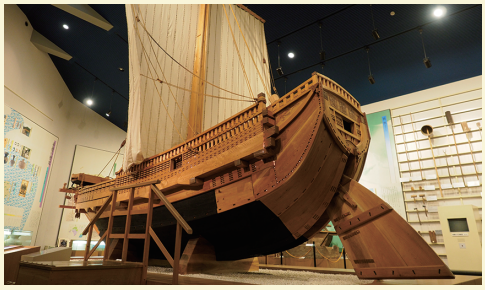


坂越湾

江戸時代になると、寛文年間（1661～1673）に開かれた西廻り航路によって、瀬戸内海の海上交通は活発化し、坂越も大きく発展しました。元禄 4（1691）年の記録によると、坂越浦の船数は 113 艘あり、このうち内海航路用の小型廻船（6 反帆～ 8 反帆）9 艘、西廻り航路用の大型廻船（13 反帆以上。300 石積以上と推定される）31 艘によって、廻船業が営まれていたようです。その航行範囲は広く、このころの遭難記録には豊後国臼杵（現在の大分県）、出羽国酒田（山形県）など遠方の地名を見ることができます。

しかし、こうした廻船業は 18 世紀後半頃から陰りを見せ始めます。上方（大坂）、瀬戸内の廻船が、北国海運の主導権を北陸地方の廻船業者に奪われたためです。こうした日本海海運に従事した廻船を一般に「北前船」と呼び、500 石～ 1,500 石積の大型廻船が用いられました。

北前船は、大坂を起点として瀬戸内海を航行し、下関を回り日本海に抜け、北国さらに蝦夷地（北海道）にまで行き、全国の特産品やあらゆる生活物資を積み、それらを各地で売買することによって、莫大な利益を得たと言います。



赤穂市立歴史博物館の廻船模型